

平成15年度 第7回 山口大学 FD研修会報告書

日程 第1回目 2003年9月16日～9月17日
第2回目 2003年9月18日～9月19日

場所 山口県セミナーパーク

山口大学大学教育機構

はじめに

大学教育センター長 渡邊 正

本年度の山口大学FD研修会は、開催場所の変更を希望する参加者が多いことを考慮して、開催場所を徳地から山口県セミナーパークに変更しました。実施形式は昨年度から導入されたワークショップ形式を本年度も採用しました。

今回のテーマは「シラバス作成」としました。国立大学法人化に向けて、認証評価体制に対応し、国民への説明責任に果たす教育制度作りが進んでいます。例えば、FD活動の推進や、学生授業評価や授業自己評価などがそれに当たります。そして、時代の要請に応えるシラバスの作成は、これらの教育制度作りの根幹に当たる重要なものです。

本学では次年度から、認証評価体制に対応して、達成度評価方式を採用することになり、従前のシラバスと比較すると根幹部分が大きく変わりました。この変化は、多くの教員には、初めて遭遇することではないかと推察致しましたので、このFD研修会を通して周知徹底を図ることになりました。

今回の全体学習会では、教育学の専門家から達成度評価の方法をご指導いただき、ワークショップでは、それを基に具体的なシラバスの記載方法についてグループ討論をしながら深めることを目指しました。特に、達成度評価方式を取り入れ、成績評価の方法をシラバスに記載することになりましたので、その意義を理解していただければ幸いです。

なお、次年度版のWEBシラバス作成は年明けに始まります。この研修会で得られた資料を基に、「シラバス作成」冊子を作成し、全教員へ配布し、新シラバスの意義の周知徹底を図ることとする所存です。

研修会へ参加された皆様にとって、実り多い機会となりましたら幸いです。

平成15年度 第7回 山口大学FD研修会報告書

目 次

はじめに	副学長 丸本 卓哉
1 . 平成15年度FD研修会実施要項	1
2 . 研修のねらい	3
3 . オリエンテーション (研修の流れ、施設利用上の注意)	4
4 . 学長講話	7
5 . 講義1 (なぜ、今、厳格な成績評価か)	13
6 . 講義2 (授業技術)	23
7 . 講義3 - 1 (授業の目標の設定)、講義3 - 2 (シラバスの目標の書き方)	30
8 . 講義4 - 1 (授業計画と成績評価方法) 講義4 - 2 (シラバスの各週の授業計画と成績評価方法の書き方)	44
9 . ワークショップの記録 (9月16 / 17日実施分)	63
10 . ワークショップの記録 (9月18 / 19日実施分)	100
11 . 講義5 (まとめ)[林徳治教授]	127
12 . 閉会の言葉 [丸本副学長]	133
13 . 研修会資料	135
14 . 研修会アンケート結果	163

1 . 平成 1 5 年度 山口大学FD研修会実施要項

1 . 主 旨 本学では、平成 1 3 年度から山口大学教員能力開発専門委員会（FD専門委員会）を発足させ、全学展望に立ったFD(Faculty Development)研修会を実施している。教員の資質向上のための研修は、大学設置基準に明記された義務であり、山口大学においても全教員が 5 年程度の期間内に 1 度は本研修会を受講することを、教育研究委員会で申し合わせている。

今年度は、昨年度に引き続き、年二回、各 2 日間の日程で「成績評価」について講義並びにワークショップを行う。参加者はできるだけ担当授業の似通ったグループ（授業科目別部会単位が望ましい）に分かれ、グループごとに自分の授業に関する学習目標の設定、授業設計、評価の方法の検討を行い、発表を行う。翌日は、グループで話し合われた内容に関して、全体発表並びに質疑応答を行う予定である。

具体的な作業を通して、各自の「成績評価」に関する意識の向上を図るとともに、山口大学の教育を担う教官同士の連帯に寄与することをねらいとする。

2 . 主 催 山口大学大学教育機構

3 . 日 程 **第一回目 平成15年 9月16日(火)～9月17日(水)**
第二回目 平成15年 9月18日(木)～9月19日(金)
(一回目、二回目とも同一内容の研修)

4 . 場 所 山口県セミナーパーク

5 . 参加者 **今まで一度もFD研修会を受講していない教員を対象とする。**

- (1)各学部教員
- (2)大学教育機構教員
- (3)県内他大学教員
- (4)ファシリテータ
- (5)その他大学関係者

学長、副学長 外 合計 約 8 0 名 × 2

6 . 経 費 7 , 0 0 0 円 (当日徴収。約 2 , 3 0 0 円を後日旅費より補填予定)

7 . その他 参加者は、洗面道具、着替え、寝間着等を持参すること。

また、発表や作業にコンピュータを用いるので、WordやPowerPointの使えるパソコンをお持ちの方は持参ください。今年度、共通教育で授業を担当された方は、そのシラバス（データもしくは印刷物）をお持ち下さい。

8 . 備 考 各学部のFD委員の先生方は、7月中旬を目処に参加者の集約をして下さい。
(参加者の学部、氏名、職名、授業科目部会名を教務課・中光さんまで連絡)

9. タイムテーブル(予定)

第一日目 [総合司会:岩部]

9時20分	山口地区出発
9時30分	宇部地区(工学部)出発
10時00分	山口県セミナーパーク到着
10時20分	開会の言葉[大学教育センター長]
10時25分	オリエンテーション (研修の流れ、施設利用上の注意)[沖、中光]
10時35分	学長講話(質疑応答)[学長]
11時25分	講義1(なぜ、今、厳格な成績評価か)[植村]
12時00分	昼食
13時00分	講義2(授業技術)[沖]
13時20分	ワークショップ1(アイス・ブレーキング他)
14時00分	講義3-1(授業の目標の設定)[沖]
14時20分	講義3-2(シラバスの目標の書き方)[吉田]
14時30分	ワークショップ2(自分の授業の目標を考える)
15時00分	ワークショップ3(各グループ内発表)
15時35分	講義4-1(授業計画と成績評価方法)[沖]
15時50分	講義4-2(シラバスの各週の授業計画と成績評価方法の書き方) [吉田]
16時00分	ワークショップ4(授業計画と成績評価の方法を考える)
16時30分	ワークショップ5(各グループ内発表)
17時00分	事務連絡[植村]
17時15分	ワークショップ終了
18時00分	夕食・懇親会

第二日目 [総合司会:岩部]

7時00分	起床
7時30分	朝食
8時30分	ワークショップ6(グループのまとめと発表準備)
10時30分	ワークショップ7 (グループ発表と質疑応答<各班10分程度>)
12時00分	ワークショップ終了
13時00分	講義5(まとめ)[林]
13時30分	閉会の言葉[副学長]
14時00分	山口県セミナーパーク出発
14時30分	宇部地区到着、解散
14時40分	山口地区到着、解散

備考 学長の予定により、学長講話は適宜変更することがある。
グループの数により、終了時間を延長することがある。

2 . 研修のねらい

今、「厳格なる成績評価」が課題である。

年々、学力と学習意欲の低下が進む大学進学者に対して、各大学とも入学者数の確保と同時に、世界で通用するような大学卒業者としての質の保証が求められている。企業社会からはこき下ろされる大学教育ではあるが、単に成績評価基準を厳しくするだけでは解決方法にならない。

昨年度、各学部で努力していただいた単位の上限設定は、厳格なる成績評価の一側面である。言うまでもなく、授業1単位の修得には、履修と試験に伴って、予習・復習各1時間の授業外学習が前提となっている。しかしながら、他大学の例で報告されているように、上限設定が定められても、万が一安易な成績評価で単位を認定する授業が主流を占めれば、これまで一回生時に多数の単位を集める生真面目な学生は暇をもてあますことになるという。もちろん、企業側の大学に対する評価を覆すことにもつながらない。

また、GPAを始め、「秀」評価の導入など、制度面での厳格化は比較的たやすい。しかし、昨年度、学生授業評価に基づくメンタル・モデルで示したように、学生の授業に対する満足度、理解度を上げる努力が伴わなければ、単に学生を成績で輪切りし、成績不良となった学生を切り捨てるだけになる可能性がある。

「厳格なる成績評価」には、制度面におけるカリキュラムの整備と授業技術の錬磨が表裏一体となる。併せて、各授業における学習目標の選定と厳格な成績基準の設定が不可欠である。

さらに、JABEEにおいては「技術者倫理」が求められ、これをカリキュラムの中でどう位置づけるかが問われている。このような形而上の学修内容を、いかに各授業の中に織り込み、目標と対比させながら指導を行い、かつ評価を行うかが、今、重要な争点となっている。

そのような状況の中で、各授業の到達目標を明らかにし、「可」の位置づけを明確にするにはどうすればいいのか。そして、「良」「優」「秀」の基準はどのように設定すればよいのか。さらに、単に知識・理解や技術・技能を試験するのみならず、その分野における倫理観や関心、生涯学習に向けた学習意欲などを判定するにはどのような方法を使えばよいのか。

もちろん、それらの観点を議論する前に、大幅な「出席点」を成績に加算することがあればそれを是正し、学生授業評価で学生側から準備不足、熱意不足等を指摘する声が大きければ適切に対応する姿勢が重要であることは言うまでもない。また、定期試験のカンニング防止等にもまだまだ力を注がなければならないと言える。

今回の研修では、これらの難問について、各自の授業を元に検討し、担当授業の近いグループの中で議論を進めていく予定である。

これらは、大学教育にとって、未だ踏み入れたことのない議論である。手探りの中、多くの人の議論と実践を通して、解決の道筋を見つけていかなければならないと考える。しかし、今後、山口大学が世界に互して発展していくために、そして卒業生が就職していく企業社会からその質に関して成績証明書に違わぬ保証を取り付けるために、これらの問題は、今、検討していく必要があると強く考える次第である。

初秋の2日間を有意義に過ごしていただき、後期の授業や、来年度のシラバスの作成に役立てていただければ幸いである。

3 . オリエンテーション(研修の流れ、施設利用上の注意)

司会(岩部) おはようございます。司会を務めさせていただきます大学教育センターの岩部と申します。4月に大学教育センターに入ることになりまして、とりあえずこの研修会の講義をする能力もないので多分司会ということになったんじゃないかというふうに自分では考えておりますけれども、2日間の予定、かなり細かい時間できっちりと詰まっております、絶対に動かせない時間というのが昼食、夕食、懇親会、このあたりの時間ははずせないという話でありますので、そこら辺の時間管理の方はしっかりさせていただきたいと思っております。

それで、2日間の予定でこのFD研修ということでありまして、私も一般参加者のつもりで自分の授業を見直す機会にさせていただきたいと考えております。大学全体の理念、目標と自分の授業との関係がどうなっているのかとか、あるいはほかの授業と自分の授業との間で内容がちゃんと同じになっているのか、あるいは逆に重なりがないのかというようなそういうあたりをもう一回見直す、これから見直していくための出発点になったらいんじゃないかなと個人的に考えております。

それで、1泊2日のFD研修会ということで、皆さん、参加者の方々も正直なところやれやれという感じをお持ちかと思っております。私は、この後、2日間の後また連続して18、19の研修会もありますので、個人的にこっそり申し上げますとやれやれの度合いも2倍になってるんですけども、幸か不幸か話の内容を2回聞くことができますので、理解がその分高まるんじゃないかなと、なるべくポジティブに考えるようにしております。

それでは、先ほども申し上げましたように時間管理をきっちりやらなければいけませんので、早速開会の言葉を渡辺大学教育センター長、お願いいたします。

大学教育センター長(渡辺) おはようございます。今日は、残暑の厳しい中、朝早くから出席していただきましてありがとうございます。大学も今いろいろな改革が進んでおりますけども、その一つとして研究COEというのが言われて、山口大学もトライしたわけですけども、それがかなわないということになりました。

教育のCOEって言われている大学、特色ある大学教育支援プロジェクトっていうのがあります。それは、最終的に山口大学の中で議論しておりまして、教育絡みのものとWebシラバス関係のものが最後に残りました。最終的に学長の採決でWebシラバスの関係のプロジェクトを提出しました。先ほど学長さん自ら行かれましてプレゼンをして、今その結果待ちっていう状況です。本来でしたら9月上旬に決まるっていうことだったんですけども、どういう状況なのかわかりませんが9月下旬に決まるという案内が来ました。それで、多分この近隣の大学でもプレゼンまで進んだプロジェクトっていうのは余り聞いておりません。広島大学もプレゼンに行けなかったという話を聞いておりますし、そういう意味で大変有望なのではないかと思っております。

今回は、このシラバスの中身をもう少し充実していこうということで、それをメインテーマにしております。シラバスといいましても、いろいろなシラバスの書き方があります。そのあたりを今日はこの2日間で学習していただきたいと思います。

最近、シラバスっていうのは高等学校や中学校でも導入が始まっております。例えば、山口県の高등학교でも、今シラバスというのをどうやって導入するかという議論が進んでおります。という意味で、大学だけではなくて高等学校にもシラバスという概念が浸透してきております。大阪の方ですと、中学校、小学校でも今シラバスというのを作り始めております。そういう意味で、教育の基本的なところがシラバスで記入されて、それが公表されるというのが大きな流れになっておりますので、ひとつこの

2日間、お忙しいでしょうけどもみっちり学習していただきたいと思います。

それでは、ひとつよろしく願いいたします。

司会（岩部） どうもありがとうございました。

次に、オリエンテーションですが、研修の流れ、施設利用上の注意点を沖先生お願いします。

大学教育センター（沖） おはようございます。大学教育センターの沖でございます。いつも大変お世話になっております。

昨日まで、私関西の出身で自分の家に帰っていたんですが、帰りしなの新幹線の中で広島対阪神2対1と、「ああ、今日はあかんかったなあ」と言って帰ってきて、NHKのニュースを見た途端優勝が決まっていたという。昨日、山口の方ではほとんど放送らしい放送はなかったんですが、家へ電話をかけたら大騒ぎになっていると。けさも嫁はんからメールがありまして、全然関係ないんですよ、私、向日町いうところなんですが、向日町のサティの前に人だかりができていたという大変な状態になっているようです。本当は一緒になってお祝いをしたいというか、騒ぎたかったんですが、今日は朝からFD研修会ということで、皆さん、2日間よろしく願いいたします。

まだ学長がお見えになってないみたいなので、少し時間が延びるかもしれませんが、お手元のレジюмеの中に本日、及び明日のタイムテーブルが書いてございます。簡単に申しますと、ここでの研修と、ここでの講義と、それからちょうどこの2階になります。グループごとに分かれていただいて研修を進めていただく小さな研修室がございまして、その間を行ったり来たりしながら2日間学習を進めていきたいという形態になります。

先ほど司会の方がおっしゃいましたけれど、タイムテーブルを一応厳格にはつくって見たんですが、何ぶん初めての経験です。私自身もシラバスを書くということを経験にのってやってみましたが、考えれば考えるほど時間をとるといふ部分あります。で、御自分のシラバスを30分以内でつくっていただくということになるんですが、ひょっとしたらそれ以上の時間が必要になってくる可能性もございまして、そのあたりは司会の方の判断で若干延ばしていただきながらあるいは調整していただきながら、4日目までいきたいと思っております。

まず、学長のお話、続いて講義1ということで「なぜ、今、厳格な成績評価か」ということをお話をさせていただきます。その後、昼食を挟んで1時から、こちらの方で「授業技術」について講義をさせていただきます。その後、ワークショップ1で各自の自己紹介、ここで40分時間がとっております。ここまでは多分恐らくスムーズに行くと思っております。個人のことを1人3分程度で御紹介していただいて、多い班で8名か9名になりますので十分時間がとれると思っております。

その後に、御自分のシラバスを記述していただくという作業に入るんですが、一応レジюмеの方にシラバス、共通教育並びに学部教育のシラバスをお持ちくださいますよう書いていたんですが、ひょっとしてお忘れになっている方があるかもしれません。こちらで共通教育分はすべて印刷してございますので、受付のところでお自分のシラバスを言っていただければ共通教育分は御用意させていただいております。それから、専門教育の部分につきましては、このアイス・ブレーキングの時間が若干時間に余裕あると思っておりますので、214室で何先生がプリンターとコンピューターとCDシラバスを持ってきて、そこで印刷する手筈を整えております。もしもお忘れになって、共通教育は担当してないので、専門の方のを少しつくってみたいとおっしゃる方は214教室にアイス・ブレーキングの時間にお寄りいただいたら、そこで印刷できるかと思っております。

あと、コンピューター持ってきておられる先生と、そうでない先生がいらっしゃいます。で、コンピューター持ってきておられない先生は手書きのシラバス用紙をお配りしますので、そこに書いていただきたいと思っておりますが、コンピューターで表を、おつくりになりたいという場合は、データを持ってきて

おります。白紙のフォーマットを持ってきておりますので、それをコンピューターに取り込んでいただいてコンピューター上でそれを作成していただければと思います。データの移入の仕方ですが、フロッピーディスク、CD、それからUSBのフラッシュメモリを用意しておりますので、各研修室グループの担当の、大学教育センターのスタッフの方に申し入れていただければ、何らかの方法でデータをインポートできるかと思います。

それから、各グループごとの研修で、これの3分の1から4分の1ぐらいの部屋でラウンドテーブルがあるんですが、そこで御自分のシラバスをつくっていただいて、またグループ内で討議をしていただくという活動を繰り返します。そのときに、それを全員に提示する方法が2通りございます。紙でお書きになった分につきましては、教材提示装置、書画カメラが用意してあります。それから、コンピューター上でつくられた方は、それをプロジェクターを通して映せるようになっておりますので、もしそのあたりの配線がおわかりにならないところがありましたら、また大学教育センターの方にお声をかけていただければと思います。

そういった形で本日も、明日の両日、この部屋と御自分たちの研修室を行ったり来たりしながらスモールステップでやっていきたいと思っております。

ただ、最初に述べましたようにどのくらい時間がかかるかというのは、正直初めての経験ですからわかりがたいところがあります。臨機応変に調整しながらやっていきたいと思っておりますので、ひとつ御協力のほどをよろしくお願いしたいと思います。

4 . 学 長 講 話

司会（岩部） それでは、次に山口大学長加藤先生より学長講話をお願いしたいと思います。よろしくをお願いします。

加藤（学長） おはようございます。朝早くからご苦労さまです。山口大学学長と今御紹介いただきました。去年の5月から学長で、その前はずっと医学部にいました。山口大学は長いのですが、全学的な立場ってというのはこの1年ちょっとなので勉強、勉強の毎日です。

今日から1晩泊まりでのセミナーということで、私も経験ありますけど、皆さん方今朝は腹立ち紛れに来られた方が多いかもしれないですね。この忙しいのに1晩泊まりで何をやるんだ、というような感じで来られたかもわからないですね。よくわかりますが、後悔しません。きっと行ってよかったと思って帰られるに違いないと自信ありますので、辛抱してやってみてください。そのうちだんだん面白くなると思います。

いろいろ世の中騒がしくて、大学改革とか大学のあり方とかいうことも議論が多くて、特にトピック的な話題が受けるので、山口大学でも産学連携などいろいろ出てきます。しかし、しっかりとスタンスを置いておかなきゃいけないのは、大学ってというのは何のためにあるかということで、国立研究所とも違うあるいは国立病院とも違う大学の存在意義は、やはり教育だと思うんですよ。

で、教育を外れた土俵で競争しても、これはもう相手にならんぐらい強い連中が一杯いて、例えば研究でも、国内だけでも、あるいはアメリカにも東南アジアにも凄い連中がいっぱいいます。この連中と本気で研究で競争しようと思ったら、とんでもないことやらんといけません。また、地域連携とか経営とか、そこら辺の判断基準は今世界的にやはり貨幣価値なんですよ。これはまた海千山千の長けた人がたくさんあります。やはり人材育成とか次の時代をどうするかというふうな人間を育てるところが我々の一番得意な土俵で、これから離れたところで競争しても大学は太刀打ちできんと私は思っているのですが、だから、大学の基本的なスタンス、存在意義は教育です。高等教育です。それは今からも変わらないし、これは大学に許された特権でもあるし、やはりそれを生かすのが大切であると思います。

大学の法人化についても、せっかくの機会ですからちょっと話しますけど、この10月1日に国立大学法人法が施行されますので、そうすると来年の4月からは国立大学法人山口大学が経営する国立大学山口大学ということにはなります。文部科学大臣もはっきり言っておられますように国立大学です。国から交付金が入ってきます。交付金自体は、だけど日本の国の国力が落ちてくるとだんだん下がっていく可能性がある。これはもう覚悟しなきゃいけないですね。悲しいかな、教育とか福祉とか介護とか、そういうところは何かやさしいので、先ず削られる可能性が強い。大学も経営的なことを考えなければなりません。しかし一方で、そういう価値観ばかりの所で学生も教わりたくないと思うし、あるいは患者さんを助けるのも、貨幣価値観とか儲けとかというような基準では治療したくない。このことはしっかり抑えてないと流されます。

法人化で大学の中も大変ですが、大事なのは今大学の中にいる学生、来年入ってくる学生のことで、だから通常の業務、もう少ししたら入試が始まりますし、進級判定がありますが、それらのその基本的な業務が崩れてしまうと大学が存在する必要もなくなるので、そこをしっかりとおさえていただいて、その上で法人化への準備を進める。大変ですが御協力頂きたいと思います。

それからやっぱり大学の特徴づくりもしないといけない。中期計画を読まれてよくおわかりになったと思いますが、書いてあることは、主にシステムや枠づくりのことで、シラバスつくりましょう、学生

の評価を取り入れましょう、評価をやりましょうなど、方向性や枠組みが書いてあるが、内容は書いていないんですね。内容こそ大切なのですが、もっとも4月1日に法人化になった途端に教育の内容を変えないといけないことがありますか。悪ければ変えないんといけません、そういうことは現場で、日ごろから議論しているべきことで、必要があれば何時でも変えてゆきましょう。

「大学で何を教えますか」ということですが、「学び方を教えるんだ」と言うのですね。どうやって学ぶかというその学び方を教えるので、プロダクトを教えるのではない。特に理系などでは前から言われているんですけど、大学で教えらることで卒業後もずっと使えることは、6割位で、それ以外のことは時代に合わず役に立たない。そうすると、何を教えるかといったら、学び方を教えるのが大学の使命だと言われています。シュバイツァーがやっぱり似たような事を言っております。「学生は教師のやったことを追体験しながら育っていく」と。何かにぶつかったときには、こんなときはあの先生はああやったというふうに追体験しながら将来育っていくのであって、教官のやることは、そういう追体験を学生が持てるようなしっかりした自分の経験、自分のノウハウ、それを情熱を持って学生に示すことであって、これが大学の教育なのである。あとは、学生が実際にぶち当たったときには、それでもって切り抜けていく。一種の学び方ですが、大学というのは本来そういうことだということです。

もちろんのことですけれども、大学に入ってくるのはそんな学び方を教えてもらいたいために来るんじゃないくて目的を持ってくる学生もいます。この資格が取りたい、国家試験が通りたい、何とかの資格を取りたい、英語しゃべれるようになりたいとか、コンピューター触れるようになりたいとか。要するに、実践的な能力あるいは具体的な資格です。またそれが無いと学生がついてこないのも現実ではあります。

また、やりたいことが分からず、何もなくてふらっと来た学生もいますよね。要するに、大学へ行って何か探そう、自分の人生を探そうという。ここの学部に入ったけど、何かおもしろくないし、就職先もないし、就職したいとも思わない。学び方を教えるんといっても、何を学びたいという意思がない人には、これを学んだらこうなりますよというガイドを示して、それをちゃんと学べる仕組みも必要なのでしょう。最近、子供が少なくなっていますし、18歳に限らず年齢や性別や人種に関係なく大学が受け入れるような時代なのでいろいろな人達が入学してきます。

私は産婦人科医だったので手術の仕方は習いましたが、教え方とか学んだことはありません。皆さん方きっとそれぞれの専門分野があって、研究とかいろんなことをどんどんやってこられて、その方向ではキャリアを積んできたと思うのですが、教え方とかいうのは習われたことがありますか。私はないんですけど。そういう人が大学の教官なんですよ。

それから、私、落語を聞きに行くんですが、新宿とか浅草とかに。親しくなった落語家の方に聞いたんですけど、昔は30分間ずっと話して行って、落ちでひっくり返るのがあった。30分でも1時間でもずっと話をしてどんと落ちをやると、わあっとみんな笑った。このごろもちません。5分ごとに笑わしてやらんともたん。10分も続いたら前のことを忘れてしまう。細切れにとっととととと笑わせて、もう起承転結も何もありません。本当週刊誌みたいなものですっていわれました。ちょっと例えは悪いのですが、非常に短期的に具体的な姿を実現させてくれないと、ついてこれないことが多い。それで、皆さん方が頑張って、教授方法やシラバスを研修しなければならないことになります。

シラバスのことですが、皆さんはシラバスを御存じですが、私は知りませんでした。アメリカにいた時、私が行ったところの教授が「おまえ、せっかく来たんだからわしの講義を聞くか」とか言いまして、「それは聞きたいです」と言ったら、「シラバス貰ってこい」と言うんです。で、教務係のところに行って「シラバスください」と言ったら、A4版の分厚いシラバスをくれました。絵も載っているし、参考文献も載っているし、それからその時間に習うべき目標も書いてある。講義に出てみると、学生は参考文献を読んできていて、研究者のごとく教授と対等の議論をしている。いずれにしるシラバスって

うのを初めて知りましたし、ああ、こういうふうにして授業をやるんだと思いましたが、帰ってきてそんなことはやりませんでした。講義でも、今で言う認知的領域とか精神運動的領域とかの区別はないんですよ。超音波診断法を教えるのでも、超音波診断の機械も見せずに講義するだけでしたし、試験では、自分で教えていようがいまいが関係なしに、教科書の1ページ目から必要なところを全部問題にして出すので、学生からは「加藤先生の試験は山が当たらん」とか言われて、単純にそれを得意に思ったりしていました。

教授になって2年目ぐらいのときに医学歯学教育のためのワークショップを言うのでいわゆる富士研に行きました。今でも覚えていますけど、私行く時は文句たらたらでしたよ。こんな忙しいときに5日間もと。学部長命令でしたから行きましたが、そこで身にしてみたことは、学生には学生の人格があって、教師とは違う感覚があって、学生のための教育なのだから、学生の反応を見ながら教えなければそれは教育ではありませんということだと思えます。2日目の夜ぐらいからおもしろくなって、5日目に帰るときはみんなで同窓会をつくりました。

私は医者なので、言われるとよくわかるのですが、患者さんに手術しましょうと言っても御本人が「私やります」と言わんことにはできません。いくら医者は手術がいいと思っても患者さんには患者さんの思いがあって、納得がなければ事は進みません。学生にも「ここはこうだろう」と言っても、学生にも感情がありますから自分でやろうと思わんことにはだめなんですよ。一生懸命教えても覚えてないし、もっと悪いのは反発しますね。理屈や善し悪しとは違う次元の話です。うちの奥さんは結構論理的なんですけど、それでも五木ひろしは嫌いと言ったら絶対嫌いで、理屈ではない。ちょっと冗談になりますけど、人はそれぞれいろんな考えで生きていて、理論的に話が通じないということがあっても、それは仕方がない。だけどそれでは先へ進めないところがあって、何とかお互いに納得づくで前に進まなければならぬし、そこら辺が教育の難しいところです。ワークショップでアイス・ブレイキングというのがありますが、まずは肩書きとかプライドとかを外して、生身の対等な人間同士として付合うもの良いのではないかとおもいます。

いずれにしろ2日間御苦労さんですが頑張ってください。いろんな意味できっといい思い出と言うか、プラスアルファのことがあると思えます。余りまとまりまらない話ですみませんでした。ありがとうございました。

司会（岩部） どうもありがとうございました。さすがに学長先生のお話、何かこれから話す内容を先取りされているような印象を受けました。それから、FD研修も2日間じゃなくて、やっぱり5日間ぐらい缶詰にしないと十分な効果が上がらないのかなというような気もしました。3日目ぐらいからだんだんというようなお話だったので、2日間ではちょっと足りないのかなと思いましたがけれども。どうもありがとうございました。

それでは、質疑応答ということになっておりますので、この際、今のお話あるいはそれ以外のことで結構ですけど、学長先生に質問したいことがございましたらぜひこの機会にお願いしたいと思います。

小柳（工学） ちょっと先生の話と関係ないんですけども、私が今一番悩んでいるのは、学生のレベルが下がってきてるのに、ある程度社会は卒業とともに品質保証を要求してますよね。そこをどうするのか。要するに、ちゃんとシラバス通り教えるとか、要するにみんなに聞いてもらうように教えるということは、必要単位を減らせばある程度やれる自信はあるんですけども、ここまでやっぱり教えなきゃいけないと思うと、そういう余裕はなくなる。で、大学で先生が文部科学省に行って、30%減の学生、学力低下の学生が入ってきたなら、卒業のときでも30%でいいんじゃないかというふうなことを言っていたら、我々は昔と同じ授業ををすることができる。そうはいかない。そこをどういうふうにしていけばいいのか。例えば、物理、数学がわかってない学生に教えるわけです。ですから、本当は物

理、数学の別の講義があって、わからなかったらそこ行って教わってこいということを言えば非常に楽なんですけど、それもできません。学生がかわいそうなんです。一生懸命やろうとする、けどわかりたいっていう意欲が、結構1年生教えてますけどもあるんです。物理、数学の話っていうのはそこがわかんなくてつまづくわけです。我々そこは教えられないわけです。授業時間決まっていますんで、講義内容が。それでジレンマ感じてて、シラバス以前の問題、そこをどうしていくかがわかりませんが、お知恵は。

加藤（学長） 大学だけの話じゃないところがあるようですね。何十年のツケが全部そこへ来ているんだと思うんです。

うちとしても、今からももっとそういうふうな学力がない人が入ってくるに違いありません。ただこれは勉強する機会がなかったから学力がない連中もおるに違いがないので、その辺は引き上げたいですよ。ね、大学の中である程度いわゆる基礎的な入門的なものをセッティングして、上へ押し上げていくという努力を自衛的にやらんといかんと思うんです。

みんなが同じような方へ行くのではなくて、選択肢があるような学内の体制や学科編成とか、そういうふうなことを自衛的に大学の中ではやっていく。大学院っていうのもその上に積み上げて、専門教育を積ませるようにやっていくと良いと思います。

そして、教養というものの考え方がちょっとあやふやなんで、私は先ず専門とか自分の得意とかいうのをその社会でその時代に上手に生かすことのできる能力というふうに思うんです。工学部であれば、工学の専門的能力を、100年前じゃなくて今の時代に、しかもアメリカじゃなくて日本のあるいは山口県の土地で、上手に生かしていく能力。専門的な能力とかその人の特徴を、その時代に生かせるような常識。これを先ず身につけるといって、それを何とか大学の中では教養としてやって、それから、人生を語り、芸術を語り、文学を語りという非常に大きな まあ、素養もありますよね。それも、一つの教養としては重要な部分だと思えますが、そこら辺りを仕分けして、何かわけのわからんようなことにはならないように整理する必要があると思います。

小柳（工学） 卒業後のその品質保証ですよ。それは、例えばコースを上げると高いレベルの違うところに立ってる。そういうふうにいるとバラけて、それで卒業してもいいというのか、それともやはり社会からある程度、例えば電気電子工学なら電気電子工学としてJABEEのことをやって、そして皆さん、いわゆるJABEEの登録段階みたいなことももっともってやって、その分野の技術を発展させるのか、それともいろんな人が出てきてのもいいですよとかそういうふうには話なのか、その辺をちょっと伺いたい。

加藤（学長） 国際標準っていうのも一つのグローバル的な流れで、あれに乗らないとその方向では伸びていけないというのがあるので、これは当然要ると思うんです。それで、全員がそれを通らんといかんかということ、そうでもないんじゃないかと思えますけども、そこは選択肢が出ると思えます。だから、国家試験を通らなきゃどうしようもないような科目もある、あるいはJABEEのような国際水準に沿ったようなちゃんと内容をそろえんといかんような科目も出てくると思う。それは選択肢が出てくると思います。

小柳（工学） その辺が要するにプレッシャーになってくるんです。

加藤（学長） 今んとこ何とも言葉がありませんね。入ってくる学生が優秀な連中ばかりじゃなくて、優秀な連中という言い方はちょっと いわゆるセンター試験的な基準でいうと余り優秀な連中じゃない若い連中がおって、その中にはセンター試験は合わなかったけれども、本当は能力があるっていうのが隠れておるわけですよ。だから、それは何とか引き出したいですよ。で、それでその方向に合ったようなコースを与えたり、大学に入ってくる時には工学部かと思っておったけど、本当は文学

系というのもおるかもしれませんがね。そういうところも含めて少し選択のコースの幅を広げて、で、国際標準とかそういうようなところで生きていけないという科目については、しっかりとそれはバックアップするようなコース設定ですね。

丸本（副学長） 1分間ちょっと時間をいただきます。

司会（岩部） はい。

丸本（副学長） ただいま学長がお答えになりましたこと等々、それで現状そうなんです、今18年度対応というのがございますね。3割減の問題。これについて、やっぱり大学としては早急に方向を考えなきゃいかん時期が来ております。それで現在、昨年から学長のもとに教育改善推進会議というのを持っておりまして、今この18年度対応についても早急に対策を講じようとしております。特に、これは工学部だけの問題じゃなくて、すべての学部にもわたってこの3割減の教育内容の変わった高校生が上がってくることに對して、共通教育だけをいじくっても問題解決しないと。ですから、学部教育、場合によっては大学院の教育のあり方まで総合的にもう一度見直さないと、1カ所扱っても逆にまたその次の制度との溝が大きくなるだけであって、非常に困るわけです。で、今後は、その大学院の問題、学部の問題、それから共通教育の問題含めて、総合的にもう一遍各学部間のことも含めて見直しが必要だろうと思っております、少々時間をいただきたいんですが、早急に先生の御質問に対して大学としての総合的な答えを用意していきたいと、こういうふうに思っておりますので、もう少し時間いただきたいと。

司会（岩部） どうもありがとうございました。

大島（工学） 今のコメントに関連するんですけども、工学部の大島です。よろしくお願いします。

現場サイドからの切実な声としてちょっと聞いていただきたいんですけど、実は我々は教える技術、教えることの難しさそのものを習っていません。で、今おっしゃっていただいた小学校、中学校にはいろいろ改定があって、さまざまな子が入ってくるというのに対して、例えばその初等教育の教諭たちは教えることそのものの技術を習ったり研究したりしてるんですけども、我々大学の教官というのは、研究することはプロであったりしたんですが、学長が言うように大学として教育で全面的に押し出さないと勝負できないんじゃないかという一方で、教えることの技術っていうのは、実は学ぶ機会がないあるいは今までなかったっていうのが現状だと思うんです。ですので、ぜひ山口大学が日本ですばらしく教育環境の整った大学であると言わしめるためには、我々スタッフにも教育技術の向上をどっかで研修できるような、例えばこのFD研修会もその一環だと思うんですけど、それだけじゃなくて継続的なそういった技術、教育技術を学ぶための何かプログラムなり制度なりをですね、そういったものを検討していただければ非常にありがたいと思います。

加藤（学長） いいことをおっしゃっていただいた。誤解がないように言いますけども、教育というのも教科書だけを教えるのではなくて、大学の教育ですから教える内容はその人の実際の経験とか技術とかノウハウとか人生とか、いろんなことがないと学生ついてこないの、そのためにはどんどん研究もするし、社会活動もしてもらおうし、いろんな面で全部やらなくていいですけど、自分の得意わざはこれなんだということをばあんと打ち出すその情熱で学生が来ますので、それはぜひやっていただきたい。そういう点では、大学は教育だけではないんです。二流の人が学生に教えてもなかなか学生ついてこないの、やっぱり一流で、何かで一流の活動をしてもらいたいと、社会勉強もそうだと思いますし、自信持ってやっていただきたい。

で、それをどうやったら学生がちゃんとわかるかという、意気込みや情熱だけではなくてですね、それは方法論の問題なので、それは先生おっしゃったようにしっかりとやっていきましょう。

ただハーバードにしるケンブリッジにしる、みんな悩んでますね。その教育論ということについて。ど

うやったら効果的にそれをやることができるかというのは一生懸命に試行錯誤でやっているの結論はまだないと思いますが、このシラバスとか今やっていることは一つの解決策ではあるし、皆でつくり上げていく方向でがんばっていきましょう。

司会（岩部） どうもありがとうございました。今、御質問を2つお伺いして、出席者の方々の教育に対する意識の高さに非常に驚いております。恐らく、これからのFD研修、非常に実り多いものになるんじゃないかと考えております。



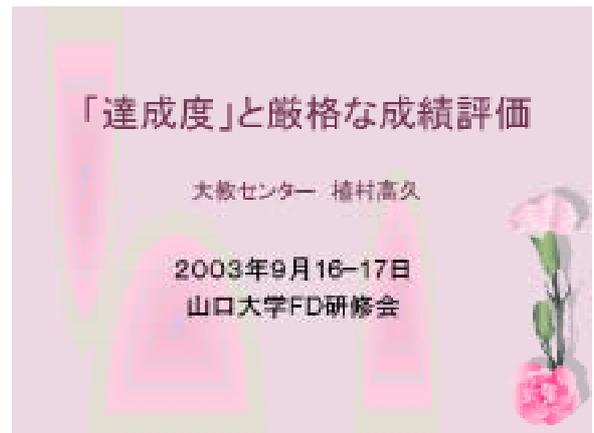
5 . 講義 1(なぜ、今、厳格な成績評価か)

それでは、次に、植村先生の方から講義 1「なぜ、今、厳格な成績評価か」、お願いいたします。

大学教育センター(植村) 時間的余裕があると思っていたんですが、ちょっと時間が押しております。できれば質問時間を後とりしたいので、手短にお話をします。

今、お話が幾つかございましたから、概略としては、入学者の多様化の中で、卒業生の質の保証ということをさまざまな形で求められているということがあります。多分、1998年に大学審答申が出て以降だと思んですけど、一つの路線を走ってまいります。大学改革は一つの方向へ向かっているということです。

その中で現段階としてやらなければいけないのは、少なくとも認証評価という時代に入りまして、大学がどれだけ教育の成果を上げているか。この教育の成果というのは非常に難しゅうございます。短期的にはかれるようなものではないし、あるいは言葉であらわせるようなものではないということあったわけですが、我々もその教養教育の評価で大学評価機構に行きまして、この評価なんていうのはどういうふうにするんだと話をしましたら相手にもされませんでした。基本的には、とにかくその帳じりを合わせるという形で評価をしなければいけないということがございます。



で、そのとき問題になりますのが教育目標の達成度ということが一つです。もう一つは学生の満足度です。で、私たちの短期的な、今まで見てきた短期的な観測では、この2つは実は全く別のものです。

学生の満足度って何であるのかというと、簡単に申しますとこれは人間関係です。大学における人間関係、先生も入っていますけれども、先生がいなくても学生同士のいい人間関係がつけられるところは非常に満足度の高い数字が出ております。特にこれは、例えば先ほど学長の話にもありましたけれども、資格とかそういうようなもので出口が閉められているようなところではそういう傾向があります。例えば、これは名前を挙げてもいいかもしれませんが、理学部保健学科さんは非常に高い評価、満足度評価をもらっておられますのは、個別のインタビューをして、面接をして進路指導とかをされているそうです。ここまでサービスをしますと、やはり満足度というのは非常に高くなってくだろうということがあります。

満足度の評価は、多分、学生授業評価と全く関連しないという観測があります。ただし、もう一つ裏側の教育目標の達成度の評価っていうのは、どちらかということとその満足度評価と相入れないような関係があるのではないかと思います。今、国立大学ではどこの大学でも全く同じことをやってる感じです。早い遅いはあるかもしれませんが、これをやらないとだめです。要するに認証評価機関による認証評価という制度、それから2009年だと思えますけれども、中期計画の達成度評価というのをしなきゃなりません。その中心的な目標がこの教育目標に対する達成度っていう話です。

FDに関するいろんな御要望と、さっきちょっとお話もあったんですけど、このFDを受けられても、だから授業がうまくなるっていうものではありません。むしろ、私は教育ということに関していいますと、決してそのものとしては前向きということではないことなんですけども、しかしこれはやらないと先へ進めないという状況があるということで御理解をいただきたいと思えます。

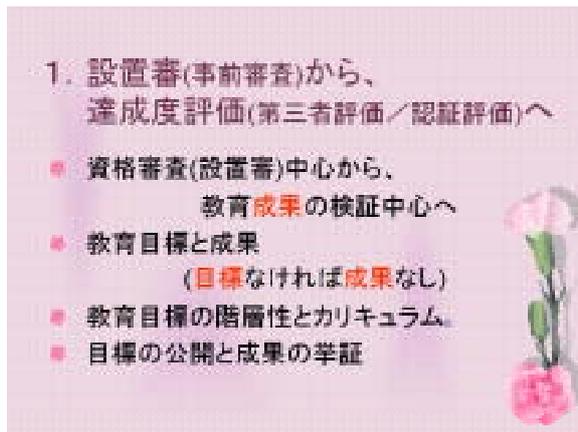
まずポイントであります。今までは、大学設置審というのあったわけですね。これ事前評価であります。で、教員がこれくらいの能力を持っていて、それからこういうカリキュラムがあるんだというような人については、その資格を審査する。で、「マルゴウ」であるとか合であるとかあるいは非であるとかっていう判定をして、まあ、研究を中心にしておりましてけれども、そういう教員の能力を審査する。そういう能力のある人間が何人かそろって、それが適切なカリキュラムに組み立てられていけば、大学というのはオッケーであります。

この設置審がなくなるわけではありませんが、設置審は今非常に審査がゆるくなってあります。そういう状況がありまして、昔のような設置審のやり方というようなことは、まあ、いろいろあるようですけども、だんだんこれからは減ってくるのではないかと。

で、それに変わってむしろ教育の成果が問われるというのが、第三者評価あるいは認証評価機関による評価という言葉も使われているわけですが、こういうものであります。これは、学校教育法第69条というのが資料にはあるんですけども、その次のページに上がっております。で、ものすごい長大な文章なんですけど、これだけの文章が去年の12月に学校教育法改正で入れられました。その中の大学設置基準の中に、要するに自己点検、自己評価とか、FDについての努力義務というのが掲げられていたんですけども、それが努力義務に過ぎなかったわけでありまして、まあ、努力しなさいと、努力すればいいっていう、そういったことなんです。でも、こちらの場合はそうではなくて、もう最低7年に1回は認証評価機関で評価を受けなければいけないということでありまして、で、その仕組みは何であるのかということ、要するに卒業生がちゃんと教育目的、教育目標を達成しているかということをはかるということになるわけでありまして、教育目標と成果です。

で、大事なことは、目標がなければ成果がはかれないということです。で、山口大学の全体としての理念、目標というものもありますし、それから各学部がさまざまな目標を掲げておられますが、残念ながらという言い方をしましょう、この目標の中で、その目標と成果との対応でちゃんととられるような目標が整理されている学部は余りありません。ということはどういうことかといいますと、抽象的な目標を上げてますね。例えば、「深い異文化理解を持った学生を育てます」と書いてあります。これはいいんです。じゃあ、その中身は何であるのか、どのようなものが異文化理解が深いというふうに言えるのかという、そこの中身言ってるんです。で、ここで言ってる目標は評価と対応するもんですから、要するにある学生をその尺度ではかってみて、この学生はこれができてるよ、この学生はできてないよという形でちゃんとその学生を判定できるような目標でなければならぬのです。

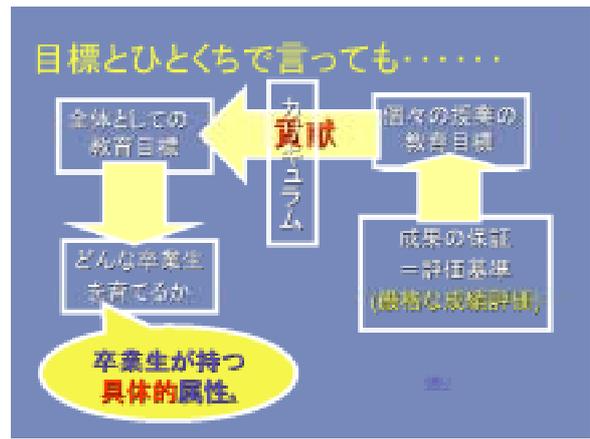
ですから、多分皆さんの課題にはならない、普通ならないかもしれませんが、これからいろんな学部等でこの教育目標というものを具体的に検討していただいて、明確なものをつくっていただかなければならないということがまず、第一の仕事としてあるということです。



それから、2つ目です。教育目標というものと階層性のカリキュラム 教育目標の階層性とカリキュラムということです。で、教育目標というのは、今申しましたが、例えば非常に抽象的な例えばこういう人間ですよってものがあるわけですね。で、それに対して具体的には、こういう人間はこういう属性を持ってますよというのがあるわけですね。で、今度は、それを個々の授業がどういうふうにして達成しているのかということでありまして。もちろん、教育目標はいわゆるカリキュラムの中にある、重要科目である授業だけで達成されるものではありません。大学の教育活動はカリキュラムに尽きるわけではありませんから、こういったものも含まれているわけですが、しかしカリキュラムに入っている授業というものは、少なくともその教育目標というものに関係をしていて、この教育目標を達成する形になっていないといけないということがあります。

目標と一口に言っても、という訳ですけどね。まず、全体としての教育目標があります。これは、わかりますが、どんな卒業生を育てるかということでありまして。で、こういう学生になってほしいな、こういう学生に卒業証書をあげたいな、そういうようなものがあるわけですね。大事なことは、ここにも書きましたが、具体的じゃないといけない。具体的じゃないと、例えば私たちは卒業判定をするときに、この学生は124単位ちゃんと規定どおりの単位が集まるとから卒業させますよっていう考え方をします。しかし、それが、ある学生は124単位集まったということでこの学生は卒業生が持つべき具体的属性を備えていますよ、また、ある学生は120単位しかそろっていないので、この学生はこの属性がそろってませんから、卒業させませんよという形で、教育目標の達成と卒業とがちゃんと相関していないと話にならないということでありまして。

山口大学の理念・目標の教養教育、これサンプルとして挙げています。で、下線を引いた部分が具体的に卒業生としてどういう属性を求めているかっていうことなんですけども、まず最初の部分ですね。真に人間的な平和、幸福、豊かさを探求し、実現するための礎を教養教育では築きますということなんですけども、これは非常に広い概念があって、抽象的なことです。で、これは、これだけでは多分目標として役に立たないと思います。で、じゃあ、具体的にどういう展開をされているのかということ、例えばここですね。みずからが考え、判断、表現、行動、発信する能力を培うということ、こういう能力ですね。これは、多分大抵の授業がこういう能力に関係しています。で、自分の授業は、こういう 例えば共通教育であれば、こういうものに貢献しているという、こういう形でこの目標を掲げます。で、そしてもう一つ重要なことなんですけど、じゃあみずからが考える能力っていうのは、どういう形で評価して、どうい



山口大学の「理念・目標」の《教養教育》

「自ら」が発見し、はぐくみ、かたちにすることをとおして、真に人間的な平和・幸福・豊かさを探求し、実現するための「礎」を築きます

《誠意》 誠意を大切にし、「自ら」が考え・判断・表現・行動・発信する能力を養います。

《個性》 個性を大切にし、心身ともに豊かな人間性と <美> を発見するところをはぐくみます

《出会いと交流》 出会いと交流の中で、歴史と伝統を重んじつつ、異文化を受け入れることを養い、地球社会と国際社会への責任感や義務感を培います。

《夢》 夢を描き続け、自らが生涯を通じての <知の探求者> になる「礎」を築きます。

ふうに表示するのかということが必要になってくるように思います。

それから、その次、例えば心身ともに豊かな人間性、美を発見するところって書いてますね。こういうのは割合に目標になりやすいっていうか、具体的ですからわかるんです。で、じゃあ、どこまでこれをやればいいのか、どういうことができなければいけないのか、これは後で沖先生の講義の中でちゃんと出てまいります。要するに、効果目標という形ではっきりと中身が規定することができるわけですね。そういうようなもので具体的に目標を立てていかなければいけないわけです。最後の部分ですが、これも同じなんですけれども、こういう具体的内容があります。これ、中身を具体的に展開をしていって、やっていかないといけないというのがここのお話であります。

さて、じゃあということで個々の授業なんですけれども、個々の授業は全体としての教育目標に役立っていなければいけません。私はこれを教えたいからこれを教えるんだ、では話にならない。教えることを通じて教育の目標を達成していかなければいけないわけでありまして。というよりも、教えることを通じて相手が何を、学生が何を学んだかということでもって貢献をしていかなければいけない。で、要するに、教育目標というのは卒業生の属性でありますから、こちらがどんな授業をしているかではなくて、学生の側はどんなことを獲得したのかというようなことが問題になるわけですね。で、こういう形で全体としてその個々の授業が目標を持ってるとすれば、それは全体としての教育目標に貢献していなければいけないという形、これは当然の話であります。

もちろん、この場合にこの間にカリキュラムというものが入っていて、いいですか、ここは大事なことなんですけれども、個々の授業はこのカリキュラムでそれぞれ役割を与えられている。そのカリキュラムに沿った形で教育目標が立てられていなければならぬということは当然であります。つまり、ほとんどの授業はある特定の目標を達成するように設計されていて、あるべきその卒業生の属性についてそれを目標にする授業がないというようなことがありますと、これはカリキュラム上問題だということになるんですね。で、あくまである程度カリキュラムに入っていて、個々の授業の教育目標というのが生きてくるという構造をしているということです。

そして、ここでもう一つの問題があります。実は、個々の授業はそういうわけですから、個々の授業がちゃんと教育目標を達成した学生だけを合格させるということでありまして。要するに、今度は学生の質が悪かったなあ、これやると全部落ちてしまうなあというようなことがあるかもしれません。しかし、そのときにやはり教育目標をちゃんと達成しているということの評価の基準にしなければいけないわけです。これをしないと、卒業生の質が保証できませんよね。この部分の拳証が求められているというのが、さっき言いました認証評価体制制度の検証体制であるわけです。

厳格な成績評価というのは、別に不可の数をふやせとかいう話ではございません。教育目標を達成しているか否かについてはっきり拳証できるような、証拠立てられるような評価の仕組みをつくっていただきたいということに過ぎないわけでありまして。

そして、重要なことです。今、一番大事なことは多分、公開ということだと思います。「シラバスなんてものを何で公開しなきゃなんないんだ」ってお話がありますが、これは大学の掲げる教育機関としてそういう評価とか授業の内容も含めてですけど、公開性を求められているということです。どこまで公開すべきか、すべきでないかということについては議論の余地はありますけれども、基本的には少なくともその授業の中身、それから授業の目標と評価基準、こういうものについては学生と先生の間で共有されていなければいけない。先生がそれを勝手に変えてしまえばいけないということです。これは約束事ですから、その形でやっていかないとだめだということです。しかもそれは、単に学生と先生との間だけではなくて、社会的に社会に対してもこういうことをしていますよと公開をしてやらなきゃいけないということでありまして。

具体的にはということですが、こういうようなものをいわゆる第三者評価機関が評価をして、要する評価結果を公表してくれるっていう形になるんだらうと思います。そして同時に、成果の挙証ということですが、例えばJ A B E Eなんかが極端で、要するに可の答案全部そろえたという形で、全数、すべての修了者あるいは単位をとった学生について挙証を要求されます。差し当たりそういうことはないかもしれませんが、私はこういうこういう形で、こういう能力を評価しました、ですからこの学生には単位がちゃんとあげられてるんですよ、この学生はちゃんと私の一定の教育目標を満たしていますと、そういうことを挙証していかなければいけないという仕組みになってくるわけでありませう。

さて、今度は個別的な話です。授業の目標と成績評価です。授業の内容と目標です。ここで勘違いをしていただいているということですが、実は簡単な話なんです。授業の内容がありますよね。例えば、何々学の初歩を学ぶという授業の内容があります。で、これはこれでいいんです。そういう授業内容は構わないんです。じゃ、授業の目標は、何々学の初歩を理解するでいいのかということなんです。

で、実は、先ほどの目標というのを見ていただければわかるんですが、例えば歴史に対する何とか、心を養うとか、例えば世界史の年表を全部暗記しても、歴史認識が高まったと言えるでしょうか。僕は、それは多分違うと思うんですね。つまり、実はこれじゃだめなことが多いんです。もちろん、知識を目標とするという授業がないわけではありません。ですから、そういうものもありますけども、大多数の授業は教育目的が、例えば、ものを覚えれば済んだという教育目標は立っておりませんので、全体のそれは教育目標の貢献はといったときには、その物事を覚えたというようなレベルでは終わらないわけですね。で、例えばですけども、何々学の初歩を理解することを通じて何々的な態度を培う。実は、後で申しますが、表記法というものではないんですけれども、こういう形で、授業の目標ってのはもっと奥深い、高いついていうんでしょうかね、もっと上の部分のものがあるだらうということなんです。

それから、もう一つの問題と言え、何を教えているのかではないんですね。何を学んだかなんですね。しかも、学んでどういうものを獲得したのかということでもって評価がちゃんとできる仕組みをつくらないといけません。これは学長先生のお話にもあったところでありませう。

その上で、次の話、これですね、目標の多様性、多元性です。さっき申しました知識理解というのは多分どの授業でも一番重要な要素になってきます。ものを覚えないとその先へ進めないというのは当然の話です。しかし、ものを覚えるという点だけで尽きてしまう授業というには非常に少ないと思ひます。

さらに、その上のレベルですね。例えば、何々についての思考習慣が身につくであるとか、何々の、例えば応用できる。よういようなものがその上位になってくるわけなんです。

で、何でこんな話をしているかということ、もう少しぶっちゃけた話をいたしましませう。去年の大学評価機構の教養教育の評価で、東大だけ点数がよかったんですね。何でよかったのか。確かに、東大は駒場教養学部という巨大な組織を持っておりませう、ものすごい豊かな教育の歴史を持っている。しかも、わりと努力をしているようでありませう。

ただし、多分僕は決定的だったと思ひますのは、彼らは相対評価をしているんです。で、彼らは35%以上を優をつけますと始末書を書かなんといかんんですね。理由書を書かんと。

今、この大学には相対評価の流れがあります。この前、北大の先生が来られたんですが、相対評

価ですとおっしゃっていました。

要するに、いろいろ小手先を労していても、結局は知識理解みたいなもので割合、簡単に単位を出す人が多いという形になりますと、優の数がどっと増えてしまいますね。80点超えましたから優出しました。そういうやり方をされていたのでは、これはだめだろうということでもあります。じゃあどうするのかということで、厳格な成績評価とは本当は言えないんですけども、優の数量を規制するというやり方をしているんですね。

私は、ここで目標の多元性という言い方をしておりますのは、実はそういう相対評価をやりたくないから言っているんです。相対評価をしますと、これも教員の自由度なんていうのはほとんどなくて、例えば、83点の人は優だけれども82点の人は良だよみたいな形で、非常に機械的な形で割り振りをしていかにとかんという形になるわけでしょう。で、そういうやり方が、僕は決して好ましい方法だとは思ってないからです。そのかわりにということで、目標の多元性と言ってますのは、より高い目標があるんだよと。そう簡単にそこまでいけないだろうと。そこまでいったやつだけに優を出してくれというお願いをしているわけです。

こういう形で、目標がうまく設定できるのであれば、わりあいうまくこれが動くだろうという目算を持っております。よろしいですかね。

それから、もう一つとして、裏側の問題として評価の観点がありますと、必ずそれに即した評価基準が必要になってまいります。で、特に難しいのは、例えば数学的思考方をどうやってはかるかとかですね。これはすごく難しいと思いました。後でお話、具体的に出てきますけれども、測定というのは、例えば知識理解だったら、要するに客観テストでも簡単にはかれるんですけども、個人の目標というのはなかなかかかれないう非常に難しい問題であります。しかし、それにもかかわらず、目標がいくつかあれば、それに対応した観点を設定、そしてその次ですが評価手段というのをちゃんとやるわけですね。

つまり、こういう、例えば数学的な考え方がちゃんとできていれば優をあげますよと言ったときには、数学的な考え方という観点到した、それを評価するための手段を考えて評価するというやり方です。

で、こういうやり方をしますと、優が山ほど出るということは、多分ないだろうというような考え方です。

最後に厳格な成績評価です。先ほどのお話もあったわけですけども、これ2つ目の話です。まず優が大多数を占める授業として、共通教育のレベルでいきますと、大体受講者の半数が優をもらっています。で、これが多いか少ないか、私は多くも少ないとも申し上げませんが、これについては大きな問題があるということでお話をします。

1つの問題が、目標が容易に達成可能であるという場合に優がたくさん出てしまった。それでもいいんじゃないかというお話がありますが、実はここは難しいことがあります。

2. 授業の目標と評価基準設定

- 授業の内容と目標
- 目標の多様性・多元性
- 評価基準:
 - 目標の多様性に見合った**観点**設定
- **観点**に対応した適切な**評価手段**

3. '厳格な'成績評価

- '優'が大多数を占める授業
- 不可が過大な授業
 - 目標が高すぎる(非効率)
- 1. 目標が容易に達成可能(貢献が乏しい)
- 2. 不適切な評価基準・評価手段

で、1つはですね、私たちが実は2つの役割をしている。このことを御理解いただきたい。一つは授業の遂行者、授業の実施者です。で授業を実施して学生をできるだけたくさん目標に行くように、押しつけて押しつけて、頑張るって頑張るって勉強しろよってやってる部分です。

もう一つは、実は目標の設定者なんです。実は、みんなが越えられるような目標を設定した場合には、目標の設定者としてはアウトです。大学の授業としては優しすぎるっていいと思います。で、これで言いますと、例えば、客観テストになっていて、例えば、英語の塾の授業を受けたりTOEICスコア運動みたいな形になっていると、ここでは絶対に個人の責任は問われません。制度の問題は起こりませんよ。

多くの授業の場合は、自分が目標設定者であり、かつその授業をする授業遂行者であります。で、学生と一緒にゴールを超えるように頑張ろうという人ですね。

この2つをやっていくときに、たくさん優を出したというのは、授業遂行者としてはほめられてしかるべきですけども、たくさん優のするような目標を設定したということについては、これは目標の設定者としてはまずいだろうということですね。

それから、もう一つ、これが多いだろうと思うんですが、実は不適切な評価基準、評価手段です。具体的な話はここではいたしません、例えば、レポートを書かせる場合に、まあレポートというのはだれが書いたのかよくわからないことがあります。とりわけインターネットなんかで引かれますと、非常に素晴らしいレポートがたくさん出てくるんですけども、実は自分で全然やってないというようなケースがありますね。本当、インターネットは注意しないと、修士論文とか学位論文ですらインターネットからの盗用が山ほど出ますんで、そういうようなことがあります。

そういうことも含めて、例えば、レポートを評価してなかなかのものをつくったから全員優だよというのは、これはまずいだろうと思います。で、つまりそれは学生がどういうものを身に着けたかを適切に測定していないのではないかとということです。

そういうようなことも含めまして、今のは一例ですけども、適切に評価したのを使いますと、そんなにたくさん優が出るということはないだろうという気がしております。

それから、2つ目であります。不可が過大な授業、これは先ほど小柳先生、お話がありましたが、やはりJABEEなんかでこう基準も定められてきますと非常に難しい問題が生じます。で、これにつきましては、丸本副学長がちょっとおっしゃったんですけども、我々の対処法を考えてまして、何とかしないといかんということで、そのうち何とかしますと、可決できるわけではないんですけども、我々の中心的課題と考えていて、何とかするつもりであります。

しかし、制度設計上という議論をしますと、不可が過大である授業は、これ明らかに目標が高すぎるという形になるわけですね。不可になりますと、実は学生はもう一回授業を受けますから、例えば、3通りにしか通らない授業は、6回分授業をしないと結局全員通らないという形になるのかな。そういう形になりますね。そういうふうにしますと、これは非常に非効率になってしまいます。で、こういう授業をつくってはいけません。

いずれも、ちゃんと評価しているという限りでは、実は、要するに授業の目標の設定の仕方にかかわってきている問題であろうというふうに考えます。よろしいですか。

で、それから、先ほどちょっとお話をしましたが、客観的な評価手段を使われますと、こういう問題はほとんど制度の問題になってきます。つまり、個々人の個々の担当の先生方が悩むべき問題ではなくて、制度設計をする、カリキュラム設計をする側の問題になっているようですね。

以上でおしまいであります。ちょっと時間が過ぎましようけれども、何か御質問等がありましたら。

山本(工学) 工学部応用科学の山本です。優の数が多い講義が問題であるということについてお伺

いしたいんですけれども、私自身としては、できるだけよい成績を学生につけたいと。それは1つが、就職のときに余り成績が悪いと大学の方と比較したときにそれで不利益をこうむるということがありますけれども、例えば山口大学が例えばそういうふうなシステムを変えたときに、ほかの大学との格差がものすごく大きくなるように一見、見えるんですけれども、そのこの部分はどういうふうにお考えでしょうか。

大学教育センター（植村） ええとですね、多分、中期計画、1期、2期終わるくらいまでは、国立大学についてはほとんど優が山ほどあるという形の評価はなくなると思います。遅い、早いがあって、うちが早いと過渡的には損をするというか、そういうイメージあるかもしれませんが、逆に僕は山口大学がそういう厳しい評価をちゃんとやってますということで、むしろ社会的に宣伝をした方が、我々としてはよいのではないかと思います。

山本（工学） そうしますと、ぜひ広報活動の方に力を入れていただいて、早く普及するようにお願いいたします。

大学教育センター（植村） 実は、余り言われてないんですけれども、大学評価機構がいろいろ教育評価とか観点別評価については、評価証を全部出しているんですね。で、いい取り組みをしているような大学は全国から問い合わせとか来ているんですけども、あれもなかなかその形ではサーキュレイトしてませんね。一部マスコミにも流しているくらいであって、中身そのものが知られてないという点で問題があります。

で、我々もそのちゃんと取り組んでいるのであれば、そういう形でやるし、例えば、成績証明書にその旨表記するとかということもあり得るのではないかというふうには考えてはおります。

大島（工学） 質問します。工学部の大島ですけれども、成績評価について非常に興味があるというのが、私自身悩んでいるところがあるので、そういう意味で今日は参加させていただきました。で、現場サイドから切実な質問をさせていただきます。

共通教育で物理学実験を担当しているんですけれども、教育目標としては、例えば簡単なところで毎回レポートを出す。出さないと成績をあげないよ、ということを設定しておりますが、実は、学生からのアンケートをとると、そのレポートを書くということ自体が異常なストレスになり、夜も眠れないというような声が上がってきて、だから物理実験はいやだ、嫌いだ、受けたくないという声が上がってます。

そうすると、そういったときに、例えば、若干甘くしてレポートの1個ぐらいなくても単位をあげてしまおうかというような気も起こるんですね。それは、先生のお話では、それはだめだよ。厳しくするんだよというお話なんですけど、現場サイドからすると、必ずしも厳しく、捨てきれないという悩みがあります。

それから、もう一点、それとリンクするんですが、実は山口大学は地理的な条件があって、特に工学部ですとか医学部ですとかは吉田地区と離れて、1年間だけ吉田地区にいて、それから2年目からは地区が移る。そうすると、1年次に残した授業というのを、落としていると、とりにいくのが厄介になって、多少甘くても出しといてあげた方が、その学生さんが2年、3年で成績が伸びてきているかもしれないという期待もあるという、地理的な難しい条件がリンクしてですね。そういった場合に、本当に厳しく切り捨てるのが教育としていいのかどうかというところの先生のお考えをお願いいたします。

大学教育センター（植村） 現場としては、今おっしゃっているようなことであると思いますし、それは仕方のないことだろうと思います。ただし、これは全体がこの鶏と卵の関係になっているんですけれども、例えば、必修系の授業については最後までとことん勉強しない学生が残るというケースがありますね。これは、追試で必ず単位がもらえるという、そういう期待を持っているという学生がいまだに

いるわけです。期待を裏切る先生がときどきおられますし、ある先生は絶対にくれないというような形で、名前をはせている先生もおられます。

そういう場合に、例えばその抜け道があるということが知られていれば、その抜け道を利用して学生は勉強しなくなります。全学生に抜け道をふさがないといけないのではないかというのが、長期的な考えです。

ただ、短期的には今おっしゃてることは多分間違っていない。その判断で結構です。で、長期的に見れば、どうやって道をふさいでいくかということは、私たちの全体としての制度を動かす上でやっていくべき話でありまして、それは個々の先生方の単純な努力では解決できないというふうに考えます。

よろしいですか。

大島（工学） もう一つ。目標のレベル設定についてですね、低すぎるのは設定者として無責任だよと話があったんですが、僕は別な観点からすると、大学全体として、だんだんと年次に合わせたレベルが高くなっていくというようなシステムのその取り組みというのも必要じゃないかと思うんですが、その点についてはいかがでしょうか。

大学教育センター（植村） 本来は、おっしゃるとおりです。つまり、そのレベルの側をカリキュラムの側で設定すべき話ですから、全体を見た形で、全体の中で設定しないと意味がないですね。だからおっしゃるとおりです。

滝野（人文） 人文学部の滝野と申します。質問というより、根本的な意見の部分をちょっと聞きますが、このFD研修のそういうテーマとして、厳格な教育評価をしなければいけないということをおっしゃったんですが、そのときに、認証評価というのが始まるんだというふうに言われるところから話を始められるのは、ちょっと本質的に違うんじゃないかというふうに私は思います。

これは、やっぱり教育効果がいかにあらわれるかということから話すべき問題の内容だと思うんですね。先ほど先生はその評価機構はそういうのは受け入れてくれないというふうにおっしゃったんですが、植村先生はじゃあその教育効果としてこういうふうな厳格な教育評価をする、成績評価をするということが、教育効果としてどういうものを上げられる、どういうふうに効果が上がっていくのかというふうにとっておられるのか、ちょっとお聞きしておきます。

大学教育センター（植村） 全く個人的な意見で申しわけないんですけども、私は、満足度の高い大学というのは多分いい大学だろうと思っております。で、そういう見地から見ますと、こういう制度的に厳しく厳しくしていきますと満足度は下がるという形に多分なってくるだろうと。僕は満足度を犠牲にしてまでこんなごりごりやったら意味があるのかなというようなことはあります。

ただし、一般的な言い方で、今、非常に言われてますのは、基礎学力という言葉がありまして、例えば、日本経団連が、要するにハイテク、20社ぐらいなんですけど、日本の代表的大企業を調査した結果で、一番言われているのがそのほとんどが修士卒をとっているんですけども、基礎学力なんですね。基礎学力というのは学部レベルの数学とか理科の能力ということだろうと思うんです。そういうものを欠いてる人間がすごく多いんだということです。

ほかのところ、僕は就職委員をしているんですけども、いろんなところで聞きますのは、やっぱり同じような話、文系でも同じような話だろうなというところがあります。

そういう状況を踏まえていって、それはやっぱり、今まで私たちがこう組んできたカリキュラムが学生の質の変化にもかかわらず、長年それに対する適用を怠ってきたと。そういうものについて、こういう機会に目標をしっかりと見直すことで、そういうものの組み立て方をしっかりとやり直すということではあるかもしれない。

よろしいですか。

増山（理学） 単純な質問ですが、資料にある学校教育法で引用されていることなんですけれども、認証評価の話で、大学評価基準というのがありますよね。で、それが評価機関が定める基準というわけですが、まあ今までで言うと、設置基準に沿ったものなのかなと思うんですけれども、その事後の認証評価とそれから中期計画の目標に応じて評価委員会がやる評価、これ違うものかと私は思うんですけれども、その2つの相対的關係と、植村先生が今おっしゃったそういう目標、授業の目標の評価というのはどちらの方に入るといふふうにお考えなのか。この学校教育法にいう認証評価と違うのではないかという質問です。

大学教育センター（植村） 認証評価と言いますのは、認証評価機関というのがいくつかありまして、既に名乗りを上げているのが、大学基準協会と大学評価・学位授与機構ですね。これは多分、認証評価機関になるうとするであろうと。

で、ここに書いてある大学評価基準というのは認証評価機関がそれぞれ大学を評価するときにこういう基準でありますよというものがあって、機関ごとに違ったものをつくるわけです。それをですね、文部省に届け出て、その組織とか何とかの審査を受けて認証してもらって認証評価機関という形になるわけですね。

国立大学の中期計画との関連で申しますと、基本的には、評価委員会の評価について、教育と研究については大学評価機構が行う評価に基づいてやるという形になっておりまして、その大学評価機構がやる評価が研究については2008年、地域計画の達成度については2009年度に出されます。実はそれと合わせて認証評価も別途やらんといかんのかという話もあるんですが、実は認証評価も兼ねてやろうという話が大学評価機構の中で出ています。これもわかりません。

で、おっしゃるとおり、実はかなり異質な面があるわけですが、基本的には同じであろうというふうに思いますし、例えば、増山先生よく御存知だろうと思いますけれども、中期計画、中期目標の中で、教育目標が上がっていて、それを達成するための措置というような書き方がなされていますよね。そういうものの中身として、全部こういうようなものを入れていかないと、拳証を入れていかないと多分、要求には応じてくれないというふうに思います。違いますか。

少なくとも教養教育の評価はそういう形の評価がなされていて、評価項目の順番は違いますが、内容的には、基本的には同じものであるというふうに考えております。

司会（岩部） それじゃあよろしいでしょうか。若干時間が過ぎてしまいましたけれども、これから昼食の時間になります。昼食は2回の食堂の方でお願いいたします。昼食が終わりましたら、13時を目標にまたこの場所にお集まりいただいて、次の講義を受けていただきたいを思います。よろしくお願いいたします。

6 . 講義 2(授業技術)

司会(岩部) そろそろ1時になりましたが、お集まりになられたでしょうか。予定どおりに進めさせていただきたいと思いますので、13時より授業技術に関しまして、沖先生から講義をお願いいたします。

大学教育センター(沖) 失礼いたします。大学教育センターの沖と申します。食事直後で眠たくなる時間帯かもしれませんが、ひとつよろしくをお願いいたします。

先ほどの学長のお話、それから植村先生のお話、質疑応答が非常に熱心に交わされています。今日、あすの本体、本質にかかわる内容をされているかと思うんですが、今日の質問にもありましたように、1点目の話は、授業技術に関して私の方から少しお話をさせていただきたいと思います。

なぜ、先ほど植村先生がお話になった、厳格な成績評価ということに授業技術がかかわるのかということなんですが、これももうさっきの質疑応答の中にもお話になってたことなんですが、到達目標という観点

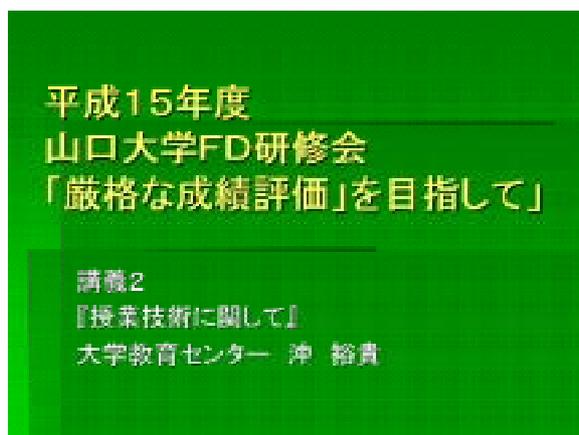
に変わってまいります。認証評価体制の中で各大学、学部、それからそれぞれの授業で到達目標というのをつくらなければいけない。その到達目標が避けられないような状況になってくるであろう。これは先ほど質疑応答の中にももうそういう旨の御発言がございました。

1つ目は世界的な競争の中でというふうに書いてございますけれど、目標を設定いたします。その目標を設定いたしましたら、そこに到達したかどうかということを挙証するという形で認証評価は行われるわけですね。それは、大学の理念、目標をしかり、各学部・教養教育の理念目標しかり、それから授業のレベルまでいきますと、授業の目標というのがあるわけです。

今日の、今回のFD研修会の大きな目的というのは、一つはその各授業が、後で申し上げますが、各授業が学部、あるいは学科の目標、理念に対してどんだけの貢献をしているかということの判断、もう一つは、各学部のカリキュラムが大学全体の目標との間にどういう関係があるか、どういう貢献度があるかということになってくるんですが、目標が定められた限りは、それを貢献するシステムとして授業をするわけですね。そうすると、そう簡単に到達目標を下げられないという状況が生まれてくるということなんです。

で、大きな背景は、何遍も言いますが、世界的な競争という背景です。さきから述べましたJABEEもそうなんですが、山口大学からJABEEコースを出た学生が、JABEEの実施試験にどの程度とおるのか。今は形式的な評価でJABEEコースが認定されたとしても、近い将来、じゃあ山口大学のJABEEコースを出た学生はとまらないじゃないかというような話が出てきたときに、これ非常に大きな問題になってくるわけですね。一国家試験だけではなくて多くの資格試験で各大学の合格率だとかが出てくるわけですが、恐らくそういった状況が近い将来出てくる可能性がございます。

これも、こないだもIDEという広島の方の研究会に行った話なんですけど、恐らく大学がいくつかの階層に分かれるだろうと。もうオープンアドミッションで、入ってくる学生のほとんどを占めるような大学においては、おそらくこういう問題が起こらなくて、どこまで我々は下がって、どこまでの教育を称するかという部分になるでしょう。しかも、その評価というのは、プラスアルファで、どこでそ



れをつんだかという、そういった評価体制になっていくであろうし、ある一定以上については、世界的なレベルの質の保障ということが言われる。その世界的なところでの質の保障といった大学は到達能力目標をそう簡単に下げられないということを言われてました。

入ってくる学生については、学力が非常に多様化し、学習意欲が低下し続ける、これは間違いじゃないわけです。2006年度問題のみならず、学生指導要領3割減という話もありますし、各種の研究者が問題はインセンティブディバイトだと、学習者の学力が多様化してという問題よりも、学習意欲それ自体が大きく低下している。これは初等、中等教育においてはもう本当に目を覆わんばかりの事情があるんですね。そういった学生がどんどん入ってくるわけです。

その学生に対して、到達目標はかえられない。というと、ここに書いてございますように、十分な学習支援策というのとらなければいけない。ここではまあ支援策という言い方をしていますが、授業技術ということのみならず、ハード面でのいろんなサポートも含めてです。例えば、少人数クラスをつくるだとか、あるいはリメディアル、あるいは補修クラスをどれだけ充実させるかといった、そういったものも含めてかなり本腰を入れて十分な学習支援策をとらなければ、大量の留年生を生み出してあるというふうに言われてます。

現在、全国の大学生の引きこもりが5%あるそうですね。これを厳格な成績評価は、GPOを含めてそういったJABEEコースの中で必ず保障するというようなことをやっていきますと、大量の留年生、大量の引きこもりを引き起こす可能性がある。それに対して我々はどう対応していくかということ、ハード面も含めて制度も含めて考えていかないと、これはとんでもないことになるだろう。

特に、その中でじゃあ今まではわからなかったらまあ放っておいてもいいのか、何割は留年してもしかたがないとかいう教育をやってきた部分がありますが、どうもそういう形では許されないような事態になってくるだろうというふうに考えております。

で、厳格な成績評価になぜ授業技術がかかわるのかという3点目なんですけど、まあこれも同じようなことですが、教育目標の挙証が求められているんだと。到達目標、それから授業、大学の満足度の挙証ということも求められるわけですね。目標は下げられないし、しかも多様化した学生の入ってくるし、目標の挙証達成度が求められているということで、一番重要になってくるのが授業技術、それから制度面でもいろんな保障であるということになってきます。

先ほどの質問の中に、じゃあ授業技術を高めるようないろんな研修が必要じゃないかというお話が出ておりました。まさにそのとおりだと思います。しかし、大学教育センターが主催するこういうFD研修会というのは、自ずととちょっと限界があるわけです。大学教育センターが考えてますのは、今後、授業科目別部会、それからFD、各学校ごとのFD委員会を中心とした授業、自分たちの教える授業に密接に絡んだ形でのFD研修会を今後、推進していく必要があるんだというふうに考えております。

ちょっとこれごらんにいただきたいんですが、99年の学生授業評価の中で、主だった項目を繰り上げてみたんですね。その中で、ちょっとこれごらんいただきたいんですが、話し方という項目があるんです。先生の授業、先生の話し方はわかりやすかったという項目です。それから、メディアというのはこれ視覚教材も含めて、あるいはテキストや授業資料を含めてですが、メディアは上手に使われたかといった場合、それから学生質問というのは、学生が質問しやすい雰囲気であったかというんですね。で、

なぜ、「厳格な成績評価」に「授業技術」が関わるのか？

- 到達目標は下げられない！
 - 世界的な競争の中での質の維持
- 学生の学力は多様化し、学習意欲は低下し続ける！
 - 十分な学習支援策が必要
 - 大量の留年生は経営問題
- 教育目標の挙証が求められる！
 - 到達目標、授業・大学満足度の挙証

説明、先生の説明はわかりやすかったか。特に、専門用語等の説明がわかりやすかったかといった内容です。

これを共分散構造分析というのがあるんですが、要するに、パス係数であらわして慣例をつけたものがこの図になるんです。

で、あともう一つ、出席と学習時間なんかも分析にかけますと、この4つというのは、授業技術という場でちょっと隠れた因子があるんですね。この隠れた因子の一つ一つの側面であると。で、かかわり合いはここに書いてあるようなパス係数見ていただいたら大きさがわかるかと思います。

そして、出席であるとか学習時間というか、学生意欲から出ているような因子であるというふうに考えることができます。そして、その間に0.42の相関関係があります。

そして、この2つ、この潜在的な因子、授業技術という因子と学生意欲という因子から学生が授業をわかるというスキーマ形成という因子が抽出されます。その間の関係がこんなふうになってます。

そして、このスキーマ形成という因子から3つのそれぞれの項目が出てるんですね。1つはその授業

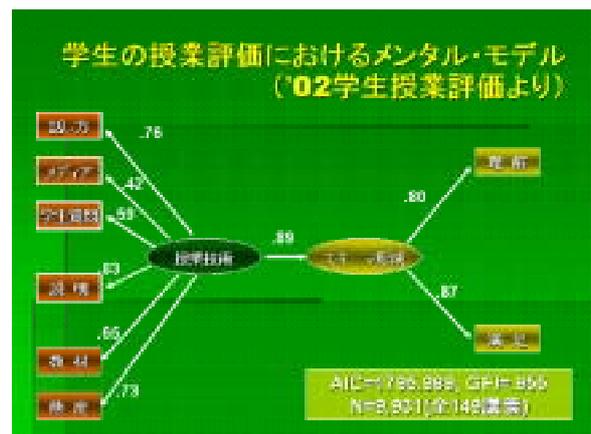
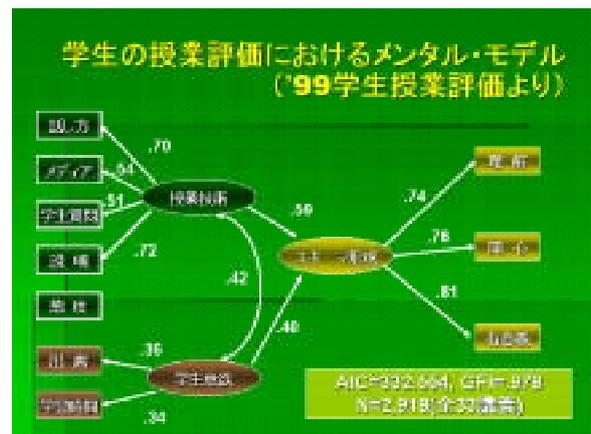
わかったかどうか。それから授業科目に関心があるかどうか。で、最後、その授業はよかったかどうかと。こういう構造が99年度の学生授業評価を分析して出てきました。ただ、これは学生が授業評価においてどういうふうな形で評価をしていくかというひとつのメンタルモデルになるかと思うんですね。

で、その中で重要なのは、この話し方から説明にいたるまでの授業技術が、例えば、その授業の理解度、関心度、有意義度にどれくらい貢献しているかというのが見えてくるんですね。

例えば、授業技術が直接的にはスキーマ形成と理解に達する。これ0.59掛ける0.74の比率でいきます。しかし、学生意欲というところを通して計算してもいいわけですから、その比率を計算しますと、これは0.56になるんです。授業技術からスキーマ形成を通して理解というのと、授業技術から学生意欲を通してスキーマ形成から理解を合わせますと0.56になります。同じく、関心は0.58、それから有意義度にいたりましては0.61になるんですね。つまり、授業技術が全体の理解度、それから授業科目への関心とかそれから有意義度に対して過半数以上で影響力を持っているということが言えます。

これを見ていただいても、いかに厳格な成績評価で厳しくやっていくわけですが、そんな中でもいかに授業技術が重要かということかおわかりいただけるかと思います。ただ、残念なことに授業技術というのは、じゃあどうしたらいいですよというような個別に、かなり綿密に長時間かけてやらなければならないことですので、二、三日の研修ですぐに身につくというもんじゃなかなかないようですね。

これは、99年度の授業評価でやったんですが、その後で、もう一つ大きな内容で、態度というのがあるんですね。これ教育論で態度という言葉よく使われるんですが、皆さん方が例えば授業態度が悪いという、この態度ではないんです。いろんな意味で使うんですが、ここでいう態度というのは先生の非



言語のコミュニケーション活動すべてです。例えば、どんな服を着て、どんな表情で、アイコンタクトをきちりととって、それから目ぶり手ぶりはどうだという、そういうものをすべて、今、態度と呼んでいます。この部分も恐らく重要なものであろうということで、昨年度の後期からの学生授業評価の中にはこの内容を入れております。非常に大きな内容を持っているところです。

これがそうですね、02年度の学生授業評価でやっておりました。ちょっと学生意欲の部分が飛んでしまったんですが、こんな形になってますね。話し方、メディアを2つに分けたんです。視聴覚メディアとそれから手持ちの資料等の教材に分けました。あとは同じですが、この態度で見えてます。授業技術を構成する0.73ほどの影響力を持っている形ですね。

じゃあ、これだけで言えることではないんですが、と言うか、わずか5分、10分で授業技術がインプットされるわけではないんですが、少しここでまとめておきたいと思います。

授業というのは非常にたくさんのものでございます。双方向の授業もあれば、実験、演習、あるいは語学の授業なんかもあります。全部やり方は違います。ただ、その中で一番大きいこういった形で、一方向で話しかける、まあプレゼンテーションといってもいいと思うんですが、そういった形の授業、つまり講義ですね。講義にははっきりとしたよくするための条件があります。

ちょっとここに書かせていただきました。下の図はレディネスの把握、レディネスというのは、学生が今までどんな経験を持ってきたか、どんなことを学んできたか、どんな興味、関心があるかということ把握することです。その学生がどんどんどんどん変わってきて、今度は2006年度には大幅にかわるわけですし、毎年のごとく、学生のレディネスは変わってきております。それを把握して授業ができるかどうか。

ここ難しいところなんです。把握すれば10年1日のごとく、10年前のノートを読むということはなくなります。しかし、そこで問題が出てきます。把握してもう今までやってきた授業、難し過ぎたな。じゃあ到達目標を下げるというものはなかなかできなくなってきておるといのは、唯一、背反の問題としてあるんですね。

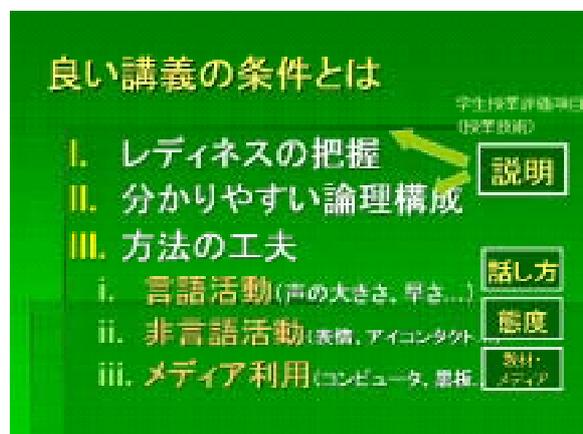
当然、これからシラバスを書いていただいて、今までの授業が難し過ぎた。優も全くでない授業、あるいは先ほど話がありましたが、オール優の授業、そういった部分の調整はしていただかなければいけません。カリキュラムをつくるのは大抵3年かかるというふうに言われています。自分の授業でいい授業をつくるのにも3年かかると。

そういった意味で、シラバスの内容も若干の変動はあってしかるべきです。しかし、3年、5年、10年になってきたときに、山口大学は到達レベル、到達目標下げられるかと、もう下げられなくなるだろうと思います。

把握したけれど、その1本の授業ではそこまで到達できないということが、これから往々にして起こってくるかもしれない。そのときには、同じ種の授業をふやす、少人数にする、あるいは段階を追って水準別にする、いろんな方策が出てきます。だから、制度上の問題が出てくるというのはそういったところなんです。

それから、もちろん授業を上手に教える技術というのにも必要になってくるわけです。1つ目はレディネスの把握。

2つ目、これは言わずもがななんです。分かりやすい論理構成、これは大学の先生方ほとんど全員



クリアされます。この部分でおかしな方というのは、私の知る限りではありません。

ただし、3つ目です。方法の工夫、今までは先生方は多くの場合、黒板に向かって学生にお尻を向けて、ぶつぶつぶつぶつ言いながら黒板に板書されるという授業が多かったんじゃないでしょうか。実際問題、このFD研修で去年、おとしと模範授業をおやりになっていただいた例があるんですけど、それでさえ、先生方、後ろを向いて、お尻を学生に見せながら、ぶつぶつ言いながら書いておられる授業が何件があったわけです。

まあ御自分で反省されたところであるかもしれませんが、その部分ですね、3点あります。言語活動、声の大きさ、速さ、言葉のくせ、私は関西弁が抜けませんけれど、これも含めてそれぞれがみんなさんくせをお持ちです。一番適した速さはどうか、大きさはどうかといったものを検証する必要があります。いろんなチェック、方法があるんですが、先生によっては、ええと、ああんというのを数えたら90分の授業で100何十回言っているんです。

2点目が非言語活動、これが先ほど申しました態度です。非常に大きいんです。ある研究者の話によりますと、これ全体を百分率で100としましたら、全部、訓練可能で改善可能な技術点です。その中で、何が大事かといったら、方法の工夫が70%以上を占めております。そして、この方法の中でも非言語が70%以上を占めています。よい講義をつくるためには、この非言語、要するに態度がものすごく重要だということも一つ抑えておいていただければと思います。大学生でそんなことがあるのかと言いますが、これは本当に大きいです。いかに先生方が学生の目を見て、ゆっくりと、どうどうとしてしゃべっていくというのが大きいですね。後ろを向いてお尻だけを見せてるだけで、学生は半分寝てしまうということです。

これには、教育心理学の方でいろんな実験ございます。教育の専門の方、よく御存知のところなんです。

例えば、ある病室がありまして、その奥に、両方とも世界的に著名な医者だという触れ込みで、お2人のお医者さんが見えるように、処置室にいらっしゃったんですね。片や白衣を着ておられる、片やGパン姿、違いはそれだけです、ふれこみは全く一緒です。で、次から次、100人の患者をこの部屋に入れて好きな方に行きなさいという選択をさせると、99人が白衣の方に行っちゃう。人間の心理って非常に簡単なもんなんです。逆を言えば、そういうところをしっかりと抑えて授業をすれば、中身はなくてもとは言えませんが、子供の、学生の心をつかむことは比較的容易であるということです。

これを、自分で気がつかないんです。例えば、いろんな方法がありますが、ストップモーションとかビデオキャッチャーとかいろんな方法があるんですが、ビデオで1回撮ってみて、で御自分の授業に参加なされると非常にその点がよくわかります。で、もう一人、ピアレビュー言いまして、同僚の先生方にそれを見ていただくと、先生、ずっと後ろを向いてはるなとか、先生、学生の中を1回も見てへんなというのが非常によくわかります。一度こういうことをやってみたらとわかりやすいかと思います。

それから、3点目は目のやりようです。これも言わずもがなというところなんです。最近は黒板とか手持ちの資料以外にコンピューター、視聴覚機器をよく使った授業は、当然、学生評価が高くなりますし、わかりやすいところもあります。

しかし、これも一長一短でありまして、すべての授業がすべてパワー・ポイントであると、恐らく学生はたまったもんじゃないかと思います。

これは林先生が恐らく明日言われるかもしれませんが、授業というのは、様々なメディアをそのときの学生の様子に応じて使い分けるといことが大事ですので、疲れてきたなといったら、じゃあ手持ちの資料を見てください。ページ、何ページとかいうような話をする。こういうのがベテランの教師の技術になってくるんですね。だから、これは言ったらあれかもわかりませんので、ちょっと頭の片隅

に置いていただいて、ピアレビューとか今後、部会ごとレフリー活動をやられるときの参考にさせていただければと思います。

学生授業評価にそういった内容が盛り込まれているということをご存知いただいていたほうがいいと思うんですね。何であんな項目で選んであるかというのは、すべての授業に対応しているわけじゃないんです。実験とか実技の方には対応していませんし、語学の授業も若干違うところがあると思います。今後はちょっと改良して、いろんなバージョンづくりを予定してありますが、特に、今年度から始まりましたプレ授業評価というのは、とにかく年度途中、例えば5月の中ごろ段階で先生方に学生が授業評価、特に技術項目をお返しして、それを先生方の授業、年度途中の授業に反映していただこうと、こういう観点だったんです。

あの中で説明というのはレディネスの把握やわかりやすい論理構成の部分、それから話し方というのは当然言語活動ですし、態度というのは非言語活動、教材メディアというのは、メディア利用に対応している。

こういった部分の評点がどうであったかということをもう一度見ていただいて、そこが今、自分のウィークポイントであるということを書いていただければと思います。

学生授業評価、それからFDというのも、先生方の授業を改善するための材料なわけです。これで評価をするというのは大学教育センターの仕事ではございませんので、先生方にそういう材料を、データをお返しするという意味でやっております。それで、この対応する観点をごらんいただくと非常にありがたいかと思えます。

もう過ぎましたな、失格です、ごめんなさい。若干時間が延びてしまいましたが、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会（岩部） 御質問等がございましたら。

小柳（工学） 先生のおっしゃることは非常によくわかたんですけども、ただ最初、先ほど、一番最初にお話しましたように、最終目標は下げられない。レベルは下がる。私、先生のお話から非常にそのジレンマを感じるの、ある内容を教えるとき、どうしてもしゃべり方が足らん。どんどん差がでても、それは授業技術をみがくと可能ですか。それともやはりある程度、内容を減らさないとだめでしょうか。

大学教育センター（沖） 非常にお答えしにくいんですが、ある意味可能だし、あるところは不可能だと思います。で、今までのレベルでしたら、恐らく先生のお考えになっている授業の内容を工夫すればいけるレベルにあるだろうとは思いますが、いや、見たわけじゃないですからあれなんです、ただ間違いなく学生の意欲とそれから多様性は増してきます。今後、それはできなくなる可能性が非常に強いというふうに思います。

で、こないだもIDEの総会に出てきまして、同じ議論がありました。1時間ばかりみんなでわいわい言いながら、やれることは何かと出して出たのは、結局は今言った2点です。一つは、授業技術を全部、今のと同じ感覚ではだめだろうと。授業技術を改善しなければならない。そのために十分我々は研修を積まなければいけない。もう一点は、制度的なカリキュラムを含めてで、例えば、200人、300人の講義でどうしようというんだということもあるわけですね。そしたら、もう分割せざるを得ないじゃないかとか、あるいは対応なしで、例えば、物理の1、2もとってなくて理学部に入ってくるんが出てくるとか、生物やらなくて医学に入ってくるのが出てくるとか。そうしたら、段階別にした、あるいは補修クラスをつくったり、今まで15回の授業でこんだけやってたのを半分にして2段階にしてという、入門コースのやり方ですね。そういうようなやり方では分割せざるを得ないじゃないかと、そういう議論が出てます。

やり方としては、カリキュラム制度面での改革、ハード面での改革ですね。と、それから、各個人がやる授業技術の改革と、もうこの2つにつきるんじゃないかというふうに思っています。

司会（岩部） よろしいでしょうか。

それでは、次のプログラムになって、ワークショップ1の方に進みたいと思います。

じゃあ沖先生の方から御説明があります。

大学教育センター（沖） それじゃあお手持ちの資料のページ4ページをおあけください。ワークショップ1までは恐らく時間どおりにいくと思うんですが、そこから先はこう質問、御意見が非常に多く出ると思います。だから、ここに書いてあるタイムテーブルどおりいかないかもしれませんが、あとはもう岩部先生にお任せしたいと思います。

とりあえず、ワークショップ1は、今からこの2階にございます各研修室に移動していただきます。そこで、お1人3分程度、先ほど学長にもお話ありましたけれども、まあちょっとくだけで、昨日の夕食はどんなもんがいい、どこで食べて、どのようにお召し上がりになったか。プライバシーにかかるとありますから、差し支えない程度で、本当なら5日ぐらいのワークショップしたらもっとどろどろしたものを出不さいかんですけれど、今日はそういうわけにもいきませんから、この程度にしておきたいと思います。

で、それを含めまして自己紹介をしていただいて、研修を進める司会を1名、それからワークショップの記録係、どんな内容でワークショップをしたかという記録係、これは後でちょっと集めさせていただいて、報告書にまとめたいと思います。

それから、明日のグループ発表の報告書、この前で発表していただく先生をお1人、大体5人から8人、9人ぐらいのグループですので、その中で3人、お役を決めていただきたいと思います。

そして、次、2時になりましたらこちらの部屋にお戻りいただきたいと思います。

それから、一番最初に申し上げましたように、ワークショップ2からは、実際に先生方のシラバスを順番につくり上げていただくという作業に入ります。で、シラバスをお持ちいただいてない先生、共通教育でも専門教育でも構わないんですが、持ってくるのをお忘れになった先生はこちらで共通教育部分が印刷して持っております。で、専門教育の部分については、何先生が上の、254の部屋でCDシラバスから印刷する手はずをしておりますので、このワークショップ1の余った時間の中でそれを取り寄せておいていただきたいというふうに思います。

各研修室には、プロジェクターとそれから教材提示装置がございますので、手書きで書いた先生もコンピューター上で書いた先生も写しながら自分の書いたシラバスをグループ討議の中でかけられるようになっております。また、大学教育センターのスタッフが順次回ったりしますので、もし足りない部分がありましたらおっしゃっていただければと思います。

それじゃあ、やってみましょう。

7 . 講義 3 - 1(授業の目標の設定) 講義 3 - 2(シラバスの目標の書き方)

司会 (岩部) 講義 3 の 1 と 2、これを続けて行います。授業の目標の設定について、まず沖先生をお願いいたします。

大学教育センター (沖) 失礼いたします。再び、大学教育センターの沖です。授業の目標の設定ということで、20分程度、お話をさせていただいて、その後、吉田先生の方から具体的に、シラバスに目標をどのように記述すればいいかというお話を

10分程度やらせていただきます。それを受けて、また先ほどの部屋にお戻りいただきまして、実際にシラバスの目標の部分を考えていただくということになります。

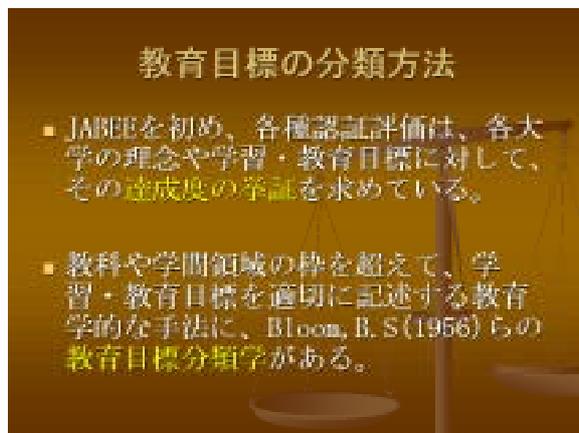
私自身が、吉田さんもそうなんです、実際にやってみて、うんうんうなってしまって、考えれば考えるほど実は時間をとってしまいます。だから、30分各部屋に戻っていただいて、御自分の目標を考えていただくということになるんですが、ひょっとしたら時間が足りないかもしれません。残り30分は比較的近い科目のメンバーが集まっておりますので、そこで交流をしていただきたいという趣旨でございます。

ただ、ちょっと時間については、一応そういう区切りをしておりますが、そのとおりにいけるかどうかは定かではございません。よろしく願いたします。

今日はもう既にですね、学長のお話の中にも認知的領域うんぬんという話が出てきましたし、最初からすごく高度なところで走っているんだという気がいたしました。植村先生のお話で、非常によくまとめられていたんですが、先ほど少し、私がふれましたのは、次のような段階を経ていきます。1つ目は、認知評価について、大学全体の理念、目標と各カリキュラムとの関係のなかで、特にその授業がねらいとか目標とかいうものをきちんと達成するような、貢献度が図れるかというような内容。もう一点は、そのカリキュラムの中で授業の各目標がそれにちゃんと貢献しているかどうかを聞くわけで、この2点になったと思います。

いずれにしても、目標の記述の仕方ということが非常に大きな問題になってきます。後でそれが達成度を評価できるか、達成度を挙証できるかという問題がついて回るわけです。

この達成度を挙証する方法、特に、そういった目的を持った目標記述学というものがあります。で、これはもう1956年といいましたらもう半世紀も昔の話なんです、ブルームという人が教育目標の記述化というのをやっています。通称ブルームのタクソノミーと呼ばれているものなんです、タクソノミーというものは、体系というようなものですね。で、もともと分類するクラシフィケーションという意味ではなくって、ブルーム自身が言ったことにはその分類がそのなかにさらに上位目標から下位目標までであると。また授業によっては年間教育計画を立てるレベルから個々の50分の授業までと



のように、非常に細かく分けられていて、それぞれ一つ一つ目標を達成することによって、全部上位の高度の目標に達すると。そういう体系を現したもんです。

で、これが今のところ、先生方の中には、今こういうことができているんだというような話もあるかもしれませんが、私ども研究者が行っているのは大体同じことなんです、これ大きく超えるようなものでは、まだ出ていないというのが正直なところです。

いろんなこれからも問題点も申し上げます。正直全部申し上げますので、そういう問題点も含めて、現在のこういう領域の、こういう考え方の中で目標を記述していくのが一番いいんじゃないだろうかと。ベスト論ではございませんが、比較的、かなり融通のきく応用範囲の広いものじゃないかというふうに考えているわけです。

で、そのタキソノミーというのはどうなのかと申しますと、これ学長がお話されたんですが、医学部、歯学部の教育というのはもうかなり前からこれを取り入れてやっています。1つで3つの領域があるというんですね。私は、タキソノミーというふうに言いましたけれど、ここでお話をさせていただくのは、どっちか言うたらその分類の一番上の部分だけをとってしまう。だから、クラシフィケーションとして使っているという、矛盾がございます。

しかし、こういったことを考えていただいてはいかがかというところなんです、1つ目、認知的領域という領域があります。教育目標を立てるに当たって、認知的目標、認知的領域の目標というのがある。それは、知識理解や講義の論理的思考力等を言う部分です。これは、ある程度、ペーパーテスト等で測定可能なんです。

2つ目は、情意的領域と言っているものです。これは、価値観であるとか、学習意欲であるとか、また出てきましたね。レベルも同じようだなと聞いておっいいんですが、態度のことです。これは非常に評価が困難だと思います。ただし、後で申し上げますが、大学の教育の目標であるとかねらいであるとか理念であるとかといった分は、かなりこの部分の表現が対応されているということがあります。

そして、3つ目、よく覚えてらっしゃいますね、学長先生は、精神運動的領域という、3つ目の領域がこれになります。これは運動技能であるとか、操作技術であるとか、技能等で、学習行動の観察や活動結果によって評価が可能になるんだというふうに言われています。

まず、この3つの領域があるということを含みおきいただきたいと思います。そして、このブルームの分類は、この後、いろんな研究者が世界中の文化に翻訳して、構造目標というのが広がってきたんですけど、この人の偉いところというのは、もう一点あるんですね。この法典、目標を分類したということだけではなくて、それ以前のタイラーという人がおったんですが、その人から含めて、目標の記述の仕方について、1つの条件を出しています。その条件というのは、到達目標を上げるということです。到達目標は、学習活動を通じてその実現が規定される学力の内容を明示化するもんであるという言い方をします。さらに、その到達目標は、行動目標という形で書きなさい、という主張しているんです。ここは今までのねらいとか目標とかの書き方と大きく違う点です。非常に抽象的な、あるいはレベル的な目標の記述の仕方が多く見られますが、このブルームを初めとしてその後の行動目標の考え方というのは、到達目標ということにして、その到達目標の記述の方法は行動目標で書きなさい。こういう言い方をしているんですね。行動目標とは何かと言いますと、学習後に達成される学習成果としてと、行動の形で書きなさいと。こういう言い方なんです。具体的な行動で書きなさいということなんです。



先ほど、植村先生のお話もありましたように、例えば、何々について理解するっていうような言い方ではなくって、理解も一つの行動の一種なんです、一般目標とこれは書いているんですが、もう少し具体的な学習成果としての行動であらわしてほしいということです。だから、例えば、何々について説明できるというような言い方がいいかという考え方は。

そこで、先生方のお手持ちのレーベルをちょっとごらんいただきたいんですが、資料の16ページ、表2というのを付けております。ちょっとごらんいただきますでしょうか。行動目標の記述に用いられる行為動詞、これ自体が非常に大きな研究ジャンルでして、多くの研究者がいろんなオリジナルの行為動詞という

のを設けているんですけど、それ全部説明しても意味がございませんし、一応、その中で多くのものに書かれている推奨例でもお考えいただければと思います。これじゃないといけないということじゃないんですが、こういうものだというふうにお考えいただければと思います。

一般目標記述のための動詞の例、それからその後には行動目標記述のための動詞の例で、認知的領域、情意的領域、精神運動的領域というふうに、いろんな言葉を書いております。

で、ここに書いてある言葉をごらんいただきますと、非常に具体的であるということがおわかりになるとと思います。理解するとか、わかるとか言った言葉ではなくって、具体的に列挙するとか、あるいは構成する、分類する、比較する、判断する、予測する、こういった具体的な行為をあらわす言葉を使って目標を設定しなさい。

こういう言葉で設定いたしますと、評価もしやすくなるわけですね。何々について理解するといったらどの程度を理解と呼ぶか、非常に難しいところです。考え方がわかるなんていうとどの程度わかるかわからないです。

ところが、分類するであるとか、あるいは説明するというか、説明できたかできてないか、分類したかどうかというのははっきりしてくるわけですね。そういうことは程度の問題があります。

そういった形で、評価、それからどういう授業をすればそういう力が身につくかというのもおのずとわかってくることになります。

この認知的領域なんか特にそうなんですが、この行動目標の形で書いてあれば、その評価の仕方とそういう力をつけるための授業の方法というのがかなりの程度、限定されてくるという特徴があります。

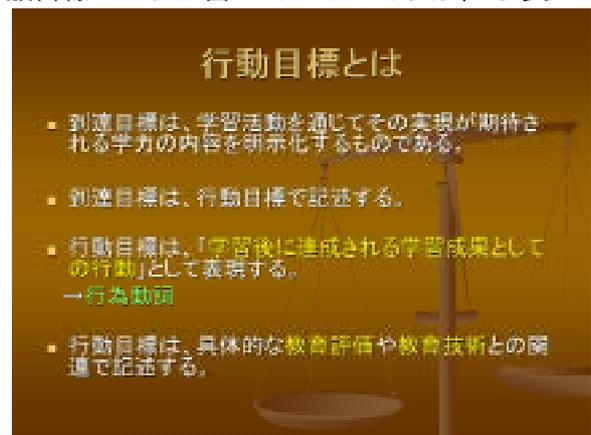
で、行為動詞と今申し上げた行動目標は具体的な教育技術との関連で記述するということになります。

いきなりなんですが、この問題点をさきにお話をしておきたいと思うんです。行動目標にも限界がございます。これはもう先ほどの学長の話の中にも既にあつたんですね。学長がお話になった中で、学生の意欲によって全然違うじゃないかと。じゃあ意欲を持たせるにはどうしたらいいんだと。興味を持たせるにはどうしたらいいんだというようなお話がありましたけれど、まさにその点です。

行動目標というのは、先ほども言いました3点あるわけです。3つの条件です。認知的、情意的、精神運動的領域、その中で、情意領域の行動目標、つまり、態度であるとか倫理観であるとか道徳観です。これはまた非常に教育の目的とか目標とか理念にたくさん書いてある言葉なんですね。

そういったものが書いてあるんですが、それを達成する手順と筋道が非常に不明瞭な点がございます。

それから、先生方よく御存知のところですが、学習というのは失敗から学ぶ。それから学ぶ過程が非常に重要だというようなこともよく言います。ところが、達成目標、特に行動目標で書きますと、でき



た結果によって評価するわけですから、できなかったものというのは評価にならないわけですから。ところがじゃあ失敗して学んだとか。学ぶ過程とはどうなるんだという問題点がございませう。

さらに3点目ですが、これはもう初等、中等教育でもう、言うたらブルームのタキソノミーはもう50年前の話ですから、いっぱい実践されているんですけど、目標つぶしの授業でございませう。これは、先ほど言いましたように、上位目標から下位目標まで1枚の指導案が出て回って、たくさんたくさん目標があるんですね。その目標を1個ずつつぶしながら授業をやっていくということに陥ってしまうんです。これはもう先生方想像されたら一発でわかるんですけど、非常にだるい授業になります。教師にとっても学習者にとっても、本当に何かせきたてられているような授業であって、余分なわき道にそれたり、冗談を言ったりということがなくなる。全然生き生きとした授業にならないわけです。そういった授業がたくさん出現しております。

こういった行動目標の限界というのがありますが、先ほど申し上げたように、残念ながら、このタキソノミーを超える目標記述はございませう。さらに、情意領域や高次の目標が存在し、それを挙証しなければならないという事実があります。

もう一度お手持ちの資料の18ページをお開きいただけますでしょうか。そこの表の4のところ、ジャビーの学習・教育目標の設定と公開という部分を載せていただいております。これちょっとごらんいただきたいんですが、その太字で下の方にありますね。(a)地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養、(b)技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、及び技術者が社会に対して負っている責任に関する理解(技術者倫理)、それから下の方には(g)として、自主的、継続的に学習できる能力、これ情意的領域、それから認知的領域の中でも非常に高度なものです。

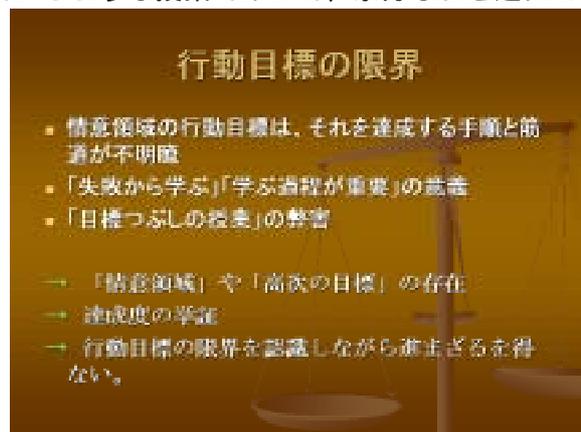
こういった目標が上げられているんです。これ理念とかねらいとか言っているんだそうなんですが、ジャビーみたいに非常に厳格で、しかも言ってみれば科学技術のその成果というのを問うようなものなんですが、それですらこういった抽象的な、講義の目標が上げられていると。

こうなってきましたと、いくらまあ行動目標の限界というのがわかってながら、非常に情意的領域や認知的領域も講義の目標というのは難しいということがわかってても、その達成度の挙証をしなければならない。その限界を認識しながらこれ以上のものがまず出てない以上、限界を認識しながら進まざるを得ないというのが現在の到達点だということなんですね。

だから、我々も問題点は非常によく承知しております。そして、非常に難しい課題だということも認識しております。しかし、こういった形で、情意領域や講義の目標も含めて記述しなければいけないし、その達成度も挙証しなければならないというのが、今我々におかれている状況だということをひとつ御認識いただきたいと思ひます。

非常に難しい点なんですけど、梶田叡一がこのあたりについて非常に深い考察をしてあって、1978年にこういう類型をつくっております。で、今までは認知的領域、情意的領域、精神運動的領域、そこに上位から下位までいろんな目標が記述してあったんですが、それを少し分けて考えたらどうかと。余りにも偏狭だからもう少し類型を考えてやれば比較的评价の方もやりやすいし、それからそれに対する授業設計もしやすいんじゃないかというのを提案しているんですね。

ちょっとこれをごらんいただきたいんですが、すべてにわたって達成目標と向上目標と体験目標というのをつくっております。で、認知的領域の中で達成目標というのは、非常にシンプルで知識理解。た



だ、先ほど高度のとか広域のと言いました、認知的領域のその部分は向上目標ということで、論理的な思考力とか創造性とか、思考判断という言葉も使えます。例えば、数学的なものの考え方、物理的なものの考え方というのはいこに入ってくるわけです。

で、まあ、あと体験目標というのがあります。情意的領域では、その分野に興味、関心があるかどうか。向上目標としては、さらに態度であるとか価値観、J A B E Eに載っている技術者倫理とかはここに入ります。精神運動的にはこうなるんですね。

で、この中で、右端の体験目標というのは余り大学では用いられることが少ないようです。だから、考えていただきたいのは、認知、情意、精神運動の中で、達成目標と向上目標、特に、精神運動的の領域の向上目標も余りないですので、考えていただきたいのは、この5つぐらいじゃないかなというふうに考えております。これ後で吉田さんの方の話があると思いますが、うちのシラバスを全部見ていただきましたら、ほとんどこの5つの中で目標を均一されていると。ですから、大体これぐらいのカテゴリーがあれば先生方の目標は書けるんじゃないかなと。

この中で、どれが認知的の向上であるとか情意的の達成であるかというようなことを御自分の中で検討していただきながら、目標記述をしていただくということがまず第一歩になってきます。それは非常に難しい、しんどい作業です。私自身も自分の中でやってみて、分けするのが難しいですが、これを書いておくことが、例えばJ A B E Eにしる、あるいは学部や大学の理念、目標に対して非常にシンプルに対応関係をつけられるんですね。

例えば、ここに目標科目の中に上げておけば、例えばJ A B E Eなんかの技術者倫理に対応するのはこの科目だよということがシンプルに言えるわけです。

で、またこの部分を実現するための授業設計を特化して考えるべきです。あるいはその後も相談すればいいというようなふうに、非常に今後の発展をしやすい分類の仕方であろうというふうに考えております。

非常に時間がかかります。これだけでできる、今日の研修だけでできるものじゃないかもしれませんが、こういった区分けで考えてみたいと思います。

で、よその大学も大体同じ動きをしているんですが、例えば、こないだ見せていただいた岡山大学なんかでは、それぞれの科目が、例えばJ A B E Eの項目、目標の中でどれに対応しているか丸つけてあるとかね。やっぱりこれと同じような区分けをしています。

情意的領域の向上目標について、これがJ A B E Eの倫理観に当たる授業であるというのは、複数の順番にしてあるわけですね。

で、山口大学の場合は作業倫理でしたか、あれは今特化して出したんですけど、考えていただいた方がいいのは、恐らくすべての授業に、複数の目標があるだろうと。全部、認知できればいいけど達成目標だけではないはず。英語にしる数学にしる物理にしる、すべての授業が向上目標の情意的領域の、例えば向上目標を持っているであろうと。その部分をやはり1回は考えていただいた方がいいだろう

梶田毅一の目標類型
目標類型と目標到達性の観点から見た大学の目標類型の分類

	達成目標	向上目標	体験目標
認知的領域	知識、理解等	論理的思考力、創造性(思考、判断)等	発見 等
情意的領域	興味、関心等	態度、価値観 等	触れあい、感動 等
精神運動的領域	技能、技術等	確達 等	技術的達成 等

目標類型と目標到達性(梶田)

	達成目標	向上目標	体験目標
到達性の確認の基本視点	目標として規定されているとおりにできるようになったか	目標として規定されている向上が見られるかどうか	目標として規定されている体験が生じたかどうか
目標到達性の性格	特定の教育活動の直接的な成果	多様な教育活動の複合的な成果	教育活動の内在する特定の経験
到達性確認に適した時期	授業中、単元末、学期末、学年末	学期末、学年末	授業中、単元末

うというふうに考えてます。

それが、シラバスの目標欄に明記されて、そして、J A B E E にしろあるいは学部、あるいは大学の理念、目標との対応関係がきちんと示されて、さらにそれで評価方法がはっきりすれば、今回の認証評価には十分対応していけるんじゃないかなというふうに考えております。

引き続き、じゃあシラバスにそれをどう具現化するかということ吉田先生の方に説明していただきます。

大学教育センター（吉田） 失礼します。大学教育センターの吉田です。

今、沖先生の方から教育評価、論議の観点から理論的な面について御説明をいただきましたけれども、私の方からは多少、技術的なことについてこれから御説明をさせていただきます。

達成目標を立てて、その成果を挙証するために基礎的な作業としてこういったシラバスの作成というものを行っていかねばいけないわけですが、山口大学のシラバスは2004年度から多少の改定を予定しております。そのことについて、まず御説明をさせていただきます、その後、具体的にどのように、今、沖先生の方から御説明があったような、そういった到達目標を組み込んで書いていけばよいのかということをお説明させていただきます。

まず、具体的な内容に入る前に、基本的なことについて確認をしておきたいと思います。もう先生方、長年このシラバスを書いてきていらっしゃると思いますのでよくご存知かとは思いますが、シラバスとは何か、まず1つ目は、学生が科目選択を行ったり、履修計画を立てたりするための基礎的な情報であるということがまず1点です。

それから、授業が始まる前だけではなくて、授業が始まった後、授業中、または授業外で学生が学習を行うための指針となるものでもある。これが2点目です。

そして、教員にとっては、教員が学生に示す授業全体の設計書、契約書であるという性格がございます。

ですから、授業に来た学生がもともと想定していた学生のレベルとちょっと違ったので授業が少し遅れてしまっているというようなこともあるかもしれませんが、基本的には、このシラバスを見て学生が授業を選択してくるわけですから、シラバスに沿って授業を進めていくということは前提となります。

では、山口大学のシラバスはどのように作成されているのかということですが、大きく分けて2通りあります。1つ目は、Webシラバス「かぼす」、今年からWebシラバスが始まりましたけれども、そのフォーマットを利用して書いていただいている学部、そして共通教育、もう一つが、独自のフォーマットを利用して書いていただいている学部がございます。

例えば、理学部、それから工学部、医学部、それから理工学研究会など、まあ独自のフォーマットを



1. シラバスとは何か？

- ・ 学生が科目選択を行ったり、履修計画を立てたりするための情報。
- ・ 学生が授業中や授業外で学習を行うための指針となるもの。
- ・ 教員が学生に示す授業全体の設計書、契約書。



利用しておりますけれども、来年度からこちらの「かぼす」の方に参加をされる学部研究科もございます。

では、シラバスにはどのような内容が含まれているのかということですが、これも先生方よく御存知かとは思いますが、一応ここに上げました、ちょっと字が小さいので見にくいかも知れませんが、授業の授業科目、単位数、担当教官などなど1から15項目まで、大体どの学部のシラバスにもすべて含まれております。例えば工学部とか理学部でその授業の目標とか授業の概要という言葉の使い方が多少違っていたりとか、そういったことがございますけれども、大体同じだと考えてよろしいと思います。また、その全国的な動向を見ましても、こういった内容が含まれているということはどこかの大学も大体同じでございます。

では、具体的に、シラバスはどういうふうな観点から作成すればよいのかということなんですが、学生の立場に立つと、学生が科目選択、履修計画を行う上で役に立ち、そしてまた授業中や授業外での学習を充実させることのできるシラバスが理想であると。

学生はシラバスを読んでいないとおっしゃる先生も多いと思います。確かに読んでいない学生もおります。けれども、中にはしっかり読んできて、次第4回目の授業はこういったことをするから、じゃあ教科書ここら辺読んでおけばいいのかなと、そういうふうな役に立てている学生も実際におります。

ですから、そういう学生の役に立つようなシラバスをつくることは、大切なことであると思います。

また、学生の立場だけではなくて教員の立場に立つと、シラバスにはどういうメリットがあるのかと言いますと、具体的には、作成をする段階では授業の概要を考え、目標を設定し、そして授業計画を立て、そこで用いる教授法、教育方法、それから学習メディア、黒板やプリントだけじゃなくて、例えばこういったパワーポイントをつかったり、そういった、どういった学習メディアを使うのか、そういったものの選定をしなければなりません。そして、ここで立てた目標に沿って成績の評価方法を考えなければなりません。

つまり、具体的に授業をデザインする過程であるということです。そして、この過程というのは、実は授業を成功に導くための大切な作業で、基礎的な作業であるということが言えます。

ですから、学生だけではなくて、先生方にもこういったシラバスをつくることはメリットがあるんだということです。

では、2004年度はどのような変更を行うのかということなんですけれども、先生方、御自分のシラバスをプリントアウトされて、お手元にあると思いますけれども、これが2003年度の「かぼす」

2. 山口大学のシラバスはどのように作成されているか？(2003年度)

- Webシラバス「かぼす」のフォーマットを利用・・・共通教育、人文学部・人文科学研究科、教育学部・教育学研究科、経済学部・経済学研究科、農学部・農学研究科、医学部(保健学科)、東アジア研究科
- 独自のフォーマットを利用



3. シラバスにはどのような内容が含まれているか？

①授業(開設)科目、②単位数、③担当教官、④開設期、⑤開設時期、⑥授業区分、⑦対象学生、⑧授業の概要、⑨授業の目標、⑩授業計画(15週)、⑪成績評価方法、⑫教科書、⑬参考文献、⑭連絡先・オフィスアワー、⑮メッセージ・担当教官からの希望事項

→どの学部のシラバスにもほぼすべて含まれている。



4. シラバスの書き方

学生の立場に立つと？

- 学生が科目選択・履修計画を行う上で役に立ち、授業中・授業外での学習を充実させることのできるシラバスが理想。

教員にとっては？

- 授業の概要・目標の設定、授業計画とそこで用いる教授法・学習メディアの選定、目標に沿った成績評価方法の選定など、**具体的に授業をデザインする過程**であり、**授業を成功に導くための大切な作業**。



のフォーマットです。こちらに授業の概要があり、授業の目標があり、それから1から15週分までの授業計画、そしてその横に備考があり、そしてその下に成績評価方法、これは選択もできるわけですが、こういったのを選択できる欄がございます。これを多少、変更を加えたいと思っております。それが大きく分けて3点ございます。

まず1つ目が授業の目標を分離をしたいと思っております。2003年度は1つの欄に自由に記述をしていただいております。これを2004年度は授業の目標、一般目標、それから授業の目標、到達目標のこの2つに分類をしたいと思っております。

それから、2つめは、授業計画欄を改定をする予定でございます。改定は大きく分けて3つございまして、1つ目は、授業項目・内容等、ここが15週に分けて書くところでございますが、ここの欄を項目と内容に分離をしたい。これはまた後で御説明をいたします。

それから、授業外学習の支持等という欄を追加したいと思っております。これも後で御説明します。

それから、授業の記録の欄を追加する予定です。ここにはWebシラバスのよい点としまして、リンク機能、そこから学生がそれを見て関係のホームページなりに飛んでいけるという、そういったリンク機能を貼ることを予定しております。

それから、3つ目ですが、成績評価方法に観点別というものを入れる予定でございます。それからジャビー収集資料という欄を追加する予定でございます。これによりまして、到達目標に応じた成績表保管方法を選択していただくということになります。

後の先生方、ちょっと字が小さいので見にくいかもしれませんが、お手元の資料の27ページにWebシラバスの改訂案が載せてあります。その後にも、具体的な記述例が3つ載せてありますので、ぜひ御参照ください。ここでは27ページのものを例にして挙げております。

まず授業の概要ですが、ここが先生方の行われる授業の内容、目的、ねらい、こういったものを書いていただきます。ここに学生を主語にして何々を理解するというふうな形で書いていらっしゃる先生もおられましたけれども、そうではなくて、ここは先生を主語にして書いてください。ですから、先生がどういった授業をするのか。例えば、丸々を説明するとか、そういった丸々を紹介する、丸々を提示する。丸々を講義するなど。先生が主語になります。先生がどういった授業を行うのかということを書いていただきます。

次に、検索キーワードです。ここが2003年度にもございました。Webシラバスのよい点としましては、キーワード検索ができるという点がございます。例えば、化学、「ばけがく」と入れますと、工学部、それから理学部、それから教育学部、医学部も検索でかかるかもしれませんが、いろいろな学部にもたがってその化学とついている授業がピックアップされることになります。

これは、化学に興味のある学生にとっては大変いいことなんです。この学部でこういう授業がやっているんであれば、自分も聞きに行ってみたいなど。そういう意味で、学生のその履修の幅を広げること

2004年度の変更点

1. 「授業の目標」を分離
2003年度版は1つの欄に自由に記入
2004年度版は「授業の目標(一般目標)」「授業の目標(到達目標)」の2つに分離。
2. 「授業計画」欄を改訂
 - ・ 「授業項目・内容等」の欄を「項目」「内容」に分離。
 - ・ 「授業外学習の指示等」の欄を追加
 - ・ 「授業の記録」の欄を追加。リンクを貼ることができる。
3. 「成績評価方法(観点別)」「JABEE収集資料」欄を追加
「授業の到達目標」に応じた成績評価方法を選択

科目名	科目コード	単位数	授業形態	科目担当者
化学	0000	2	講義	山田太郎
授業の概要	一般化学の基礎を学ぶ。			
授業の目的	基礎化学の知識・技能を習得させる。			
授業の到達目標	基礎化学の知識・技能を習得させる。			
授業の記録	授業の進捗状況を記録する。			
成績評価方法	試験による。			
授業計画	1. 基礎化学の講義 2. 基礎化学の実験			
備考	基礎化学の講義は、1. OOCを履修できる。2. OOCを履修できる。3. OOCを履修できる。			
授業外学習の指示等	1. OOCを履修できる。2. OOCを履修できる。			
授業の記録	1. OOCを履修できる。2. OOCを履修できる。			
成績評価方法	1. OOCを履修できる。2. OOCを履修できる。			
授業計画	1. OOCを履修できる。2. OOCを履修できる。			
備考	基礎化学の講義は、1. OOCを履修できる。2. OOCを履修できる。			

ができるという意味で、大変メリットのあるものがございます。

ですから、わかりやすいキーワードをここにに入れていただきたいと思います。

それから、授業の一般目標、これは目標の欄を一般目標と、この下の到達目標の2つに分けておりますけれども、この一般目標には何を書くのかと言いますと、学習者を中心として、授業の最も大きな目標をここに書いていただきます。ですから、ここに例を挙げておりますが、丸々を知る、丸々を理解する、丸々を考察するといったように、先ほど沖先生の方からも御紹介ありましたけれども、行為動詞、これはレジメの、資料の16ページの表2のところがございます。

表2
目標類型と目標領域の観点からの代表的目標例の分類 (単位)

目標	目標類型	達成目標	向上目標	評価目標
認知目標	① 知識、理解	② 理解の深化、創造性(思考、判断)等		両方、等
情意目標	③ 興味、関心等	④ 態度、価値観等		両方あり、両方、等
技能・表現目標	⑤ 技能、技術等	⑥ 態度、価値観等		両方あり、両方、等

一般目標、行動目標の記述に用いられる行為動詞の例としまして、まず一般目標記述のための動詞の例というのが16の一番下の方に上がっております。こういった行為動詞を用いまして、先生が行われる授業の最も大きな目標、この授業の中で学生に身に付けてほしい知識や技術や態度など、そういったものの中で最も大きな目標をここに書いていただきます。そして、この大きな目標を達成するために、この下の到達目標を選んでいただきます。例えば、ここ6つ挙げてございます。その中で、知識・理解、施行・判断、関心・意欲、態度・価値観、技能・表現、その他として挙げてございますけれども、これが先ほど沖先生から紹介になりました資料の方の19ページでございます。表の5、目標類型と目標領域の観点からの代表的目標例の分類、この部分で、大体、シラバスに分類しまして5つに分けられるだろうという紹介がございましたけれども、その部分に当たります。

この大きな目標を達成するためにそれぞれの個別の到達目標のどれを達成したらよいのかとか先生方に考えていただきまして、ここにチェックを入れていただき、チェックを入れたものについては、この右側で丸々を説明できる、丸々を関係づけるとか、また先ほどの行為動詞のところ、ここで使われる行為動詞がのっておりますので、それを参考にしながら書いていただきたいと思います。

これが先ほどのその表5ですけれども、大体この1、2、3、4、5、はここに該当いたします。そのほかのところは6としております。体験目標というのは、初等、中等教育ではかなり多いんですけども、2003年度のシラバスで上げていらっしゃる先生方は、余り多くはございませんでしたけれども、大体こういうふうな区分けになっております。

例えば、じゃあ具体的な書き方としてどうしたらよいのかと言いますと、例えば、認知的領域の達成目標として、ここに知識、理解というのが上がっております。その分野で身に付けてほしい基礎的な知識や理解の部分でございますけれども、例えば、共通教育の外国文学で、ドイツ文学の授業があるといたします。これ2003年度の目標なんですけれども、ドイツ文学に親しみ、作品が問いかける問題を読み取って理解を深めると。これでもよろしいんですが、多少、やはりこの理解を深めると、これでいいのかと。

実はこれは、先ほどの大きな目標ですね。授業全体が大きな目標としてその理解を深めるとというのがよく使われる、使ってよろしいんですけども、そうではなくて、大きな目標を達成するためのより個

表5
目標類型と目標領域の観点からの代表的目標例の分類 (単位)

目標	目標類型	達成目標	向上目標	評価目標
認知目標	① 知識、理解	② 理解の深化、創造性(思考、判断)等		両方、等
情意目標	③ 興味、関心等	④ 態度、価値観等		両方あり、両方、等
技能・表現目標	⑤ 技能、技術等	⑥ 態度、価値観等		両方あり、両方、等

(例)ドイツ文学に親しみ、作品が問いかける問題を読み取って理解を深める(共・外国文学)

※授業の目標(一般目標)向けの行為動詞。授業の目標(到達目標)では学生が何ができるようになるかもっと具体的に示す。

(修正例)
ドイツ文学に親しみ、作品が問いかける問題を述べることができる

別の到達目標では、もっとその学生が何ができるようになるのかというのを具体的に示していただきたいんです。

ですから、理解を深めることができるようになるのではなくて、例えばですね、これがふさわしいかどうかわかりません。例えばです、ドイツ文学に親しみ、作品が問いかける問題を述べることができる。こういうふうに修正をしていただければよろしいです。

そのシラバスの例がたくさんそこに上げてございます。21ページからずっとこの各領域、知識・理解、それから思考・判断、関心・意欲、態度・価値観、そして技能・表現、それぞれ分類、一応目を全部通させていただきます、ここに上がっているのが模範的な例というわけではなくて、これを今のような形で書きかえていただくという作業を、次のワークショップではしていただくこととなります。

以上です。

司会（岩部） 今2つの講義について、御質問等があれば。

山本（工学） 済みません、ちょっと次のワークショップなんですけれども、個々の授業の教育目標は全体の教育目標にどういうふうに表現するかを考えなくちゃいけないということなので、全体の教育目標というのをもう一度ちゃんと示してほしいんですけれども。

大学教育センター（沖） 先生のおっしゃるとおりです。今日午前中の植村先生のお話にありましたように、正直言って、はっきり、きちんとした部分がまだでき上がってないんです。

そこで、今日は、その山本先生の理念目標がございまして、先ほどもう一回、2段階といたしました全体の目標とそれからカリキュラムの関係、それからカリキュラムの中で各授業貢献度と申し上げます。この下の方を考えいただくということをお願いしたいと思います。

将来というか早急にやらなきゃいけないんですが、教養教育、それから各学部の教育、それからそういったものの理念、目標とカリキュラムの関係というのを早急に整備しなければならないというふうに考えております。

今日は、ちょっと下の方の課題についてお願いしたいと思います。各授業の先生方が考えられる到達目標が何かということをお考えいただきたいというふうなんです。

小柳（工学） 植村先生が目標の可能性、多元性というのをおっしゃってまして、私の理解は、例えば普通の人はこちらまでできてとか、授業として5つの段階を設ければいいわけです。でも、よくできて5つまでとか、そういうふうなこととして捉えたんですけれども、このカリキュラムの書き方にそういうふうな書き方をやればシラバスで、それはちょっと違う話でしょうか。

大学教育センター（植村） やっぱりその問題が出たわけですね。基本的にはそのところは非常に難しい問題でして、つまり、目標がA B C Dとあって、それが段階的にA B C Dという形になるわけじゃないです。多元性という言い方をしたのも、それが例えばいろんな側面があって、いわゆる、情意目標、そういう側面もあれば、向上目標みたいな形で出てくるところもあるわけで、それがその正誤関係のような形になってない以上、それを並べて書くという形になって、どこまでできたらという書き方までは一般的には踏み込めないだろうと。

小柳（工学） 先生がおっしゃったのは、沖先生は例えば、5つに分ける点のそのことをおっしゃっているのですか。

大学教育センター（植村） はい。その5つに分けるということなんですけれども、私が申しましたのは、例えば、その5つのうちの1つに対しても入り口の部分から奥まであるだろうと、つまり考え方とか、あるいは理解といった場合、知識理解というものがあれば論理的に述べるというものがある。論理の方が多分上にあると思います。私はそういう話をしたわけなんです。私はカリキュラム専門家ではないのでそのところちょっとまだ。

小柳（工学） ちょっと勘違いしてる。ただ、優の上の秀という話のときは、私は私のなりの理解をしたんですが。

大学教育センター（沖） そうです。植村先生が科目別部会とか、あるいは教育専門委員会でお話されたのはそういう意味です。今までは成績ていうのはペーパーテスト1回やって、それで80点以上が優とかしてまして、そのときはそれでいいんですが、そのペーパーテストで図られるものが何かって言えば、多くの場合、知識・理解、もう少し言えば、認知的領域での若干向上できた目標が入っているところなんです。そういう部分を認識した上で、すべての知識・理解の部分だけで優を出さないようにというのが、もともとの趣旨だったわけです。

だから、何遍も申しますけれども、J A B E Eを初めとしてうちが中期目標掲げていくねらいもそうなんです。さまざまな情意的領域や認知的領域の高次の目標が入ってくるわけです。それを実現するためには非常に単純な構造の試験だけでは恐らく評価できないであろうと。それだけで優をつけてしまうのは問題だろうということなんです。

大島（工学） なかなか整理がつかなくて、ぜひアドバイスをいただきたいんですけども、目標の設定の仕方、お話の中にあっただと思うんですが、絶対的な到達目標をよしとするのか、あるいはその授業を参加した学生のスタート時点からはかって、その子がどこまで到達したかを評価するような目標を設定する方が望ましいのか。そこはどちらを理想というのかな、どうなんでしょうか、アドバイスいただければ。

大学教育センター（沖） はい。ちょっと言葉足らずだったかもしれませんが、到達目標というのは絶対的なものです。だから、例えば、これも先ほど申しましたように、世界的なレベルで、例えば、山口大学工学部のJ A B E Eコースを出たときに、これだけの到達水域にあるべきだということではかれるべきものです。

現実問題として、そこに至らない場合が先ほど申したようにさまざまな問題を起こしてくる。例えばカリキュラムを20にして、実際に、例えば1段階。

大島（工学） カリキュラムを20にするというのは1つの方法だと思うんですが、今日、明日できることじゃないので、そうすると1つの授業の中で、学生のレベル等を明らかに分けていくということを明示しないとまずいと思うんです。そういう意味で私はお聞きしたんですけども。

大学教育センター（沖） その問題が当然出てくると思います。今大きく問題になっているのは、J A B E Eコースというのがあって、1つの学部、学科を全部含むところと含まないところが出てきてますよね。

大島（工学） 今、J A B E Eはちょっと。そこまで話を複雑にしないで、もう少し単純に。

大学教育センター（沖） 先生おっしゃったのはこういうことですか。例えば到達目標があって、その能力別クラスと習熟度別クラスに分けたとします。ここで優をとると、その次で優をとるのは違うじゃないかという意味でおっしゃっているんじゃない。

大島（工学） いや、違います。

大島（工学） 1つの授業の中で、例えば物理を高校時代に履修している子と、していない子が同時に授業をするわけです。その子たちに対して同じ到達目標を設定した場合に、彼らの勉強する量ていうのは明らかに違いがあるわけです。そこで、絶対的な到達目標にして、これを到達しなければ悪というやり方をすると、スタート地点が低い子に対しては、これは余りいいやり方ではないというのが私の実感として感じるものですが、それに対してどうでしょうかということなんです。

大学教育センター（沖） 現実問題としては、すべての領域、すべての課目で同じことが起こると思います。

大島(工学) 思います。

大学教育センター(沖) 結果として申し上げますと、到達目標は下げることができないというような目標です。そこにいろんな対応性という話をしました。そういうところなんです。いろんな対応性を持った学生に対して1つは授業技術と、1つは制度上の問題で、それをリカバーするような方策を立てなければいけないということがあります。だから基本的なスタンスは、到達目標はその間どんだけなったかという。

大島(工学) リカバーする方法を考えなければならないというのは、それはある種の理想論で、現場で我々はそれをやらなきゃいけないですね。という所に対して、それを考えてくださいというのではちょっと我々も書けなくなると思うんですが。

大学教育センター(植村) 行動目標という書き方は、明らかに絶対評価、到達目標という考え方で。ですから、いくら努力してもそこまで行かなかった者はだめという考えです。それが実は沖先生がいろいろごちゃごちゃおっしゃったのは理由があって、それは、彼が限界と言われたでしょ。要するに、行動目標という書き方は、さっき最初からお話してるように、教育の仕組みとしては必ずしもベストのものじゃないということです。そういう努力みたいなものを汲み取ってやって、その努力をした学生が次の授業で頑張ってもっといくかもしれないという。そういう可能性そのものをほとんど無視したような記述方式というのが行動目標の考え方です。いいですか。我々はそういうものに即して差し当たり授業を組み立てないといかんというところにいるということで、今こういうことをやってます。ですから、それがいい教育になるというのでは必ずしもありません。

言ってることはわかります。わかりますけれども、そういう仕組みのものであるという理解の上でまず行われているか。ですから、これを厳格適用しようとか、あらゆるものに万能な形でこういうような形で何かをすれば済むとか、そういうふうを考えているわけではありません。

高木(人文) 成績というのは一種の学生と教師のコミュニケーションみたいなところがあって、つまりほかの子と比べてだめな子でもここまでしたんだから優をあげるとい、その選択権は僕らに与えてほしくて、そんなところまで介入されたくないですね。

それと、常に偏差値でもって絶対的にできるというんじゃないくて、特に文学部なんか人文学部なんか人間少ないですから、その子の日常生活知ってるんですね。だからほかの子よりもずっと落ちるから絶対不可だとそんなこと僕らとてもできません。

大学教育センター(植村) それはそれで結構なんですけれども、そのかわりその形で目標を書いていただかないと困るんです。そういう形での目標の記述の仕方は私あり得ると思います。

高木(人文) そうなったら、大学が1つの価値基準でシラバスというのを決めちゃうんでしょ。非常に窮屈な思いして、何か価値観ということもできてますけれども、ある意味で総合合わせみたいになっちゃうんじゃないですか。

大学教育センター(植村) そういうことを考えているわけではありません。個々の授業については、大多数の授業はそうなると思います。個々の先生方がその到達目標というものの設定者であるし、授業の遂行者である。その2者の側面を相変わらずいつまでも持っていらっしゃる。高木先生は高木先生の授業でその目標について、例えば私の授業では、中国文化についての関心などについて尊重するスタンスで、永続的に努力をするということについて高い評価を与えるというような形での記述方法があれば、そういう形での目標を記述されればいいんじゃないか。

高木(人文) これ、授業という言葉が、業を授けるという言葉に、余りにも力点が置かれすぎてますよね。学生はやっぱり学ぶ意欲があって、学びたいという、学生は自分なりに授業に臨むときに、目標なり何なり立てるわけです。それと僕らが学生たちに向かって書くということになるべく結びつける

ということが大事なんだけど、学生側の意欲みたいなものに対して全然話ししてない。

大学教育センター（植村） いや、そういうことじゃなくて、意欲を評価することは非常に難しいという話です。どういう評価法があるかという点については、かなり難しいということもあるんですけども、意欲を授業の中でその行動目標として掲げられて、それを評価されても一向、問題はありません。

高木（人文） だから今、小中学校の授業には、学ぶ意欲をはずされているわけでしょ。何か今、話を聞いている限りでは、何か小中学校的な授業の仕方をスポイルしているような気がして、学生の学ぶ意欲みたいなものをもっと見詰めて、それを評価するということが非常に大事だと思うんです。

大学教育センター（植村） それは、そのことについて別に異論があるわけではありません。高木先生のおっしゃることが、わからないわけではないんですけども、今までお話をしてきました、いわゆる到達目標というものを考えるシステムは、そういう形での目標の記述法と、それからそういう成績評価法という考え方に基づいて成り立っているわけです。

それは高木先生がおっしゃるとおり、そういうようなさまざまなものについて評価しにくいという側面があるわけです。評価ができないわけではありませんし、高木先生の授業をこういうふうに評価しろというようには申しません。よろしいですか。この観点で必ず評価しなさいというようには我々は申しません。

納得ならないようなところがあるかもしれませんけど。

青島（理学） 例えば、中高でも学習指導要綱で最低のものと、それからプラスアルファというのが今、学力の低下ということで与えられてます。やはり大学でもかなり学力の差があるんで、最低のものと、それから、できる子は例えばこれについてやりなさいというような形になるんじゃないかな。そこから辺のこの到達目標に関してははどうしたらいいんですか。

大学教育センター（沖） 今、先生がおっしゃったとおり、到達目標というのが可のレベルですそこから上が優なり、秀なりが出てくるわけです。可のレベルが質の保証。

青島（理学） 可のレベルで考えればいい。

大学教育センター（沖） そうです。それから、高木先生がおっしゃったことはもちろんそのとおりで、センターでもずっと議論し、まだ結論が出てないところなんですけど、次の講義の部分で授業設計と評価のところのお話をさせていただきます。

要するに情意的領域、特に態度とか意欲とか価値観であるとか、そういったものを評価する方法、そういうものをつけるための授業、そういうものを大切にする授業の方法って何かという話をど少しさせていたきたいと思います。

我々が言っているのは、行動目標の限界ということを最初から申し上げてるのと、ここの考え方ですが、行動主義という教育学の中の大きな潮流があるんですけど、その考え方に基づいてやってるわけですが、それで行ききれなかった部分があるというのが最初からの想定なんです。その部分を、じゃ、どうして改善すべきかいうのを、次の4の方で若干話をさせていただこうと思います。

先生がおっしゃったこと非常によくわかることですし、また、会場に林先生という教育学のそのあたりの専門家もいらっしゃいますので、御意見ちょうだいできたらと思います。



8 . 講義 4 - 1(授業計画と成績評価方法)

講義 4 - 2(シラバスの各週の授業計画と成績評価方法の書き方)

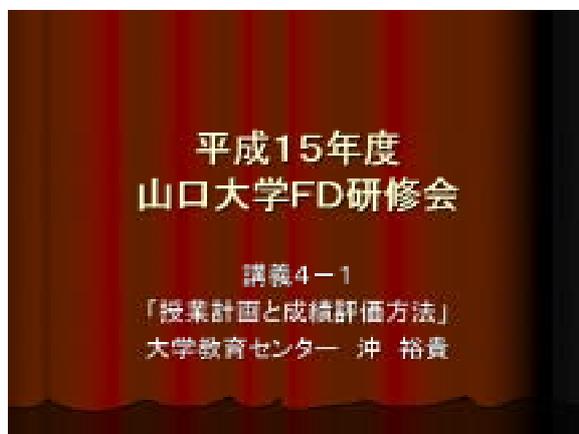
司会 (岩部) 成績評価方法について沖先生お願いいたします。

大学教育センター (沖) 失礼いたします。先生方本当にお疲れのところもうしばらくおつき合いいただきたいと思います。先ほど、司会の方からありましたように、この講義、私の部分と吉田先生の講義をあと 20 分か 25 分ほどして、それから質疑、応答の時間を設けて、本日の内容をすべて終わりにしたいと思います。

6 時から食事になりますので、最初ありましたように、10 時 40 分、50 分になりましたらすべてのシャッターが閉まりますので、それ以降の飲み食いというのができなくなりますので、その時間は押さないようにということで、今日はあと講義、それだけにしたいと思います。よろしくをお願いいたします。

先生方が今、目的について、目標についてずっとくわいていていただいているわけなんですけど、その中で難しかったのは情意的領域、それから認知的領域の向上目標の部分、これがどの授業にも基本的には盛り込まれるはずだということでお考えいただいたと思います。中にはもちろんできなかった部分もあるかと思いますが、それはそれで御検討の上そうであれば当然そういうこともあい得るだろうと思いますが、そういった向上目標と情意的領域というのは非常に難しい、しかも目標を立てた場合に、いかにしてそれを授業の中に盛り込んで、しかも評価をするかというのがこれから大きな課題になってくるわけです。若干私の方ですべて網羅はできませんが、その部分についてお話ができればと思います。

ジョナッセンという人が 1991 年にこういうような話をしてるんですが、知識習得の 3 段階モデルというのを考えてます。これはいろんな批判はあります。教育学の先生方が大変御存じのところですけど、先ほど申しましたような行為動詞を用いた行動目標です。これは行動主義というような教育学の教育学習課程における考え方に基づいて行われているものなんですけど、それともう一つは構成主義というような考え方がございます。その構成主義と行動主義を折衷したような、折衷案であるような一つの知識習得のモデルをこのジョナッセンというのは提唱してるのですが、折衷案であるがゆえに、非常に現実の授業の中で適応しやすいというふうに言われています。1 つ目のレベルというのが構造化領域と言いまして、初期レベルの知識習得の段階であるとか、これは練習であるとか、フィードバック、即時確認の原理というのがあるのですが、テストなんかをして、合ってるか合っていないかをすぐに返す。通常それに KR 情報というのを返すわけなんですけど、そういったのもあわせて練習とフィードバックによって達成されるようなものだというふう言われてます。



例として書いてあるのは私が書き加えたのでありますが、例えば九九の学習がそれに当たるといいうようになってます。例えば3の段の練習、4の段の練習というのを暗唱させるというのが、この構造化領域での授業の方法であり、またそれが言えたか言えてないかが簡単に評価ができるといったことになります。多くの場合、これは達成目標に記述できると言われてました。個々の授業ではです。

例えば、年間の指導計画なんかで言いますと、これを1桁の数字同士の掛け算ができるというような行動目標で書いてやればいいわけです。

それに対しまして、次の段階というのがございます。アドバンス・レベルと言いまして、難構造化領域というふうに言われてます。それに対しては徒弟制であるとか、最近、経営学でも言われますコーチングです。教育学の方では認知制徒弟制なんて言い方もするんですが、こういった方法によってアドバンス・レベルの知識の習得がなされる。

具体的には、例えば、日々の授業で言えば、 $a \times b$ の文章題なんかがこのに当たります。この違いちょっとおわかりになるでしょうか。3の段の九九が暗唱できるというレベルと、例えば3の段でもいいんですが、3掛ける何々の文章題が解けるといいうのは日々の授業のレベルにおいても達成目標と向上目標の違いがあると言われてます。というのは、例えば3の段の計算、応用できる範囲でいいうのは言い尽くせないわけです。例えば、1日3ページ本を読んで10日で何ページになるとか、1個3円のあめを何個買ったら何ぼだというような話は、すべての例が全部違う、日常生活の中でそれを言い尽くすことができないわけです。ところが、生徒たちはそれを学んだ上で授業の中でスキーマをつくり上げて、その計算の応用ができるようになるというのがこの部分の知識レベル、アドバンス・レベルの知識習得段階だと言われてるわけです。したら、なかなか大きな壁があるわけです。こういった部分が日々の授業において向上目標にあたるだろうと。

例えば、年間指導レベルで言いますと、もっとかなり上位の目標になるかもしれませんが、そのレベルで言いますと、例えば $a \times b$ の計算が日常生活の中でその応用を検討できるとか、指摘できるとか、あるいは応用できるとかというような言い方で向上目標を書くことができる、こういうわけなんです。非常に難しいところですが、先生方が日々の授業、講義の中でやっておられるといいうのは、恐らくこのレベルの知識習得を求めておられるといいうことで、やはり認知的領域においてもこの向上目標に入らざるを得ないといいうところなんです。

さらにつて言うと、これ余り関係ないところなんです、エキスパート・レベルの知識習得段階があると、このジョナッセンが言ってます。これは経験によってつくられるもので、ここに相当する人間ていいうのはもう研究者レベルだと言われてます。ここは少しはずして考えてもいいんですが、この構造化領域と難構造化領域といいうのは日々の授業のレベルでもそれに相当するものがあるし、あるいは年間指導計画でも相当するものがあるといいうふうに言われてます。

問題は、向上目標に対する授業の設計といいうことになってくるかと思えます。先生方、先ほど目標書いていただいた中で、情意的領域も非常に難しいですし、それから認知的領域の中でも向上目標といいうのが入ってこざるを得ないけれど、それをじゃ、実際どうやって達成させるような授業設計があるか。さらに、どうやって評価をすればいいかといいうようなことが、恐らくずっとこの1時間半ほど悩んでおられたんじゃないかと思えます。私自身もそうです。最初に言い訳することではないんですが、これだといいう解決方法はありません。ありませんが、いろんな取り組みがなされているといいうところは言えます。例えば、最近よく言われるのは、授業の形態の中で協働学習、グループ学習です。そういうものを取り入れるとか、eランニングを初めとして個別学習を取り入れるといいうような方法も言われてます。

それから、評価の方でも、先生方がよくやるレポートですが、そのレポートで判定する。それからプレゼンテーションをさせる。作品や実演で見る。さらにそれを全部集めたティーチング・ポートフォリ

オだけでなくラーニング・ポートフォリオというような考え方も出てきてます。

それから、パフォーマンス・テストというような呼び方も提唱されているところがあります。このパフォーマンス・テストといえますのは、例えば、情報リテラシーというような、かなり包括的な概念があります。能力として複合的なもの、いろんな内容を持ったものなんですけど、それを分割して考えてもいいんですけど、例えばそれを情報リテラシーがついたかどうかを判定するような評価を、例えば考え出すといたします。ある人が言うには、例えばキータッチだけなら何秒間に何字打てたりできますよというんじゃなくて情報の収集、整理、それから分析、さらに表現、伝達、発表とすべてのものを全部含めた形で評価ができないかといったときに、このパフォーマンス・テストの中に提唱されておるんですが、例えば、これは中学生とかでできるんですが、あなたがこの夏休みに2泊3日でUSJに行った。USJに関する情報は全部インターネットでとれます。例えば山口から行く場合は、いつ何時の電車に乗って、何時に向こうに着いて、そこでどう乗りかえてというのを全部調べる。開園時間もわかれば、どんなアトラクションやってるかも全部調べる。それを全部調べて、あなたの家族に一番ふさわしい行動プランを立てなさい。それをレポートに書かして発表させる。それを複数の教員で評価すると、かなりの程度すべてを含んだような評価が出る。そういう具体的な事例を含んだパフォーマンス・テストというのが幾つか開発されてます。そういう形でやる方法がこれなんです。

授業の形態	評価の方法	評価の主体
・協働学習 ・個別学習等	・レポート ・プレゼンテーション ・作品や表演 ・ポートフォリオ ・パフォーマンステスト等	・自己評価 ・相互評価等

あと、評価の主体ですが、教員が見て判断するっていうだけじゃなくて、自己評価をして自分にどういう力がついているかを発表させること自体も非常に重要であるとか、あるいはお互いにプレゼンテーション、作品もそうなんですが、相互評価を取り入れるといったことも最近よく提唱されてます。先ほど構成主義の話、行動主義の話をしましたけれど、行動主義というのは、はっきりしてるように、行動のでき上がった成果に対して評価をする方法なんですけど、ちょっとそのあたりがわかりやすい図を用意しましたんで、教育学の先生には大変失礼なんですけど、ちょっとこれを拝聴させていただきたいと思います。

行動主義と構成主義の教授学習理論というんで、これは早稲田大学の菅井がまとめたものを少し修正したものなんですけど、この先行研究というところのお話をしますとイメージがわかりやすいじゃないかなと思います。

行動主義っていうのは前世紀に、20世紀の初頭ぐらいにソーンダイクの試行錯誤学習という実験がございました。これは猫をおりのの中に入れるんです。そこには魚か何かのえさを置いてあるんです。猫はそれを見て、当然飛びついて食べたいと思うわけです。檻の中でも走り回るんです。ところが、檻はシャッターが閉まって外には出られない。でも、ひもが1本つるしてあって、そのひもを引けばシャッターが開いて外に出られようになるんです。それをずっと観察してるんです。そしたら、何かの拍子にひもを引っ張って外へ出てえさを食べるわけです。えさを食べる直前にまた捕まえて中に入れちゃうんですけれども、その実験を繰り返してみますと、最初の方は外に出る思考がすごく時間がかかるんです。ところがだんだん思考回数が減ってきて、容易にそのひもを引っ張って外に出られるようになります。ソーンダイクという人の学習者観というのは受動的な情報伝達体である。刺激があって、反応をやって、えさによって強化をされる。これによって何かするんだという一つの極論です。この考え方を導き出して、これが行動主義にもつながっていくわけです。

そのあと、ワトソンとかスキナーとかは猫でやったり、ハトでやったり、ネズミでやったりいろいろなことするわけですが、基本的にこれが先行になってます。だから、こういう感覚が行動主義です。だからスモールステップでちょっとずつ、合えば、よかったねとかいうケアを与えるし、フィードバック効果がやればどんな人間でも必ず到達するんだというような考え方になります。だから、行動予測としては、人間の行動はすべて予測可能であります。制御可能であるという考え方になっています。

それに対して、ほぼ同時期に出た観察なんですけど、構成主義の方は、ケディー、ケラーでしたか、ごめんさい、ちょっと忘れましたが、の実験で、チンパンジーの知的ランクに関する実験ていうのがあります。この実験はズルタンというたしか名前だったと思います。チンパンジーをやっぱりまたおりの中に入れるんです。おりの中に入れて、外にはバナナが置いてある。先ほどの猫と同じように、チンパンジーはそのバナナをとろうとして手を伸ばすんですが、もちろん手を伸ばしても届かないところに置いてあるんです。でも、おりの中に棒が2本置いてあるんです。それで、1本の棒でやっても届かないんです。もちろんもう1本の棒でも届かない。ずっと観察して、このケラー、ケディーでしたか忘れましたが、その人がふっとあきらめたあとに、実はお弟子さんが見てたらしいんです。チンパンジーがある瞬間手をたたいたわけじゃないですけど、ある瞬間ふっと気がついて、その2本の棒を、竹の棒だと思っと思うんですが、つなぎ合わせてバナナを手繰り寄せたんです。

この人の学習者観というのは能動的な情報生成体、気づき、これはデジタル心理学につながっていくんですが、洞察、気づき、そういうものが学習の本体だっというふうな考え方が発展してきます。それがこの構成主義の学習者観、教授学習理論の基礎になってるんです。だから逆に言えば、ワトソンなんかは自分に10人の子供を与えてくれたら、10人を医者にも弁護士にも芸術家にもすべてしてやると豪語したんですが、構成主義の考え方ではそれは本人のそれぞれ向き、不向き、洞察の程度によると。そんなこととてもじゃないけどできないと、そういう考え方なんです。まあ、日本だけじゃなく世界中がそうなんですけど、教授と学習の振り子というのが言われてます。学習というのは学習者中心の考え方と思ってください。教授というのが先生中心、テキスト中心の考え方、こっちが構成主義で、こっちが行動主義だと思ってください。その間が日本の戦後だけを見ましても、昭和20年代、経験主義という時代がございました。生活単元学習というのが指導要領の中に入りまして、今と同じような形態でやってた時期もございます。それが1975年のスプートニクショック当時のソビエトが人工衛星を打ち上げた、世界中の大きなショックを受けたと思うんですが、その時期を経験して、一斉に行動主義の方に走り出す。系統学習とかプログラム学習とか、現在もやってるCAIとかe-Learningですとか、そういった学習に走る。

日本ではこの間に受験戦争であるとか登校拒否であるとか、校内暴力というのが非常に吹き荒れた時代です。恐らく先生方、私も含めてですが、小中高と過ごしたのがほとんどこの時期です。この時期が30年近くにわたった日本では、再び、学習者中心の学習観に戻りつつあります。学習指導要領には、この30年間ずっとふえ続けています。今、言われている新学習要綱の構成主義的な学習観に立って、総合的な学習時間というのが入っている。ワトソンの考え方がかなりの部分大学に入りつつあるといったところなんです。

世界中の歴史を見ましたら、もうさらに二、三往復してるところもございまして、こういった考え方に基づいているといったところなんです。こういう社会的構成主義、それをさらにスキーマを共有することが、知識を習得することだという社会的構成主義なんですけど、その構成主義的な学習者観、学力観というものに基づいて先ほど申しました認知的レベルでの向上目標、それから情意的領域の目標について授業設計ができないかというのが最近多くのところで出ている議論です。

これは非常に難しい、提唱も難しいんですが、ここに述べてるのが、久保田が教育学会の雑誌に載せ

てるんですけど、こういった枠組みで考えたら、授業設計という評価しやすいんじゃないかなというふうに見えます。

学習活動を実際に解決しなければならない問題として、より大きな枠組みの中に埋め込む。学習者が問題や課題に主体的に取り組めるように支援する。本物の問題状況をデザインする。現実の複雑な社会状況を反映した学習環境と課題をデザインする。問題解決に向けて取り組んでいるプロセスを学習者自身が自分のこととしてとらえる環境をデザインする。学習者の学びの過程を支援し、多様なコミュニケーション・モードを活用する環境をデザインする。多様な視点で評価できる学習環境をデザインする。まあ、言うはやすしか

もしれません。先生方のそれぞれの授業の中で、15週という制限と、それから到達目標下げられないという条件の中で、いかにこういうもんを盛り込めるかという難しい問題もあります。

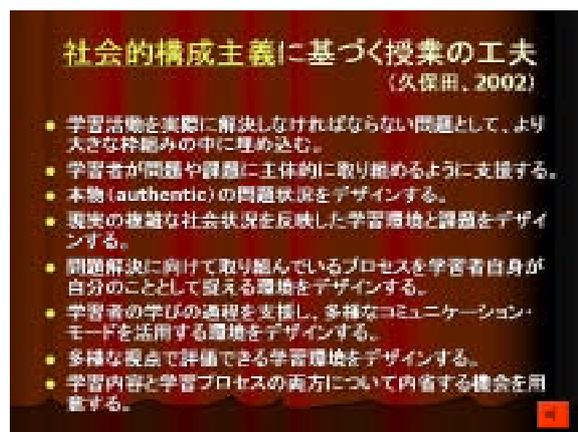
しかし、スポットで90分の授業1本、2本でこういったものをやってる例も、最近はかなり報告されてます。あるいは、先ほど出てましたけど、産業倫理とか、プレゼンテーションの授業とかですが、特に関心・意欲であるとか、あるいは向上目標です、認知的領域の。その部分に焦点をあてた授業というの、今いくつかいろいろな研究会、学会で報告されてます。大学でも実践されてます。そういったものを参考にしながら、少し盛り込んでいく必要がないかどうか。本来、これは個々の先生方の授業一つ一つについているんな相談させていただきながら検討を進めていく必要があるかと思うんです。こんな一般的な話をしてても何のこっちゃわからないというのが正直なところだと思いますが、一つのヒントはこの構成主義的な授業観てというのが向上目標に対する、あるいは情意的領域に対する回答のひとつじゃないかというふうに考えております。

はい。わかったようなわからないような話で申しわけありません。また質疑、応答とか、明日のいろんな発表の中でさらに深められるところがあつたら深めていきたいと思います。後は、具体的なことで、次、吉田さんの方にシラバスにどう接するかということにお話いただきたいと思います。

大学教育センター（吉田）失礼します。次に、シラバスの各週の授業計画と成績評価方法の書き方について、記述的な面を少し御説明をさせていただきたいと思います。

まず、授業計画という欄がございます。授業計画というのが、この全体の欄とそれからこの下に授業単位、週単位で書く欄がございます。全学的なシラバスの統一のために、なるべく15週に分けて書いていただければと思っております。ただ、どうしても分けられないとおっしゃる先生のために、2003年度のシラバスのフォーマットにつきましても、この授業計画全体というのを残しておりますので、2004年度からも引き続きこの欄は残しておく予定でございます。なるべく15回に分けて書いていただきたいんですけども、もちろんこの15回分と全体と両方に書いても構いません。

それから、2004年度の変更点ですが、今年のシラバスを手元にお持ちだと思いますけれども、これを今年、2004年度のフォーマットと見比べていただくとよくおわかりになると思います。この



15回分というのは基本的に変わっておりませんが、授業項目内容の欄が項目と内容と2つ記述してあると思います。記述の例をあわせて御参照いただきながらちょっと見ていただきたいと思いますけれども、この項目というところが授業のテーマ、タイトルです。例えば、第1回目はオリエンテーションをやりましょう。第2回目は丸々について、第3回目は丸々についてという形で授業のテーマについて書いていただきます。

授業項目内容の欄			
授業項目内容の欄			
回数	項目	内容	備考
第1回	オリエンテーション	オリエンテーションの内容、授業の進め方、成績評価の方法などについて説明する。	
第2回	丸々について	丸々についての内容、丸々についての内容、丸々についての内容などについて説明する。	
第3回	丸々について	丸々についての内容、丸々についての内容、丸々についての内容などについて説明する。	
第4回	丸々について	丸々についての内容、丸々についての内容、丸々についての内容などについて説明する。	
第5回	丸々について	丸々についての内容、丸々についての内容、丸々についての内容などについて説明する。	
第6回	丸々について	丸々についての内容、丸々についての内容、丸々についての内容などについて説明する。	
第7回	丸々について	丸々についての内容、丸々についての内容、丸々についての内容などについて説明する。	
第8回	丸々について	丸々についての内容、丸々についての内容、丸々についての内容などについて説明する。	
第9回	丸々について	丸々についての内容、丸々についての内容、丸々についての内容などについて説明する。	
第10回	丸々について	丸々についての内容、丸々についての内容、丸々についての内容などについて説明する。	

それから、内容というところにつきましては、先生方が個々の授業でどういったことを講義なさるか、また演習でなさるのかといったことを書いていただきたいと思います。

例えば、1回目のオリエンテーションの場合は、内容は担当教諭の紹介、授業の目標と進め方、シラバスの説明、成績評価の方法などこういった具体的なことを書いていただきたいと思います。

それから、ここの授業外学習の指示というところが新しく2004年度から追加される予定です。これは何かといいますと、簡単に言えば、学生がその授業が、例えば第1回目の授業が始めるまでに家でやってきておくことです。ですから、第1回目が始まる前までにはシラバスを読んでおくこと。第2回目が始まる前までには教科書何ページから何ページまでを読んでおく。または資料を読んでおく、そういったことです。

学生はこの授業の項目、内容とその指示、ここの部分を見比べて、あ、そうか、第1回目はこういった授業をするから授業外ではこういうことをやっておけばいいんだと具体的に想像ができるわけです。ですから、こういったところを活用していただくと、学生がより今、授業外で学習をしやすい、その指針になるようなシラバスになるということです。

それから、3つ目が授業の記録というところを追加いたします。ここは、前は備考という欄だったんです。備考の欄は先生方自由に、例えば、オムニバスでやる授業でしたら、1回目は何々先生、2回目は何々先生にとか。または、参考文献の名前を挙げてらっしゃる先生もいらっしゃいますし、ばらばらに先生方に使っていただいていたんですけれども、2004年度からは、ここの部分、例えば、第1回目に使った、配付した資料をアップロードできるように考えております。

ただ、現在は、ちょっとセキュリティの問題がございまして、2004年度からはすぐにスタートできるというわけではございませんで、まだWEBシラバスの小委員会というのがございますけど、そこでセキュリティの問題については話し合ってる途中です。ですので、とりあえず当面は、2004年度からは授業に関係のあるホームページリンクができるという、リンク機能をここに追加するというになっております。ただ、将来的には例えば医学部ののシラバスをご覧になった先生もいらっしゃると思いますけど、大変充実したシラバスとなっており、その中には、ずっと奥まで入っていきますと、教科書や資料のページまでございます。将来的にはそういったものまで追加ができるようになる予定でございます。また、授業で使った例えばパワーポイントであるとか、またワードのレジメであるとか、そういったものも随時アップロードできるように、将来的にはなっていく予定でございます。ですから、シラバスを授業中の学生にも活用してもらえるように、どこにいても、家からでも大学内でもその授業に学生がアクセスできるという、そういう機能でございます。

ただしシラバスを作成する時点では、ここの授業の記録というところは書く必要はございません。授業が始まってから御活用ください。

次に、成績評価方法ですけれども、この成績評価方法ですが、これ2つ欄が設けてございます。成績評価方法（総合）それからその下に成績評価方法（観点別）これは両方記入していただきます。

まず、成績評価方法の総合の方には先生方がどのようにして成績評価を行うのか。例えば、授業の中で小テストを何回か行う。丸々についてレポートを何字程度で作成し提出する。試験を実施するといったことです。学生にわかりやすいように、こういった形で評価をしますよということを書いていただきます。

そして次に、成績評価方法の観点別ですが、この例では小テスト選んでいます。また、レポートですから、このレポートも該当します。

3番目に試験を実施すると書いてありますので、定期試験のところも関係がございまして。それから、出席が所定の回数に満たない者には単位を与えないという基準も設けてあるようですので、その場合の出席のところも該当するということになります。

それぞれの教育方法についてどのような観点で評価をするのかということなんですけれども、ここが先ほどから話に出てきております、この知識・理解、思考・判断、この2つが認知的領域です。それから、関

心・意欲、そして態度・価値観、ここが情意的領域、技能・表現が精神運動領域、で、その他。これが、先ほどの先生方に書いていただきました、ここの到達目標のところですが、例えば、知識・理解と、上から4つにこの先生はチェックを入れているわけです。知識・理解、思考・判断、関心・意欲、態度・価値観、このチェックを入れているものについて評価、この観点を利用して評価を行うということですから、この1、2、3、4、この4つのところの観点を使って、この評価方法で評価を行うということです。

ですから、この先生は知識・理解の部分は定期試験、小テスト、それから宿題・授業外レポートで判断をしますよと。特に、定期試験、小テストで特に知識・理解を見ましようというときに二重丸をつけています。ただ、レポートでもこれを多少必要と見る。思考・判断については、やはりこの3つで見るとは、知識・理解よりももっと高次の高い目標が思考・判断ですから、これについては授業外のレポートでどれだけ論理的な思考力が身についたかということを見ようということで、ここに二重丸がついているわけです。関心・意欲は、このレポートで見よう。また、出席についても見よう。それから、態度・価値観、これは、授業内レポート、それから授業外レポートで見ようと、特に授業外レポートで見ようというふうにして、この観点別でどのように評価するかということをおの中に書き込んでいるわけです。

評価の割合ですが、2003年度は、例えば、60%から80%といったような幅がございました。ただし2004年度からは、はっきりとここに数字を書き込めるようになる予定です。また、評価に加えて、それから欠格条件というものも引き続き使えようとしています。

それから最後に、JABEEの収集資料ですが、JABEEの対象の授業になっている専門、それから共通教育の課目につきましては、ここに収集する資料のところに丸をつけておいていただきたいと思います。

では、どこに丸をつければいいのか。先ほどの成績評価方法と、それから、観点別の到達目標の部分、どのようにこうそれぞれが対応していて、自分の授業はどこに丸をつければよいのだろうかということなんですけれども、ここの下に挙げている表が、これが教育評価の分野ではよく使われる一般的な結果

到達目標等	知識・理解				思考・判断		関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	到達目標1等	到達目標2等
	知識	理解	思考	判断	思考	判断						
定期試験(筆記)	◎	◎									◎	◎
小テスト・授業外レポート	◎	◎									◎	◎
宿題・授業外レポート	◎	◎	◎	◎							◎	◎
授業外レポート(宿題)											◎	◎
授業外レポート(宿題)											◎	◎
出席											◎	◎
その他											◎	◎

的な対応表でございます。

例えば、定期試験、それから小テスト、この2つは何に、どれに対応しているかといいますと、見ておわかりだと思いますけれども、この標準テスト、教師作成テストです。この標準テストというのは、業者の作成しているようなテストで、例えばTOEICのようなものを想像していただければわかりやすいのではないかと思います。それから、教師作成テストというのは、先生方がいつもおつくりになっていらっしゃるペーパーテストのことです。

それから、授業内レポートや授業外レポート、これはここにあるレポート法と対応しております。何が見れるのかといいますと、このレポート法では知識・理解、思考力・論理力、興味・関心、態度、技能、全部を見ることができます。ただし、この二重丸がついているところ、思考力・論理力、それから態度、より高次の目標を見ることが可能であるということです。

評価方法	知識・理解	思考力・論理力	興味・関心	態度	技能	知識
標準テスト	○	○	○	○	○	○
教師作成テスト	○	○	○	○	○	○
授業内レポート	○	○	○	○	○	○
授業外レポート	○	○	○	○	○	○
観察記録法	○	○	○	○	○	○
制作物法	○	○	○	○	○	○

評価方法	知識・理解	思考力・論理力	興味・関心	態度	技能
標準テスト	○	○	○	○	○
教師作成テスト	○	○	○	○	○
授業内レポート	○	○	○	○	○
授業外レポート	○	○	○	○	○
観察記録法	○	○	○	○	○
制作物法	○	○	○	○	○

それから、授業態度・授業への参加度、これが、例えば、観察記録法に対応している。例えば、授業態度・授業への参加度、例えばグループディスカッションを授業の中でしたとします。これについて先生方がそれを観察されると思います。そして御自分の中で観察する前にある一定の基準を設けてらっしゃると思います。こういった基準を満たしていれば丸、5点をあげようとか、例えばそういう評価の基準を設けていらっしゃると思いますけれども、この基準に基づいて評価を行うわけです。観察記録法ではこの5つの観点すべてを評価できますけれども、技能の部分、それから興味・関心の部分に二重丸がついております。その部分は観察によってより評価しやすい。

それから、受講者のプレゼン、発表プレゼン、授業内での制作、これらが例えば観察記録法や制作物法によって評価をすることができます。

以上で、今申し上げたのが26ページに詳しいことが載っております。ですから、これも参考にされながら、今日はもうワークショップはこれから行いませんけれども、明日の朝、散歩されながら御自分の授業、到達目標に対してどのような成績評価方法、そして観点をういて評価するのかということをお検討いただければと思います。

司会（岩部） ここで御質問等たくさんあると思うんですが、そのための時間を十分とるつもりでしたが、会場の方が、ここ5時までには必ず明け渡すようにというお話がありまして、ちょっと質問時間を十分とることができませんので、あす8時30分に202のお部屋の方に集まっていただいて、そこで、今日これからちょっとどうしてもという方に1つか2つ質問を受けつけますけど、十分な時間がとれませんので、あすの8時半に202の部屋でお集まりいただいて、そこで質疑、応答をさせていただきたいと思います。

それで、8時半からでないワークショップの部屋の準備もできませんので、8時半から各部屋の教材的装置とかプロジェクター等の準備をしていただいて、質疑、応答が終わりましたらそちらの方に移動していただいて、ワークショップの4番、5番の方に取りかかっていたいただければと思っています。

それでは、余り時間ありませんので、あと事務連絡等もございまして、どうしても今すぐという御質問だけをお受けしたいと思います。沖先生と吉田先生の2つの講義についてです。はい。

西村（工学） 工学部の西村ですけれども、1つは、最初に授業の到達目標というの項目挙げてますよね。それともう1つ最後のところで、成績評価法というふうにあります。そこでちょっと矛盾というわけじゃないんですけれども、最初にそういうふうに、その到達目標を設定してるんだから、通常素人

考えれば、それぞれの項目について点数なるものの評価点、A、B、C、Dがついて、その後最終的な総合点でもいいんですけども、このままいっちゃうと、その間が抜け落ちちゃって、100点満点で60点で合格だということになると、ひょっとすると余りうまく機能しない恐れがあるんじゃないかという危惧しとるんですけども、いかがでしょうか。

大学教育センター（沖） ありがとうございます。今、西村先生が御指摘なさったとことというのは、センターでも一同危惧したところなんです。本当ならばこの観点別の部分も生かしながら、先生のおっしゃった各観点の中の小項目、それも交えて3次元ぐらいのマトリックスにしたらうまくいくんじゃないかなという意見も持ち得たところなんです。しかし、書く内容が多分、先生によってばらばらになるだろうと、個数も制限できないであろうということで、技術的にはなかなか難しいということと、最終的に落ち着いたんです。実際先生方が成績評価計画していただくときには、恐らくこの知識・理解とか思考・判断の中に御自分が立てられた個別の到達目標、それに関して採点をされると思うんです。ただそれはちょっと表にはここに表現しづらいというところはあります。でも実際は西村先生がおっしゃったとおりになるかと思えます。

それは、すべての先生にこういう3次元マトリックスみたいな複雑なもの書いていただくのは、恐らく今回無理であろうと考えて省略した、という経緯がありますので、先生の意図はまさに我々の考えていた意図しているところです。

西村(工学) 済みません。もう一度今のところ説明していただきたいんですけど、よくわからなかったんですが、先ほどの到達目標というのが今までの概念とかでいくと60点のレベルだということなんです。だからそういう意味でいうと、こちらの2枚目の評価というのがその60点レベルに到達した上で、さらにどこまで学力を伸ばしましたかという評価をしたのではないかと。

大学教育センター（沖） 到達目標は観点にあって、ちょっと西村先生のお話で言いますと、到達目標はそれぞれ観点書きます。知識・理解なら知識・理解で、そこにいったかどうかということなんです。例えば、知識・理解の中に3つ自分の到達目標を書いたとします。そのテストが、知識・理解が、例えば定期試験によってやったと。その定期試験が例えば60点満点であって、その知識・理解の部分がもちろん小問題がいっぱいあるわけですから、その合計によって判断するわけですが、その合計が60点満点で何ぼあるかということなんですけれど、ところが情意領域であるとか、思考・判断の部分という部分は恐らく定期試験では見られませんので、例えばレポートとかで見えるわけです。そのときには書いてある観点に到達したかどうかというのは、例えばレポートが30点分で見れば、到達したとみなすレベルがその大体6割で見ると、それが可のレベルだと、それより非常にすぐれていたらそれにももちろん上乘せして、最大限30点まで点をつければいい、そういう観点です。

西村(工学) よくわからない。もう一度。

司会(岩部) それでは、このあたりで時間がまいりましたので、申しわけありません。また明日改めて質問いただきたいと思います。

大島(工学) 内容に関する質問じゃないんですけど、ワークショップが後ろに動いたことによって、今日やってれば4と5のワークショップをやって、そして発表する、私、発表するのがありますけれども、発言は時間の間に自分たちのグループの集約をして、明日発表できるんですけど、明日直後にすぐ発表というのが大変つらいことになるんですけども、そこはちょっと考えていただけないんでしょうか。

ワークショップをやって、4と5をやって、すぐ発表しろと言ったら、自分のことは発表できるかもしれないけど、そのグループのどういうことがありましたぐらいなら言えますけど、うまく集約して発表するのは不可能でないかと。

司会(岩部) そのあたりはじゃ沖先生に。

大学教育センター（沖） すみません、計画が非常にいいかげんで、しかもレディネスを把握してない感じがするのですが、申しわけございません。恐らくそうなるであろうと思ってたんですが、やっぱりなりました。

今日、本来、今からやるべきであったワークショップは、ご自分で、授業計画と成績評価をやっていただいて、それをグループ内で発表し、これをそっくりそのまま明日へ持って行く予定でした。本来、明日やるはずであった授業の標準化とか到達目標、検証みたいなところはカットいたします。したがって、グループ外発表、前で発表していただく先生方には、本来その到達目標の妥当性であるとか、あるいは標準化が可能かどうかということを発表していただきたかったんですが、それできなくなりますので、今日と、明日のワークショップでやる各自がつくったシラバスがどんなのであったかという紹介で結構です。そしてパワーポイントともう1つ教材提出装置をここに持ってきますので、写していただくの大変ですから、大体近い先生方の例が出てるとお思いますので、そのうちの全部が紹介できれば全部でも結構ですし、こういうことで大体まとまったところがあればまとまったところで、二、三枚紹介していただくと、で、こんな議論があったということをはかのグループの人に紹介していただければと思います。

ただ、明日の発表時間は1時間程度です。ワークショップが恐らく2時間ぐらいで、それから発表時間が1時間ちょっとぐらいしかないと思いますので、そのワークショップをしながらそのあたりは考えていただくこととなります。はい。

司会（岩部） それでは、残り7分ぐらいになってますが、事務連絡をお願いいたします。

大学教育センター（植村） 皆様御苦労さまでした。どうも計画がなかなかうまくいかなかったんですけども、我々にとっても授業の目標を立てるということは未知の領域に入ってきます。今、全国どこでもやってるんですけども、全国どこでも同じような未知のことをやってるんじゃないかとお思います。ですので、どうもなかなか計画どおりいかなかったということと、こちらと与えるべき情報をどこまでうまく与えられてたのかということについて多々反省すべき点があると思います。

第二日目

司会（岩部） まず、最初に、昨日の講義4の1、2の質疑応答から始めていきます。その後、渡辺センター長の方から全学Webシラバスの概念、全学Webシラバスの大体の様子についての説明を数分間させていただきたいと思います。その後で昨日残っておりますワークショップ4と5、授業計画、成績評価を記入していただいてですね、各グループでの発表内容を検討していただくということになっております。それではよろしくをお願いいたします。

まず、昨日の講義4の1、2に関する質問を受けたいと思います。よろしくをお願いいたします。

大学教育センター（沖） 昨日御質問いただいた部分があったかと思うんですが、ちょっとお酒を飲んだら覚えてないんですけど、到達目標というのは、全部をそこをクリアして可になるかどうかというようなお話がだったような。

大島（工学） 設定する目標というのが、その授業の成績という中で6割、60点相当のレベルに設定するんですねという話から始めると、西村先生が質問された点、何か目標というか、設定のレベルが何となく食い違っているような、そういうニュアンスを受けたんで、もう一度整理していただけないかということです。

大学教育センター（沖） 到達目標というのは、基本的に、評価の仕方は可否しかないんだろうと思うんですね。認定か不認定かといった部分しかないと思うんですよ。で、最近教育学の中でかなりそういう観点がでてきているんですが、例えば、イギリスの教育制度なんか、レベルが11だったか9つ

かあって、学年にかかわらず、そこをクリ明日かどうかという判定でずっと進んでいくというのがあるんですね。J A B E E なんかも基本的に可否しかないという形ですね。理数系や語学なんていうのは大体そういう方向になるんじゃないかというふうには言われています。

ただ、今回は大学の問題ですし、優・良・可、場合によっては秀が出てくる問題がありますので、基本的な考え方、到達目標は可否しかないんだと思うんですが、それを優・良・可をつくるために、一部の先生言われましたけど、例えば、5つの観点をその1から10までつくって、例えば、簡単にしまして、認知領域の達成目標に3つ、向上目標に2つ観点をつくったとします。その観点でその3つの達成目標はペーパーテストで出そうと。2つ分の向上目標は、例えばレポートで見ようとしたとしますね。その3つ分の観点については、ペーパーテストで60点分見て、こっちはレポートで40点分に見よう。その中で、この3つを大体クリアしていると考えてるのが、その60点の6割分ぐらい。だから、36点ぐらいとれば、何とか3つをクリアしてるだろうと考える。レポートの方の評価では40点分の6割で、24点ぐらいをつければ大体合計60点ですから、それで5つの観点をクリアしていると考えないようにしないようにしましょうがないんだと思うんです。で、それ以上はもちろんたくさんとった者については良がつき、優がつき、あるいは秀がつくという形になるだろうと思います。

ただ、問題は、例えば、バランス的に言って、こっちが36点とらなあかんとこを30点しかとれずに、こっちが24点とるべきところが30点とって、合計は60点以上になったという場合でも、やっぱり可をつけざるを得ないだろうなという矛盾点があります。

しかし、あんまり厳密にすると難しいところもありますので、やっぱりそのあたりを総合判定という言い方をせざるを得ないかなというふうには考えております。ただ、その先生方の目標設定、それから重みのつけ方というのは先生方で御自由に考えられるところですから、そこで、いや、もう関心意欲であるとか、情意的な部分であるとか、認知的領域の向上目標についてもっと比重を高くして、そう容易に60点超えないようにしようとかいうようなことは可能だと思います。お答えになってるかどうかわかりません。

山本(工学) 済みません。それに関していいでしょうか。シラバスの到達目標というのはクリアしなくちゃいけない目標なんですけども、教官サイドはそういうふうにしてつくりませんが、このシラバス見た学生は、その到達目標の6割をクリアすればいいというふうに見るんじゃないかと思うんですけど、多分西村先生も、その辺だと思んですけども、そこははっきりとこう、到達目標はクリアして初めて可否だろうということを何か知らしめる方法があれば。

大学教育センター(沖) そうですね。先生のおっしゃるとおりですね。大学教育センターの方で、例えば共通教育に関して、第1時間目に、昨日も少し授業あったんですけどね、第1時間目にシラバスについて説明をするようなオリエンテーションの授業というのをやっぱり1回目を持ってくるべきだろうというふうに考えております。で、事務の方でもシラバスを全部印刷していただいて、1時間目はどういう観点で授業するかとか、試験をするかというような説明に充てていただこうと。そういうことを充実させていくと、昨日も出てましたように、シラバスが使われないとか、読む学生が少ないとかという部分も徐々に解消していくんじゃないだろうかと。それが役に立つということを徐々に浸透させていくんじゃないかと考えております。

だから、しばらくは今までの経緯もありますから、シラバスの重要性もわからなければ、その観点別の授業のやり方もわかんないところが多いと思うんですが、徐々にそれはならしていかなるを得ないんじゃないかなというふうに考えております。

山本(工学) 現実に新生ガイダンスでそういうところの説明はないんですか、今は。

大学教育センター(沖) ああ、入れるべきですよ。はい。

河中(工学) もしもそれをクリ明日ら、60点以下であるというのは、到達目標を設定したら、正直言って、驚くほど低いレベルに設定しないとだめだと思うんですね。思いませんか。これ達成できなかったら落としちゃうぞという、いわば最低限考量で到達目標を設定したら、これまではもう最大限考慮できてましたよね。

大学教育センター(沖) 恐らく「何々することができる」という文章をどこまで解釈するかですよ。ただ、達成目標というのは、そこを質の保証で最低限可のレベルまで想定してることになりましてから、やむを得ないところです。で、それは昨日から何遍も出てくる議論なんですけど、万が一それが高過ぎるならば、今後それを分割するなり、あるいは方法を考えるなりということをしていかなければいけないという部分になってくるんですね。

萩原(工学) 同じことについて何遍も恐縮なんですけど、私これ観点別にきちっと評価しようと思ったら、もう100点満点の総合点を廃止するべきだと私は思います。要するに、すべての観点をクリ明日ら、まあ可にすると。で、さらにもっと上だったら優にとか、それは個別にまあ基準を決めるにしても、それはこのシラバスにあるように、評価割合20%、10%とか、そういうものにしても全く意味がないと思うんですね。本当の70%をクリアしてしまえば、もう10%のところはクリアしなくてもいいと。できたら、もう100点満点を全学的に廃止すると。結果として、優良可しかつかないというような成績システムに変更する必要があるんじゃないかと思えますけど。

大学教育センター(沖) 優・良・可に変更する。

萩原(工学) 優・良・可、そうです。で、まあ、どこまでクリ明日ら優にするかというのは、それは先生の判断という。

大学教育センター(沖) そうですね。はい。先生おっしゃったように、今恐らくそういう方向に行く可能性が大きいんじゃないかなというふうに考えてます。ただ、現行との絡みがあって、それから特にGPAというて、さらに細かくしようというような動きもあるわけですね。その中で急激な変化というのはなかなか難しいところがありますが、基本的な考え方というのは先生がおっしゃる方向に向いていくんじゃないだろうかと思います。特に、今入門科目が始まり、それからTOEICが始まり、かなり認否というような形の形態が出てきてますよね。で、恐らくこれ賛否両論があるんですが、でも、グローバルスタンダードの中で、例えば、工学部何々学科を出たレベルという世界的な基準が、もしつづられつつあるならば、大学の4年間というのは初等・中等教育と同じように、そういった基準のもとで認否というような形にならざるを得ないだろうと思うんです。ただ、ちょっとこれはもう少し動向を見ていって。

増山(理学) そこまで言われるとちょっとですね、反論したくなるんですけども、学ぶ方の身になってみればですね、自分が先生から、レベルが高いかもしらんけども、高いところを到達すれば、それは評価してほしいと思うんですよ。それがあからまた学ぼうという意欲が出てくるんだと思うんです。可否、もちろんそういう観点もあるんだけども、私何年か前に困ったというか、イギリス人から自分の教え子に対する評価を求められて、上位5%だったらどうか、それだけを教えてほしい、そういう言い方をされるんですね。それはまあある意味では正しいところもついてる。そういうところの矛盾点はどう考えるのか。

大学教育センター(沖) おっしゃるとおりです。先ほど言いましたイギリスの例というのが、ちょっとはつきり覚えてないんですけど、11レベルやったかなと思うんですが、学年にかかわらず、その1個1個のレベルの可否なんですよ。で、例えば、11レベルというのが最高で、上位1%か2%、で、9以上が15%でしたかね、何かそういう比率で分布してるらしいんです。で、本人にとっては、1人1人の生徒学生にとっては、自分が何々レベルにいて、レベル9、10人と言ったら、そのレベ

ル自体が全体の成績分布の中でどの位置を占めているか、要するに、言ってみれば、総体評価の優・良・可が出てると同じ評価を、価値を求めるわけですね。そういった評価のシステム、仕組みというのが今後出てくる可能性は強いだろうと思います。

だから、使い方というのは、まさに先生がおっしゃったと同じ意味になります。ただ、これは私の予想の範囲ですから、大学教育センターがこれをこうする、こうやっていこうという提案でも何でも無い、個人的な意見でございます。

大学教育センター（植村） その数字、試験が何%とかっていう数字をシラバスに残しました。これは今の評価の仕方と、先ほど御指摘があったように、必ずしも整合したもんじゃありません。けれども、これをなぜ残しているのかということ、これは受講者の側から見た評価の透明性ということです。つまり、どこを勉強すればいいのか、どういう形で評価をされるのかということで、それは評価手段という形で見えるような形にしておきたいということであるわけです。

先ほど御指摘がありましたように、本来であれば、100点の加算表みたいなやり方というのは、こういう到達の評価が必ずしもなじまないものがあるわけですが、まだ当分は、要するに100点満点という点数のスケールでやっていった方が、学生と教官双方について見通しがいい状態になるだろうということで、そういうスケールというか、要するにテスト何点、何パーセントみたいな部分を残してるわけです。で、その部分とですね、評価の考え方から少しずれてるところがあります。が、今のところちょっとそこを大きく手を入れるということができないというのが現状です。よろしく願います。

青島（理学） 非常に一般的な話なんですけどね、実際自分の評価を見たら、やっぱ、全体が悪ければ、まあ落とすかということで少しく下駄履かせたりしてるわけですね。ですから、大学全体としてね、非常にアメリカ的にどんどん厳しくやって、ある程度保証された学生を出していくのか、今後の大学評価に対応して、余り留年生を出したり、落ちこぼれを出したらいけないのか、その辺の大学としての方針ですね。で、厳しいということは、まあ、あなたはもう留年して単位がないと。だから、その辺のところを大学全体としてどう考えているのか、それがないと、教官の方でも非常に甘い先生もいるし、まあ厳しい先生もいるという。ですから、大学の方として、それは対社会的に山口大学は、非常に厳しく一定のレベルの学生を出していくのか、こういう方針でいくのか、そうじゃなくて、やはり入った以上はまあ最後まで面倒見て卒業させるという、その辺のところをある面では決めて、決めるというか、出していくわけですね。まあ、やりやすいようにということですね。そのところはどうか。

渡辺（医学） そのあたりは、まだこれから決めていくところじゃないんでしょうかね。まだコンセンサスが得られてないということです。基本的には、年配の方は大体甘くて、若い方が厳しいという傾向は随分あります。それがミックスされてほどほどになっているのかなあとは思ってます。多分、青島先生が言われるような大学としてのコンセンサスは、やはりいつかつくらないといけないだろうなと思います。

大学教育センター（沖） それと、例えば、西村先生にこうお伺いしたらいいと思うんですが、恐らくJABEEでつくってあると、かなりの落ちこぼれといますか、留年が出そうな気もするんですが、よその大学なんかではもう一部をJABEEコースにして、そこでなかなか厳しくていけない学生は、もうJABEEコース以外でかなり緩やかに出そうとか、いろんなことを聞くんですが、ここについてはどうお考えですか。

西村（工学） 今、成績のことで、JABEEのこともあるんですけども、工学部は留年が多いで有名なんです。それで一応、昨年度からアクションプランということで、各学科でまあ、機械に所属してる大体40%ぐらいなんです。もっとひどいとき、50%まで、大分こう緩やかになったんですけど

も、で、それで、各学科、機械の場合ですと、ある程度合格率ていうのを一応みんな決めてよと。いろんな先生おられるけど、一応、ある幅で数値目標だけ決めて、その中で先生方頑張ってくださいよ、というのを、2年間実施してるんです。各学期ごとにその合格率を全部教授会議に出して、名前は出さずに、まあ大体わかりますけど、それをずうっと年度別に出してある。まあ、やっぱりみんなこう見ると、まあそこそこの方に大体落ち着きあるようだから、そういうやり方が一つ。ちょっと余り表には出せないですけども、そういう形で、むやみやたらに単位を出すんじゃなくて、例えば補習をやるとか、それから再試もきちっと勉強してる人たちにやるとか、そういう条件はそれぞれ先生にお任せしてやってる状況なんです。だから、まあ、そういうことを常に学科の中でやっていくと、まあ、あるところに落ち着くんじゃないかなと思うんですよ。

ですから、先生方も、私もちょっと驚いたんですけど、今回研究室紹介で、機械工学科で研究室の紹介をやるんですよ。それで100点でレポートをつけてくださいということで、それ以上は何も言わなかったんですよ。そうすると、幅があるんですよ、90点から100点つける人と、60点から100点の子、これをまあ一緒に混ぜれば余り差はないんですけども、随分開きがあるんですよ。それとか、卒論なんかもそうなんですよ。

だから、やっぱり自分の中だったらいいと判断したんだけど、全体を見る機会がないからよくわからないんですよ、みんな。だから、そこは余り強制力でやると皆さん反発されるけど、ある程度合意の中でこういうふうに持っていきましょうよとすると、ある幅を持った中で収束させるということになるんじゃないかと思うんですね。

だから、成績の60点というのも結構難しいのはですね、確かに機械的っていうのは非常に楽なんですけども、やっぱり50何点とかこうあるとね。その点をやっぱり本当は幅があった方が、いいじゃないかなと思います。ただ、やっぱりみんなで話し合っ、ある程度ここまで持ってこようという、きちっと決める必要はないんですけど、数値目標みたいな持ってくると、そして、常に情報をオープンにすると、やっぱり全体を見ますからね。そうすると、自然にこう動いてくるんじゃないかなと今ちょっと思ってますけど。ちょっと完全な答えにはなりませんけども。

ただ、大学全体で余り言われるとオープンになりますからね、数値目標を85%でやるというと、すごい反発があると思いますから、その辺はむしろ学科の中で何かうまくいぐあいにやってもらうようなシステムをつくる方が、工学部でやってる限りは、そういう形でみんな努力して、留年者が下がってくれば、ああ機械工学部頑張ってるなとかいって、みんなそういう雰囲気になるんですよ。だから、その雰囲気をどうつくるかじゃないかなと思います。だから、余り厳格にすると反発する人もいますよね。今までおれはこうやってきたんだというような。まあそういうことです。

朝位(工学) 工学部の朝位ですけど、今JABEEがちょっと出たので、JABEEがちょっと先行しているのが社会技術工学科のようなんですけど、昨年度、私、教務員で、工学部のシラバスのことや、留年のこととかいろいろやってきたんですけど、私の感想では、ここに到達目標とかいろいろありますけれども、本当に学力が足りなくて留年する人って、実は意外と少ないんですよ。で、どんな学生が留年するかっていうと、もうやっぱり学校に来ない学生なんです。だから、到達目標がクリアできないんじゃないのかというのは、私個人的にはすごいがっかりしてて、山大に入ってくる学生はやっぱり、自分の到達したレベルは超えてくれると。問題は、やっぱり本当に学力が足りない学生というのは学校に出てこなくなる。昨日も5%の人というような話しも出てましたけど、そういった学生が留年を繰り返す。だから、いつまでたっても留年率が下がらない。ですから、ちょっとシラバスの話と関係ないかもしれませんが、こういって非常にすばらしいシラバスができて、学生にとって非常に勉強の趣旨がわかる。ですけど、やっぱり、それと留年対策は全く別物であるというのが印象ですね。すばらし

いシラバスができて、やっぱり来ない学生は来ない。そんな印象です。まあ、雑感ですが。

田中(理学) つい先日、おっしゃったようなですね、どの辺のレベルに持っていったらいいということですが、そのときに、たまたまケース・スタディでやったやつは、国家公務員の二種試験と、それから技術士の一次試験、そのくらいで何となくイメージをつくってもらったらいいと言われました。私は反対派なんですけど、あそこで何かこう逆にイメージがないと、どの辺を目指したらいいのかというのが、ほかの大学でも違うでしょうけどって言われましたけど、やっぱりいい大学、いい大学というとなんかそれなりを入れる。でも、何となくそういうふうなイメージなんですよ。

司会(岩部) 先ほどのJ A B E Eのことでおっしゃられたのは、私も似たような感想を持ってるんですけど、厳格な成績評価というのをまず適用する。で、いきなりぼんと高いレベルに設定すると非常に心配ですから、どうしてもかなり低いところに設定せざるを得ないような。私はまあ英語の方で、もうTOEICというスコアをぼんと導入しまして、295点とった学生は単位もらえないわけですね。5点といえどもまげられないわけです。で、295点でもうTOEIC指導コースに放り込まれた。で、そういう学生がどういうふうになるかっていうと、やっぱり分かれてくるんですね。大多数の学生はちゃんと勉強するようになって、で、もうはっきりした目標で、あと5点とか、あと10点とかいう目標を自分で与えられると一生懸命頑張ります。そうすると、300点ちょうど超えるというような点はとりません。400点ぐらいまでいきます。で、そういうきっかけになるということが、まあ厳格な成績評価というのを導入する一つのメリットじゃないかなと思います。もうまげられないんだということがはっきりすることによって、かえって。

ところが、逆に、確かに何パーセント、今TOEIC指導で300点いかないのが、1年たって2.何パーセントとかいう数字が出てますけども、本当にその部分というのは別の解釈をしないと、救えないゾーンでもありますね。確かに学校に来ない。TOEIC受けると言っても受けないと。そこは本当に全く別の対策が必要だと思います。

ただでも、多くの、思ったより多くの学生がそのシステムに乗ってちゃんと頑張ってくれるようになるんだという、そういう感想は持ってます。で、みんながクリアするようになったら、またちょっと基準を少し上げてやる。そういう方向に持っていけば全体のレベルが上がっていきだろうと、それがいい方に展開した場合の厳格な成績評価で、最初からちょっと心配だからっていうんで、厳格じゃないような適用の仕方をする、結局今までどおりで余力変わらなくて、学力低下とともにどんどんどんどん地盤沈下していくという流れになってしまうと、それは困るな。だから、今ここで厳格な成績評価というのをですね、一生懸命模索しているという状況だと考えます。

溝田(工学) 工学部溝田ですけども、私は1科目必須単位を持たされていて、試験以外にですね。必須というのは、要するに一緒に心中しなきゃいけないですから、つらいんですね。で、幾ら努力して、幾ら工夫しても、もう何年ももってますけど、落ちこぼれが出るんですね。で、おとしですね、約30%合格点あげなかった。やれなかったんですが、ちょっと多いので、しょうがないから、前期に私授業はあったわけですが、後期に補講をやったんですね。補講やって試験を2回、3回やって、結局全員通ったんですけど、その補講の回数がトータルで11回ぐらい。だけど、人数は30何人ぐらいで、少ないんで、非常に授業は楽しいし、学生もまあわかるレベルで話せるんですね。

ですから、基準は厳格にしておいて、だけど、そのバックアップができるような体制を組むのがベストだと思うんです。それから、プレテストをやって、自分の実力をはっきり認識させて、それから何か対策打つとかね。とにかくわかんないと、最初から君は何か通ってないからこれを受けると、ぼやっと導入教育あったらね、結局やっぱりおもしろくないからついてこないっていうのが出てくると思うんです。最初から、自分の実力はこのくらいだとわからずことが重要なんですね。私の授業は結局短期やっ

で落ちたやつにわからせて、次にバックアップしてやったちゅうことで。

で、続きなんですけど、去年はね、補講をやらないこと宣言したんですね。そうやって、まあ確かに大変でしたし、あの先生補講をやるぞという、レベルが低くなる。そしたらですね、結局、今年試験やった段階で、その前の足りなかったのと合わせて42人ぐらい残っています。だから、今年は補講をやらざる得なくなった。で、まあ、やろうと思ってるんですけど、めちゃくちゃだと思うんですね、それ、私のやってることは。だけど、そういうの許してもらわないと、とても拾えないというか、私と一緒に心中すると。まあ、あと1年半で定年ですから、そこまでどうかかわらないですけど。

司会(岩部) まだまだちょっと質問等、たくさんあると思うんですけども、スケジュールがだんだん押してまいりましたので、このあたりで一たん打ち切りとさせていただきます。

それでは、渡辺先生の方からWebシラバスの概要について御説明いただきたいと思うんですが。

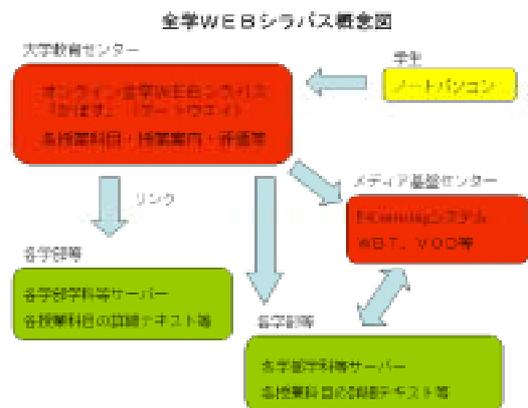
大学教育センター長(渡辺) 先生方の資料のところの中紙で色紙が入ってると思いますけど、その一つ手前の部分に全学Webシラバス来年度というのがあります。それをちょっと見ていただきたいと思いません。こちらの方にはこれを簡単にしたのが出てますけども、今考えている「かぼす」という全学のWebシラバスは、基本的にはゲートウェイとして機能させることを考えております。で、これから各先生方、例えば、自分がAという授業科目担当したときに、そのAの授業科目の、例えば教科書を学生に提示したいと

か、そういうことが起きてくると思います。そういうときには、その「かぼす」の、例えば資料とかいうところに、その具体的な教科書に当たるようなものを各学部とか学科のサーバに入れていただくと。そこへリンクで飛んでいくと、そういうことを考えております。

ですから、「かぼす」のところに全部のデータを集めるという考え方はしておりません。例えば、今、医学部でシラバスつくっています。それは医学部のサーバにデータが集まっているわけですけども、実態はオープンで、医学部の中でのシラバスというのは、メディア基盤センターのサーバに入ったり、まあ、見かけ上は医学部のサーバにあるように見えていますけども、それと同じで、1カ所に全部集めて膨大なデータベースをつくるという考え方は考えておりません。

ですから、これからお願いしたいことは、各部学部なり学科なりに一つのサーバを置いていただいて、そこに学部なら学部の教科書のデータをため込んでいく。で、ため込んだところへ「かぼす」のWebシラバスのところからリンクで飛んでいくと、そういうことをこう考えております。ですから、これから医学部的なシラバスをこうつくっていかうというのが一つの考えですけども、個々の授業の中身のデータをつかっていくということが必要で、そのためには、各学部のところにサーバを置いて、そこにデータをため込んでいってほしい。まあ、人文学部のように自前のサーバを持っていないところもありますけども、そういうところはメディア基盤センターのところの大容量サーバがありますから、そこを利用していただくと。そういう形で、どっか特定のところにこう自分の教科書のデータなり、いろいろな学生との連絡をするデータなりをこうため込んでいく。で、「かぼす」の方からはリンクでそこへ飛んでいくことを考えております。

ですから、例えば著作権の問題や何か起きてきます。例えば教科書を自分でつくって、それをどっかに置くとなると、そういうものは、A教授が当然著作権お持ちですから、サーバの学科なりのところへ、そのデータをたどって、その著作権はA教授が持つておると。そういう考え方をとっています。



基本的には、大学で業務でつくった書類というのは、著作権は大学が持つというのが建前です。ただし、教科書とかそういうのは、その書いた人が著作権を持つということになります。で、あと、先ほどの、昨日の説明の中でありましたけども、アップロードというのをちょっと考えてるんですけども、それはウィルスの関係などがありまして、現状ではちょっとその対策をとった上で実現したいと思ってます。次年度には間に合わないかもしれませんが、ゆくゆくはそういう機能もつけ加えたらいいと思ってます。

このあたりの分散して置くという考え方と、1カ所に全部データを集めてしまうという考え方の違いを御理解いただきたいと思います。下手すると大学教育センターの全部のすべてのデータを自前で抱え込むのかどうかお思いの方おられるかもしれませんが、それは現実的ではありませんので、そういう形はとりません。

ですから、これから各学部または各学科で、例えば機械なら機械学科の専門の授業で使われるいろいろなデータをそこへため込むと、そういう作業をしていただける方が有利かなというふうに思います。

共通教育も、共通教育の他にはどうしようかなと思ってらるんですけども、共通教育はゆくゆくはどうかメディア基盤センターのサーバか何かを利用してもらおうかなと思ってます。

山本(農学) ちょっといいですか。農学部、山本ですけども、例えば、その資料みたいなものも授業の資料として配布するというぐらいな問題はその件に触れないというような形をセンターの方でとってますけども、Web上にのせて、それでこの全学Webシラバスはどうなるんですか。

大学教育センター長(渡辺) 今考えてるのは、Webシラバスにも種類を何種類かを置いています。今現状では3通り置いております。一つは、例えば4月初めにつくって、CDに焼きつけて、しかも固定してるものですね。それは個人的な情報が入ってますんで、例えば先生の教室への電話番号とか、そのところは学内限定になって、それを除いたところが学外から見られるようになってます。それと、あと、オンラインのものが一つ入ってます。

山本(農学) 例えば、自分のシラバスにリンクさせて、テキストみたいなのをアップしてありますねえ。そのときに結局、学外全体から見られるようになってますね。そういうものは非常に、違法、まあ違反するということですよ。それで、結局パスワードを受講生にふって、ある特定の人だけ見れるようにするのであれば、そういう形でアクセスすることができるけれども、そういう学外全体の方が見られるような形でのせるということについては、違法ではないんですか。そうでもないんですか。

大学教育センター長(渡辺) 先生がお書きになっているものは厳密に言うと、違法になりますね。だから、それは先生が特定の学生だけに提示できるようになるサーバの方ですね。

それで、今考えてるのは、そういうリンクや何か、現実に機能するのは、オンラインのところをこう考えてるんです。先生方がいろんなものをつけ加えたりしていくのは、固定されたものはもう固定されたもので変更できませんので、オンラインのWebシラバスのところは随時変更できるという。随時変更できるといっても、あるところは変更できないということは指定しないとイケないと思いますけども、すべてが変更できるというわけではありません。そのあたり、今どこどこをこう変更、管理するとか、そういうことをチェックしてる段階です。

よろしいでしょうか。基本的にはゲートウェイとして、カボスっていうものを送るというのが。あと、各自のデータは各学部、学科なりに置いていただく。それでは、ありがとうございました。

大島(工学) カボスからその周りのシステムにインターフェースをつくるというところまでの話の前にですね、カボス自体の機能についてお伺いしたいんですけども、それはシラバスを入れる入れないというのではなくて、むしろログインするしないという面での話なんですけども、例えば、学生側から利用の使いやすさを見たときに、その都度自分の授業のシラバスがどこにあるのかって探していくの大変な

んですね。全学でやると、山口大学があって、学部があって、その中に学科があって、学年があって、曜日があって、時限、コマがあってというふうに、無限大になるんです。だから、パーソナライズ、要するに、自分を、ログインすると自分のページに入って、できれば履修システムとリンクさせてほしいんですよ。自分で履修届けを出す、それもできれば電子化してほしいと思うんですけど、そうすると、履修した科目については、自分のページにログインすると、自動的にシラバスのリストがどっと並んでる。少なくともそこについてはフリーパスで行ける。フリーパスというのは、ごめんなさい、言葉悪いんですけど、ログインするとそこは自動的に見える。それ以外のものも、まあどっていけば見れるようにするかしないかはありますけども、そういうようなパーソナライズ、要するにトータル化ですね、の機能を入れていただきたいんですけども。

大学教育センター長（渡辺） それは多分各学生の履修している科目のリストですね、それが手に入らないとできないことですよ。

大島（工学） それは多分それほど難しい話ではなくて、むしろシステムとして、細かいこと言うと、データベースとリンクさせるかどうかという話になると思うんですけども。

大学教育センター長（渡辺） 教務全体を一元化することが決まりましたので、そういうことは可能だろうと思います。

大島（工学） カボスには当初からそういったパーソナライズ機能は。

大学教育センター長（渡辺） そういう機能は現在持っておりません。まあ、必要であれば、毎年毎年バージョンアップしていきますんで、そういう要望をいただければ検討してみたいと思います。

大島（工学） ぜひ検討してください。教官側も同じなんですね。自分をアップロードする科目がどこにあるか、多分何らかの格好で入れてもらってると思うんですけども、結構大変だと思うんです。

大学教育センター長（渡辺） わかりました。検討させていただくようにします。いろいろな御希望がありましたら、各学部からWebシラバス専門部会の委員の方が出ておりますので、できたらその方に言っていただくと、我々の方に直に入ってきます。どうもありがとうございました。ほかに。

萩原（工学） サーバを分散させるという点については、別にそれで私はいいと思うんですけども、問題は、学生が見るときに、カボスの方も何か学内限定アクセスと学内インターアクセスとの両方をつくるというお話だったんですけど、私のちょっと経験で、前にその学内検定で過去の試験問題を学生がパソコンで見れるようにしたことがあるんです。そしたら、どうも最近の学生はブロードバンドでADSLなんかを使ってるみたいで、そのADSLというのは、メディア基盤センターではまだ多分やってないと思うんです。で、結局学外のプロバイダーを通してアクセスせざるを得ないんで、そういうのがかなり一般的になってるんです。学内限定のアクセスだとわざわざパソコンを持ってきてつながなきゃいけないというような事態で、まあ、学内からもアクセスを要求されることは多いんです。

大学教育センター長（渡辺） 先生の言わんとすることわかるんですが、自宅からね、例えばオンラインのカボスに入って見たいと。そこには多分認証という操作が必要になると思います。

萩原（工学） それは可能なはずですが。

大学教育センター長（渡辺） メディア基盤センターには認証サーバというのをつくろうとしてますんで。それができたら、そういうことも可能になるだろうと思います、基本的には。

萩原（工学） それともうひとつ、学科で学内向けのアクセスの作動させるちゅうのは結構大変なことで、工学部でも今電子工学科でされてるんじゃないかと思うんですけども、ほとんどはもうメディア基盤センターのパソコンを利用せざるを得ないんじゃないかという状況だと思いますんで。

大学教育センター長（渡辺） そのあたり、メディア基盤センターと相談をしながら、利用しやすいものをメディア基盤センターに設定していただこうと思っています。

萩原（工学） メディア基盤センターに一括して設定してもらった方が心配が少ないんじゃないかと思うんですけど。

大学教育センター長（渡辺） 一括して今度メディアセンターに置きなさいというと、いや、自分はここに置きたいんだという先生も出られまして、そのあたりは融通性を少し持たせておかないといけないかなと思ってます。で、ほとんどの方はメディア基盤センターを利用するようになるんじゃないかなとは思ってます。

司会（岩部） それでは、この辺で。ちょっとあとの予定が大分押してますので。

9. ワークショップの記録(9月16/17日実施分)

司会(岩部) 残り2つのグループを30分以内に、やっぱり10分ずつでやっていきたいと思います。それで、ちょっと予定がずれますけれども、2時にはバスが来ますので、おくれても10分とか15分ぐらいが限界だろうと思いますので、最後の副学長の閉会の言葉あたりをちょっと縮めていただくことにいたして、おさめたいと思います。

それでは、順番はAグループから順番にやっていただければと思うんですけど、お願いできますでしょうか。Aグループの代表の方、よろしくお願いします。

滝野(人文) 私のシラバスを例に出しております。私はAグループの滝野と申し、人文学部で、部会としては史学部に所属しております。

それで、私の例を出しておりますが、実は私のところのグループは、大きく3つのグループに分かれておまして、歴史学の私と、それから西洋史の岩崎先生、それから教育学部の音楽の系統の方お2人と、それから医学部の看護学関係の方2人で、一つのグループになってるんですが、なかなかまとまって話ができないというか、まあ、偏差が非常にあるということでもあります。

系列	人文学	分野	歴史学	科目類型	総説
開設科目名	東洋史	単位数	2	担当教官	滝野正二郎
開設期		開設時限		授業区分	講義
対象学生		備考			
授業の概要					
1. 日本が属してきた歴史世界が東アジア世界であったことを説明する。 2. 古代東アジア世界を律する秩序であった冊封体制と、中世におけるその変質について説明する。 3. 東アジアの伝統秩序と近代世界システムとの齟齬および、後者による前者の併呑を説明する。					
検索キーワード	東アジア世界、中華思想、冊封体制、渡来銭、朝貢貿易、近代世界システム、侵略、変質				
授業の一般目標					
1. 東アジア世界を前近代において律していた冊封体制・朝貢貿易システムを理解する。 2. 世界史/日本史の二分法、世界 アジア 日本(或いは世界 日本)の同心円的世界観を相対化する。 3. 日本社会の置かれた国際環境を歴史的に理解し、日本史を孤立化させて考える視点から脱却する。					
授業の到達目標					
	知識・理解の観点	古代東アジアの冊封体制と中世におけるその変質を説明できる。			
	思考・判断の観点	「世界」「アジア」「日本」という地域を無限定に設定する不合理を指摘することができる。			
	関心・意欲の観点	歴史学あるいは東アジア史に興味を持つ。			
	態度・価値観の観点	1. 既存の概念に疑いを持つ。2. 近現代の世界観に疑いを持つ。			
	技能・表現の観点				
	その他の観点				
授業計画(全体)					
授業計画(授業単位)					
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録	
第1回		【項目】オリエンテーション 【内容】担当教員の紹介、授業の目標と進め方、シラバスの説明、成績評価方法。	シラバスを読み、プリントアウトして持参すること		
第2回目		【項目】アジアと東洋 【内容】ヨーロッパとアジア、西洋と東洋という言葉の成り立ち			
第3回目		【項目】東アジア世界 【内容】前近代の日本が属した世界 = 東アジア世界の説明			

第4回目	【項目】古代中国における「文化」の構造と皇帝制度 【内容】天子 = 皇帝を中心とする境界のない求心的世界							
第5回目	【項目】朝貢と冊封 【内容】古代中国の「外交」儀礼							
第6回目	【項目】魏晋南北朝期の中国王朝と「東夷」諸国 【内容】非漢民族王朝による冊封の拡大							
第7回目	【項目】隋唐帝国を中心とする冊封体制 【内容】冊封体制の完成							
第8回目	【項目】「東夷」諸国の「小中華」意識 【内容】朝鮮半島・日本における「ナショナルイズム」形成と東アジアの一体化							
第9回目	【項目】宋銭の流通と東アジア世界 【内容】東アジアの商業化							
第10回目	【項目】モンゴル帝国の拡大と東アジア世界 【内容】東アジア世界の通交圏とモンゴル帝国							
第11回目	【項目】明朝による朝貢 冊封体制の再編と倭寇 【内容】朝貢貿易システムと私貿易							
第12回目	【項目】日本の「鎖国」と清朝の「閉関」 【内容】日本の輸入代替							
第13回目	【項目】西欧列強の侵略と東アジア 【内容】東アジア伝統社会と近代世界システムの衝突と浸透							
第14回目	【項目】近代日本の侵略と東アジア 【内容】征韓論から第二次世界大戦まで							
第15回目	【項目】期末試験 【内容】							
成績評価方法(総合)								
欠席は0回=20点、1回=15点、2回=10点、3回=5点、4回=0点を加点。5回以上失格								
成績評価方法(観点別)								
到達目標等	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)							70	
小テスト・授業内レポート							10	
宿題・授業外レポート							評価に加えず	
授業態度・授業への参加度							評価に加えず	
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							20	
その他()							評価に加えず	
合計							100%	80%
関連科目								
教科書	なし。プリントを配布する。							
参考書	『中国古代国家と東アジア世界』,西嶋定生,東京大学出版会,1983年 『隋唐の国際秩序と東アジア』,金子修一,名著刊行会,2001年 『アジアの中の日本史』1~6,荒野・石井・村井編,東京大学出版会,1992年 『アジア工業圏と日本工業化1500-1900』,濱下・川勝編,リプロポート,1991年 『朝貢システムと近代アジア』,濱下武志,岩波書店,1997年 上記以外にも多数あり。授業中に紹介する。							
メッセージ								
連絡先・オフィスアワー								

で、ちょっと私のところ最初に例を出しましてお話ししたいんですが、その主題というのは、もう要す

るにいろいろ違って、かなり問題があるということです。私の場合は東洋史を担当していますが、どちらかというと通史みたいな、そういう事実を述べながら学生にいろんな知識を与えると同時に、疑問を感じてもらおうという部分のところがあります。

それで、授業の概要としては、これこれの世界であったことを説明するとか、それから、変遷について説明するとか、そういう説明するというのでずうっと統一しておるわけですが、授業の目標としては、今度は逆に、まず知識としては、こういうような事柄を理解するというふうにしてあります。その一方で、そういうある知識を得たことによって疑問を感じてもらおう。私どもの人文系の教官からいうと、大学生が持たなくちゃいけない一番大事な教養ていうのは、人がこういうふうな、これはこういうものだぞというふうに言った場合に、いや、そうじゃないんじゃないかという疑問を持ってという、簡単に信用するなという、そういうところは非常に重要なところだというふうに思ってるものですから、相対化するとかですね、脱却するとかですね、そういうふうなあそこの例には入ってなかった、そういう一般の目標を持って書きました。

そして、到達目標の件ですが、これは説明できるとか、それから指摘することができるということなんですが、その3つ目の関心意欲のところ、歴史学あるいは東アジア史に興味を持つというふうにして書いてるんですが、ここにちょっと問題があるんじゃないかというふうに言われた場合もあります。それから、既存の概念に疑いを持つところの、とかですね、近現代の世界観に疑いを持つというふうに書きましたが、ここのところで渡辺センター長の方からですね、疑いを持つだけじゃあそれは評価できない。だから、疑いを持って、それを説明できるというふうにするべきではないかというような意見が出されたとします。で、こういう表現のところですが、例えば音楽系の先生なんかですと、追及するとか、そういうようなことをやっぱり書きたくなる点が非常にあったりするんですね。例えば少人数で、学生との間で一緒にこう追求して考えていくということそのものも評価したいというふうな。それは評価しにくくて、実際昨日言われたような点においては評価できないんですけども、しかし、やっぱりそれを評価していくべきなんじゃないかと思ってしまう部分があるので、できればそういうのを考えていただきたいというように思います。あともう一つは、音楽系の場合、例えば、個人で指導される場合があるというふうな、非常にそのときの指導のやり方とか、その学生の課題とかが非常に偏差がある場合があって、そういうのを非常に苦労すると。シラバスで書くということになると苦労するという問題が出されたりしておりました。

それから、私の場合は基本的に通史ですので、時代を追って、一番最初にオリエンテーションをやって、それから一番最後が期末試験という形で、その間は大体時代を追ってずうっと行くということにしております。で、ちょっと時間がないのでその説明は飛ばしますが、問題は、その評価の方法のところなんです。私の場合は、知識が非常に必要というか、理解するということが、やっぱり通史的に授業をすると大切です。ただ先ほども言いましたように、知識を知ったことによって疑問を持つとか、そういうことも見ますので、定期試験が70%、質問表の形式をとった小テストが10%、出席を点数化して20%です。出席に関しては、1回休むごとに5点引いていくという形で、4回休むと0点になるという、そういう点数化してみたんですが、そこも実は私知らなかったんですけど、渡辺センター長の方から、JABEEは出席を点数化するのはだめだというふうに言われた、点がですね、ちょっと知りませんでした。

で、ちょっと今も出そうかと思ったんですが、看護学、助産学の方のシラバスなんかですと、実は、私なんかと違う、違う意味で非常に知識を伝えるというような形なわけですね。で、それは同じ知識を与えるというのもあるんですが、私の場合は、知識を知ることによって疑問を感じるというような、そういう点を考えるんですが、助産学なんかですと、国家試験というのがありますので、非常に明確に知

らなくちゃいけないという知識が決まっています、なおかつ、それを非常に明確に達成すると。なおかつ、それを受ける学生の方も非常に明確にモチベーション持っているという点で、同じグループに入りましたけど、全く違うというふうな点があったりしました。それから、15回書いてますが、実はこの助産学の場合ですと30回あるんだというようなことがあって、今年は改善されているそうなんですが、そういう問題も出ておりました。

で、あと、一つ言いますと、歴史学で、例えば岩崎先生が西洋史をされてますが、実は歴史学でも授業は全く違っていて、それ何が違うかと、題材が違うだけじゃなくて、私は通史的にずっと、世界史の普通の授業みたいに通史的に古いところからずうっとやっていくようなそういう授業をやってますが、岩崎先生は、ホロコーストという一つの題材を使って、その題材をいろんな問題点からこう照射して考えさせるというような授業もされたりしています。そうなってくると、シラバスの書き方も、特にこの授業計画なんか見て、こういう問題点から見るとどうなるかと、そういうところが全く違うということになって、そういうときに私が本当思いましたのは、セッション6でしたっけ、ワークショップの6の標準化っていうのは出なくてよかったなというふうに私は思いました。

以上です。

司会（岩部） 質問等を受けつけてると時間がなくなるので、私、ちょっと個人的に疑問に感じた部分もあったんですけど、じゃあ一言だけ勝手に質問します。さっき疑いを持つという目標を立てられたんで、それはどの部分で評価されるんでしょう。授業内レポートという部分ですかね。

滝野（人文） いや、疑いを持つのは、実は、授業ではにおわせてはいるんだけど、明確に教えてない問題を考える、私は、日本とアジアというフレーズ、これこないだ出した試験なんですけど、日本とアジアというフレーズがあるが、この言葉の抱えている矛盾をなるべくたくさん書けという、そういう問題を出したことがあるんです。よく日本とアジアというフレーズをよく言われるんですね、だけど、実はよく考えてみるとおかしいんです、この言葉はですね。こういうのを問題に出してみたりして、そういうところで見えておるんです。

司会（岩部） わかりました。試験問題自体にそういう疑いを持つというのが入る。認証評価に疑いを持つという、これも重要なのかなという。

Aグループ ワークショップ活動報告

<メンバー>	司会	西村順子（芸術）
	グループ発表者	滝野正二郎（史学） 岩崎好成（史学） 朴 成泰（芸術）
	記録係	戸部郁代（社会と医療）
	記録係	山元公美子（社会と医療）
	ファシリテーター	渡邊正（大学教育センター）

ワークショップ1日目の話題としては、主に「目標記述のための動詞」の使い方であった。例えば・・・
到達目標に「疑いをもつ」や「脱却する」「興味をもつ」という動詞を使ってみたが、このような動詞を使ってもよいものか。
芸術系の科目においてはどうしても広がり求めてしまうので「追求する」という動詞を使いたくなる。練習を「重ねる」という動詞も使ってみたが、この辺りの表現も検討していく必要があるだろう。
などであった。

ワークショップ2日目において、シラバスに記述する授業計画と成績評価方法を各自で考え作成した。我がグループは、「史学」「看護」「芸術」といった多様な分野から集まった教官から成っているため、グループ内発表は、時間の都合上「史学」「看護」「芸術」から1例ずつ提示された。各分野の発表内容と発表後に討議された内容を、部分的に抽出して 下記に記す。

「史学」(滝野先生)

昨日議論になった「疑問をもつ」という動詞は、まだ変更はしていない。自分の中では疑問をもってもらうことが目標であって、それを確認する必要があるかどうかは悩んでいる。

「疑問をもつ」という点を具体的にどのように評価するか。疑問を持っていることを何らかの形で表現する必要がある。

実際にはペーパー試験などで「日本とアジアという表現をされることがあるが、その矛盾点について指摘せよ」という問題提起はしている。

試験で「疑問をもつ」と点を表現させているので、「既存の概念に対する疑問点を説明できる」という表現にしても良いのではないか？

「態度」の評価をする必要があるが、通史の授業をしているため、実際的には知識習得の確認をペーパー試験でみることが多い。出席を点数化して(例えば全て出席なら+20点、1回欠席なら+15点、2回欠席は+10点、・・・と5点ずつマイナスしていき、5回以上は欠格とする)、出席点を加味している。

JABEEの考え方では出席をするのは当たり前であるため出席点は加味されない。JABEEの記入欄に点数を記すのはおかしいのではないか。JABEEのところに記さなければいざらう。学則規定では、授業の3分の2以上の出席が必要になるので、「5回欠席は欠格」というのは規定に則した形になっており問題ないと思う。

教科書というものは使用しておらず参考書は論文レベルのものを使用している。シラバス上に参考文献を載せているが、東洋史の文献は数が少なく、研究室にしかおいていないものも多い。読んで来なさいといっても難しい状況がある。

これからは講義ノートをWeb上に載せておくといよいのではないか。

しかし、全てを載せてしまうと、学生は授業でノートをとらなくなってしまう。授業を受ける緊張感も無くなってしまいう可能性もある。

教官から学生への一方的な講義だけでなく、討論であれば資料としてWeb上に載せるのはよいだろうが、学生の人数が200人ともなると討議形態の授業は難しくなる。

「看護」

一般目標は全体を網羅出来るように抽象的なものになっているが、到達目標に関してはかなり具体的になっていった。というのも看護の学生の場合、最終の目標として「国家試験の合格」があるため、最低限厚生省が示している基準をクリアしていかなければならないからである。私たちの学科では国家試験に受かるのは最低条件となる。知識の習得に関しての項目が多い状況になってしまうので、どこまで具体的にシラバスに載せるべきか。

基本的に2004年度版のシラバスは字数の制限がないので、基本的には自由にいくらでも書いてよいと思う。学部によって「国家試験」などの最終目標があるところ、ないところがあるため、シラバスの書き方も学部によって大きく違ってくるであろう。

「思考」「判断」についてはペーパー上で「状況設定問題」として挙げて学生の能力を評価していくことができる。実際には「助産技術学」や「助産学実習」という科目で実践能力をつけていくが、ここで示している「周産期看護学」は主に講義中心なので、「ペーパー試験」もしくは「学外レポート」などにより評価する。

「音楽」

昨日、到達目標に「追及する」「練習を重ねる」などの動詞を使用していたが、「技術的トレーニングをすることが出来る」や「中断せずに弾くことができる」などの言葉に変更した。その理由として絵画などになってくればじっくりと時間をかけてよい作品が出来上がればよいが、音楽の世界に関しては言えば、評価が「公開テスト」となり制限時間内に課題曲を演奏し終わらなければならない。

○音楽の場合、授業が個人レッスンであり、その子のレベルに応じて内容が変わってくるため、授業内容を15回に分けて書くことは出来ない。従って「授業計画(全体)」のところに内容を記載している。

まとめ

医学・工学のように構造主義的な教育であれば評価視点が定めやすい。しかし、構成主義的な教育を主体とする人文系の学部では明確な評価視点を定めるのは容易ではない。このように背景が大きく異なる各授業において明確な到達目標を示すためには表現方法に工夫が必要である。到達目標=評価視点という点を学生が授業前に理解できるようなシラバスの作成を行っていく必要がある。

今回のFD研修では、改めてシラバス作成の意義と難しさを学習できた。

次のBグループの方、お願いできますでしょうか。

森岡(教育) 教育学部の森岡です。部会は応用科学の部会に入ってます。私自身の授業科目名は技術概論です。

シラバスだけだとちっちゃ過ぎてわかりにくいので、必要なところだけ抜いています。技術概論とい
 いますのは、教育学部の教官がですね、この3人が持ち回りで、15回を3で割って5回ずつという形
 でやっております。それで、どういうことをやっているかという、技術概論というのは非常に広い
 ですので、エネルギーの問題、木材加工、木材の利用に関する問題、ロボット等の技術、ロボット等の最
 近の動向に関する問題、あとコンピューターに関する問題、主にこの4つの範囲を3人の教官が持ち回
 りで説明していくという形式です。

系列	応用科学	分野	科目類型		
開設科目名	技術概論	単位数	2	担当教官	岡村、森岡、古賀
開設期	1年・前期	開設時限	水3・4	授業区分	講義
対象学生	全(工・農除く)	備考			
授業の概要					
技術とは何だろうか。よく聞く言葉ではあるが、その意味や内容は多様である。 本授業では、はじめに「技術」という言葉およびその用法について考察し、この後さまざまな分野における 技術の変遷や事例について概説する。 主な分野および内容は、伝統的な技術としての手加工(木材を中心とした加工)と最近の木材利用技術、 現代西洋技術の先端であるコンピュータ、現代社会を支えるエネルギー事情と核エネルギー、メカトロに 代表される機械の制御技術などである。					
検索キーワード					
授業の一般目標					
本授業は、人と技術、人間社会と技術、環境と技術など、総合的な関わりの中で技術をとらえる必要を知 り、自分なりの技術をみる目すなわち技術論の形成ができるようになることを目的とする。					
授業の到達目標					
	知識・理解の観点 (認知的領域・達成目標)	1. 技術を人と技術、人間社会と技術、環境と技術など関わりの中でとらえ て説明することができる。 2. 最近の木材利用技術について説明することができる。 3. 現代のエネルギー事情を説明することができる。 4. 最近のロボット技術、特にヒューマノイドの必要性を検証することがで きる。 5. コンピュータの動作原理を説明することができる。			
	思考・判断の観点 (認知的領域・向上目標)	1. 木材と環境問題の関わりを検証することができる。 2. エネルギーと環境問題について推論することができる。			
	関心・意欲の観点 (情意的領域・達成目標)	1. 自分自身のエネルギー使用量に関心をもち生活に問題意識をもつ 2. 工場以外でロボットがどのように活用されているのについて関心を持つ			
	態度・価値観の観点 (情意的領域・向上目 標)	1. 将来の環境問題やエネルギー問題を主体的に考える 2. ヒューマノイドを製作することへの反対意見や自分なりの利用法を提案 する。			
	技能・表現の観点				
	その他の観点				
授業計画(全体)					
授業計画(授業単位)					
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の 指示等	授業の記録	
第1 回		【項目】オリエンテーション 【内容】担当教員の紹介、授業の目標と進め 方、シラバス説明、成績評価の方法	シラバスを読んでおくこ と。		
第2 回目		【項目】技術と人との関わり 【内容】			
第3 回目		【項目】木材と環境、木材利用にみる技術の 変遷 【内容】			
第4 回目		【項目】最近の木材利用技術 【内容】			
第5 回目		【項目】現代のエネルギー事情 【内容】			
第6		【項目】エネルギーと環境問題			

回目	【内容】							
第7回目	【項目】核エネルギー 【内容】							
第8回目	【項目】ロボット技術の概要 【内容】最近のロボット技術の動向を説明			授業の感想レポート			途中でビデオを見せる	
第9回目	【項目】工場を飛び出すロボット達の紹介 【内容】農業用ロボット、アミューズメントロボット			産業用ロボット以外のロボットを調べて、レポートすること。			ロボコン参加の体験談等	
第10回目	【項目】2足歩行ロボットの開発1 【内容】ASIMO等の開発を紹介			人間社会へのロボット技術の貢献について説明する。(レポート)			途中でビデオでビデオをみせる	
第11回目	【項目】2足歩行ロボットの開発1 【内容】動歩行の原理			ヒューマノイドについてのレポート				
第12回目	【項目】IC技術とコンピュータの発展 【内容】							
第13回目	【項目】コンピュータの動作原理 【内容】							
第14回目	【項目】コンピュータとプログラミング 【内容】							
第15回目	【項目】試験 【内容】							
成績評価方法(総合)								
授業は複数の教官で行うため。成績評価は、それぞれの教官の採点を平均したものを使用する								
成績評価方法(観点別)								
到達目標等	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集 資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)								
小テスト・授業内レポート							40%	
宿題・授業外レポート							60%	
授業態度・授業への参加度								
受講者の発表(プレゼン) ・授業内での制作作品								
演習								
出席							欠格条件	
その他()								
合計							100%	80%
関連科目								
教科書								
参考書								
メッセージ								
連絡先・オフィスアワー								

それで、一般目標は抽象的で、授業を通して人と技術、人間社会と技術、環境と技術など総合的なかわりの中で技術をとらえるの必要を知り、自分なりの技術を見る目、すなわち技術論の形成を目指す、こういうふうな非常に抽象的な目標を持っています。全部やったら時間がありませんので、到達目標で、まず、知識と理解の観点。これは領域でいうと、認知的領域と達成目標だったと思うんですけど、例えば、技術と人間、人間社会と技術、環境と技術などのかかわりの中でとらえて説明することができる技術をですね、あと、最近のロボット技術、私がこれは担当してますけど、特に足のところ、ヒューマノイドの必要性を検証することができる、こういうふうな話ですね。あと、思考と判断の観点については、エネルギーと環境問題について推論することができる、こういうふうなことをやっています。原子力発電とかですね、そういうふうな風力発電とか。あと、関心意欲の観点では、自分自身のエネルギー使用料に関心を持ち、問題意識を持つ。これは私の担当じゃないですけど、授業参加してますと、学生さん、前の時間用意してもらって、自分とこのアパートの電力量、請求書があります。あれを持ってきてもら

って、自分がどんだけエネルギーを使ってるか、そのエネルギーはドラム缶にしたらどのぐらいだとか、そういうふうなことをやっておられます。あと、工場外で、今最近介護ロボットとか、農業用ロボットとかありますので、そういう活用について関心を持つと。あと、価値観については、情意的達成目標というんですか、ヒューマノイドを制作することへの反対意見や自分なりの利用法を提案する。これは主に文系を相手にしてしますので、何ていうんですか、文学部の方なんかはこれ非常に恐ろしいという、大概恐ろしいって言っています。あと、自分なりの利用法なんかいうと、経済学部の方なんかですと、これでビジネスをしたらこんだけ儲かるとか、そういうことをやってくれます。

あとまあ1回目は同じなんですけど、主に私がやってるところですけど、ロボット技術の概要、途中でビデオを見せたりします。あと、授業の感想ですね、これは授業内です、済みません、ここ授業外でしてますけど。あと、工場を飛び出すロボットたちの紹介ということで、農業用ロボットとかアミューズメントロボットですね。ここでは私、前職でロボットコンテストとかよくやってましたので、その参加状況とか、どこが難しいんだとか、体験談ですね。それでレポートとしては、今やってませんが、来年は産業用ロボット以外のロボットを調べてレポートを提出することとか、そういうふうなタイトルでやってます、やろうと思ってます。

おもしろいところは、先ほど言いましたけど、ヒューマノイドについてのレポートですね。これが毎年いるんですが、1年、2年やりましたけど、やっぱり2年間でもちょっと動きがありまして、そんなんやったらいかんていう人がだんだんふえてきてるのが、何か技術に対する不安感みたいな、漠然とした不安感みたいなのが、そんなんする必要ないという意見もふえてきているような気がします。

あと、この授業は何で評価するかといいますと、もう授業内のレポートとか、授業外のレポートですね。これも機械的にレポートだったらこれですよと、さっき表に載ってましたので、やって、40%と60%。出席は、欠格条件でちょっと書いてませんが、4分の3ですかね、学校の規定に従ってここに書くつもりです。それと、これは教官がたくさんいますので、授業は複数の教官で行うため、成績評価はそれぞれの教官の採点を平均したものとするというようにしています。

話では、やっぱりこういう専門の話にやっぱりしたんですけど、専門の科目ていうのはグローバルスタンダードが決まってまして、私なんか機械工学科ですから、機械工学科の材料力学といえ、もうこれとこれとこれで決まってるわけですけど、こういうものはグローバルスタンダードの中になくて、先生の中に絶対評価基準がある、昔の余りよくない時代の評価になると思いますが、しょうがないかなと思ってます。

以上です。

司会(岩部) すばらしく広がりのある授業だというふうに感じさせられましたし、我々その授業のカリキュラムを考える場合に、知識とか、そのあたりのところというのはある程度ちゃんと書けるかなと思うんですが、情意目標というのをどうしたらいいだろうとちょっと困ったんですけど、今の授業を見ると、その情意目標のあたりを非常に中心的になされていて、ああ、大学の中にこういう授業があるんならば安心だなというのを本当に感じさせられました。どうもありがとうございました。

朝位(工学) 同じグループの者なんですけれども、先ほどもちょっと議論の中で私が言ったんですけど、複数で教官をやってる場合、例えば、そこの成績評価方法観点別というところで、複数の教官が同じコンセンサスをとって、小テストが何パーセントとか定期試験が何パーセントか、大事ですけど、各先生で観点が違って、例えば、自分は、小テストは30%でレポートは70%とか、微妙にこう違う場合にですね、その場合、この成績評価方法というこの表が、その担当教官分だけこうつくれば、細かいこうニュアンスが伝わるんじゃないかというふうなことがちょっと感じた部分であります。一応コメントとして。

司会（岩部） どうもありがとうございました。

次、Cグループの先生、よろしく。

中内（理学） 理学部の中内です。数学のグループで、数学文科会なんですけど、いつも顔を合わせてるメンバーばかりなんで、昨日のアイスブレーキングもいきなり氷が解けていたという、今回の発表者も、実をいうと、数学は平等なんでくじ引きで決めました。で、運悪く、くじ運の悪さを嘆いた私に冷たい言葉をみんな一斉に合わせたというすごいチームワークのいいグループですけども。

で、数学に関しては、共通教育の数学、理系の数学を皆さんやってるので、それをもとに、数学1というやつなんですけど、高校でもやってる一変数の微分と積分の授業です。時間もないことだし、もうこれは皆さんの、そのグループのメンバーの合議でつくった作品で、こういうのを余りやったことないんで、きちっとしたこういうシラバスをですね。

系列	分野	科目類型
開設科目名	数学Ⅰ	単位数
開設期		開設時限
対象学生		備考
授業の概要		
理工系学問の基礎である微積分学において、一変数関数の微分と積分を理解させ、計算方法を習得させる。		
検索キーワード	関数、連続、微分、積分、微分係数、導関数、不定積分、定積分、・・・	
授業の一般目標		
一変数の微積分学の基本的な概念を理解し、計算方法を習得する。微分法・積分法、合成関数の微分法、部分積分の公式など、微積分学における様々な概念や手法を理解し、習熟する。さらに、それらの概念の理解をもとに、理系分野における様々な分野の問題を解決できるような応用力を養う。		
授業の到達目標		
知識・理解の観点	1. 三角関数、指数関数、対数関数など、初等関数の基本的な取り扱いや計算が正確にできる。 2. 微分法の基本的な概念を理解した上で、合成関数の微分法、ライプニッツの法則、テイラー展開など、微分法の基本的な方法に習熟し、正確に使用することができる。 3. 定積分、不定積分の基本的な概念を理解した上で、部分積分の公式など、積分法の基本的な方法に習熟し、正確に使用することができる。	
思考・判断の観点	1. 論理的な思考過程を通して、問題に取り組むことができる。 2. 理解できた部分と理解できない部分が明確に識別できる。	
関心・意欲の観点	1. 何事にも興味をもち、自ら進んで新しい概念に取り組むことができる。 2. 理解できない部分を理解できるまで考え抜く集中力と忍耐力をつける。 3. 数学のさらなる勉学意欲をもつ	
態度・価値観の観点	1. 新しい概念を知り、驚き・喜びを感じ、感動を覚えることができる。 2. 数学の必要性を再認識し、より高度な数学に興味をもつことができる。	
技能・表現の観点	自分の思考過程を正確に人に伝えることができる。	
その他の観点		
授業計画(全体)		
<ul style="list-style-type: none"> ・これから学ぶこと、高校の復習、実数の性質 ・数列の極限 ・関数の極限と連続関数 ・微分係数と導関数 ・微分に関する基本的な法則（合成関数の微分法、ライプニッツの法則） ・三角関数、指数関数、対数関数、逆三角関数などの微分 ・高次導関数 ・平均値の定理 ・テイラーの定理 ・微分法の応用 ・不定積分 ・積分に関する基本的な法則（部分積分法、置換積分法） ・有理関数の積分 ・三角関数、指数関数、対数関数などの積分 ・定積分 ・広義積分 		

・積分の応用									
なお、以下に注意のこと。									
(1) 各項目において、適宜、問題演習の時間をとることがある。									
(2) 微分法が終了した段階で、中間試験を行う。									
(3) 積分法が終了した段階で、期末試験を行う。									
(4) 適当な時期にレポートを課す。									
授業計画(授業単位)									
回数	日付	授業項目・内容等			授業外学習の指示等		授業の記録		
第1回		【項目】 【内容】							
・		・							
・		・							
・		・							
第15回		【項目】 【内容】							
成績評価方法(総合)									
2回の試験(中間試験と期末試験)とレポート、および講義中に適宜行う問題演習の取り組み状況により、以下の割合で総合的に判定する。									
成績評価方法(観点別)									
到達目標等		知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集 資料
成績評価方法									
定期試験(中間・期末試験)								80%	
小テスト・授業内レポート									
宿題・授業外レポート									
授業態度・授業への参加度								10%	
受講者の発表(プレゼン) ・授業内での制作作品									
演習								10%	
出席									
その他()									
合計								100%	80%
関連科目		数学 II							
教科書									
参考書									
メッセージ									
連絡先・オフィスアワー									

で、まず、概要とか目標とかはちょっと時間の関係で飛ばさせていただきます。要するに微分と積分に関しては、概念の理解というのが一つ、それと、計算方法などの技術の習得というもう一つ、その2つについての項目を書いたということです。

で、多分特徴あるのは、このあとの到達目標の真ん中辺の思考判断の観点あたりからだと思うんですけど、数学というのは、まず技術ていうのもありますけど、計算方法の習得とかありますけど、まずわかるということが重要だと思うんですね。技術の習得だったら、それは、問題は解けるかもしれません。でも、実際に社会に出たときに、何か要するに、今まで出会ったことのない問題をどう解決するかというときは応用力が必要になります。それは自分がわかってるとということが前提になります。そういう問題、そういうことは重要だということに関して、思考判断の観点では、まず数学ていうのは、数学って題材を通して、まず論理的な思考過程を通して問題に取り組むことが一つですよ。それと裏腹なんですけど、要するに、理解できた部分と理解できない部分があり、明確に識別できる。これはもう学生がどこがわからないのかわからない状態ていうのが一番、これが根本的な問題なんで、それがちゃんとわかるということで、もう半分問題が解決したもんだと思う。そこがよくわかってるとということが判断の基

準です。

それから、関心意欲の観点に関しては、要するに、もう数学だと嫌だなんていうのがありますが、要するに、そこは教師の側の取り組み方によって、せっかく大学に来たわけですから、内容等にも興味を持ってみずから進んで、新しい概念に触れたり、みずから取り組むことができるというのがある一つ。

それから、2番目は、だから、理解できない部分はやっぱりしんどいんですね。超えなきゃならないところは、どんなおもしろい分野でも超えなきゃならないところはあります。数学は特に超えなきゃならない罫が大きいんで、そこはもう仕方ないんですね、本人幾ら後押ししたって、ある程度努力をしても、ある程度は本人の力によって超えてくれないと。そういう意味で集中力と忍耐力、昨日学長先生の言葉にあったと思うんですけど、要するに5分集中力が続くか、だから、講義に来てじっと聞いて、集中力をつけて、まあわかるわからないは別として、ちゃんと聞いて、何か頭に残ってるかどうかというのはそれでいいと思うんですけど、それが10分、15分と続けばいいわけで、それがちゃんとできるかどうか。

それから、3番は、数学のさらなる勉学意欲、まあそれはちょっとさっきの新しい概念とか関連します。それから、態度価値観の観点ということに関しては、これもちょっと理想論になるかもしれないですけど、新しい概念つくったときに、まあ自然科学の一番の基本だと思うんですけど、何で、どうしてなのかというのが多分学問をやるときに一番根本だと思いますが、それにこういうのが解けておもしろい、こういうことが楽しい、そういうことを多分中学、高校ではテスト、試験勉強ばかりだと思うんで、そういうことがわかるようになる、わかるよと。だから、そういうことを判定してあげたいというのがこの項目に入ります。で、またより高度なという同じような、さらなる勉学ということですね。

それから、最後の、この技能表現の観点というのは、思考、論理的な思考という、自分の考え方とちょっと密接に関係するんですけど、それを正確に人に伝えることができる表現力です。だから、数学の勉強して、世の中の役に立つのかとよく聞かれるんですけど、要するに、人前でちゃんと論理的に例えることだけでも多分重要だと思うんですよ。それは世の中へ出て一番役に立つことだと思うんで、だから、数学を通してそれが学べればいいわけで、それも判断の対象にしたい、まあ、特徴的にはこういうことで。

それと、あとですね、授業計画なんですけど、授業計画が、週単位ごとのシラバスになってるんですけど、グループの討議の結果、あえてこういう形にさせていただきました。というのは、数学、このシラバスのフォーマットなんですけど、多分私の考えもあるんですけど、大学の授業というのは、さっきも出てきたように、技術、ハウツーを教える分野と、それから、要するに、なぜという学問を教える部分がある。どの分野もそれが何パーセントかで混じっておると思うんですけど、理系に関しては、多分100%技術ってというのが、資格試験とか受けるハウツーを教える科目だと思うんですけど、その対極にある100%なぜっていうところをまず中心にしたいというのが数学だと思うんです。で、そういう科目に関しては、このシラバスはちょっと書きにくいんです。多分わかるというのは、その週わかったっていつてわかるもんじゃないです。もう学生とレベルに応じて、どんな学生が来るかわからないですし、わからなさそうかなと思ったらレベル下げますし、ゆっくりやりますし、わかってたらやりますし、臨機応変というのが重要です。だから、そういう意味では、このシラバスの書き方だと、逆にシラバスに足を引っ張られるところでもありますんで、だから、我々としては、項目は出して、で、ただし、この項目の順番で、多分数学はもう道のりが、テキストもありますし、わかりますから、ある程度の予測はどこまで行くかというのとはわかると思うんで、こういう形で、で、中間試験と期末試験は微分、積分それぞれ半分ありますので、それぞれ終了した段階で試験を行うと。で、適当な時期にもレポートを出すという形にします。

最後の成績評価はちょっと自信がないんですが、レポートと定期試験、レポート、研修ていうのに8、10、9、10という形でそれぞれ丸つけたことに関しては、さっきの情意目標でしたっけ、こちらの方にも丸が、さっきの観点の、あるいは技能表現ですかね、関心意欲の方にも、レポートとかそういう面で汲み取れることはできるだろうというので。

大体以上です。

司会（岩部） ありがとうございます。

小柳（工学） 質問というか、多分次のDグループ、大島先生が話されると思うんですけども、いろいろ目標を上げられてますね、こうなってほしいというか、その問題の。その挙証ていうか、それを証拠づけるっていうのはできるんですか、評価は。

中内（理学） 客観的な成績評価ということですね。それは正直言って、まだ私らも、我々のグループでは、どういう形でというにはまだちょっと時間がなかったので、考えてません。

小柳（工学） ちょっとそこをですね、やはりそこ、到達目標は多分挙証ができるものしか上げられないという、例えば第三者が評価する場合のことを考えると、要するに、あとの評価のところとリンクした話を。ですけど、教官側は別にそういうきちっとして評価しないんだけど、こうなってほしいというメッセージをね、書きたいですね、そこにね。本当はこういう知識で、これらの最低限が試験に出る。チェックするんだけど、それ以外のことになぜというのもね、こう考えてほしいとか、それは多分試験では取り上げないと思うんですけども、やはりこうなってほしいとか、そういう要するに学生向け、評価者向けじゃなくて学生向けにね、何かそういうメッセージを込めるということではできるんですか。だけど、それを書きたいですよ、観点別にね。

司会（岩部） お気持ちよくわかります。結局、非常に挙証しやすい部分と挙証ができない部分ていうのがあるわけですよ。で、最終的には総合的に評価するというような形で何とかせざるを得ないんじゃないかと。この例えば態度とか、そういう部分を、そこだけ取り出して、きっちり兆候を出すというわけにはいかない部分がどうしても出てくると思います。

小柳（工学） ただ、先生おっしゃった、人前できちんと説明できる、それは多分そういうふうな試験ていうか、対面試験みたいなことをやればできる。だけど、それは考えてないですね。

中内（理学） いや、例えば、それは具体的にすると。ただし、それを客観的にどこまで客観的といわれると、主観が入る訳ですよ。それはだからもう何とかコンテストと同じですね。それは審査員そのときの審査員によりますし、だから、客観的というのはどこまで客観的というのはわからないと思います。だから、もうそれはそれで、そういう授業でこういうことを出すんだからというのを事前に言っただけ、それはそれでいいんじゃないかと私は思うんですけど、これで判断すると。だから、それはいいんじゃないかなと思うんですけど。

大学教育センター（植村） 今のお話なんですけども、はかれないというものはないと思うんですね。ただし、今おっしゃってたように、主観的な評価ていうか、客観的な基準のないものにならざるを得ないんですけども、しかし、これではかってるんだよという言い方はできると思いますし、それで、はかっていただきたい。さっきはメッセージとおっしゃいましたが、そういうものをどんどん盛り込んでいただいて結構です。どうやってはかるかは、いろんな形で間接的にはかるしか多分ないんでしょうけども、そういういろんな形、例えば演習なら演習で、自分の思考過程が出てきたら、こういう人はちゃんとものが考えられているなあとか見るとか、そういうようなところでやはりその記録を残しておいて、最終的に成績に反映させると。そういういろんな手法があると思うんです。

で、前もちょっと言ったんですけど、例えばどういうのがいいのかというと、自分で問題をつくらせるとかね。割合に総合的に判断するためには、こういう問題を別につくってみなさいとかいうような形

にすると、割合いろんなものはかれたりするという話もしたんですけども、工夫の余地はまだまだあると思います。

ですから、はかりにくいんですけど、はかれないものはないし、そういう希望というようなものはどんどん入れていただいた方がいいと思うんです。

司会（岩部） どうもありがとうございました。数学という分野で、すべての部分を目標として網羅しているという、まあ、ちょっと新鮮な驚きを感じています。

Cグループ ワークショップ活動報告

我々のグループ C は理学部の安藤良文、中内伸光、宮澤康行、工学部の柳研二郎、教育学部の佐藤好久の 5 名で構成され全員が数学を専門としている。

共通教育の同じ部局会に所属していて、日ごろから顔を会わせていることもあって、アイス・ブレイキングをする前に溶けてしまっていた状態であった。WS1 では、司会（柳） 報告者（中内） 記録係（佐藤）を決めて、後は、いつも通りの雑談で終わった。それ以後のワークショップでは、シラバスを作成することで、授業運営の仕方や成績評価の仕方を考えていった。共通教育では、主に「数学」を担当することがあるので、「数学」に統一してシラバスを作成することにした。この科目はほとんどの理工系の学生が履修していて、対象学部や担当教官によって、その内容が少しずつ異なっていたりする

そのため、この WS では、一般的な工学部を対象とした科目（内容：一変数関数の微積分学）のシラバスを作成し、意見交換をすることにした。

実際の評価を考慮しながら到達目標を設定するという事は、新鮮なことであった。知識・理解、思考・判断の観点から目標を設定することは、これまでと変わりはないが、関心・意欲、態度・価値観、技能・表現の観点といった情意的領域での目標を設定することは、ある意味、我々が望んでいることでもあった。高度に抽象化がなされた数学では、概念や技術の習得だけでなく、論理的思考の哲学というものを学生に学んで欲しいと思っていた。そのことが、これらの目標で学生に明示されることは意義のあることだと思われる。このようなことを確認しながら、到達目標について意見を交換し、理解を深めていった。

その次の WS では、授業計画と成績評価方法について各自が考えたものを発表し、議論した。主催者側から提示された授業計画についての案では、全体的なものと授業単位（週単位）のものを作成することになっていた。しかし、数学では、授業単位で計画を立てることは困難であり、相応しくないと判断した。数学のような、概念を一つ一つ理解し積み重ねていく学問では、学生の理解度を確認しながら授業を進めていくべきである。週単位の計画を立てて、シラバスに沿った授業をすることになれば、シラバスに縛られてしまい、教育的効果・配慮の欠如したものになる。このように判断して、全体的計画だけを作成し、その中に学習する内容を明記することにした。その後、到達目標にあわせた成績評価方法を考えて、意見を出し合った。最後の全体の WS で、中内が我々の考えを報告した。（文責 佐藤）

では、次に、Dグループの先生、よろしく申し上げます。

大島（工学） Dグループは物理学グループです。メンバーはここに書いてあるとおり 8 名のメンバーで、私、大島、工学部機能材料工学科の大島が代表させて発表いたします。手短につくったものですから、余りいいわけではないんですけども、今日今までのグループの発表を聞いてると、我々理系の問題点であろうかなと思った疑問と技術に関する問題ていうのが、実は理系に限らず、文科系の問題でもあるということを知りました。

それから、今回のこのゼミでは、目標というものをちゃんと設定して、それに対してどう評価するかというところの手法というのが、我々教官側のアプローチの仕方というものを考え直しなさいというような、そういう指導を受けて、物理学グループとして、例えばこういうような、例えばできが悪いよ、ここが問題じゃなからうかというようなことをこの 2 日間に一生懸命討議しました。その結果を、物理の中の私の担当する物理学実験という科目を通して発表、御報告いたします。

系列	分野	科目類型			
開設科目名	物理学実験 B	単位数	2	担当教官	大島ほか
開設期	前期	開設時限	金曜 5-8	授業区分	実験・実習
対象学生	機械、応化、社建	備考			
授業の概要					

物理学実験と化学実験授業は対になっています。クォーター（6回）ずつ物理実験と化学実験を交互に行います。物理学実験では、高等学校レベルの物理学の知識を基に、力学・熱力学・光学・電磁気学などの基礎的分野から、6テーマの実験を行い、実験結果の整理・解析とレポートの作成を行います。

検索キーワード 物理学、物理学実験、基礎物理学、

授業の一般目標

物理学実験では、力学・熱力学・光学・電磁気学の分野における基本的な物理現象や原理・概念を説明できるようになることを目標とします。さらに、「ものづくり」のための基礎技術と、初歩的な技術作文の書き方を身につけます。

授業の到達目標

知識・理解の観点	6テーマの物理実験の原理について説明できる 仮説・仮定をたてて、それを実証・検証するという手法を身につける 技術作文ができること。
思考・判断の観点	自然現象のすべては物理現象に基づいていることを実感する
関心・意欲の観点	身の回りに起こる現象について、「なぜ?」という疑問を抱くようにする
態度・価値観の観点	
技能・表現の観点	実験指導書で説明している測定機器について扱えること、
その他の観点	チームワークの方法と技術について、創意工夫を行う。

授業計画(全体)

物理自学実験Bでは、下記の14テーマの実験課題の中から6テーマを選んで実験を行います。どの6テーマを行うか、その順番で実験を行うかについては、実験グループによって異なります。物理学実験の掲示板に張り出される実験予定表をよく見て、自分の行う実験を確認してください。

授業計画(授業単位)

回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録
第1回目	初日	【項目】ガイダンス 【内容】物理学実験の単位に関する説明、 実験実習の基本ルールの説明	あらかじめ実験指導書を購入しておくこと	物理学実験 HP の URL http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~physicsj/
第2回目	A1	【項目】実験A ボルダの振り子を使った 重力加速度の測定 【内容】		
第3回目	A2	【項目】実験B ヤング率の測定 たわみの方法 【内容】		
第4回目	A3	【項目】実験C 表面張力の測定 Jollyのばね秤による方法 【内容】		
第5回目	A4	【項目】実験D 電流による熱の仕事当量の測定 【内容】		
第6回目	A5	【項目】実験E 線膨張率の測定 【内容】		
第7回目	A6	【項目】実験F 交流の周波数の測定 【内容】		
第8回目	B1	【項目】実験G 導線とサーミスタの抵抗 の温度特性 【内容】		
第9回目	B2	【項目】実験H ダイオードとトランジスタ の特性 【内容】		
第10回目	B3	【項目】実験I オシロスコープによる 波長観測 【内容】		
第11回目	B4	【項目】実験J 電子の e/m の測定 【内容】		
第12回目	B5	【項目】実験K 回折格子による光の 波長の測定 【内容】		
第13回目	B6	【項目】実験L ニュートンリングの実験 【内容】		
第14回目		【項目】実験M プリズムの屈折率の測定 【内容】		

第 15 回目	【項目】 【内容】							
成績評価方法(総合)								
成績評価方法(観点別)								
到達目標等	知識・ 理解	思考・ 判断	関心・ 意欲	態度・ 価値観	技能・ 表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集 資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)	-	-	-	-	-	-	-	-
小テスト・授業内レポート	-	-	-	-	-	-	-	-
宿題・授業外レポート							50%	
授業態度・授業への参加度								
受講者の発表(プレゼン) ・授業内での制作作品								
演習	-	-	-	-	-	-	-	-
出席							50%	
その他()								
合計							100%	
関連科目	基礎物理学							
教科書	物理学実験指導書							
参考書								
メッセージ								
連絡先・オフィスアワー	毎週 金曜日 正午～午後0時50分 連絡先 大島 0836-85-9611							

まず、物理学実験の大きな特徴ですけれども、これについて若干御説明をいたします。いろいろ細かいことあるんですが、大ざっぱに2点御理解いただいた上で次を見てください。一つは、実験回数が6回です。で、その6回の実験を120名の学生が、2人もしくは3人のグループを組んで、ですから、大体60グループの実験テーマといたしますか、グループが一斉に実験をいたします。で、6回の授業です。評価基準は、出席が5回以上、風邪を引いた、あるいはどなたか御不幸があったなどなど、避けようのない理由があるでしょうから、1回ぐらいは休んでいい。でも、レポートは全部出しなさいというのが評価基準です。これが6割なのか8割なのか、マキシマムなのかというところを我々はもう一度考え直さなきゃいけないということを私は今回学びました。

それから、もう一つの特徴は、科学実験と同時に開講いたします。どういったものかといいますと、授業15回のうち、半分ずつ割り振って、120人ずつ、こうがさっと入れかわりながら、物理を6回やったら、次に科学を6回やる。最初に科学を6回やった人は後半に物理を6回やるという、まあクオーター式でやっております。

では、物理学実験の雰囲気をちょっと見ていただきたいんですけども、これ後ほどちょっと紹介させていただきたいんですが、実はWBTとシラバスをリンクさせたいというようなお話が午前中にあったと思うんですが、そのWBT側にも物理学実験として対応すべく、2年間、2年来、前からいろいろ準備を進めております。これ、内容についてはまた後ほどちょっと触れさせていただきます。本筋から離れないようにですね、物理学実験の授業の雰囲気をこれで見させていただいて、こんな感じで60テーマの物理学実験というのが一斉にどーんと6人の教官でやってるとというのが授業の実態でございます。

さて、そういった授業に対するシラバスをどうやってつくるかというところでいろいろ悩んだところではありますが、問題は、今日皆さんがやっている目標の設定の仕方であろうと思います。で、一般目標としては、もう大ぶろしきに書かざるを得ないだろうと。で、今回は、私は、ですから、力学、熱力学、それから光学、電磁力学などなど、物理学の基本的な分野にまたがって、現象や概念を、従来は理解できることをという目標を立ててます。それではだめだよというので、じゃあ、それをどういう表現したらいいんだろうかについて、説明できるようになることを目標とします、と置き換えました。

それから、工学部ですので、ものをつくって何ぼの世界ですから、そのための基礎技術、ノギスをはかる、使うですとか、オシロスコープを使うですとか、そういった簡単な技術、それから、ここはもうメッセージの部分なんですけども、技術作文も、作文も実は技術の一つなんだよということを伝えて、そういったものを身につけます、ということ伝えて。

で、今日、今ちょっと急に編集したんですけども、最初の御発表で脱却するという言葉をいただきましたので、そういう表現が可能ならば、我々はさらにこういうことを実際は加えたいなと思いました。丸ペけのドリル式の学習方法から脱却してくださいと。高校生は今まで答があって、それに対して正確出したら丸、で、出さなかったらペけという学習をやってきた。でも、本当はそうじゃないでしょ、答えはないじゃない、そこに到達する過程が大事だよ。あるいは、そこに到達、もし間違った答えを出したとしても、なぜ間違っていたかを検証することが大事だよというような学習の過程を大事にしたい。でも、これは、今回の勉強では実は盛り込めませんでした。というので、一つの問題点というのは、こういった過程を大事にしたいのをどう表現するかというのがあると思いますね。

それから、何とか盛り込んだんですけども、周りの現象に疑問を抱くというのは、歴史の世界でもそれが重要だよということを今日勉強したんですけども、物理の世界でも全く同じです。ここにマウスがあります。で、手を離すと落ちます。これは物理現象です。たったこれだけのことを学生たちは物理現象として見ない。だけど、これを見てほしいというのがあります。で、そういったものをどうやって評価に盛り込みますかというところが、やっぱり難しいんだなというのがわかりました。で、先ほどチームリーダーの小柳先生からメッセージがありましたけども、その教官が学生に伝えたいメッセージというものをどうやって盛り込むのか。それから、先生のメッセージで、それを評価するのは難しいけども、評価できるだろうというコメントをいただきましたけども、我々としては、他力本願ではありますが、じゃあ、難しいところの評価方法をスタンダードを、例えば大教センターの方でつくっていただきたいというような要望が上がってまいりました。

さて、今回勉強したもう一つの点は、目標に対して、どうやって評価しましょうかというのでこの評価の欄を考えてみたんですけども、実験ですので、出てくるものはレポートしかありません。それから、出席回数を数えるという、その2つの項目しかないの、そのように欲張っていっぱい挙げた目標をどうやって評価しようかというのが、実は問題だなというのがわかりました。

ですので、願わくは、勉強した、例えば、昨日の講義では精神運動的領域の中に技能という達成目標が入ってたんですけども、どうもお話を聞くと、それは、プレゼンテーションのような技能を指すらしいんですけども、我々理系の教官としては、ぜひ作文技術ですとか、あるいはそういう技術そのものを、技術表現の中に盛り込んで評価したいというものであります。現場サイドの声ということで。

というので、大体がこれが物理学グループのお話です。

それから、済みません。お時間をちょっといただいて、先ほどの物理学実験のグループコンテンツの方の紹介をちょっと簡単にさせていただきます。

まだ、制作途中ですので正式にWebにアップロードをしてないんですけども、現在こういったものをつくっております。これは、今後のシラバスの動き、使い方にも大きく関係するところだろうと思います。

今ちょっと見ていただいているのは何だというと、我々物理学の予習用のコンテンツとしてつくるところです。例えば、オシロスコープのような波形観測という実験がありますよということ、ここを大体、今4分ぐらいのファイルなんですけども、これを学生に見させて、本当は音声あるんですが、今日はカットしてます。これを、学生が見て、実験の予習を自宅ですてくるように、あるいは自宅ですてほしいという使い方をしようという考えでございます。すると、シラバスのこの項目に、リンクの項目

に、例えば、この実験項目が予習というような意味にかかわると、ただ、ここにストレートに飛ぶよというような使い方がひとつはあるだろうなという気がしました。展開が見えました。

そうなってくると、シラバスの作り方っていうのは、もっとダイナミックにかわるんだらうなというので、WBTとシラバスが絡んだときに一体シラバスってどんな使い方がいいんだらう、あるいはどんなふうに使おうとおもしろいんだらうというようなことも、私、個人的にもおもしろいなと思ったんです。以上です。

司会（岩部） どうもありがとうございました。授業評価のところ、レポートと出席というのが50%、50%になっておったけども、出席というのは、単なる講義に出てきて座っているのとは全然意味合いが違うんですね、実験の場合というのは。

大島（工学） はい、違います。

司会（岩部） だから、そこ辺の評価っていうのを、単に出席50%というのは、ちょっと何か意味合いが違うかなという、個人的に思ったんですが。

大島（工学） 評価が違うというのはどういう。

司会（岩部） だから、普通にその講義に出ただけで50%の評価の割合を与えてるというのと、この実験に出てきて50%というのは随分違うわけですね。

大島（工学） これは、どういう意味合いかということ、評価の最低基準として、出席を最低5回というのを課してますので、それに対する評価点を与えている。これを意味するところは、レポート点と、それから、出席点です。例えば、50、50で割り振ってるということはフィフティ・フィフティですよという、非常に甘いつけ方ですね。裏をかえしてしまえば、これは、底上げですよ。もう出席にちゃんとあれば、50点も自動的に、さらにレポートで評価が乗れば、成績が上がりますよというような、そういう見方もできるわけです。実は、そういうつもりじゃないんです。つもりじゃないんですけども、ここは何%で割り振るかというのは議論の余地があるとこだと思うんですが、ここで私は表現したかったのは、むしろこの2つしかないんだよ。この2つにどうやって、こういうさまざまな項目を盛り込んだらいいですかということが問題として見えてきましたということをお伝えしたいです。

滝部（人文） 先ほどのお話なんかで、JABEEに引がかかるという点はどうするんですか。出席点は全部JABEEに引がかかると言われたんですけど、だから、今、岩部先生が言ったのは、物理学実験における出席というのは全然違って、例えば、別の項目で出席ではなくて、今実習とか何かそういうのに値するように項目をつくらないと、JABEEに引がかかるんじゃないかという感じもするんです。

大島（工学） その点に関しては、今日ちょっと初めて私聞いたので、明快な答え持ち合わせてはいないんですけども。

大学教育センター（植村） JABEEとの関連ということでは、出席権を与えたからJABEEそのものに引がかかるということではないと思います。そこで、ここでの問題は、要するに実験ですので、例えば、実習、演習とかという項目に、例えば実質的な出席という評価の部分を角度からできないかということです。つまり、実験に参加しているという、あるいは体験していると、そういうところで点数を出しているんだよという考え方はできないかということです。

だから、ここの項目の立て方が悪いのかもしれませんが、そういうことです。

それから、JABEEだけじゃないんですけども、一つの問題は、講義型の授業の場合は、その出席点というのはやっぱり問題があるというのは、出てるだけで点数をあげるというのは、これはちょっと筋が通らないだろうと。JABEEとの関係で問われるのはそこだと思います。例えば、こういう実習をしたりするような授業は出てるだけでも意味があるので、点数をあげても構わないんですけども、普

通の講義に出てましたということと、何か達成をしたということとの間に、相関がなかなか見出せないだろうと。例えば、それでいうと、関心とかというものも資料に上がるんですけども、J A B E E の考え方、これから先の達成評価の考え方からいきますと、授業管理をして、出席管理するのは当たり前であって、授業に出てきているから関心が高いという言い方はできないだろうということまで来ているので、できる限り、その出席の加点をするという場合には、何で加点しているんだということを、ちゃんとここで説明できるような形にしないときついということです。

J A B E E そのものが出席点を禁止しているというわけじゃありませんが、出席点はJ A B E E のやり方で問われますと非常に説明がしにくい点数であるわけです。この場合も多分そうで、それだったら実験に関する参加点、そのような形で、その他の項目でもいいですし、演習という、演習といたらちょっとまずいですね。演習、実習とか配点とか、そういうようなものをやらなければ多分いけないだろうと思いますけども、そういう項目で点数を出された方が筋が通りやすいというのはわかりやすい。

ただ、ここには設定項目がありますのは、実は、本来的には私たちは消しただけですね。消しただけですと、現状としてこれを消しますと成り立たない授業というのはたくさんあるんですよ。だから、出ているだけです。そういうわけであって、本来の単純な出席で加点しているんでないものは別の項目でできるだけ書いていただきたいというのは、我々の主旨、その方が説明しやすいということです。

滝部（人文） やっぱり、今のはやっぱり実習かなんかに。

大学教育センター（植村） そうですね。だから、演習というところの項目をもう少しふやして、実習とかもあそこにも書けるようにする。

ただ、参加点というのはいいんですよ。例えば、こう議論をしていて、話を聞いていて、そこで一緒にやりましょうと。ただし、参加度をどうやったんだという問題があります。全員が、だから参加しているわけじゃなくて、寝てると参加してないわけですから、そういうことも含めて、どうやったかという問題があるんですけども、参加点というの結構です。

Dグループ ワークショップ活動報告

Dグループ：増山、南、三好、小柳、大崎、西藤、大島、荻原（名簿順）

・報告

講義を参考に、各自、自分の授業のシラバス作成に取り組んだ。その中で疑問、問題点について提起され、議論を行ったが良い結論は得られなかった。それらを以下に列挙する。

- ・目標の関心・意欲の「関心を持つ」をどのように評価、チェックするか？他の目標についても同様であるが、拳証を具体的にどのように行うべきか難しいものがあり、目標に挙げにくい項目がある。
- ・工学部の授業では思考・判断に該当する項目はないのではないかと（例題、応用問題を解かせるものは思考・判断にはならないとの説明があったので）結局、全て理解・知識に入るのか？
- ・技術レポート（ある書式で分かり易く科学的に）を書く技術は、技能・表現に入れても良いのではないかと？
- ・各目標にメッセージを入れたいが、拳証が難しく入れにくい。メッセージをどう使ったらよいか？
- ・専門外（他学部など）の学生向けの概論などについては、深い理解などの多くのことは望めないで、到達目標が書きにくい。
- ・前回履修したが単位を取得できず、再履修する学生の出席をどう評価するか？前回の出席の実績で代用できる（再履修では出席しなくても良い）のではないかと意見が出された。
- ・実験などでおかしなデータが出て、なぜそうなったかを考えさせるには、どのような目標、拳証を準備すればよいか？

最後の報告会で上記の「メッセージをどう伝えるか」という問題も含めて、どのように拳証を行うかが難しい、との提案をした。講師からは「どのようなものでも拳証できないものはないだろう、何らかの形で評価できるはず」とのコメントを戴いたが、具体性が無くよく分からなかった。やはり、目標に対する拳証が求められる以上、どのような方法を用いればどのような目標に対する拳証が得られるのか、大学教育センターでスタンダードを作っていただきたいとの意見が当グループでは度々出された。

各研修などを通して大学教育センターには有益な情報が多数集まっているはずなので、これらの資産を無駄にせず、分か

り易く整理して教官全員に提示していただきたいと思います。貴重な時間を使って研修に参加した我々も、研修で得られたデータが無駄にならず、有効に利用されることを願っています。

司会（岩部） ちょうどお昼になりましたけど、あと1つやっていただいて、午前の部を終わりにしたいと思いますので、Eグループの先生、よろしくお願いします。

山本（工学） 工学部応用科学の山本です。我々の部会は、科学部会と、それから、地球科学部会の2つが一つのセッションをやります。

あれだけ派手な後にやるとシンプルなのが非常に際立つんですけども、シンプリファイしました。単純化して、学生によく伝わるか、そこに着目してます。

系列	自然科学	分野	化学	科目類型	総説	
開設科目名	化学		単位数	2単位	担当教官	山本豪紀
開設期	1年生	後期	開設時限	水曜日1・2時限(夜間)	授業区分	講義
対象学生	工(夜)		備考			
授業の概要						
本授業では、有機化学を取り扱う。理系学生として最低限必要な有機化学の基礎である炭化水素、芳香族化合物、ハロゲン化合物、アルコール、アルデヒド、ケトン、カルボン酸、アミン等の構造と性質、およびそれらの反応について説明する。また、有機化合物の反応における基本的な原理・法則についても説明するとともに、有機化学における最新の研究も解説する。さらに生命科学から材料科学の広範囲にわたって利用される有機化合物について、工学系各分野における実例を紹介する。						
検索キーワード	有機化学					
授業の一般目標						
(1) 理系学生として最低限必要な有機化学の基礎的な事項について理解するとともに、一般的な有機化合物の構造、性質、反応について知る。						
(2) 有機化合物について関心をもち、工学の中での有機化合物の役割を積極的に理解しようとする態度を養う。						
授業の到達目標						
	知識・理解の観点	1. 有機化合物を分類することができる。2. 分類された有機化合物の一般的な性質を説明できる。3. 基本的な原理や法則と化合物の反応と関係づけることができる。				
	思考・判断の観点	1. 有機化合物の性質について系統立てることができる。2. 工学系分野で利用される有機化合物の役割や意義を説明することができる。				
	関心・意欲の観点	有機化学と身の回りの有機化合物に関心をもつことができる				
	態度・価値観の観点	1. 有機化合物の危険性や安全性を理解する。 2. 材料としての有機化合物の開発に理解を示す。				
	技能・表現の観点	1. 有機化合物の性質をデータベースから調べることができる。 2. 基本的な有機化合物の構造と立体を図示できる。				
	その他の観点					
授業計画(全体)						
授業計画(授業単位)						
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録		
第1回		【項目】オリエンテーション 【内容】授業の目標と進め方、講義の概要、成績評価の方法の説明	配布資料(第1回)をダウンロードして読んでおくこと	第1回配布資料		
第2回目		【項目】有機化学とは 【内容】有機化学の学問的位置づけ、有機化学で取り扱う領域について解説する				
第3回目		【項目】工系分野における有機化合物1 【内容】機械系、建築系分野における有機化合物の関わりについて解説する	配布資料(第2回)をダウンロードして読んで	第2回配布資料		

			おくこと	
第 4 回目		【項目】工系分野における有機化合物 2 【内容】電気電子系, 情報系における有機化合物のかかわりについて解説する	配布資料(第 3 回)をダウンロードして読んでおくこと	第 3 回配布資料
第 5 回目		【項目】有機化合物の形 【内容】炭素の原子軌道, 混成軌道, 軌道と有機化合物の形について解説する	配布資料(第 4 回)をダウンロードして読んでおくこと	第 4 回配布資料
第 6 回目		【項目】炭化水素 【内容】炭化水素の命名, 性質について解説する	配布資料(第 5 回)をダウンロードして読んでおくこと	第 5 回配布資料
第 7 回目		【項目】ハロゲン化合物 【内容】ハロゲン化合物の命名, 性質と基本的な反応について解説する	配布資料(第 6 回)をダウンロードして読んでおくこと	第 6 回配布資料
第 8 回目		【項目】中間試験 【内容】		
第 9 回目		【項目】アルコール 【内容】アルコールの命名, 性質と基本的な反応について解説する	配布資料(第 7 回)をダウンロードして読んでおくこと	第 7 回配布資料
第 10 回目		【項目】アルデヒド, ケトン 【内容】アルデヒドとケトンの命名, 性質と基本的な反応について解説する	配布資料(第 8 回)をダウンロードして読んでおくこと	第 8 回配布資料
第 11 回目		【項目】カルボン酸とその誘導体 【内容】カルボン酸とその誘導体の命名, 性質と基本的な反応について解説する	配布資料(第 9 回)をダウンロードして読んでおくこと	第 9 回配布資料
第 12 回目		【項目】アミン 【内容】アミンとその誘導体の命名, 性質と基本的な反応について解説する	配布資料(第 10 回)をダウンロードして読んでおくこと	第 10 回配布資料
第 13 回目		【項目】演習 1 【内容】自専門分野と有機化学とのかかわりについて, グループディスカッションを行う		
第 14 回目		【項目】演習 2 【内容】環境問題と有機化学とのかかわりについて, グループディスカッションを行う		
第 15 回		【項目】定期試験 【内容】		

成績評価方法(総合)

成績評価方法(観点別)

到達目標等	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)							60%	
小テスト・授業内レポート							20%	
宿題・授業外レポート							10%	
授業態度・授業への参加度							10%	
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品								
演習								
出席							欠格事項	
その他()								
合計							100%	80%

関連科目	
教科書	大学生の有機化学,大野惇吉,三共出版,2002年
参考書	
メッセージ	今ではたくさんの有用な情報がインターネット上にあります。講義に関連する多くの情報もインターネット上にありますので、それを上手に利用してください。
連絡先・オフィスアワー	電話 9262, オフィスアワー 17:00~18:00

この講義は、共通教育の化学 という講義なんですけども、これは、工学部の夜間生の学生を相手にしています。したがって、受講者は科学をメジャーにしない学生です。そこが、一般の科学の講義とは違っていますから、その部分がちょっと目標とか、それから、評価方法に差が出てます。

あんまりしゃべっていると、お腹すいて倒れそうなので単純にいきます。

まず、一般目標なんですけども、これが、理系学生として最低限必要な有機化学の基礎的な項目について理解して知るといこと。2番目は、特徴的な部分になりますけども、共役の中に有機化合物の役割を積極的に理解しようとする態度を養うと。これは、共役といえども、有機化合物たくさん働いてまして、そういうものに対して、自分が積極的にそれがどういうものであるか、それに対して認知力とか理解力とか、そういうものを身につけると。興味を引くというところが大きくありますから、そこをまず大きな目標として挙げてます。

到達目標なんですけども、知識、理解の点は、一般的に有機化合物の分類ができるとか、あるいは分類した化合物の性質がわかるとか、反応がわかるとか、そういう一般的な内容なんですけども、思考、判断の観点からしますと、一般講義において思考、判断をどこに目標に置くかというのは非常に難しかったんですけども、私、このシラバスの中では、有機化合物がたくさんありますから、それを系統立てることができる。そこに、思考力、あるいは判断力というのをもってきました。

それから、もう一つは、工学系の各分野で利用されている化合物の役割や意義を説明することができる。これここでいいのかなという気はちょっとしたんです。関心・意欲のところでは、これは有機化合物、有機化学に対して積極的に取り組むことができるかどうかということが、もう半信の域になります。態度、価値観なんですけども、価値観、態度というところで、これはやはり問題になってます有機化合物の危険性、安全性を理解する。それから、いろんなところで、いろんな分野での人たちがいますから、己の分野に入ったときにどんな動きをしているかという、そういうものが、あるいはそこでどういう開発が行われているかという理解が審査になります。

技能、表現なんですけども、これ、有機化合物においては非常に重要で、実は化学構造式をかけないと話にならないので、化学構造式を書くというのは、非常に重要な技能になってきます。特に、3次元のものを、我々は2次元で使用しますから、その2次元のものをみて、それが3次元に起こせるどうか、あるいは3次元のものを2次元化できるかどうか。ある意味デザイン的な要素が出てきますから、これは、我々は無意識にやってますけども、こういうところできないと有機化学はできません。

講義の内容なんですけども、シラバスを蔑ろにするわけじゃありませんけども、私、この講義去年やりまして、今年も後期にあるんですけども、第1回のオリエンテーションのところで、もう一回再契約をします。そこで、これ単なるコピー・ペイストではなくって、どういうふうな講義の進め方をするか、概要と、それから、どういうふうに評価するかっていうのを、もう一度ここであえて明らかに告知をします。それから、すべての講義の資料をWeb上にアップロードしてます、PDFファイルとして。Web上にアップロードしたものを各自ダウンロードしてもらってます。余り準備すると、むだな紙がたくさんできますので、PDFファイルをダウンロードします。それから、そのときに、基本的には講義をパワーポイントを使ってやりますけども、これは、表記を配置させていただいている資料は大事など

ころだけ書いてますけども、私が配るパワーポイントには、大事なところだけ抜いてます。それは、そこで積極的に参加して書き込んでもらおうと。寝てると何があったかわかんないんです。何があったかわかんないんじゃない、あんまり無責任なので、何カ月後して、実はWeb上で自己学習システムという形でアップロードするんですけども、それはあんまり早い時期にやっちゃうと講義に来ないもんでやりませんけども、大事なところを抜いた資料を持たせません。ですから、授業外学習の方法というところが、ずっとそういうふうに進んでくるんですけども、第3回目と第4回目で、各分野において重要な部分を簡単に説明します。2回に分けますけども、第1回目で、工学系と、社建の学生を相手にしてるんですけども、それが、第4回目で、連携意識、あるいは情報系の中で有機化合物というのはどうなっているかということで、ここでもう一回動機づけをします。そして、あとはもう各論に行くんですけども、ずっと各論が進んでいって、中間試験が1回入ります。ページを送ってしまいましたけど、中間試験を1回やって、この辺で1回切ってあげないと、学生がもうオーバーフローしてしまうので、中間試験を切って、そのあと後半部分でもう少し各論をやって、最後に、13回目、14回目、約2回ほど演習を入れます。演習の目的は、これは学生に講義中に手を挙げてくれっていうても、なかなか手を挙げてくれません。ディスカッションできません。ですから、気の合う友達と勝手にしゃべってもらいます。ところが、こういうふうな会場の中で適当な人数で割り振って、その中でグループディスカッションしてもらおう。そうすると、学生なら結構しゃべれますから、そこあたり十分しゃべっていただいて、その議論の結果を、各自がレポートでまとめて提出もらおうという形を取ります。

プレゼンテーションをさせる先生がいらっしゃるんですけども、私はまだそのプレゼンテーションの評価方法、こういうふうにして採点するかとよくわかりませんから、昨日の約束で沖先生からいただけるはずなんですけども、それが来るまではプレゼンテーションをさせません。僕、評価できないものはやりません。

テーマは、一つは自分の専門と、それから有機化学のかかわりについて話してもらおうと、どういうふうになるか。もう一つ、2番目、これは結構おもしろいんで、好きなんですけども、環境問題に対し、学生がどう考えているか、以外と先生方知らないんです。これ環境と有機化学のかかわりについてであります。大体有機化合物って、環境問題が出てくると目のかたきにされますから、出題ももう決まっているので、あらかじめ言うんですけども、今の生活レベルを維持した中で、地球が汚れていくのをよしとするか、地球を汚すのに嫌だから、生活レベルを、例えば江戸時代のように戻すか、ほぼ二者選択です。もちろん学生の答え半々になります。ですから、学生たちで環境問題といっても、やっぱり地球を汚してもいいやという人が半分います。そういう結論で出てくることを見越してないんです、このグループディスカッションでやります。

評価なんですけども、基本的には中間試験、定期試験が60%です。これは、実際、去年こういうふうな評価しまして、今年も、それ確定いこうと思ってますけども、それが、小テスト、授業内レポートって、これは、授業の中でディスカッションしてもらっていることをレポートにしてもらおうと。ここで、思考力とか、あるいは関心、そこで自分がどういうふうな関与をしたかということが多分出てくると思うんです。

宿題、課題レポートは出てきませんでしたけども、宿題は、幾つか出さないととても無理なんで、それは10%あります。それから、授業での態度、参加度ということ、ここを私は10%つけてますけども、これは、一番最初のガイダンスのときに、講義中に手を挙げてくれた人には、この点を出しますと。手を挙げた回数をカウントします、これ小学生的なんですけども、これ結構効きます。大学院の講義では、10回以上発言しないと単位を出しませんって明言します。積極的に参加してもらおう一つのアプローチ方法だと思うんですけども、だれか、皆さんいい方法があったら、その方法に切りかえるんで

すけども、そういうことで、ここ10%なんです。

最後に、メッセージのところなんですけども、最近、インターネット等いろいろありますから、私のスタンスが、ある道具は使えというスタンスですから、インターネットを十分利用してくださいというのが最後のメッセージになっています。以上です。

司会(岩部) どうもありがとうございました。

小柳(工学) 資料をダウンロードするというお話でしたけども、これは、紙に印刷してもってくるんですか。

山本(工学) 印刷して持ってくる学生とパソコンの中にPDFファイルを取り込んで、そのまま見ている学生とかいます。

小柳(工学) そうすると、授業中、パソコンを開いて見ているんですか。

山本(工学) そういう学生もいます。で、大体見てます。授業中、パソコン開いてどっかネットで遊んでないかなと思って、私、今日ここでおとなしくしゃべってますけど、講義中、ぐるぐるぐるぐる回るんですけども、見てても、大体まじめに見てます。

小柳(工学) 印刷は、下宿で自分のプリンターを使って印刷するんですか。

山本(工学) 実は、そこが非常に問題なんですけども、学校のプリンターを使うか、自分で印刷してくださいと。私のところ、カラープリンターが繋がってないので、どうしても、困る人は来なさいと。そのかわり白黒しか出ません。一応そういう道はつくってあるんですけども、基本的には各自やってまいります。

小柳(工学) 配布資料を、そういうふうダウンロード、アップロードでダウンロードさせたいんですけど、そのインフラがどの程度あって、学生が、どういうふう利用しやすさの面はどうかと。

山本(工学) サーバーは、実は自前のマッキントッシュで、OS8でサーバーが出てるんですけども、あんまりそれで困ることはないです。ただし、一応学内専用という形でやってますから、そこがわかるところです。もっと、外からもアクセスできるようにしてくださいという話があるので、そういう人たちには、具体的には、私が使うのはYahoo、Exciteとかにあるサイトにこそっと隠しておいて、そこからとってってもらうと。もちろんオープンに出しちゃいますと、私がいろんなところからテキストするときコピー・ペーストしてきましたから、問題はありません。

ですから、そういうふうにして情報発信をします。それから、もう一つ携帯サイトも最近使ってます。Exciteの携帯サイトにホームページをつかって、必要な事項をそこから落とすという形にしてます。

大島(工学) プリントに関してですけども、現在、聞くところによると、カウント制で図書館のプリンターで学生が年間500枚とかまで打ち出せるようにしようという動きがあるようです。それが整えば。

山本(工学) 実は、吉田キャンパスはすごく環境がよいんですけども、宇部キャンパスはすごく環境が悪い。これ幸いにして、夜間生の1年生で、吉田のこと知りませんから。ただ、昼間の学生に同じようなことをやっているんですけども、そうすると、授業評価を受けたときに、やっぱり1割から5%ぐらいは配ってください。気持ちはわかるんですけども、やっぱり準備すると紙がむだになりますから、どうしても余分につくりますから、そこは、環境も考えてごめんなさいというふうな形で、第1回目に約束をします。

Eグループ ワークショップ活動報告

1. 参加者

澤井長雄(理・地球科学)、田中和広(理・地球科学)、大石勉(工・応化、生体高分子化学)、溝田忠人(工・機能材料、鉱物学)、川俣純(理・化学、固体物性化学)、青島均(理・自然情報科学、化学)、山本豪紀(工・応化、生物有機化学)、村上ひとみ(工・知能情報、防災システム)、計8名

2. 役割

司会：溝田、記録：青島、村上 発表：山本

3. 各自のシラバス紹介とコメント

3.1 化学系

山本： 化学、1年後期、夜間主、化学専攻でない学生むけの講義
有機化合物の分類、性質、反応の基本
有機化学の知識や理解が、今後の展開・目的・目標にどうつながるか？
動機付けにつながる、「この講義を受けるとどういうメリットがあるか、何の役に立つか」というようなフレーズを入れたらどうか。

大石： 化学(再履修用)、昼、2年前期
有機化学の面白さ、現代社会の中での重要性、炭素-水素結合の本質
危険性、安全性、環境共生型の材料開発への理解等
「暗記の学問でない」を、別の表現で説明できないか。

川俣： 化学、1年前期、知能情報の学生対象
無機化学、原子や分子の呈する性質の活用
原子の成り立ち、化学結合と物質の性質、酸・塩基の概念、化学平衡
「考察」という表現は、目標として漠然としているのではないか。
可のレベルを想定して記述されていると、学生からみて、魅力乏しく見えるきらいあり。

青島： 化学、1年？
原子の電子配置、分子、平衡、酸化還元、電池、反応速度、物理化学的法則、実験に必要な知識
試験50%、レポートとして、分野の英文を和訳させることを課す。
英語に訳して日本語に直すのは、評価の「表現」に相当するだろう。

溝田： 材料無機化学、必修、専門、機能材料2年
無機化学の基礎、水溶液系の物理化学的性質。酸・塩基・・・
水溶液の中で物質がどのような状態で存在するかを理解し、定量的に計算。
実験指導書がテキスト。実験と直接リンクする講義。定期試験で評価100%。
授業の一般目標にいろいろ記述されているが、成績評価のマトリックスに が付いていないのは、
不適当ではないか。 試験で思考・判断、関心・意欲などもみるので、その欄に丸をつけるとよい。

3.2 地球科学系

村上： 地球科学、2年前期、工学部。
3名の教官が共同で担当。岩石地質分野、土木地質・斜面災害、地震災害のリレー形式。
評価は、各教官が課すレポート等による。
科目名からイメージする、基本的な地学・地球科学よりも、環境や災害の視点が強いので、そのことがわかるような表現にした方がよい。
環境保全への関心・理解などは「態度・価値観の観点」等に入るのはないか。

澤井： 現代地球科学概説、1年前期、人文・教育学部
文系なので、高校で地学を全く勉強していない学生が対象。
地下資源の生成過程、地下構造など基礎事項。資源の有限性、枯渇の実態解説。
レポート(身近な地下資源について)発表会を3、4回実施(ひとり5分×70名くらい)。

田中： 土木地質学(専門科目)、2年後期、理学部
岩石・岩盤・堆積物の諸特性、地質プロセス。調査法、現地見学等。
具体的な目標設定。
到達目標がかなり高くて、一部大学院の授業のようだ。

実際、昨年はこれを満たすのは難しかった。今年は内容を絞りこむ事を考えている。

4. 発表

山本(化学、上記参照)

演習として、グループ(6から8名)に分けて自分野と有機化学との関わり、化学と環境問題((ディベート: 選択肢は、生活レベルを下げてでも良いから地球環境を守りたいか、生活レベルは維持して地球のことは仕方ない、生活も環境も維持するのに何をどうすれば良いか提案)について調べてディスカッション。レポート。質問回数をカウントして、点数化し、関心・意欲を評価。出席は欠格事項。70名。工学部夜間主全員。授業の資料pdfファイルをウェブに置いて公開。プリントを配ると労力も大変、余ったり捨てたり環境にもやさしくない。一方で、学生は工学部でほとんど大学のプリンタを利用できないので、プリント配布を希望する学生もいる。授業ではパワーポイントで説明(一部重要なところが配布資料ではブランクになっている)

パワーポイントばかりを写すと、学生が判ったような気になったり、ノートもまったくとらない場合もあるので、メディアを取り混ぜて活用するなど、工夫が要る。ノートの件は、配布資料の作成方法で一部対応。

5. 意見交換・感想・まとめ

到達目標と評価方法

- ・授業の到達目標を具体的に掲げるところが参考になった。到達目標を成績評価方法とのマトリックスで記載するのも新しい方法と感じる。
- ・実際の成績評価の手段・方法が今後の課題であり、今後の研修に期待する。
- ・しかし、「関心・意欲の観点」と、「態度・価値観の観点」の意味の違いがよくわからない。6つの観点は、数が多すぎるのではないか。マトリックスをあまり複合的に設定すると、採点時に混乱するし、学生への透明性・説明責任が果たせなくなる。

メディアや情報基盤の問題

- ・ウェブに補助資料を置く: 著作権の問題。インフラの整備。学生のプリンタ利用環境など、問題がある。(教官が多量の資料をコピーするなどの労力を省ける環境を整備してほしい。)
- ・黒板やホワイトボードばかりでなく、パワーポイントの活用が潮流であるが、学生が座って見ているだけ、わかったつもりにならないような、工夫が大切。
- ・その意味で、小テストなどにより段階的に学生の理解を確認しながら授業を進めるのも1つの考え方だと思う。
- ・教室の大きさや形状、学生数などを考慮した、教育方法が重要と考える。

授業計画の柔軟性

- ・授業の進行に伴って、学生の理解力や意欲が把握でき、それにしなやかになって教育方法も変わらざるを得ないことがある。固定した考えではなく、フレキシブルに対応する事も重要と考える。
- ・あまりにも詳細な内容を事前に提示してしまうとそれに縛られてしまい、その年々の学生の素養・関心などに応じて臨機応変に授業内容を改善する余地が無くなってしまふことが懸念される。

今後の研修

- ・教育の工夫、問題点を、共有するしくみとして、FD研修や、学部での研修会などが有効だろう。
- ・ピアレビューは是非やるべき。

司会(岩部) どうもありがとうございました。午前中はここまでにしたいと思います。

それで、それぞれのグループですばらしいシラバスができ上がってますので、このシラバスを、できればすべて提出していただいて、よいシラバスの例として、我々の活動に利用させていただきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。紙の媒体の方はちょっとそのまま提出していただいて、あとでこちらでコピーして学内便でそれぞれの先生方お返しいたします。それから、ファイルでお作りいただいた先生方には、ちょっとこの昼休みの時間にでもコピーしておいていただいて、提出いただけると幸いです。それぞれの部屋に大教センターの係のものがついておると思っておりますので、その先生の方に提出していただければと思います。よろしく願いいたします。

昼食にちょっと時間が食い込んでしまいました。1時にまたここに集合してください。

司会（岩部） それでは、1時になりまして、鐘が鳴っておりますので、残りのグループ発表2件よろしくお願いたします。

山本（農学） 農学部の山本です。Fですから、生物学のグループなんですけども、私、生物学を担当してないもんですから、ちょっと自分の講義、専門の講義についてお話をしたいと思います。

それで、農学部といえば、我々の生物資源環境科学科という学科と、それと、機能の学科と、獣医とがあるんですけども、多分先生方皆さん、大学におられたころは、農学部といえば女性の方が非常に少なかったと。僕らのときも1割ぐらいが女性なんですけれども、今多いときで大体6割です。平均して5割、半分ぐらい女性ということですね。うれしいとか何とかいいたくなんですけども、僕はまだ学生のとときに多かった方がうれしかったんですけども、そうやなくて、女性の方が多いということですね。片方はフィールドワークです。片方はもちろん基礎なり、講義になりますけど、どのような形でうまく位置づけをすればいいかということを私いつも考えてます。余りフィールド関係で泥臭いことやりますと、やっぱり女性の方、ちょっとやっぱりなかなかついていけない部分もなきにしもあらずなんで、酪農の方でもそうなんです。

系列	分野	科目類型			
開設科目名	植物生体計測学	単位数	2	担当教官	山本晴彦
開設期	2年生 後期	開設時限	水曜日 1・2時限	授業区分	講義
対象学生	生物資源環境科学科 2年	備考			
授業の概要					
本授業では、まず、植物の生育に大きな影響を及ぼす気象環境や土壌環境の計測法を概説する。次に、植物の生育状態、栄養や水分の状態、病害虫による被害の状況などを計測・診断する新しい手法を説明する。最後に、植物の計測・診断手法から構築される生育予測モデルを説明する。					
検索キーワード	植物、計測、診断				
授業の一般目標					
(1) 気象環境や土壌環境の計測法の原理を理解する。(2) 植物の生育状態、栄養や水分の状態、病害虫による被害の状況などを計測・診断する新しい手法を理解する。(3) 植物の計測・診断手法から構築された生育予測モデルを理解する。					
授業の到達目標					
知識・理解の観点	1. 気象環境や土壌環境の計測法の原理を説明できる。 2. 植物の計測・診断手法の原理、生育予測モデルを説明できる。				
思考・判断の観点	1. 計測手法の改良や新しい計測手法を思考できる。				
関心・意欲の観点	1. 植物の計測・診断手法の問題点を討議できる。				
態度・価値観の観点	1. 農業生産現場における作物の計測・診断手法の問題点を感じる。				
技能・表現の観点					
その他の観点					
授業計画(全体)					
授業は、植物の計測・診断に関して様々な原理を解説し、その利用法について理解させる。新しい計測・診断法を解説するので、十分な予習と復習が必要である。このために、授業中に12回、小テストを実施し、総合評価に加点すると同時に、受講生の学習の進捗状況をチェックする。					
授業計画(授業単位)					
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録	
第1回	10月1日	【項目】オリエンテーション 【内容】担当教員の紹介、授業の目標と進め方、シラバス説明、成績評価の方法、緒言	シラバスを読んでおくこと	配布資料1	
第2回目	10月8日	【項目】気象環境1 【内容】小テスト1、気象環境の計測法(1)について学ぶ	配布資料1を読んでおくこと	配布資料2	
第3回目	10月15日	【項目】気象環境2 【内容】小テスト2、気象環境の計測法(2)について学ぶ、前回の小テストの	配布資料2を読んでおくこと	配布資料3	

		解説		
第4回目	10月22日	【項目】植物生育の1 【内容】小テスト3、植物の生育状況の計測と診断(1)について学ぶ、前回の小テストの解説	配布資料3を読んでおくこと	配布資料4
第5回目	10月29日	【項目】植物生育2 【内容】小テスト4、植物の生育状況の計測と診断(2)について学ぶ、前回の小テストの解説	配布資料4を読んでおくこと	配布資料5
第6回目	11月5日	【項目】植物栄養状態 【内容】小テスト5、植物の栄養状態の計測と診断)について学ぶ、前回の小テストの解説	配布資料5を読んでおくこと	配布資料6
第7回目	11月12日	【項目】まとめ(1~6) 【内容】小テスト6、講義1~6についてまとめを行う、前回の小テストの解説	配布資料6を読んでおくこと	配布資料1~6
第8回目	11月19日	【項目】非接触・非破壊 【内容】光学的計測による植物状態の非接触・非破壊的診断について学ぶ、前回の小テストの解説	参考資料を読んでおくこと	配布資料7
第9回目	11月26日	【項目】光合成機能 【内容】小テスト7、植物の光合成機能の計測と診断について学ぶ、前回の小テストの解説	配布資料7を読んでおくこと	配布資料8
第10回目	12月3日	【項目】蒸散機能・水分ストレス 【内容】小テスト8、植物の蒸散機能・水分ストレスの計測と診断について学ぶ、前回の小テストの解説	配布資料8を読んでおくこと	配布資料9
第11回目	12月10日	【項目】体内水分・転流, 土壌水分 【内容】小テスト9、植物の体内水分・転流, 土壌水分の計測について学ぶ、前回の小テストの解説	配布資料9を読んでおくこと	配布資料10
第12回目	12月17日	【項目】太陽エネルギー収支 【内容】小テスト10、植物の太陽エネルギー収支について学ぶ、前回の小テストの解説	配布資料10を読んでおくこと	配布資料11
第13回目	1月7日	【項目】生長予測モデル 【内容】小テスト11、植物の生長予測モデルについて学ぶ、前回の小テストの解説	配布資料11を読んでおくこと	配布資料12
第14回目	1月14日	【項目】まとめ(8~12)) 【内容】小テスト12、前回の小テストの解説	配布資料12を読んでおくこと	配布資料7~12
第15回目	1月21日	【項目】期末試験 【内容】期末試験を実施する		

成績評価方法(総合)

授業の中で小テストを毎回実施する(合計50点満点)。期末試験を実施する(50点満点)。以上を下記の観点・割合で評価する。なお、出席が所定の回数(2/3)に満たない者には単位を与えない。

成績評価方法(観点別)

到達目標等	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)							50%	
小テスト・授業内レポート							50%	
宿題・授業外レポート							評価に加えず	
授業態度・授業への参加度							評価に加えず	
受講者の発表(プレゼン) ・授業内での制作作品							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							欠格条件	
その他()							評価に加えず	

合計							100%	80%
関連科目	環境植物学、環境植物学実験							
教科書	なし							
参考書	新しい耕地環境の計測法、養賢堂、2002年							
メッセージ	毎回の講義で実施する小テストは必ず受験すること。							
連絡先・オフィスアワー	yamaharu@yamaguchi-u.ac.jp 研究室：農学部3階333号室 水曜日11時～12時							

私は、ここに書いてありますよう植物性体系束縛ということで、植物を計測して診断しようということを行ってます。

それで、農学部に入るときに、受験科目に生物・化学が前期日程で、1つは大体とられるのは生物なんです。もう一つ何をとりうかなというときで、女性の方はほとんど物理は失礼ですけどとれないです。生物・化学なんです。

僕らの学問というのは、どちらかという計測ですから、物理学が必要です。物理学をいられて、大学に入られて、そしたら、テストを受けられて、農学部物理はもう悲惨な状況ですね。つまり、ほとんど物理の方が受験生いらっしやらないですから、全部身につけたとかいう人がおられました、私も実際に監督した結果ですね。

そうになると、物理をとろうかっていうて、次に入ってきて入門も大変ということで上へ上がってくるわけ。我々やっぱり計測する中で、物理で回路とか、例えば、熱集積とシュティファン・ボルツマンの法則なり、いろんなものがやっぱり物理学の数学的、そして、物理的な知識が必要なんですけども、なかなかそういうものを身につけなくて上に上がってくるから非常にづらいんです。

それで、そういいながら、自分の講義でこういう形の授業の内容ですけども、植物の生育に大きな影響を及ぼす気象環境と土壌環境の計測法について述べようと。そして、もうその生育の状態とか、そういう窒素のストレス、病害虫のストレスみたいなものを計測を診断しようと。新しい手法を説明する。最後に、そのモデリングについて話をしようという形なんですけども、どうしても出てくるのは数学、数式出てきます。数式出てきたらほとんどの人がちょっとどういうんですかね。本当に高校の数学例の話なんですけども、それがやはり専門もあるところにちょっと見てきたり、もうそこで3つぐらい引いてしまうということになるんです。特に女性の方はそういうのがひどいんですけども、ただ、やっぱり大事なものは、計測なり診断というものに対して物理的な数学的な素養というのは、非常に必要だということですね。私も、なかなか数学的な数式を余り使わないでできないかということですけども、ぼちぼちとやっています。

それで、そこで大事なものは、キーワードとして、植物、環境、気象、土壌計測診断モデルという、こういうものをキーワードに、3つ、今言ったような計測法、気象とか土壌環境の計測法を理解する。そして、それが植物を取り巻く環境、理解した上で、真ん中にある植物環境という、植物というものの生育状態というものを診断して計測しよう。そして、それをモデル化しようということを考えて、授業の達成目標ではこういうものを挙げてます。計測法の原理を説明できる。それとか、植物の診断とか計測の原理、そして、予測モデルを説明するというようなこと。で、考えようということで、それ以外に、新しい計測法、どのようなものが考えられるかということ、やはり授業の中で考えさせるということを考えてます。意欲として、関心とか意欲の観点からは、そういうものが、どのような問題点、もちろん我々はええことばかり言います。こういうことできるんだ、できるんだと。基本的に、計測法というのは非常にお金がかかります。ちょっとしたセンターでも500万、1,000万ぐらいかかるものたくさんあって、そんなもん実際に下の考え言ったら、農業生産現場で使えるわけがないようなものの中にはあります。そういうものを含めて、自分たちの中でやっぱり新しい計測法というものを、どのよう

な形で、それが実際の現場にフィードバックできるかというものまで考えさせるというものを授業で目標の達成としてます。

それなんですけども、一つ大事なものは、新しい計測とか診断法というものを解説しますから、今までの教科書では使い物にならないということで、十分な予習と復習というものをしてくださいよと。そして、かなり大事なことは、毎回小テストをします。こちら大学に来て7年ぐらいになるんですけども、始めしなかったんです。それで、2回ぐらいですか、テストをしたら、もうひどい結果です。これはいかんということで、毎回、朝15分、この講義は一こま目にありますから、8時40分に来て、15分のテストを受けん限り永久的に単位をとれないようなにしてみます。それがいいか悪いかってというのはいつも悩んでます。そういう形で、高校的な、要するに朝学みたいなものですか、そういうものをする必要があるのかということなんですけども、基本的な知識というものをやっぱり身につけるには、やっぱり15分ずつテストをして、そして、そのときの項目について授業をして、最後は、そのあと15分で前回のテストの解説をします。この繰り返しをするんです。まあ、毎回50人ぐらい受けてますけども、テストの採点も非常に×なあれですから、一つの50人を採点するにはやっぱり五、六十時間かかって、いつも新幹線の中で採点しています。そういう形ですること自体が、ほかの先生方からの批判を受けたんです。こういうものをするのが本当にいいんか。大学でいいんかと言われるんですけども、僕はそういう形で、すべてのものに対して、こういう小テストをして、授業、そして解説をするというものを繰り返してやっています。

それを12回、実際、シラバスでは15回って書いてありますけど、これうそです。12回です。12回やりまして、それで、最後にまとめをしてテストをするということで、やはり一発勝負とか2回勝負のテストよりも、やっぱり学力的には非常に高いと思います。自分が期待しているものを、学生が行っている結果です。それをいつも見ているんですけども、することによって、やはり大きな学習効果があると、自分で確認できるということがいいことと思います。

それで、その次に、最終的に定期テストと小テスト、小テストは全部で12回してますけども、これは50点満点、そして、期末テストが50点満点、この100点。それ以外は点数に足してません。それで、出席は だけつけてですけども、基本的に2回休むと0点、0点になりますからもうアウトです。だから、12回のうち10回でぎりぎりぐらいです。3回休むともう全く単位取れないですから、初めからそういうことを啓発してます。3回休んで取れたらあなたは非常にえらいですという形で言いますが、大体2回、ほとんど8割ぐらいの方が全部出席されるという形になります。

それで、そのときに問題なのは、いつも思うんですけども、配布用資料をどうしたらいいかということ。先ほどちょっとお話しましたが、結局、配布資料が1回で6枚ぐらい。要するに50人で300枚、それをするだけでも時間がかかります。初めはちょっとWebシラバスという形で載せてたんですけども、やはり著作権の問題等があるのと、それと、初めはパスワードを配布したんですけども、それも面倒くさいともういうので、いちいちそれをメディアセンターに登録しなさいと。そうすることで、初めのうちはWebシラバスにして、あとはパワーポイントでしてますけども、基本的にはやはりそういう形で、全部Webシラバス化する。

ただ、その中で問題なのは、そしたら、印刷どうするのという先ほど言われた問題。印刷はたしかメディアは一人200枚できると思うんですけども、ただ、まとめてみんな一斉に印刷してしもうたら、全然パンクしてしまいますという形なんで、基本的に、今も、この2年生もノートパソコンが必須化ですから、PDFのファイルで落としてもらって見てもらうということにして、とにかく紙を使わないで、紙を使わないということは、自分も印刷する時間、手間が省けるという、この2つのメリットを利用して位置づけをしています。

それで、あとやはり計測法というものは実験とリンクする必要があるんです。私も、環境植物は実験にしてるんですけども、実験をリンクしていく、実験が3年生の前期、授業が2年生の後期ですね。2年生の後期で、まあ何とか聞いてたけど、3年生の実験になって初めて、この必要性が気がついたということをよく言われます。基本的なものとしては、本来なら、片一方の授業と実験というものが平行的にあって、授業を聞きながら、それをどのような形で計測されているかというものをやっぱりリンクさせる必要が、本当はあるんだなということがいえます。

それと、教科書は一切使いません。参考書程度は、自分の書いた参考書を使っているんですけども、新しい何とかなの計測法っていうたって、2001年から2年もすれば古くなります。だから、買わずと詐欺になりますから買わないということで、本屋からクレームつきます。先生毎年100部ぐらい売れよったのに、全然売れんようになった。心配せんでもほかの先生は売ってくれるから大丈夫やて言うてんですけども、そういう形で、非常にやっぱりそういう計測技術の問題みたいなものを、やはりみんなに新しいものを紹介するんであれば、基本的にこういう教科書はものすごいんですね。基本的にWebみたいなものに載せて、どんどんどんどん新しく更新できるものにしていくという形にもっていくのがベターだと思います。

それで、やっぱり基本としては小テストを受けさせて、それで、授業に対する質問はメールで受け付けてます。ただ、メールすると、「先生、光合成についてわかりません」。こんなメール書いてあるの、それでマイナス10点ぐらいです。そんなもん、おまえ資料もいっぱいあるねん、それ光合成って入れてヒットさせたら何ぼ出てくるか、そういうものはだめです。光合成の測定法のチャンパー法についての問題点というものはどういうものですかといえ、丁寧に答えてあげますけども、具体的に質問をしてくださいということもいつも言うてます。

それで、一番大事なのはやはり大学に入ってから、専門の基礎専門のところですけども、基本的に大事なのは、やはり基礎的なものは、やはり知識として身につける必要はもう絶対あるんです。それがあつた上で、やっぱり悟了というものがあるから、やっぱり基本的な知識を身につけるのは、細かいけども、毎回そういうテストをするしかないのかなということ、自分はそういう信念でやってますけども、そういうものに対する批判というものもたさくあることは現実です。以上です。

Fグループ ワークショップ活動報告

本研修では、各参加者の担当する共通教育科目のシラバスを作成しながら、よりよい授業計画と成績評価法を考えるものであった。全部で7つのワークショップを通じて、各自のシラバスを作成しながら、班内で、意見を交わした。全体的に時間が足りずに、十分な議論が出来なかった感がある。以下に、Fグループでのワークショップの流れを報告する。

WS1. アイス・ブレイキング

我々Fグループは、生物部会に属する医学部、農学部、理学部の教官7名の班である。自己紹介後、司会者：渡辺省二（医）、報告者：山本晴彦（農）、記録者：竹松葉子（農）を選出した。

WS2, 3. 授業目標を考える

各自で、それぞれの担当科目の「一般目標」「到達目標」を作成した。時間の都合上2名がグループ内での発表を行った。そこでは、一般目標あるいは到達目標としてふさわしい表現方法とはどのようなものかという議論が行われた。特に、「到達目標」の5つの観点の明確な区別とはどのようなものか、また、それぞれの観点到適した表現方法（理解できる、考察できる、説明できると言った言い回し）とはどのようなものがあるかということに関する疑問点が多く出された。

WS4, 5. 授業計画と成績評価方法を考える

WS2, 3で作成した「一般目標」「到達目標」に照らし合わせながら、各自でそれぞれの授業計画及び成績評価方法を考え完成したシラバスをグループ内で発表した。「到達目標」が学生にとって到達可能な目標で書かれているか、また、評価が「到達目標」にリンクするかたちで示されているかという点に主に着目した。また、テストあるいはレポートなどでそれぞれの「到達目標」の評価を的確にすることができるかというのが論点であった。

WS7. グループ発表

7名のシラバス案の中から、報告者の山本先生が自身の専門科目「植物生体計測学」のシラバスを発表した。特に、毎時間レポートを課すという評価方法への是非について全体への疑問を投げかけた。

(記録者；竹松葉子)

司会(岩部) どうもありがとうございました。何が御質問等はありませんでしょうか。

それでは、次に最後のGグループの発表をお願いいたします。

笠谷(工学) 工学部の笠谷です。Gグループ6名ですけれど、シラバスは情報処理2名、電子回路1名、語学関係3名ということでバラエティーに飛んでいます。それで、今回御紹介するのはちょっと悩みましたので、情報処理と語学を代表してドイツ語ということで、2つをそれぞれ短時間で紹介させていただきます。

最初、情報処理の方紹介させていただきます。

情報処理の1年生に対してコンピューターリテラシーを教えるという授業です。工学部の機能材工学科1年生を対象に、私が昨年担当しました。それをもとに今回考えて書いてみました。

それで、授業の改善ですけれど、パーソナルコンピューターを用いて情報を円滑な処理する方法、コンピューターリテラシーを教えるということです。ノートパソコンを使わずにデスクトップを使っています。キーワードとして、リテラシーだけではなくて、最後にエクセルで物理実験のデータを解析するようなことをさせています。

系列 初期教育 分野 情報処理 科目類型

開設科目名	情報処理演習	単位数	2	担当教官	笠谷和男
開設期	前期	開設時限	木 5,6	授業区分	
対象学生	機能材料工学科1年	備考			
授業の概要					
本授業は、パーソナルコンピューターを用いて情報を読み・書き・処理する方法を教える。Windows2000システムを用いた実習を行う。					
検索キーワード	情報処理、パソコン、情報倫理、E-mail、インターネット、Word、Excel、実験データ解析、直線回帰、カーブフィッティング				
授業の一般目標					
パソコンで市販ソフトの基本操作ができる。文字入力、ワープロ文書作成ができる。山口大学におけるコンピュータシステムおよびネットワークシステムの概略と理解する。個人情報の管理方法、電子メールによる情報交換、インターネットWWWによる情報収集、表計算ソフトによる数値処理、初歩的な表・グラフ作成ができる。					
授業の到達目標					
×	知識・理解の観点	パソコンとメーカー・MS-Word・Excelの操作できる			
×	思考・判断の観点	Excelによる数値データの解析ができる			
×	関心・意欲の観点	課題に応じてパソコン及び基本ソフトを操作できる。			
×	態度・価値観の観点	ネットワークを使用するエチケットを実践できる。			
×	技能・表現の観点	Wordで文章が書け、Excelで表計算とグラフ表示ができる。E-mailで添付ファイルを送受できる。インターネットで情報収集できる。			
	その他の観点				
授業計画(全体)					
授業計画(授業単位)					
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録	
第1回		【項目】オリエンテーション 【内容】担当教官紹介、授業の目標と進め方、シラバス説明、成績評価の方法、情報倫理	シラバスを読んでおくこと。パスワードを考えておく。	配布資料1：予定表 配布資料2：諸注意	

第2 回目	【項目】パソコンの使用方法 【内容】パソコンの起動終了・パスワードの変更、タイピング	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 3
第3 回目	【項目】ワードパッドの使用方法 【内容】キーボード入力とテキストエディタの使用法、タイピング	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと。タイ ピングを練習して おくこと	配布資料 4
第4 回目	【項目】フロッピーディスク 【内容】フロッピーディスクの取り扱い とファイルの記録、バックアップとファ イル消去	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 5
第5 回目	【項目】電子メールソフトの利用法?1 【内容】電子メールの送信・受信、署名	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 6
第6 回目	【項目】電子メールソフトの利用法?2 【内容】添付ファイルの送信・受信、メ ールファイルの管理	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 7
第7 回目	【項目】インターネット 【内容】インターネット WWW の閲覧と 著作権	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 8
第8 回目	【項目】ワープロソフトの利用方法 【内容】日本語入力と Word の利用方法	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 9
第9 回目	【項目】日本語文書作成 【内容】Word による日本語文書作成、 保存、削除、書式設定	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 10
第10 回目	【項目】英語文書作成 【内容】Word による英語文書作成、ス ベルチェック	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと。Word によるレポート作 成「大学に入学し て思うこと」	配布資料 11
第11 回目	【項目】表計算ソフトの利用方法 【内容】Excel の利用方法、データ入力、 書式設定、保存、削除	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 12
第12 回目	【項目】表計算ソフトによる数値処理 【内容】Excel による、合計値・平均値の 計算、演算子の使用	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 13
第13 回目	【項目】グラフ作成 【内容】Excel による数値データのグラ フ作成と Word への貼り付け	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 14
第14 回目	【項目】グラフ作成と解析 【内容】Excel による実験データの直線 回帰、カーブフィッティングへの利用	教科書 pp.?-?を 読んでおくこと	配布資料 15
第15 回	【項目】試験 【内容】全内容についてパソコンを利用し た試験を行う		

成績評価方法(総合)

授業で作成したファイルはレポートとしてほぼ毎回 e-mail で提出する。授業外レポートを1回行う。最後にパソコンを利用した試験を実施する。以上を下記の観点・割合で評価する。尚、欠席が3回以上の者には単位を与えない。

成績評価方法(観点別)

到達目標等	知識・ 理解	思考・ 判断	関心・ 意欲	態度・ 価値観	技能・ 表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集 資料
成績評価方法								
試験							70%	
小テスト・授業内レポート							25%	
宿題・授業外レポート							5%	
授業態度・授業への参加度							評価に加えず	
受講者の発表(プレゼン) ・授業内での制作作品							評価に加えず	

演習							評価に加えず
出席							欠格条件
その他 ()							評価に加えず
合計							100%
関連科目	基礎セミナー、情報処理及び演習 (専門科目・2年後期)						
教科書	Web 情報処理テキスト						
参考書							
メッセージ							
連絡先・オフィスアワー							

目標ですけれど、パソコンでは市販ソフト、ここではワードとエクセルを考えてます。あと2期目が基礎的操作ができる。文字入力、ワープロ文書作成ができる。山口大学におけるコンピュータシステム及びネットワークシステムの概略を理解する。それから、個人方法の管理方法、電子メールによる情報検索、インターネット、Yahooによる情報収集、表計算ソフトによる数値処理、初歩的な表、グラフ作成ができるということを考えています。

目標ですけれど、一応全部考えています。まず、知識、理解ですが、ここでは、情報処理の演習に実際にパソコンを使うということですので、知識、理解なのか、技能なのかというのはちょっと悩んだんですけれど、パソコンとメールがあります。エクセルの操作ができるというのは、知識、理解のところに入れていきます。

パソコンはこんなふうに使ったら使えますよというふうですので、頭を使うのかという問題があるんですけど、一応データ解析をいろいろしてみなさいというところで考えてもらう問題はありますということです。あと関心、意欲では、毎回課題を出して、それエクセルなりワードなりでファイルをつくって提出させますので、それを操作できると。

態度、価値観ですけれど、コンピューターの情報倫理、エチケットですか、ここを授業で教えますので、それを実践できるということで目標に。

あと、これは、評価のところ、評価が難しいんですが、倫理を評価する。知見でこういうことをしているのか悪いのかということは問えますので、一応ここに出ています。あと技能、表現の観点のところ、こういうことができる、技術的なことができるということで入れていきます。

あと具体的に毎回やることですが、最初、オリエンテーションでいろいろ説明します。このときにシラバスの説明もやります。こういう資料を配ります。2回目から、もう本格的にパソコン使うんですけれど、何もパソコン使ったことがない、さわったことがないという初心者を前提にして授業をします。かなり使いこなせる人もいるんですけど、そういう人はちょっとつき合ってくださいというふうに伝えております。

パソコンの大本から始まって、体験、特にブラインドタッチができるまでいかないと文書入力遅くなりますので、時間は余りないんですけど、時間外の宿題として、タイピングを練習しておくことというのをに入れて、自分で責任持って、自分の将来に責任持ちなさいということで、練習をしてもらいます。あとフロッピーディスクを使えるようにする、メールを使えるようにする。メールの添付ファイルが送れるようになったところで、毎回メールの2回目に添付ファイルの送受信をやりませんが、ここで作成したファイルは、毎週メールの添付ファイルで送ると、提出をするというふうにさせます。

あとインターネットでデータを集め、いろいろ検索するというのをしています。ワードの使い方ですけど、日本語と英語が両方できるように。それから、エクセルですけど、一般的な使い方を教えた後、工学部ですので、物理の実験のデータを解析して、直線回帰するとか、カーブフィッティングするとかで、物理を求めるという課題を出すということを考えております。

次、評価なんですけれど、試験を最後にします。時間中に最後の15回目の試験をします。それから、小テストをします。これは小テストじゃなくて、授業内のことを、添付ファイルでメールをつけて、毎回作成したファイルということをやっています。

それから、あと授業外のレポートは1回だけですけども、MSワードが使えるようになったところで、文書を書きなさい。ここにワードでレポートを作成しなさい。大学に入学して思うことというのを毎年出しているんですけど、レポートのテーマを新たに書いてくるの非常にいいことだという意見いただいたんですけど、人文学部の方からこれ評価どのするのかと、中身がよかったら、素晴らしいこと書いていたら点をよくするのかっていうことの見解が出まして、私としては、これはコンピューターの授業ですから、ワードが使えるばもうそれでいいというレベルで、その中身を問わないということを学生に話しましたと、こういうふうに申し上げたんですけど、ちょっとそれは人文学部の先生方は、その中身を評価した方がいいというふうにおっしゃいました。試験について、ちょっとこういうふうに分けていますが、知識、理解と技術が主だということになります。

あと教科書が、渡辺先生のWebの情報処理テキストを使う予定ですが、昨年担当したときは、印刷した本を使ったもんですから、ちょっと手入れが、ページの指定とか、こういう指定をできていません。以上です。

次に、そしたら語学の方お願いします。

高木(人文) まさか番が回ってくるとは思ってませんでしたので、穴ぼこだらけなんですけれども、しかも5分で終わってくれということですから、語学というか、演習系の授業で書きにくい点というのをちょっと、むしろ言わせていただこうかなと思います。

ドイツ語の場合は、高校までやってきた人はほとんどいないので、スタート時点ではもうほぼ同じですから、そうすると非常にやりやすいんですけども、私が今持っている授業、来年持てるどうかわからないんですけども、同じ先生が週2回教えるというコースを設けて、そうしますと、2人の先生が、例えば、文法、読書担当部門と教えるよりは、もう1.5、6倍ぐらい効率がいいので、それでかなりのところまでもっていきます。それで、授業するのも、週2回ありますので楽しい授業です。一年間やりますと、初級は大体11月ぐらいで終えて、11月から12月、ゆっくりやっても12月までで終えて、そして、残りは中級的な読み物まで進むことができます。

私のクラスには、ドイツ語、英検に当たる独検、ドイツ語検定というのがあるんですが、去年は半数以上受けまして、それで、16名4級合格しました。だから、かなりの成果は挙げていると思うんですけども、多分ドイツ語担当者、ほかの方は発表しないんでわかりませんが、私のところが一番多かったと思います。

ドイツ語の場合、受講者を募りたいんで、こういうふうな選定もやって楽しいですよということを強調。そして、授業の一般目標なんですけど、これを本当いうと、これができなかつたら落とすちゃうぞというのでは、とても掲げられないところはないらしいく、これは、むしろもう最大限考慮も近いので、それをどういうふうにするかなというふうに、これからちょっと考えなきゃいけないと。それから、あと到達目標なんですけども、ドイツ語の場合は、もう基本的な語意ですね、それから文法事項、そういうのを押し込むことだけで、正直いって精いっぱいなので、学生のモチベーションを高めるために、ドイツを紹介したビデオなんかを見せませうけれども、いろんなできるだけ自分がドイツで行って体験したこととか、そういうことも話して、学生のモチベーションを高める。これを通じて、モチベーションと目的とが相互に転換すると思うんですけど、言語を通じてドイツ文化についての関心を深め、ドイツ文化について話すことによって、言語に関する関心が高まる。ただ、これが問題なのは、実際の試験、ペーパーテストで、こういう項目をチェックできるような、試験問題つくるのは非常に難しい。そこ辺

を問題だなというふうに思ってます。

それから、もっと態度、価値観の関係とかいうのでは、要するに異文化理解と、そういうところまで行きたいわけですが、残念ながら、1年間の授業で、そういう話をできるだけするにはしてはみすけれども、なかなか難しいとこあります。ましてや、評価に加えるのは難しいとこがある。

あとは、具体的な項目ですか、ここら辺をもうちょっとお話してもしようがない、まだできてないと。私は、自分のつくった教科書を使っていますけれども、全体13科で、1科について、文法的な問題と、それから読書とがあるように、どの科もそういうふうにしてます。それで、これまでのやってきた授業というのは、1科が済んだら、2科の話を進めながら、1科の文法の1ページと読書1ページをそれぞれレポートにして出してもらおう。ただし、授業の中で答え合わせをしますので、ちゃんとやってきたら、出席点というか3点くらいずつ入れて、そして、それをトータルして、それが60点になったら、そのレポート点というのは20点に換算する。そして、あとドイツ語の場合は、40点以上一遍に試験範囲を設定すると、もうほとんど落ちますので、中間試験と期末試験に分けて2回試験をして、それぞれ40点ずつ、そして、レポート点というか、出席して、宿題ちゃんとやってきたら、それを20点に換算するというふうな方法で。

もう5分をはるかに超えちゃいましたんで、この辺で。

Gグループ ワークショップ活動報告

榊原（工学部・社会建設工学科）

Gグループは、工学部4名、人文学部2名の教官で構成されました。担当の共通科目は、情報処理と語学・言語系科に大別されます。以下に2日間のグループ内での活動を報告いたします。

ワークショップ1（16日）

自己紹介を行い、以下のように分担を決定しました。

司会（リーダー）：榊原先生（工） 記録係：榊原（工） 報告者：笠谷先生（工）

ワークショップ2（16日）

担当科目の一般目標と到達目標を設定しました。到達目標を具体的な行動と関連付ける点に困難があったように感じます。各自が目標を設定した後に、教育学部の林先生をファシリテーターとして、グループ内で発表・議論を行いました。各教官がシラバスを作成した科目と、主な議論内容は以下の通りです。

榊原先生（工）

「電子回路」2年後期（専門科目）

- ・この科目を受講する上で前提とされる知識はいつ習得するのか？
- 前期の専門科目にて習得する。

榊原（工）

「情報処理演習」1年前期（共通教育科目）

- ・到達目標で、インターネットを介した情報検索を「関心・意欲」の項目に含めているが妥当か？
- 知識・理解に変える。

笠谷先生（工）

「情報処理演習」1年前期（共通教育科目）

- ・ネット（情報倫理）を伝える必要があるが、到達目標（行動として記述）としてどう記述すべきかが課題。

河中生先生（工）

「ドイツ語初級Ⅰ」（共通教育科目）

- ・概要と一般目標の関係（役割の違い）がわかりにくい（シラバスを書く側として、違いがつけづらい）。
- ・「態度・価値観の観点」の重要性（異文化の価値観の尊重、など）

高木先生（人文）

「中国語読解Ⅰ」（共通教育科目）

- ・リーダーの講義であり、会話はまた別
- ・一般目標：中国文化の本質を感じ取る、中国語新聞を読めるようになる。

霧岡先生（人文）

「言語学（日本語）」（共通教育科目）

- ・一般目標：「日本語はどんな言語か」という問いに簡単に答えられるようにする。

- ・他言語との比較ではなく、日本語そのものの特徴を伝える。

ワークショップ3（17日）

翌日のワークショップでは、シラバスの中で主として授業項目・評価方法について議論を行いました。以下は各教官のシラバスに関する議論は以下の通りです。

棚田先生

- ・知識（プロセス理解）と技能（計算力）の区分けは困難

神原

- ・態度・価値観（情報倫理）をどのように評価するのか ペーパー試験で？

笠谷先生

- ・レポート点は内容ではなくワード・エクセルの技術で評価
- ・内容に倫理的に反するものがあっても技術がよければ評価するのか？逆に内容がよいレポートであっても技術が稚拙であれば評価しないのか？

あくまで情報処理の手法習得で評価

河中先生

- ・関心・意欲（ドイツ語への関心）や態度・価値観（異文化への理解）を授業内で評価するのは非常に困難。
- ・授業外で評価してゆく。

高木先生

- ・蒋維喬の文書を読んでゆく。
- ・図書館利用法
- ・中国語の Yahoo の使い方
- ・JABEE は出席点を認めない。ただし欠格条件として使うことは構わない。

霧岡先生

- ・日本語の言語的特徴
- ・関心・意欲の評価？
- ・技能：日本語の技法 観点別評価にも適用可能

全体発表（17日）

全体発表では、笠谷先生の「情報処理演習」及び河中先生の「ドイツ語初級Ⅰ」のシラバスが発表されました。以下はその概要です。

「情報処理演習」

- ・デスクトップ使用
- ・到達目標 思考：エクセルによるデータ解析 技能：ワード、エクセル

「ドイツ語初級Ⅰ」

- ・現状の一般目標は最大限の内容であり、「可」の条件になっていない。
- ・到達目標に含まれている、関心意欲、態度価値観を評価するのは困難。

意見

初習外国語はかえって到達目標が書きやすいのでは。

司会（岩部） どうもありがとうございました。私も、たまたま外国語系のもんですから、ちょっと見せていただいたんですが、そっちの外国語というのは今までやってなかったことが、新しく学んでできるようになるという、劇的な変化ですので、割とその部分は書きやすいかなという気もするんですね。シラバスが、何か、簡単な手紙が書けるようになるとか、ドイツ語で自己紹介ができるとか、そういうふうな形で一つ一つ達成目標というのを書いていくことができそうな気がしました。感想です。



10 . ワークショップの記録(9月18 / 19日分)

司会(岩部) ワークショップの作業、どうもお疲れさまでした。いよいよこのFD研修も大詰めになりまして、あとこれから7つのグループに発表をやっていただきますけれども、ちょっと時間的に7つをすべて午前中に入れるのは無理かという状況です。5つを午前中に発表していただいて、最後の2つのグループは午後1時からに回すような状況になろうかと思います。

今のワークショップでそれぞれ先生方のシラバスを記入していただいたと思いますけれど、そのシラバスを提出していただきますようお願い申し上げます。この昼休みの時間に紙に記入された方は、その紙をそれぞれグループについている大教センターのファシリテータの方に提出してください。紙のものについては後日コピーした後で学内便でお返ししたいと思います。

それから、ファイルで提出いただける場合は、フロッピーかUSBのメモリーがございますので、これにコピーして提出していただくとありがたいと思います。フロッピーはUSBのドライブが用意してございますので、それを接続して恐らくお使いいただけるのではないかと思います。マッキントッシュも多分認識できそうですかね。多分無理かもしれませんが。

それじゃ、そういうことでよろしく願いいたします。それから、シラバスの記入用の書式ファイルを入れましたフロッピーディスク及びCD Rがお手元にございましたら、御返却いただきますようお願いいたします。昼休みで結構ですので、よろしく願いいたします。

それじゃ、最初にA班のプレゼンテーションお願いいたします。

井上(宇部フロンティア大学) よろしく願いいたします。私はA班の宇部フロンティア大学の井上と申します。今回のFD研修会のまとめということでシラバス作成の経過を中心ということで御報告いたします。

最初に、私どもフロンティア大学で対応してきたシラバスと今回研修を通じて作成いたしましたシラバスの経緯、それをグループ討議の内容を含めながら報告していくことにいたします。

私どもフロンティア大学の方で対応したシラバスというのは、内容がこのとおりです。授業科目名から始まりまして、教科書及び参考書という実にシンプルなシラバスでございまして、具体的にこのぐらいの内容でしかありませんでした。これがフロンティア大学のシラバスなんですが、非常にシンプルなものです。このシラバスをつくる中でどうもおかしいぞ、これだけで本当に学生に通じるんだろうかというような疑問は以前から感じておりました。今回、研修を通じて、昨日の講義までの中ででき上がったシラバスです。私は普段、フロンティア大学の方で社会福祉の実習を担当しております。この中の1コマ、社会福祉援助技術現場実習指導2というコマを今回作成いたしました。

系列	分野	科目類型		担当教官	
開設科目名	社会福祉援助技術現場 実習指導	単位数	2	白石 義彦、井上 浩	
開設期	3年生前・後期	開設時限		授業区分	演習
対象学生		備考			
授業の概要					
本科目は、「社会福祉援助技術現場実習」の事前・事後指導にあたる。通年科目であるが、前期は配属実習前の指導として、実習中のテーマ設定・ケース実習の説明を行う。その際、社会福祉援助技術論で学んだ技術を並行させながら、ソーシャルワークの学習を確認する作業も同時に行う。後期は、配属実習後の事後指導として、実習生各自が学習してきたテーマについての深化、取り上げてきたケースについての、スーパーヴィジョンを実施する。					
検索キーワード					
授業の一般目標					
(1) 社会福祉現場を知る					

- (2) 利用者の多面的理解を行う
- (3) 援助技術を習得する
- (4) 自己覚知を深める

授業の到達目標		
f Eレ	知識・理解の観点	1.社会福祉現場を規定している法律を確認する 2.援助技術を再構成する
f Eレ	思考・判断の観点	1.ソーシャルワーカーとして援助プロセスを記述する 2.クライアントと自身との価値観が違うことを説明する
f Eレ	関心・意欲の観点	1.自身がたてた実習テーマを教員と話し合う 2.スーパーヴィジョンに参加する
f Eレ	態度・価値観の観点	1.ソーシャルワーカーの倫理観や対人援助の価値観を感じる 2.ソーシャルワーカーの援助プロセスを模倣する
f Eレ	技能・表現の観点	1.実習内容を報告書にまとめる
	その他の観点	

授業計画(全体)

授業計画(授業単位)

回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録
第1回		【項目】実習の目的 【内容】社会福祉援助技術現場実習の目的と実習中の課題について説明する	体験実習の手引きを持参すること	配布物： 実習手引き 実習ノート
第2回目		【項目】テーマ実習について 【内容】テーマ実習の意義と目的について説明する	実習の手引きを持参すること	
第3回目		【項目】ケース実習について 【内容】1ケース実習の意義と目的について説明する。 2ソーシャルワーク援助についてそのプロセスを概説し、確認させる。	実習の手引きを持参すること	
第4回目		【項目】テーマ指導 【内容】担当教員と顔合わせを行う。		
第5回目		【項目】ケース指導(1) 【内容】事例を用いてアセスメントの視点を確認する		事例1
第6回目		【項目】ケース指導(2) 【内容】各自が作成したアセスメントの視点を発表する		
第7回目		【項目】ケース指導(3) 【内容】事例を用いてアセスメントの視点を確認する		事例2
第8回目		【項目】ケース指導(4) 【内容】各自が作成したアセスメントの視点を発表する		
第9回目		【項目】社会資源の活用法 【内容】社会資源の説明と、それらがどのように結びついているのかを説明する		
第10回目		【項目】実習先の学習 【内容】各自の実習先の概要や法的根拠などについて、レポートにまとめる		
第11回目		【項目】実習前の諸注意 【内容】服装や実習態度など、実習に関わる諸注意を行う		
第12回目		【項目】書くことによるスーパーヴィジョン 【内容】実習の振り返りを行う		
第13回目		【項目】スーパーヴィジョン(1) 【内容】テーマ学習の深化を指示する		
第14回目		【項目】スーパーヴィジョン(2) 【内容】事例を提出させ、ケース討議を行		

第 15 回	【項目】スーパーヴィジョン(3) 【内容】事例を提出させ、ケース討議を行う							
第 16 回	【項目】スーパーヴィジョン(4) 【内容】事例を提出させ、ケース討議を行う							
第 17 回	【項目】スーパーヴィジョン(5) 【内容】事例を提出させ、ケース討議を行う							
第 18 回	【項目】スーパーヴィジョン(6) 【内容】事例を提出させ、ケース討議を行う							
成績評価方法(総合)								
実習報告書を重視する。報告書にソーシャルワークの価値、知識、技術が盛り込まれているかどうかを評価基準とする。なお、ケース討議で事例提出者については、加点を行う。スーパーヴィジョンについては、2回欠席した時点で履修不可とする。								
成績評価方法(観点別)								
到達目標等	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)							実施せず	
小テスト・授業内レポート							20%	
宿題・授業外レポート							50%	
授業態度・授業への参加度							30%	
受講者の発表(プレゼン) ・授業内での制作作品							評価に加えない	
演習							評価に加えない	
出席							欠格条件あり	
その他()								
合計							100%	80%
関連科目	社会福祉援助技術論、社会福祉援助技術現場実習							
教科書	特になし							
参考書	社会福祉援助技術論で使用する教科書							
メッセージ	専門職養成のための実習であるため、社会福祉専門職に就こうとする者以外の履修は不可。なお、社会福祉援助技術現場実習が規定の時間数に達しない場合、本科目は自動的に未履修となる。							
連絡先・オフィスアワー	携帯アドレス： H.Inoue@n.vodapone.ne.jp オフィスアワー 水曜日5限、ただし空き時間であれば連絡を取った上で入室は可。							

授業の概要、それから授業の一般目標、それから到達目標ということで、ここまでが昨日の段階ででき上がったシラバスです。これを報告させていただいた中から、グループの中で技能、表現の観点、特にこの技能、表現の観点というところで、実習内容を報告書にまとめるという欄がございますけれども、この欄のところで情意的な領域、それから運動、精神領域のところをどう評価するのかという御意見をいただきました。それはこのシラバスだけではなくて、きのうからのJABEEの評価にもありましたけれども、情意的な領域、それから運動精神領域の部分をどういうふうに評価するのかという課題へと結局つながっていくものだと思います。こういう御意見をいただいた後で、授業の一般目標で掲げた目標というのが、報告書に盛り込まれているかどうかというのを評価の基準にしようというふうに思いました。

その一方で、一般目標で掲げた目標というのがこの4つあるわけですが、これをすべて報告書の中で網羅していなければ、じゃあ減点の対象にする必要があるのかというような疑問も同時に出てきました。ここまでがきのうの段階でつくられたもので、きょう午前中に最終的につくったもので

す。15回は実際にございませんでして、18回の授業回数をそれぞれ記述したもの、それから成績評価、それから個別の指針をいれてつくったわけです。この中でいただいた御意見というのはもっと評価基準というのを明確にするということです。

例えば、とある学生がいて、その学生は授業に対して貢献度が高かった、ほかの学生に比べると貢献度が高かった、そういう加点をする場合には、それを成績総合評価にきちんと明記をした方がいいのではないかと、それから評価の割合を明記、もっと明記しなさいという御意見をいただきました。ちょっと見にくいですが、この「なお」書きのところ、「なお」書き以降のところというのは、そういった御意見をいただいた後で修正したものです。網かけになってるんですけども、網かけが全く見えないですね。ここではこのケース討議というのを何回か行うわけですが、このケース討議でケースを実際に提出させた者については加点をする。それからケース討議をする中で、2回以上欠席した者というのは、その時点で履修不可というふうに明記をすることということになりました。

そういった御意見いただく中で、今回シラバスを完成させたわけですが、参考として2点ほど上げておきたいと思います。

1点目は、やはりシラバスというのはすごく重要なんだなということを再認識させていただきました。これをつくることで、例えば評価を明確にできる、それから学生にこれだけは伝えたいということとをしっかりと自分の中でも整理できましたし、それから対外的にも公表していくことができる、とても大切な作業だというふうに認識しました。

一方で、だれのためのシラバスなのかというのを感じました。JABEEのためのシラバスなのか、学生のためのシラバスなのか、ここまで書いていたらシラバスをつくるということにとられるシラバスになってしまいはしないだろうかという疑問もわいてきました。

部外者ですので、失礼な意見になったかもしれませんが、率直な感想ということで述べさせていただきます。以上です。ありがとうございました。

Aグループ ワークショップ活動報告

ワークショップ1(一日目 13:00~14:00くらい)

簡単な自己紹介を行うアイスブレイキングによって、今回のFD研修のワークショップはスタートした。Aグループは人文学部から2名、教育学部から6名、他大学から1名の参加による文系科目担当教官中心のグループである。当グループでは、グループ発表の代表報告者を宇部フロンティア大学から参加の教官にお願いした。山口大学のシラバスシステムに対し、他大学教官としての立場からの客観的かつ批判的な取り組みを軸として、ワークショップがより批判的に進行することを期待してのことである。

ワークショップ2・3(一日目 15:30~17:00くらい)

授業の一般目標と到達目標を考える。参加者の取り組みは真剣そのもので、静寂さが漂う中、前半の約45分が終了する。後半の約45分は発表と討議を行う。代表報告者のシラバス検討を中心に進行する。報告者は「社会福祉援助技術現場実習指導II」という授業科目のシラバスを作成した。多くの参加者にとって、馴染みのない性質の授業であるため、授業内容の確認に関する質問が多く発せられた。シラバスの記述法に関しては、まず授業内容と到達目標の項目の適合性に関する意見が出され議論がなされた。休憩中、フリートーク的な場面も見られ、Webシラバス整備の方向性が、JABEE等の外部評価機関への対応という点に傾倒しており、学生が本当に必要としている形での整備といった面が後進的なのではないだろうかといったことが話された。

ワークショップ4・5・7(二日目 8:50~11:10くらい)

授業計画と成績評価の方法を考える。前半の約1時間30分は各自が自分のシラバスを検討し、後半の約40分を討議にあてた。前日に引き続き代表報告者のシラバス検討を中心に議論を行った。一例を示す。報告者の授業内容は、現場実習を核として、この事前指導と事後指導で構成されている。従って、成績評価に際しては実習報告書を重視するという観点が発表の中で示された。この重視するという点について、その程度、方法について議論した。これは、実習を伴う教科共通の観点と考えられるが、ここでは、事後指導で行われる学生発表に、実習成果がつながってゆくことを根拠として、発表した学生には加点するような評価方法を採用することが一方法として有効であるとされた。この点の表示としては、成績評価方法(総合)に書き加えておけばよいなどの具体的方法が大学センター長から示された。

ワークショップ7(二日目 11:10?12:20, 13:00?13:20くらい)

各グループ発表と質疑応答である。Aグループからは、「シラバス作成の経過を中心に」と題した発表が行われた。二日間にわたる報告者の試行錯誤とグループでの議論の成果を盛り込んだ最終成果としてのシラバスが披露された。作業を

通しての全体的な感想として、シラバス作成の重要性については、評価を明確化することで、学生に伝えたいことを明確化することができるという利点が示される一方で、あまりにシラバスに比重を置くあまり、いったいこれは誰のためのシラバスなのか、本当に学生のためのものなのだろうか、JABEEのためのシラバスではないのか。シラバスを作るといふことのためのシラバスに陥ってしまう危険性もあるのではないのかといった意見も提示された。実際、ここで発表された「誰のためのシラバスなのか」といった疑問は、ワークショップの中で、あるいは休憩時間、懇親会などの様々な折に、繰り返し問いかげられた問題であった。この問いは、ある時は、シラバスの「この項目の設定意図は何なのだろう」といった具体的な疑問として、またあるときは、漠然と「このようなシラバス記述方法の目的は何なのだろう」といったように、様々な形を変えて私たちの前に出現してきた。もちろん、ワークショップに先立つ講義の中で、シラバスのフォーマットの細部における目的等の解説は大学センターから、それぞれ懇切丁寧になされていたのではあるが、我々の疑問は、そこで説明されたようなテクニカルな目的という意味ではなく、もっと究極的な意味での理念的な部分での目的に関するものであったように思う。この点について、もっと議論を深めることができれば良かったと思う。現在、現在の課題としてJABEE等の外部評価機関への対応が急務であることはよく分かるところであるし、現在進められているシラバス整備は、教師自身が授業を見直し、授業目的を明確化し、目的達成のための具体的な方策を講じる上で効果的であることも実感できた。それが、結果的に学生にとっても、授業内容や評価基準への理解を助ける効力があることも理解できる。しかしそれでもなお、学生にとって本当に役に立つ、学生を主眼に据えたシラバスの模索ということも、今後のシラバス整備に際して突き詰めて行きたい課題である。

今回のFD研修では、ワークショップを通して、自らの授業を様々な視点から検討できたことはもちろんのこと、研修全体を通して、日常的にはほとんど接する機会のない他学部教員と、シラバスを話題の出発点として、様々な内容についての率直な意見交換ができたことが何よりの成果であった。

司会（岩部） 今の発言について何か御質問等ございましたら、お受けしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

はい、それじゃちょっと時間もだんだん残り少なくなっておりますので、それじゃBグループの発表をお願いいたします。

櫻田（経済） 経済学部の櫻田と申します。よろしくお願いいいたします。私が発表することになったのは、ほんの1時間ぐらい前で、それで準備が十分できていません。私がつくったシラバスは、私の担当させていただく科目についてのシラバスなんですけど、これを皆さんの前で紹介させていただくということで発表にかえさせていただきたいなと思います。

私の担当科目は経済学部で経営学科に属しております、税務会計論、法人課税について学ぶ分野なんですけども、皆さんもここら辺のことあんまりわからないだろうなと、そういう意味で学生さんと同じぐらいな気持ちで見ただだるのかなと思います。

ここで出てくる感想とか疑問点ですね、学生さん、失礼ながら学生さんになってもらった気分で見ただだいて、質問等いただいてそれをフィードバックさせて来年の4月に間に合わせたいなという感じもしております。

それで、私のシラバスを説明させていただく前に、まず私の科目、担当させていただく科目についての特徴を何点か挙げさせていただきたいなと思います。3つほどあるんですけども、担当する講義の特殊性ということで、多くの講義は、大きなものは講義形式で一方的なものが多かったり、あるいは中には実技があったりとか、私の場合は特にそうなんですけども、計算問題解きまくるといような感じですね。私の講義は外部に存在します、例えば簿記の会計、簿記の検定試験、日商、日本商工会議所が行っております。あるいは全国の経理協会が行っています税務会計能力検定試験と、そのようなものに準拠していく講義を構成しております。まあデザインしてるわけですね。これが特徴があるところの1つ目です。

2つ目なんですけども、経済学部でこのように外部の検定試験をどんどん授業に入れて講義をデザインしていくという先生は、今ほとんどいないですね。私の立場は、経済学部の中でもマイノリティーでありまして、学生さんに検定をとってもらって、卒業するときに資格の欄に1行、2行増やしてあげたいなという気持ちで授業しております。

元来、大学の授業というのは、学生さんの頭というのは考えるために存在すると思っておりますので、計算を解くというだけに偏ることに對して私自身も危惧しております、でもそうは言いながら実際、役に立つことは何だろうという学生さんや先生方の要望も一部にあるわけなんです。ですから、私は問題を解かせる、資格を取ってもらおうということに傾注しますけれども、一方において学生さんの頭を訓練する先生方の存在も重要だと考えております。これが特徴の2つ目ですね。

3つ目なんですけども、経済学部では会計士コースをつくらうとしておりまして、少数のエリート、税理士ですね、税理士、会計士をつくらうというプランができ上がりつつあります。これは近似のこのような動きが各先生方、経済学部におかれましては各先生方の講義にも若干の意識改革を与えているのではないかと考えております。

例えば、名前を上げさせていただいて恐縮なんですけど、ミクロ経済学とか、寺地先生のところの担当の科目でも、例えば公務員の授業、公務員の問題を解かせるとか、そういうようなお話を聞きました。もっともそのミクロ経済学、経済学的なものの考え方を勉強するということが大切ですので、公務員の問題ばかり解いてればいいという問題ではないんですね。実際に使われているテキスト、市販のテキスト、あるいは会計学校とか簿記学校とか専門学校にあるテキストも我々の授業の中に入りつつあるという現状ですね。この点を指摘しておきたいと思えます。

それで、私の授業なんですけども、法人が納めなければならない法人税額の金額について算定してみようと、それは学生さんたちと一緒にやってみようということで、これを高度な次元で行うと、税理士科目の法人税法という科目になってくるわけなんですけども、そこまでのことを学生さんにやらせるとなると、非常に難しくなってしまうと授業も混乱してしましまして、悲壮感が漂いますので、私がターゲットにしているのは、専門学校の授業で税務会計能力検定試験というもの、法人税法の3級、4級あたりですね。

授業をやっていく中で、知識の理解とか思考判断の観点、このようなものをチェックしていくわけなんですけども、目標としているのが、簿記の知識を基礎にもってきて、その応用をやってもらうということですね。経済学部特に経営学科にありましては、勉強の基礎に簿記の知識があって、その上に応用の勉強が積み上がっていくということになっております。

思考判断の観点ということなんですけど、日常生活における課税関係について学生さんと見ていきたいなど、ちょっと歪曲した課税とか、そういうものもあるかもしれませんが、そういうものを学生さんと見ていく。関心意欲なんですけども、税理士、公認会計士等、職業会計士に対する興味関心が高まっている昨今において、税理士の仕事というのはどういうことなのかという、この部分について学生さんに入り口だけでもわかってもらえればいいなというようなことについて授業をデザインして見ております。

3番目、態度なんですけども、この税務会計を勉強することによって、簿記の学習、フィードバックさせてもらいたいと考えてるわけですね。

4番目、技能表現の観点ということなんですけども、私のこの講義のスケジュールですと、終了時点においては、税務会計能力検定試験の3級は合格できる水準にあるんじゃないかと考えております。

授業計画に移ってまいります。授業計画は、この講義は大きく2分されまして、税務会計検定試験の4級と3級の間となっております。前半の4級で後半が3級ということですね。講義中には質問を受けたいなど、講義を活性化させるということでイレギュラーに入ってくる質問を大切にしたいなど考えてます。逆に言うと講義が終わってからくる質問というのはうっとうしいだけで、ちょっとなるべく避けたいなと思ってるんですけどもね。なるべく講義中に質問を引き出せるようなそういう授業を自分で心がけたいなと思っております。

1コマ目ですけど、オリエンテーション等、これは今回の資料の中にあつたものを全部写させていただきました。私の講義の特徴なんですけども、毎回前の講義のチェックをかねて小テストを行うことにしております。そうしながら基本的には期末テストをやらないんですね、私は。期末テストをやるとテストを保存しとかなきゃならないのが大変ですし、あと何ていうんですかね、期末間際になってくると、学生さんがやってきて、この問題どうなの、ああなのていうふうに答えるの結構大変なんです。だからやらないです。毎回毎回小テスト、これの積み上げによって学生さんの成績を見てみよう、たった1回のテストで学生さんを評価するということがどうなのかという観点もございまして、このような積み上げによって学生さんを評価したいなと考えております。そうは言っても、そこそこボリュームのある試験を一度やっておきたいなと考えますので、8回目ぐらいですかね、こちらで一回中間テストを計画しております。

今申し上げた内容について、こちら辺に書いてるんですけども、ここでちょっと私なりの工夫なんですけども、出席をどう私たちがとらえるかということですね。学生さんは来てもらわなきゃいけないわけなんですけれども、ただ来てただけで寝てるという学生も多いわけなんです。私の場合ですと、毎回小さいテストを行うことによって、それを出席点にしたいと、だけど確認テストが零点をとった場合は、零点の出席点、つまり欠席したと同じことになるんですね。そうすると、必然的に学生の何ていうんですか、注意力もこちらに向くんじゃないかと考えております。ですから、このような部分で出席がチェックできるゆえに出席点をわざわざとる必要もないということで、欠課要件にしております。

評価割合なんですけども、毎回行う小テスト、それから中間テストですね、また場合によっては気分が向けば期末テストもやるんですけども、これが半分を占めると、授業への参加とか態度とかというのは、これは小テストにちゃんと参加することによって、これがある程度捕捉できるんじゃないか、とらえられるんじゃないかと思っております。

私の授業の特徴のもう一つなんですけども、検定の試験、資格に受かってる方をどう扱うかということなんですけども、これ表現上ちょっと無理があつたんで25%という言い方をしましたけども、検定に受かってる方ならほとんど単位を上げちゃってもいいかなという気分でおります。一種の優遇措置というわけなんですけども、私の授業を行う理念というかですね、卒業するときに履歴書を書いたときに、資格の欄にほかの人にはない1行、2行がついてる、これを重んじたいわけなんです。ですから、そのような学生さんたちに対しては、これ授業も出なくてもあなたは立派だから、この授業については理解できてるだろうからということで単位を上げる、最も最高の評価をしてあげるつもりではあります。

このような感じですけども、何か御質問等あればいただければ非常にうれしいなと思っております。以上で報告終わらせていただきます。

司会（岩部） 実際に資格試験を受験して合格される人はどれぐらいの割合でしょうか。

櫻田（経済） これは余り難しい試験じゃないんですね。そもそもどういう試験として存在しているのかということなんですけども、これは専門学校にいらっしゃる学生さんたちが、卒業するときに手ぶらで出すわけにいかないだろうということで、全国の経理協会がつくった試験なわけなんです。それに大学生が受けに行くという形になってます。

ですから、大学生の能力があれば、ちょっと語弊があるかもしれませんが、そこそこ受かるんじゃないかなと思っております。合格率は3級で50%いくんじゃないかと思っております。

司会（岩部） 実際に授業を受けている学生さんの中で、受けて資格を取ってくるという人がどれぐらい。

櫻田（経済） 私が担当してるのはゼミ生なんですが、受験会場が宇部にあるというデメリットがございまして、そういうことで全員が山口で受けられませんので、行くという意思を持った学生さん、これさらにその上に能力があるというところですかね、今のところうちのゼミ生1、2年生で11人、3年で12人いるんですけども、資格を持ったのは3人ですかね。このほど今月、来月ですか、来月の末にこれの試験がございまして、かなりの学生さんが受けると思います。20人ぐらいかたまりになって行くんじゃないかなと、これが始まったばかりでなかなかまだ。受験段階ですね。

司会（岩部） どうもありがとございました。他に質問がございましてか。

林（教育） どうも御苦労さまでした。教育の林です。先生にちょっと1点だけお尋ねしたいんですよね。

今、先生の国家試験を合格するというような一つのシステムでいくと、今、理工学部の研究であります、こういう理工学研究科で試験対策用のCDとか、自己学習とか、そういうのができてるのが間近になると思うんですが、そういうものができてきたときに、先生の授業とか、授業というものをどういうふうにお考えになるか、どんどんこれから学生が個人的に学習できるようになると思うんですが、そのときに先生が御担当されている科目をどのように将来的に考えるのか、先ほどちょっとエキスパートのお話が出ましたが、それをお聞かせください。

櫻田（経済） 会計士コースの場合を説明させていただきます。税理士を養成するためには私たち経済学部にいる人材じゃ対応できないということで、外部から大原簿記学校の先生方を招きまして、授業を担当していただくということになっております。簿記学校とか、専門学校で提供するサービスを我々ができるかといったらできないですね。そこにまた別の世界のエキスパートがいて、エキスパートをつくるためのエキスパートがおります。そういう外部の人材を利用するということになっております。テキスト、今御質問受けた中身、内容ですと、幾つか含みがあると思うんですけど、例えばテキストの扱いと私の講義の扱いであるとか、あるいはほかの学生さんが外部で勉強する、例えばeラーニングの話に拡張していくんだと思うんですけど、今のところまだeラーニングとかいうのはないんです。私たちは簿記学会という学会に属しているんですけども、その試みをされている先生方がおられて、私も興味は持ってるんですね。eラーニングになった場合には、インタラクティブな教育ということになりませんので、ちょっとそれをメインにもってくることはできないと思っております。あくまでも学生さんが補助としてWeb上にアクセスしていただいて補うというような形で使っていただくんだらいいのかなというような理解ですけども、そういうようなお答えでよろしいでしょうか。

大学教育センター（沖） すみません、沖ですけれど、つまらんことを聞くんですけど、75%が授業したことに對する評価があつて、試験を受けたらあと25%ありましたね。そうすると、今の数値的なことをおっしゃると、そうたくさん受けてないわけですから、最高授業だけで受けた場合には「良」までしかつかない可能性があるということですよ。

櫻田（経済） 今、厳密に指摘していただいて、これは表記上の限界が私の方であったと思っております、それを承知の上で今プレゼンさせていただいたんですけども、私、本当はもう検定を持ってたらそれで「優」を上げちゃおうかなと思ってるんですね、それをこのマトリクス上でどう表現するかをみたときに、25という数字を入れるしかなくて。どれについても私は評価する違ったチャンネルがあるんですよというようなことなんですね。

今、御質問いただいたとおり、25%だったら「良」じゃないかという厳密に額面どおりとらわれるとそのような質問が出てくるかと思うんですけど、すみません、これは表記上に私、限界にぶち当たりまして、このようになってしまいました。

よろしいでしょうかね。

司会（岩部） どうもありがとうございました。

それでは、次Cグループの発表者の人、お願いいたします。

寺田（徳山大学） いやいやちょっと恥ずかしいですけど、字も汚くて。パソコンもなくて、自分で書いたやつをお見せしながら、作業の中でいろいろと参加していただいた方々から見た意見を羅列的にといたしますか、まとまりがないんですけども、お話をして発表というふうにさせていただきたいと思います。若干、私の意見も強く入るかもしれませんが、その辺をひとつ御了解いただいて、すみません。

まず、私のシラバスの場合には、他大学ですのでちょっと皆さんと違うかもしれませんが、考え方がですね。一応、内容的には発達証明ということで、一応シラバスをつくっています。

それでは、まず出た意見としては、特にこの授業の概要のところですね、私の場合は授業が青年期までの発達、その生涯支援について説明すると、ちょっともう少し丁寧に書けばよかったのかもしれないですけども、なかなか専門用語を避けてこういう狭いスペースの中で授業の概要を説明しようとすると、非常につまらない文章になってしまうようなことですね。ですから、こういう専門用語を使わないで、何とかうまく表現するのを非常に苦労されたというようなお話がありました。

あと全体的なこととも関連するんですけども、そうすると中も、何ていうんですかね、ある程度、文章の形が決まってしまって、例えば社会科学系の分野だと、特定の例えばシラバスのマニュアルみたいなのがありましたですね。あそこの何とか丸々ていうところを何とか学に変えれば、あとはもう大体同じようなシラバスになるんじゃないかといったような意見が出てました。ですから、ちょっと難しいことを言うと、標準化すると非常に何ていうか、無機的なシラバスができてくるんじゃないかなといったような意見が出ましたね。

ちなみに先ほど宇部フロンティアの方のシラバスが出たんで、徳山大学のシラバスも非常に恥ずかしいんですけど、非常に標準化されてなくて、先生によってバラバラです。一応インターネットにはのっかってるんですけども、科目名と担当者と単位数、対象年次と、開講時期ですね。あとはもう先生によって授業の目的、授業の計画、その量的なバランスとか内容の書き方については非常に自由があるというか、逆に統制がとれてないというか、何ていうんですかね、管理する側にとっては非常に難しいですけども、だから私の場合には、少し年齢が若いせいもあるんですけど、こんなことをやりよる、こんなことやりよるって、結構知識偏向型で、ある意味ちょっと大変だなという印象を与えるわけですね。あと今日もう一人先生がいらっしゃって、細川先生という先生がやっぱり徳大から来ていらっしゃったんですけども、ちょっと読んでいただくとなかなか印象は難しいんですけども、年配の先生で非常にやさしいんですね。だから、何ていうかな、こういう先生の気持ちとか、学校に対する取り組み方とか、余り自由になると先生によって非常に個性が出てくると、それを讀んだ学生も大分受けとめ方が違うんだろうなといったようなことは感じましたね。非常にこれがいいというわけじゃなくて、そんなことをちょっと感じましたということです。

あと出た意見としては、このようなところの単位とか時間とか技能表現の観点について、私はとにかく書かないといけないのかなと思って一生懸命つくったんですけども、先生方によってはどちらかという、何ていうのかな、授業というか、社会の要求、学校として求められてる授業の内容というのは、どうしても知識、思考、こちらの方に重きを置かれているような気がする、さっきもそうですね。なかなかこういう態度とか価値観まで授業の中で立ち入ってもいいんだろうかといったような意見もあって、あえてこういうところは余り評価しないと、入れないというような意見もちょっとあったような気がします。

これはつくってる側には別に全部やらなきゃいけないということはないんでしょうから、それでいいんですけど、私の場合はこれを全部書かないといけないのかなと思って書いたんですけど、そんな意見がちょっと出ました。

次は、評価システムの方ですけども、先ほどちょっと徳山大学を出してましたけども、この辺は全くないわけで、この辺は非常に勉強させていただいて、これからつくらなきゃいけないのかなと思ったりもしていました。

ここでは、幾つか意見があって、やはり先ほどの目標と成績の評価との対応が非常にはっきりつくことができたということですね。今までは少しあいまいだったところが、こう評価するということを前提に考えると、目標が非常に明確になるんだと、授業のですね。そういった意見が出てましたですね。学生にとっても、何ていうんですかね、今までは最終的に成績を総合的に判断しますといった表現ではなくて、非常に細かくきちっと評価されるので、親切でわかりやすいんじゃないかといったような意見もありました。

逆に言うと、ちょっと成績が厳格になり過ぎるところがあるので、あいまいさもちょっと残らないかなと。あとはそうですね。これは私の印象かもしれませんが、実際に知識とか理解、思考判断は比較的、試験とか小テスト、で関心、態度意欲というのは、比較的レポートというような形が少し多かったかなと、その場合に今まで比較的レポートというのをどういう基準で採点したらいいんだろうかといったときに、こういった形で提示されることで、こういう知識ではなく、むしろこういうところに観点を置いてレポートをやるんだといったような、そういうことが非常に明確になったという意見が出ました。

あとは、この出席というのがあるんですが、この出席というのについては、皆さんなかなかこういういと抜け道、出席をとっていても実際に学生が出席してるかどうかというのはなかなか難しいわけですから、こういうのを成績表の中に入れるのは難しいかなといった意見があって、何かいい出席の方法があれば、こう意欲とか、そういったものをはかるものがあれば、といった意見も受けましたですね。

あと少しこれはテクニカルな問題だと思うんですけども、特に学生の数が多い授業では、なかなかレポートをつくっても、実際につくっている方に何をつくっているかわからないような張りつけでつくったものが出てきたりとかということですね。どうしてもこう試験による判断、この評価しかできないといったようなことが出てきたときに、この辺のところをどう評価するかというのは難しいというような話が少し出ておりました。

羅列的でばらばらだったんですけども、少し作業の流れの中でいろいろと生じた疑問について、あるいはよかった点についてちょっと感想を述べさせていただきました。

司会（岩部） はい、どうもありがとうございました。質問がございましたらよろしくお願ひします。よろしいでしょうか。

それでは、ちょっとあと2つ入れるのがぎりぎりぐらいになってまいりましたので、すぐにDグループの方の発表をお願いいたします。

森本（農学） 農学部の森本と申します。よろしくお願ひします。私どものグループは実際似通った領域だという話だったんですけども、ちょっと違うなということで、やっぱり同時に話ができるよというということで、実習を取り上げました。全員の方が実習を担当されているというので、実習に関して実際、いろいろなところを検討しましたが、シラバスを書くに当たって、あとでお話していきまんですけども、特に評価の部分ではかなりこのシラバスに書けないんじゃないかというような意見もありました。そういう問題点、特に私が選ばれたというのは、私の実習内容からすると一番問題が少ない

と、書きやすいということで、実際は他の先生方は、ここに書き切れないいろんな問題を抱えておられるというふうなのが現状です。

その中でも私自身もちょっと疑問に思うようなところというのはかなりあります。ですから、4月までどうするのかと言われますと、ちょっと困ってしまうような部分というのがあります。そういう問題点なんかも一緒にお話してみたいというふうに思います。

具体的に私の部分はなぜ問題が少ないかと言いますと、まず最初のところ、授業の概要ということですね。私自身獣医の方ですので、最終目標というのがかなり試験ということで、科目が羅列してあって、それぞれに修得するような技術、それから知識というのは、もう網羅されて臨床の方から出てくるとい形ですので、この科目にあってはということと比較的書きやすいということで、この辺も私の担当している部分は、実際病気の研究標本を学生に見せて、それで最終診断まである程度できるようにしています。ですから、実学に近いところの学部の方でもそうだと思うんですけども、実習というのは社会からの評価ということでは大事な部分かなと感じておりました。

具体的に、講義のとき、実習のときどうしてるかと言うと、学生に実際にスケッチをさせる、できたスケッチに関してこれと並行する講義というのが獣医の場合、全部ありますから、その講義で知識を得たものをスケッチに入れさせるという形で実際、実習を進めております。

系列	分野	科目類型			
開設科目名	獣医放射線学 実習	単位数	1	担当教官	田浦保穂
開設期	5年生 後期	開設時限	火曜日 8・10限	授業区分	実験・実習
対象学生	獣医学科5年生	備考			
授業の概要					
<p>獣医領域における画像診断を体系的に理解し、実践できるように実習を行う。</p> <p>まずX線撮影法、現像法、造影検査法における基本操作を説明し、実際にX線撮影検査を行うことができるように指導する。また代表的な疾患における画像上の所見を解説し、実際のX線フィルムを用いた読影を行う。さらに内視鏡検査、超音波検査、X線CT検査、磁気共鳴画像診断などの各種画像診断法の適応について解説し、それらの機器の基本的な操作法を実習する。放射線治療やRIに関連する事項についても併せて実習する。</p>					
検索キーワード		放射線、画像診断、治療			
授業の一般目標					
<p>獣医領域において活用されている様々な画像診断法の実施方法、適応、その代表的な所見について理解し、実際のフィルムなどに呈示された所見から疾患の有無、種類を判断できるようにする。最終的には獣医放射線学の診断と治療における、基礎と応用に関して理解を深める。</p>					
授業の到達目標					
	知識・理解の観点	<ol style="list-style-type: none"> 1. 撮影・現像・読影などのX線検査法の基本的操作を実践できる。 2. 代表的な疾患のX線的な特徴を説明できる。 3. 各種画像診断法の基本事項と適応について説明できる。 4. 放射線治療の適応や実施の際の一般的注意事項を説明できる。 			
	思考・判断の観点	実際の画像所見から疾患の有無、部位、種類を判断できる。			
	関心・意欲の観点	問題意識を持って画像の分析・解釈ができる。			
	態度・価値観の観点				
	技能・表現の観点	各種画像診断法の手技を理解し、実施することができる。			
	その他の観点				
授業計画(全体)					
授業計画(授業単位)					
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録	
第1回		【項目】X線撮影法 【内容】X線防御・X線撮影法・現像・フィルム化について実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。		
第2回目		【項目】X線撮影・読影法(骨関節系) 【内容】骨格系の撮影、読影法について実	教科書 ページを 読んでおくこと。		

		習する。	
第3 回目		【項目】X線撮影・造影・読影法（消化器系） 【内容】消化器系の撮影、造影法、読影法について実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第4 回目		【項目】X線撮影・造影・読影法（泌尿器系） 【内容】泌尿器系の撮影、造影法、読影法について実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第5 回目		【項目】X線撮影・造影・読影法（脊椎・脊髄系） 【内容】脊髄・脊椎の撮影、造影法、読影法について実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第6 回目		【項目】X線撮影・造影・読影法（心血管系） 【内容】心血管系の撮影、造影法、読影法について実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第7 回目		【項目】X線撮影・読影法（腹腔臓器） その他） 【内容】腹腔臓器の撮影、読影法について実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第8 回目		【項目】X線撮影・読影法（胸腔臓器） 【内容】胸腔臓器の撮影、読影法について実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第9 回目		【項目】放射線治療 【内容】放射線治療の実際を実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第10 回目		【項目】内視鏡検査 【内容】内視鏡による消化管の評価について実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第11 回目		【項目】超音波画像診断 【内容】超音波検査の適応と検査法の実際を実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第12 回目		【項目】X線CT 【内容】X線CT検査の適応と検査法の実際を実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第13 回目		【項目】磁気共鳴画像診断 【内容】磁気共鳴画像診断の適応と検査法の実際を実習する。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第14 回目		【項目】吉田地区RI施設見学 【内容】RI施設を見学し、RI使用の基本的事項について理解を深める。	教科書 ページを 読んでおくこと。
第15 回		【項目】医学部施設見学 【内容】医学部における最新の画像診断装置、放射線治療装置を見学し、最新の技術について理解する。	教科書 ページを 読んでおくこと。

成績評価方法（総合）

成績評価方法（観点別）

到達目標等	知識・ 理解	思考・ 判断	関心・ 意欲	態度・ 価値観	技能・ 表現	その他	評価割合（％）	JABEE 収集 資料
成績評価方法								
定期試験（中間・期末試験）								
小テスト・授業内レポート							30 %	
宿題・授業外レポート								
授業態度・授業への参加度							10 %	
受講者の発表（プレゼン） ・授業内での制作作品								
演習								
出席							60 %	
その他（ ）								

合計							100%	80%
関連科目								
教科書	獣医臨床放射線学,第2版(文永堂出版)							
参考書								
メッセージ								
連絡先・オフィスアワー	田浦保穂 : taura@yamaguchi-u.ac.jp 、電話 933-5928 , オフィスアワー : 随時							

一般目標は、獣医の場合、どうしてもテクニカルタームを欠如させると何を書いていいのかわからないという面もあって、授業の方としては、もうこれはテクニカルタームでしようがない、別にやさしくなくてもいい、それに全部必修ですので、学生が選ぶ必要ないということで、私自身としてはこういう形でもいいんじゃないかと。各学部の先生方もその特質性からなるべく平易にという言葉もあったんですけども、私自身の意見としては、そういうことですので、そのままテクニカルタームを使っております。

あと作業の到達目標なんですけども、大体項目というのはある程度書いて、あとそれをどう評価するかというところで、問題のある部分があると思うんですけども、逆にその目標ということからすれば、態度、情緒の向上目標ですか、あの部分はもう評価できない、実際問題時間的にも。逆に出题範囲が決められてて、それを単位内でやれと言われることからすると、時間は例えば3倍、4倍あるならば、こういったところにも目標は置けるでしょうけれども、それはもう把握しかないだろうと、それが実情だというふうに考えて、もうこれはこういう形でしようがないのではないかと。

評価のところが、やはりグループ内でいろいろな問題提起があった部分なんですけども、もうこの辺は飛ばさせていただきます。

先ほどの知識、理解、その他、関心意欲、その項目、これが私の講義の内容からすると、まだ比較的判定しやすく、書きやすいというので、私の方に白羽の矢が当たったと。ですから、実際ほかの実習を担当されている先生方に関しては、この評価自身もどうやっていいのかというような問題提起がいろいろありました。実際、複数人数でやるわけですから、一人一人判定ができない。ただ、私の場合は、個人個人でその形になったもの出せません。それと試験もある程度できるという形ですので、プレゼンで(授業内での作品)ということで、知識も見られる、実際スケッチをかかせてますから、質か意欲もある程度見られる、それと技能、表現も当然見られる。それとテスト、これは診断テストをさせるということは知識の部分もかなりこの部分で捉えられるであろうということで、実際今こういう形で評価はある程度はできるであろうと。ただ、ほかの先生方に関しては、これをどういうふうに評価するのかというのは、非常に大きな問題で、どの部分に焦点を当てるのかということで、評価は非常に難しい、書けないとおっしゃってる先生もおられるのが実情だと思います。

それと、きのうの段階で相対評価という形の言葉が出てきたと思うんですけども、例えば獣医もそうですし、医学部の保健学科、医学科、これはかなり国家試験に関しては、絶対評価、ある基準をクリアということはやっぱり焦点だと思うので、そういったときに実習で相対評価がなじむのかと、これが評価にも実際にかかわる部分だと思いますけど、私自身どうしてるかということ、スケッチを書かせて、それで書いたものでオーケーじゃないと、基準に達するまでその範囲内で書かせて、ある規準をクリアしましたということでその日出席したという形で実際につけてます。そういった場合に、絶対評価でいいんじゃないかというような実習は当然あると思いますので、そういったときの相対評価の関係、これも問題にはなってくるのかなという意見がありました。

それと、実際、態度その他というのは、個々の実習をやっているときに見れば評価できるんですけど、実際1人でそんなもの不可能です。それをどう評価しましょうか。具体的には、実習なんか

でグループでやってるといふ部分が多いと思います。私の部分は個人と言いましたけども、そこでもまだ問題がありまして、グループで評価した場合、そのグループの中では同じ点数がある、そうすると、これ実際学生から聞くんですけども、「あいつと一緒にだから、私は」という意見が当然出てくる。グループ内で楽しんでるやつ、一生懸命やってるやつ、でもグループ単位でしか評価できない。それを個々まで評価どうやってするのかという部分が当然出てくるであろうと。

ですから、実習に関してテストだけで評価できない部分、これはほんとにシラバスに入れて、学生に読ませて、それでちゃんと厳格な評価をしますというふうなことはこの状態ではまだまだならないんじゃないかというのが最終の私たちのグループの意見集約という形になってます。

そういう形で、何かもう少しこういう方法があるんじゃないかというふうな御意見があれば、お聞かせ願いたいというふうに思います。

これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

司会（岩部） 御質問、御意見お願いいたします。植村先生。

大学教育センター（植村） 今、演習実習系についてお話が出たんですけども、私たちの方のこの評価のひな形というのは、そういうことをほとんど意識しておりませんが、申しわけないですが。それについて、それからもう一つ、大学院とか少人数授業をやっていること、それからもう一つは単位になってる場合となっていない場合があるんですけど、卒業研究とかというものの評価の仕方、こういうものについては私たちはほとんどまだそこまで研究を進めておりません。このひな形で書いていただくということは、やはり無理なんではないかというふうに事前に判断しております。

今回、さきにそれを申し上げませんでしたのもやってみてどうなるかという、申しわけないんですが、そういうふうな感じもこちらとしてはあったんですね。

そういうことで、御了解いただきたいと思います。すべての授業がこのひな形で作れるような形にはなっていないということ、演習、実習系、少人数授業、卒業研究といった類のものはこのひな形ではどうも評価が難しいんじゃないかということは、我々も意識しておりますし、そういう形でこの評価のひな形を強制するということは、決していたしませんので、よろしく願います。

森本（農学） 最終は、何らかの形で、シラバスを全学的にという形では考えておられるわけですね。

大学教育センター（植村） こういうものについても評価基準がないというわけにいかないんですよ。今、特に問題になっておりますのは、大学院の方の厳格な成績評価というのをどうするかということ。大学院の授業というのは、非常に難しゅうございます。もちろん人数が少ないので、学生を見てるんだと言われて、それでわかってるんだという言い方もできるんですけど、じゃあ拳証しなさいと言われたときに、試験とかされている授業も結構あるようなんですけども、そうでないような場合について、あるいは試験でないような評価の部分について、どういう評価をしたんですかということについて、やはりかなり工夫が必要かなというふうに思ってます。

そういうところについても、つくらなければいけないということもあります。皆さんのお知恵を借りて、これから時間をかけてつくっていかざるを得ないのではないかと考えております。以上です。

Dグループ ワークショップ活動報告

教育学部 池田恵子

ワークショップでは、共通教育の運動健康科学部会（スポーツ運動実習）担当者および農学部獣医学科（生物）、医学部（社会と医療）担当者が構成されていた。そこで、構成員に共通する授業形態として、実験・実習に関するシラバスの作成および成績評価のあり方をめぐって議論することとした。初日に御講義いただいたように、認証評価体制に対応する厳格な成績評価が問われているとの認識に立った上で、実験・実習に関するシラバス及び評価方法の特殊性について勘案することが重要ではないかといった意見が交わされた。こうした議論は、2日目に至り、観点別評価の配分にかかわって留意点を浮き彫りとする結果となった。実験・実習型の授業には次のような特徴が見られる。第一に、主として、授業教材としての実習内容に参加できる基礎技術に習熟したか否か、あるいは実験に関する基礎的技術および方法を知り、一定の技能習得に達しているか否かに力点がある。第2に、グループ集団ごとに与えられた課題、実験・実習への参加という形式をとっている場合が少なくない。そこでは、現場に居合わせていること、実地の経験を重ねること自体が、必要とされる一定レベルの技能習得につながっている。こうした一定技能の習熟度を評価する際には、その尺度として、出席していること、実験・実習時の観察記録等が、前提条件となる。具体的には、毎時の実験結果の観察記録によるスケッチの結果であったり、スコア表の提出であったり、小レポートの提出であったりする。もっとも、実験・実習形式の授業は、こうした観察記録や製作・実演による技能点の評価に抛るだけでなく、適宜講義と実習を組み合わせているものが多々あることから、定期試験や小テストによって知識・理解の査定や、上位の向上目標を促すことは可能であるかもしれない。しかしながら、それらに対し、厳格な成績評価を下すということについては、グループ分けの如何が受講者の試験結果に微妙に反映されている場合が少なくないこと、場の設定による差異をどのように授業者が評価するかということに問題が伴うなどの意見が出された。それゆえ、この種の授業の成績評価には基礎技術や実験・実習の方法に習熟しているか否かを絶対評価によって判断した足跡を残さざるを得ない部分への配慮が必要に思われるというのが構成員に共通した認識であった。この種の授業に関するシラバス作成、授業評価に伴う困難さは、今後議論の対象として深化する必要があるのではないかという感想をもった。

全体として時間不足の感は否めないが、他学部の教官とも共通する悩みについて議論できたことは、本研修の成果であり、本研修にご尽力いただいた方々に感謝の意を表明したい。ありがとうございました。

司会（岩部） はい、ありがとうございました。

それでは、次のEグループの方に移らせていただきます。

石黒（理学） お昼を回りましたらやらせてと怒られると思いますので、短時間で終わるようにしたいと思います。Eグループはメンバーはこのようになってまして、自然科学、物理、化学等の研究グループです。

その中で、今回、一応シラバス作成に当たって、特に大きな問題はこういった自然科学系の基礎専門の科目の中で、関心意欲というようなところ、あるいは態度価値観といったところ、それから技術表現というようなところ、そうしたものをいかに目標設定して、いかに成績評価をしたらいいのかというところ。いろいろお話がありましたけども、とにかくこの発表では、個々の議論したことについて発表させていただきます。

系列	自然科学	分野	化学	科目類型	総説
開設科目名	化学II		単位数	2 単位	担当教官 石黒勝也
開設期	1年生 後期		開設時限	日3・4時限	授業区分 講義
対象学生	情報・数理・自然・生 資		備考		
授業の概要					
有機化学の基礎の原理を正確につかめるように、有機化学の基礎となる分子の性質や化学反応性について学習する。また、関連する内容の中から、未来技術につながる最新の話題や様々なアイデア等を紹介する。					
授業の一般目標					
有機分子の構造と結合を、電子と原子軌道・分子軌道の立場から理解する。次に、基本的な化合物の結合様式を学び、官能基の違いによる物理的・化学的性質の相違について修得する。					
授業の到達目標					
知識・理解の観点			有機分子の構造や反応性の理解		

√									
	思考・判断の観点	物質や状態の変化について、原子・分子レベルからの見方・考え方ができる							
	関心・意欲の観点	自分の専門分野と分子の世界との関わりに関心を持つ。							
	態度・価値観の観点	有機化学は暗記の学問ではなく、基本的な原理がわかれば理解しやすい学問であることに気づき、有機化学の面白さを味わうことができるようになる。							
	技能・表現の観点								
	その他の観点								
授業計画(全体)									
講義・演習等は全てプロジェクトを用いて行い、また、プリントを配布する。資料等はWeb上で公開する。メールでのレポート提出(毎回実施)、化学式の作成及び分子構造の描写等にコンピュータを使用するため、ノート型PCを持参すること。									
授業計画(授業単位)									
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録					
第1回		【項目】はじめに 【内容】	シラパスを読んでおくこと						
第2回目		【項目】有機化合物を構成する元素とその振舞い1 【内容】電子配置・化学結合	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第3回目		【項目】有機化合物を構成する元素とその振舞い2 【内容】極性・共鳴	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第4回目		【項目】有機化合物の立体構造 【内容】立体化学	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第5回目		【項目】反応はなぜ起るのか 【内容】立体化学	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第6回目		【項目】電子の流れ図の書き方と考え方 【内容】	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第7回目		【項目】官能基の性質と反応1 【内容】: アルカン・ハロゲン化アルキル	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第8回目		【項目】中間テスト 【内容】(次回、演習を行う)							
第9回目		【項目】官能基の性質と反応2 【内容】アルコール・エーテル	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第10回目		【項目】官能基の性質と反応3 【内容】アルケン・アルキン	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第11回目		【項目】官能基の性質と反応4 【内容】アルデヒドとケトン	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第12回目		【項目】官能基の性質と反応5 【内容】カルボン酸とその誘導体	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第13回目		【項目】官能基の性質と反応6 【内容】含窒素化合物・複素環化合物	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第14回目		【項目】欲しいものをつくるために 【内容】	資料に目を通しておくこと	ホームページ参照					
第15回目		【項目】試験 【内容】							
成績評価方法(総合)									
レポート課題提示・メールでの提出(毎回実施) 中間テストの実施およびその内容に関する演習 期末試験の実施。以上を書きの観点・割合で評価する。なお、出席が所定の回数に満たない者には単位を与えない。									
成績評価方法(観点別)									
到達目標等		知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
成績評価方法									
定期試験(中間・期末試験)								60%	
小テスト・授業内レポート								15%	

宿題・授業外レポート							15%	
授業態度・授業への参加度							5%	
受講者の発表（プレゼン） ・授業内での制作作品								
演習							5%	
出席							欠格条件	
その他（ ）								
合計							100%	95%
関連科目								
教科書	デジタルテキスト（Webにて公開）を用いる予定							
参考書								
メッセージ								
連絡先・オフィスアワー								

まず、こういった物理、化学実験、実習、あるいは演習といったものに関しましては、これは比較的こういった関心意欲というのを見積もりの尺度というのは明確に出てまいります。そこでは、やはりその実習で協力して実験ができるというようなこと、あるいはそこでレポートにまとめて報告する力を養う。特に、こちらの実験では、レポート一つ一つについて各教官がチェックして、それについての合否判定をしていくということで、非常にきめ細かなものについての診断がなされていくということでございます。

それから、共通の基礎科目についてですけれども、これはやはり専門、その科目の専門以外の学生の基礎としての自然科学という意味合いで、こういった科目に関しては、やはり担当の先生方、それぞれ専門の知識だけではなくてやはり関心意欲というようなことに非常に注意を払っておられます。

白石先生は物理、力学の授業を担当しておられますが、やはりその中でも応用するような学問分野に関心持つということ非常に重要に考えておられまして、その評価はレポートとして、それが応用された分野について調べて提出するというようなことを計画されておられます。

それから、これは私ですけれども、化学としましても、授業にパソコンを持ってきてもらって、電子メールでレポートを出すという形でやりますと、非常に回答率がいいということを経験しております。

もうひとつこういった意欲というのは、これは決してこれが評価基準であるから意欲があるというようなふりをするというだけでは困るわけですので、僕たちは、これは絶対に学生に表に出すべきではないということを思っています。

それから、これも1科目に近いところかと思いますが、こういった気象学概論というところの中では、やはり気象現象というのは、身の回りにある日常生活の中でのことですので、それについて関心意欲という面では、自分でテーマを見つけ出して、それでレポートを提出すると、そういったことを重要視されているということでございます。

それから、次に専門の科目にまいりまして、専門の科目は、やはりこういったところでは、なかなか関心意欲というようなもの、これは非常に重要であるにしてもなかなかそれを入れる余裕的なものはなかなかないんですが、やはりそれぞれの先生は入れておられて、日常生活の中でこういったものに関係する現象についてのレポートというのを考えておられます。

それから、これはダスト性解析、これもやはり小テストというものを重ねております。

それから、これは建築の方で仕上げ工法というようなことでございます。これはやはり実際の建築の現場で必要になってくるところで、その中ではこういった身の回りにあるような、現在あるようなそういった工法についての診断とかそれについて判断力というようなものをレポートによって養成していきます。

それから、こういった倫理に関するようなことでは、技術倫理、それからインフォームド・コンセ

ントといったものがこの中には一応含まれてくるということでございます。それと同時にこうしたものは、実際にそれを自分で作成する演習というのが行われるということで、その結果をプレゼンテーションをすると、それだけではなくて、それを学生同士で論評するということが行われております。これは技術表現という面に関しては非常にいいことだと思います。

それから、最後に実際のJ A B E Eの指定科目になっているものが幾つかございまして、土木振動学の中でも、やはり日常生活で、こういったものに関心を持ち、あるいはこういったことを通じて直接的間接的に報道について認知して外側から判断できるということに関して、授業内容としては、災害記録を読む、あるいはビデオを見るなどの後で、感想文を提出してもらおう。感想文を評価するというのは、非常に難しい話です。しかし、やはり一つの基準としては、自分からそれについて何か提案ができるかどうかを基準すべきであるとの御意見をいただいております。

それから、宇部高専の方でもJ A B E Eの検討がなされてございまして、山崎先生が高分子化学を指定科目として、授業をされております。高分子化合物というと、やはり環境という問題が出てまいります。これは態度、価値観というようなことは、尺度としては難しいんですが、この件に関しては、試験でそれを判定することはできるわけですね。どういうふうに扱うかなど、試験で評価することのできる、非常に顕著な例ではないかというふうに思います。

以上が、個々の先生の発表についてですが、最後にいろいろ議論しました。例えば、欠席というのは何回というふうに書くべきなのか、書いてしまわんと何回まで休んでもいいというふうに思ってるとか、それだけ休んだらもうあきらめちゃうとか、そんなことが出てきますし、それぞれ欠席の意味というのも実験終了あるいは講義等では意味が違って、原則としてというようなあいまいな表現の方がいいんじゃないか、そういったいろんな議論をいたしました。以上です。

E グループ ワークショップ活動報告

本班は、理学部・工学部・農学部・宇部高専からの参加者計9名(所属部会は、物理学が5名、化学が2名、地球科学が1名、高専が1名)によって構成されていた。ワークショップ1において、各自の自己紹介を行った後、司会を白石(理)、記録係を笠野(理)、報告係を石黒(理)と選出した。その後、ワークショップ2で、各自が担当授業(共通教育科目は4名(白石、笠野、石黒、鈴木(賢))、専門教育科目は5名(馬場、鈴木(素)、福永、上西、山崎))のシラバスの「一般目標」及び「到達目標」の記述を配付資料の「行動目標の記述に用いられる行為動詞(例)」を参考にして行いワークショップ3でグループ内での発表及び質疑応答を行った。ワークショップ4では、ワークショップ3で設定した各目標について、それらを達成するための「授業計画」及びそれらの達成度を見るための「成績評価法」について各自記述を行った。その後行われたワークショップ5において、各自が記述した「授業計画」及び「成績評価法」についての発表及び質疑応答が行われた。

本班において、ワークショップを通して話題が上がったのは、「自然科学系基礎・専門科目の中で、「関心・意欲」、「態度・価値観」、「技術・表現」について、いかに目標設定し、成績評価を行うのか?」ということであった。「関心・意欲」の観点では、講義形式の場合、目標は「講義内容と実生活の関わりについて関心を持つこと」、そして成績評価は「受講生各自に調査等をさせ、レポートで提出させて判定する」という形が望ましいのではということになった。また、

実験の場合は、実験中の見回りで、「共同者と協力して実験が遂行できているか?」、また、「自分の行った実験結果を簡潔に報告できるか?」ということから「関心・意欲」が判定できるのではということになった。「態度・価値観」の観点では、「有機化学の分野が、実は基本的な原理さえ分かれば理解しやすい分野であることに気づく」とことや「受講生が将来必要となるであろう技術倫理等を知る」とことや「地球環境の観点から、高分子化合物を日常生活の中で取り扱い、処理することができる」等を目標とし、「小テストや授業内レポート」または「試験」から成績評価を行うことが出来るのではないかということになった。「技術・表現」の観点では、「実験に必要な基礎的技術や解析方法を習得し、結果等についてレポートにまとめて報告する力を養う」とことや「レポートにおいて、正しい結論を得るに至る過程を第三者に論理的にかつ容易に伝わるよう記述することができる」を目標とし、提出された「レポート」から成績評価を行うことが出来るのではということになった。また、出席の「欠格条件」扱いについても、実験・演習と講義での欠席の意味合いの違いなどを考えると、「原則として欠席は認めない」程度の表現が望ましいのでは、という結論になった。

司会（岩部） ありがとうございます。御質問、御意見、お願いいたします。特にございませんでしょうか。

はい、どうもありがとうございました。それでは、午後になってしまいましたけど、午前中のプログラムここで一旦打ち切りまして、昼食をお願いいたします。その後、1時から始めたいと思いますので、よろしくをお願いいたします。

司会（岩部） 1時ちょうどになりましたので、Fグループの発表をお願いいたします。

松野（理学部） どうもこんにちは。理学部の松野と言います。

まず最初に、ちょっとだけ私のシラバス論を述べさせていただきたいと思うんですけど、これが今現在、理学部で出ている私のシラバスです。昨日、僕、質問させてもらったんですけども、そもそもこういう言葉を見て学生が判断できるだろうか、さっき農学部の先生も言われてましたけど、理系の場合はどうしてもこうならざるを得ないところがあると思うんですよね。フォーマットに従ってやってたものですが、そういう疑問を持っていましたので、こういうシラバスを実際つくったことがあります。これ同じ授業のシラバスで、内容項目というのを3つにしちゃいました。そのかわり上の方がすごくだらだら書いてあるのがわかると思います。重要なのは、さっきのところにもあったんですけど、このコンパイラというのがありまして、これは何かと言うと、人間がプログラムしますが、それをコンピューターがわかる原語に翻訳するソフトウェアです。このソフトは非常に安定して動作します。これが安定して動作しないと、幾らまともなプログラム書いても使い物になりません。翻訳するソフトでだめだったらだめだからです。これは、非常に安定しています。

ところが、このシラバス書いていたときに私使ってたのが、Windows 95というOSです。非常によく止まります。だから、何回も保存ボタンを押します。もしコンパイラがそういうことになってしまうと、これ計算機自体の信用がなくなっちゃうんですね。だけど、コンパイラはそういうことありません。どうしてかと言うと、皆さん飛行機乗られることがあると思います。これちまきやの道路のとこ書いてありますけど、飛行機というのはめったに落ちません。どうしてかと言うと、物理学を初めていろんな学問が体系的に組み合わされて、きちっとした理論体系の上につくられているからだと思うんですね。

コンパイラというのは、やっぱりそれをつくるための理論があります。その基本的なことを学んだよということをここに書いています。これは選択科目ですから、どうしてこの科目を学生が学ばなくてはいけないのかというのがまずわかるような工夫についても、何かシラバスの中に入れておいていただくとよろしいのではないかというふうに思います。

本題に入ります。我々のグループは、先生方9人おりますが、私と徳山高専の杉村先生を除いては全部ばらばらなんです。これ、それぞれめいめいに書いていて、果たして議論ができるんだろうか、ちょっとそれ無理じゃないかというところから話を始めました。どういうことをしたかと言うと、まず4人の先生方が共通項をまず話してもらって、技術概論というのでまとめていただくと、私ら情報ですから、ちょっと楽だったんですけども、もう一つのグループは4人でやっぱり情報処理についてシラバスを書こう、だから、我々のところから出てくるのは2つです。私は、今から情報処理の説明をいたしますが、あとで合田先生が技術概論の方の説明をしていただくことになっております。

こういうふうにして、一応せつかくワークショップの時間ですから、共通の項目についてせつかく時間を共有するわけですから、議論ができる体制をまず整えようというところから始めました。

それで、情報処理のことはどなたもパソコン使われるからもうよく御存じのことだと思うんですが、要するにワープロが使える、表計算が使える、パワーポイントで使える、それであとはブラウザを

使って、インターネットの検索ができる、そういうことが基本的にできればいいな、基本的に道具の使い方を教えるということです。そういうふうなことがいろいろ書いてあって、昨今ちょっと僕のところのPCもブラスターにやられましたけど、セキュリティだとかエチケットだとかいうのも重要なことですから、別のところを教えるときにこれも教えちゃう、そういう話をしよう、これは教官でないとできない話だと思います。

系列	応用科学	分野	応用科学	科目類型	総説
開設科目名	技術概論	単位数	2単位	担当教官	合田公一
開設期	1年生後期	開設時限	3.4限目	授業区分	講義
対象学生	工・農	備考			
授業の概要					
本授業は、主要工業製品において最多使用される鉄鋼材料に焦点を当て、まず鉄と鋼の製法技術史を概述する。そして、近代産業の発展において果たした製鉄・製鋼技術の役割を説明し、さらにエネルギー・環境問題との係わりを考える。					
検索キーワード	鉄鋼材料、製鉄・製鋼技術、エネルギー、環境問題				
授業の一般目標					
古代・中世における鉄と鋼の製法技術史を学習するとともに、近代産業において果たした製鉄、製鋼技術の役割を理解する。同時に鋼の物理的・化学的性質の概要についても理解する。さらにこれらの技術とエネルギー・環境問題の係わりについて考える。					
授業の到達目標					
	知識・理解の観点	1. 鉄と鋼の製法技術史の概要を説明できる。 2. 製鉄、製鋼技術と近代産業の発展の関連性を説明できる。			
	思考・判断の観点	・今日の製鉄、製鋼技術の発展を技術史的観点から関連付ける思考力、判断力を養う。			
	関心・意欲の観点	・今日の製鉄、製鋼技術とエネルギー・環境問題との係わりを調査し、この内容に関する報告を自ら発信することができる。			
	態度・価値観の観点	・製鉄、製鋼技術の学習を通して技術全般に関心をもち、技術の果たす役割を日常生活の中で意識することができる。			
	技能・表現の観点				
	その他の観点				
授業計画(全体)					
授業計画(授業単位)					
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録	
第1回		【項目】鉄の起源(青銅器時代と鉄器時代) 【内容】鉄は鉄鉱石と木炭から比較的簡単につくることができる。鉄と青銅の製法の違いを冶金学的観点から考察し、太古における鉄の起源を推察する。		配布資料1	
第2回目		【項目】高炉法の誕生(もう一つの産業革命) 【内容】高炉法は鉄鉱石の還元反応を効果的に進行させることによって鉄の大量生産を可能にしたものである。この回では高炉法の仕組みについて紹介する。		配布資料2	
第3回目		【項目】近代製鉄技術の確立 その1 【内容】鉄の大量生産は森林資源を大きく後退させた。この回では英国の木炭対策ならびに新たに開発された石炭製鉄法について紹介する。			
第4回目		【項目】近代製鉄技術の確立 その2 【内容】蒸気機関の発達により、鋼はさらに大量生産を要求されるようになった。今回は旧式の製鋼法に変わる転炉法の発明について紹介する。			
第5回		【項目】鉄と鋼の性質		ビデオ教材	

回目		【内容】鉄は炭素の量によって物理的・機械的性質が大きく変わる。内部の組織の違いに基づき性質変化の理由を説明するとともに産業用途を紹介する。							
第6回目		【項目】鉄鋼業と環境・エネルギー 【内容】高炉法が与える環境への影響を推察するとともに、製鉄・製鋼技術開発と環境・エネルギーの係わりを考える。	環境・エネルギー問題に係わる報告書作成						
第7回目		【項目】定期試験 【内容】							
成績評価方法(総合)									
成績評価方法(観点別)									
到達目標等		知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
成績評価方法									
定期試験(中間・期末試験)								50	
小テスト・授業内レポート								10	
宿題・授業外レポート								20	
授業態度・授業への参加度									
受講者の発表(プレゼン) ・授業内での制作作品									
演習									
出席								20	
その他()									
合計								100%	80%
関連科目		人間環境論							
教科書		資料を配布する							
参考書									
メッセージ		技術論に関する本を最低一冊読むこと							
連絡先・オフィスアワー		合田 公一 :email goda@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp 電話 0836-85-9157							

そういう話が上に通り一遍書いてありまして、この辺では、一応それなりの工夫はしてるんですけど、まず最初にウェブブラウジングでちょっと遊ばせて、だけどもこういう大事なこともあるよということを知って、連絡をとらなくちゃいけないから、まず電子メールのことをやりましょうと、あとはもう通り一遍、ワープロソフト、表計算ソフト、プレゼンソフトについて教えます。例えばプレゼンソフトでは、こういうことを勉強して、次の授業で実習をする、そういうことをやられてます。あとは課題発表のところをちょっと多くとってそれぞれ発表させる。

実は、この間、うちの学部で情報の実験をやってるんですが、その実験を12点はあったら8点まで絞ります。残りは何するかというと、自分の自主テーマを、これパワーポイントでプレゼンさせるんですね。昨今、レポート書かせてカットアンドペーストで張ってくる学生がおるもんで、皆さんもよくそういうの困ったなと思われてると思うんですけども、ただこういうプレゼンをさせると、そういうことも防止できるというか、多分、新しい実験の仕方だと思うんですね。カットアンドペーストが決して悪いわけではなくて、ちゃんとそれに伴う考察があればいいんですけども、そういうことを期待できるくらいならそういうことしなくてもいいかもしれないけど、プレゼンをさせます。2回やって1回プレゼン、2回やって1回プレゼンというやり方をします。最初やり始めよたときに、「先生、パワーポイントで何ですか」という学生いっぱいいるんですよ。だけども、彼らはちゃんとやってくるんですよ。学生たちだけで教えあってるし、基本的に道具の使い方さえやっしまえば、彼ら自分たちでやります。僕がよく言うのは、子どもに教えるというのは間違いで、子どもの方がはるかにコンピューターの使い方は早く覚えます。ちょっとそういうことを余り僕が長くしゃべってもいけないので、この辺で次にいきましょう。

合田（工学部） 工学部の合田でございます。技術概論の議論しますと、技術といっても広うございますので、焦点を絞ってやりましょうと、考えましょうということで、私の専門の関係で製鉄施工技術、その製鋼技術についての歴史を学びます。そしてそれがそれだけじゃなくて、昨今言われてるエネルギーとか、環境問題にどういうふうにかかわっていくかということまで、学生に考えてもらいましょうということで、ざーっとだけじゃなくてレポートも出させましょうというふうにしました。

それで、それがここなんです、せっかくその到達目標がたくさん並んでますので、学生がそういう製鉄製法、製鋼技術というあくまで題材を通して、エネルギー、環境問題とのかかわりというのを学生が調査して、この内容に関する報告をみずから発信することができるかどうかという、関心意欲を判断しましょうと。

それともう一つは、こういう技術というものの学習を通して、技術全般に関心を持って技術の果たす役割を日常生活の中で意識することができる、そういうことを到達目標に設定させる。もちろんここに一般目標に書かれてる技術史とか、近代産業とのかかわりとかいうことへの理解も当然含まれております。

それで、事業計画の方は、最初はワークを中心に1週目、2週目、3週目、4週目といきますけど、ここで、ほんとは製鉄工場に見学しに行ければいいんですけど、ビデオ教材、これは日本鉄鋼連盟が非常にすばらしい教材を持っています。ですからこれを見せながらどういうものかということを知ってもらうということ、それでそういうのを通してエネルギー、環境問題とのかかわりを講義の中で推察していきながら、学生がそういう技術等に関する問題、かかわるレポートを書いてもらうというふうにします。最終的には試験も課します。

それで、今7つしかないんですけど、これは技術ガイダンス、大体2人の先生が担当しているので、一応、持ち分として7回ということです。あとここは通常は今までここがメインで、この定期試験が七、八十%、あと出欠で20%にしたんですが、学生に主体的に取り組んでもらおうということも入れましたので、授業中のレポート、小テスト、これを10%、さらに授業前のレポートは80%課すという形で、シラバスを考えてみました。

以上でございます。（拍手）

Fグループ ワークショップ活動報告

報告者 小淵茂寿

メンバー：入江和夫（山口大教育学部） 松野浩嗣（山口大理学部） 合田公一（山口大工学部） 中村安弘（山口大工学部） 宇都宮 宏（山口大農学部） 小淵茂寿（山口大地域共同研究開発センター） 清水昭彦（山口大医学部） 杉村敦彦（徳山高専）

司 会：合田公一 記録係：小淵茂寿 発表者：合田公一、松野浩嗣

シラバスの作成にあたり、Fグループではメンバーが共通のシラバスを書ける科目として、はじめに「技術概論」と「情報処理」をピックアップし、2グループに分かれて、1つのグループは「技術概論」、残りのグループは「情報処理」について、各自のシラバスを作成することにした。その後、技術概論グループ、続いて情報処理グループとメンバーが各自「一般目標」と「到達目標」を発表し、全員で討議を行い、各科目につき、よいものをひとつ選定し、次の「授業計画」、「成績評価法」を各グループごとに討議しまとめることにした。

「技術概論」については、技術といっても非常に幅が広いので、ここでは検討の結果、「製鉄・製鋼技術」に的を絞ることにした。議論の結果、目標および授業計画を別紙（合田先生発表シラバス）の通りとした。成績評価に関しては、厳格な評価を目指して、成績評価法を4通り、到達目標を4通りとした。特に重視すべき到達目標である知識・理解を定期試験と小テストに割り当てた。続いて思考判断を重視するような到達目標とした。さらに、関心・意欲、態度・価値観についても小テストと授業外レポートで評価するようにした。

「情報処理」については、グループの発表のためにどのようにグループ内を効率よくまとめるかを検討した。そこで、プレゼンテーションの発表者のPCを用いて、スクリーンにPC画像を投影し、皆が情報を共有しながら、一つのものを作成していく方法をとることになった。この方法で、まず、授業概要と授業内容を皆で討論し、共通の概要、目標を30分かけ

て作成した。特に向上目標として、総合的にソフトを使用してプレゼンテーションソフトを使用しての発表を置いた。授業の到達目標に関しては、どの内容が、どの観点に当てはまるのが議論となった。

次に、授業計画では、15回の項目を概要、目標にあわせて振り分けた。その後、その内容を皆で考え記述していった。授業外学習の指示に関しては、さらに授業内容を見ながら、適切に配置するように皆で話し合った。

成績評価方法は、授業内容の性格上技能表現が中心となり、レポートや作品の発表の評価に最も重点を置くこととして、評価割合を最終的に決定した。

司会（岩部） どうもありがとうございました。

御質問はございませんでしょうか。

それでは、最後のGグループの皆さん方よろしくお願ひします。

古川（梅光学院大学） 梅光学院から来ました古川と申します。私たちのグループでは外国語教育をメインに教えていらっしゃる先生以外に、いわゆる専門教育科目を教えていらっしゃる先生もいらっしゃいまして、いろいろさまざまなお話が聞けました。

せっかくですので、とりあえずうちの学校の現状をちょっと話させていただきたいなと思います。これは部会ではお話しなかったんですけど。うちの学校でも当然シラバスというのがございまして、授業目標、到達目標、それから内容等いろいろ教科書、参考文献、それから授業項目というものを書いています。今回、本来うちの学校も前期15回、後期15回、30回で、1回目はこれをやる、2回目はこれをやるというような感じで授業予定を立てていました。今回、こういうふうにちょっと項目というふうに変えてしまいました。その背景にあるのは、学生による授業評価というのをやっております、その際、何ていうんでしょう、このシラバスについて、これは参考になりましたかという質問があるんですけども、それに関してうちの学校の学生は「あんまり見ない」、あるいは「ぜんぜん参考にならなかった」というような評価、結果が出てきてまして、じゃ実際15回も授業やるわけでもないし、じゃ、スケジュールというよりもむしろ授業項目としてとらえようじゃないかっていうことになりました。最低前期何項目とか。実際、授業というのは学生の状況に応じて、進度っていうんですか、放送大学みたいにはうまくいきませんで、いろいろち変わったりしますので、その辺を現実的に捉えようということで、こういう具合になりました。

系列	分野	科目類型			
開設科目名	英語総合演習Ⅰ	単位数	1	担当教官	古川武史
開設期	1年後期	開設時限	火5・6	授業区分	演習
対象学生	現代コミュニケーション学科1年生	備考			
授業の概要					
本授業では、前期に『フレッシュマンイングリッシュⅠ、Ⅱ』と『英文法Ⅰ』で復習し、再構築した英文法の知識を元に、英語のコミュニケーション能力を測定する世界規模の検定試験のひとつであるTOEICテストの問題の解き方について解説をし、TOIE形式(リスニングセクション、リーディングセクション)の問題に慣れさせる。毎回TOEIC形式のリスニングと単語の小テストを行う。					
検索キーワード	TOEIC、実用英語				
授業の一般目標					
ビジネス業界における実用英語の能力の重要性を認識した上で、TOEICのスコア向上をすることを目標とし、(College) TOEICを最低1回受験する。					
授業の到達目標					
知識・理解の観点	1. 出張・旅行に関する語彙を扱った誤文訂正問題に関わる語彙や文法的な知識の習得。 2. 「-」や「同」を表す接頭辞が付く語彙を扱った誤文訂正問題を通して関連語彙や文法知識の習得。 3. 記事・報告書に関する読解問題を通し、語彙や速読力、判断力の獲得。 4. 通知・手紙に関する読解問題に関わる語彙や読解力の習得。 5. 広告・説明書に関する読解問題を通して、関連語彙や速読力を身につける。 6. 番組・スケジュール・申込				

		書に関する問題に対応できるようになる。7.						
	思考・判断の観点	上記類似形式の問題形式の問題に対応できるようになる。						
	関心・意欲の観点	「英語でのコミュニケーション志向」(使える英語)の意識と意欲を喚起する。						
	態度・価値観の観点	1. 自習課題を通して、少なくとも週6日毎日一日1時間の英語の自学自習の習慣を身に着ける。 2. 日頃から TOEIC 等の英語検定試験に関心を持ち、自ら積極的に TOEIC を受験するようになる。						
	技能・表現の観点	英語検定試験において、TOEIC300点相当以上のスコアを取る。						
	その他の観点							
授業計画(全体)								
毎回、教科書 Unit1 単元進み、リスニングおよび単語の小テストを行う。								
授業計画(授業単位)								
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録				
第1回目		【項目】オリエンテーション 【内容】担当教員の紹介、授業目標と進め方、シラバスの説明、成績評価の方法						
第2回目		【項目】TOEICの説明 【内容】TOEICの出題形式、過去の受験者のデータの紹介、企業でのTOEICの扱い、研修等の紹介。						
第3回目		【項目】TOEIC Mini Test 【内容】1時間程度のMini TOEICを受験する。						
第4回目		【項目】Unit 1 【内容】						
第5回目		【項目】Unit 2 【内容】						
・		・						
・		・						
・		・						
第12回目		【項目】Unit 9 【内容】						
第13回目		【項目】Unit 10 【内容】						
第14回目		【項目】Unit 11 【内容】						
第15回目		【項目】試験 【内容】						
成績評価方法(総合)								
期末試験、小テスト、出席、課題、(College) TOEIC のスコア、授業中の態度等を総合的に評価する。								
成績評価方法(観点別)								
到達目標等	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)							50%	
小テスト・授業内レポート							20%	
宿題・授業外レポート							5%	
授業態度・授業への参加度							5%	
受講者の発表(プレゼン) ・授業内での制作作品							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							失格条件	
その他(TOEIC等の英語検定試験)							20%	
合計							100%	80%
関連科目								
教科書	『TOEIC テスト リーディング基礎演習』(英宝社) 『徹底対策 TOEIC テスト リスニング』(鶴見書店)							

参考書	
メッセージ	
連絡先・オフィスアワー	

で、今回、シラバスの重要性ということで「かなり重要なんだな」ということ再認識した次第で、いろんな議論も出てきました。突然つくられて言われて、私は全然考えてもなくていろいろ適当にといい悪いんですが、ちょっと書いてみたんですけれども、一番悩んだのはこういうところではなくて、評価のところ。評価のところどれにマルをつけるか、で、何%にするかということ、ちょっと非常に苦労した次第です。実際、参加者の方々のものをいろいろ見させていただきましたけれども、古川のはこんなぐあいに、定期試験50%、小テスト何%みたいな感じでやりました。それは、授業形態によっていろいろ変わってもいいだろとは思いますが、中には定期試験を課さない、あるいは定期試験20%とか、そんな先生方もいらっしゃいました。特に、私が担当しているこのTOEICというのをどう評価するかっていうところも非常に悩んだところで、さっきどなたか検定試験に受かったかどうかで評価、「優」をあげてもいいんじゃないのって話をされてる先生いらっしゃいましたけども、私もそれで実際選択科目で、例えば600点以上とったら「優」をあげるよというふうに言った瞬間、600点とったやつが出てきて、「もう先生授業出て来なくていいでしょう」というふうに言われて、それ以来ちょっとそういうのをやめようと思ってやってないんですけども、このことで何て言うんでしょうね、それをどういうふうにあらわしていいかっていうところ非常に悩みまして、その辺のいろんな話を伺いたかったんですけども、ちょっとその機会がありませんでしたので、とりあえず苦心の策として、ここでは一応20%ぐらいにしています。点数によって多分その辺どうするのかということも考えなきゃいけないと思って悩んでいたところだったんです。

あといろいろお話として出てきたところなんですけども、外国語教育をやる、言葉だけを教えるでもそれでいいかっていうとやはり全然だめで、その異文化理解みたいなところ、それをどういうふうにするか、あるいはTOEICの授業で生かすかとか、あるいはそれぞれもたれてる科目でどういうふうにするかというお話が出てきました。言語自体もそりゃ異文化と言えど異文化なので、それでも十分だという話もあるし、あるいはほかの授業でやってもいいんじゃないかとか、あるいはリスニング、ちょっと話変わりますが、リスニングの授業、これをどうやっていくのかということです。これはいろんな先生方いらっしゃってどういうふうにするかという問題に引っかかると思います。やる先生もいらっしゃるし、やらない、ほかの授業に任ず、あるいはCD-ROM使ってe-learning的にやるとかいう話もありました。

それから、JABEEは、判断基準というんでしょうか、評価基準というんでしょうか、そういったものを持っていくと、客観的に、主観が入らないようになるべくしないといけないということ、統一カリキュラムとか、統一テキストとか、評価基準の課題など、何ていうんでしょうか、主観が入らないようにしていかないといけないんじゃないかという話も出てきました。

それから、あと評価が残るといって、答案等が残るといって、実際今まではいろんなものを総合的に評価して59点とか、69点とか、1点とか足りなかった場合、やっぱりちょっと温情的に1点あげるとか、そういうことをやってたんですけども、そういうことできなくなるんじゃないかとか、あとそういうできなくなるって、そういう補修授業みたいなものもやっていかないといいなくなるんじゃないかとか、そういう話も出てきました。

それから、出席に関して、私の場合は20%ぐらい点数をあげてるんですけども、今回JABEEとかいうのに従うと、失格条件ということになるんだそうですね。うちの学校は、試験を受ける資格

ということで、3分の2以上出席していないと失格になるということも、学則上で規定してまして、それはもう学生わかってることなんですけれども、何回までいいが悪かという議論も、学生に関しては問題ないんですけども、ほんとにそれでいいのかという問題もあるかと思います。評価で20%というふうに今回はしてませんが、私は大体そのくらいにしている、それに関して小テストをやっているんですが、出席しないとその辺で減点されるからそれでいんじゃないの、要するに点数化しなくてもいんじゃないのという話とか、結構おもしろい意見が出てました。

それから、出席点については、別の項目で出席というのは考えましょう、というふうな意見が大多数で、ほとんど何点、何%というふうにつけてる意見はございませんでした。

後は、講義科目と演習科目、あるいは発表を中心にした授業といったものにそれぞれ関連した評価については、ほんとにたくさんの御意見がありました。それはそれで科目の特殊性というものを反映しているのでいいのかなという気はしましたけれど、やはり同じドイツ語ならドイツ語、あるいは英語なら英語であればやはり同じようにやっていかないといけないんじゃないかなという気はいたしました。

もっといろいろ何かあったかと思えますけれども、思いついたところは、以上です。どうもありがとうございました。

司会（岩部） どうもありがとうございました。

私もたまたま分野が英語なものですから、なるほどとか、いろいろ感じる場所あるんですが、特にTOEICスコアで単位を認定してあげると、600点とりました、もう授業来なくていいですね、そういうことを言われるとちょっとむっとしたりして、なかなかそこを乗り越えなきゃいけない部分だと、私は個人的に思ってるんです。けれども、やっぱり教師はどうしても自分も授業に来てもらうというところ、自分で教えてると安心というようなところがあって、自分の目の前から去っていく学生というのは、何となくちょっと耐えがたい感じをどうしても持ってしまうんです。その辺ですね。山口大学ではある程度そこら辺は割り切らなきゃいけないんだという決断をしております、授業に出てくること、授業に縛りつけることに意味があるんじゃないんだと、英語能力を持ってるならばそれでいいじゃないかというこの一つの割り切り、それから逆に、そのそういう形で何点とったから単位をあげて、教室から出て行ってもいい、というのとは逆に、今度は700点にあげる授業を開設しますよ、それでも単位出ません、そういう授業を逆に立ててみると、そこにちゃんと来る学生がいるわけです。単位なんかない、けどもこの授業を受けて一緒に700点目指しましょうという授業を開設すると、そこに出てくる学生がいると。だから、スコアをとれたから単位をあげますというのと、逆にまた単位はないけれどもといって教室に戻ってくるという、そういうこともあります。それでつじつまはちゃんと合ってるんじゃないかなというふうに、今のところ個人的に感じております。

どうもちょっと勝手に感想述べてしまいましたけど、どうもありがとうございました。

Gグループ ワークショップ活動報告

Gグループ・メンバー（7名）

司会：平山豊（初習外国語・仏） 報告発表：古川武史（梅光学院大学・英）

記録係：藤原マリ子（教育学部・国） 阿部泰記（初習外国語・英） 坂本貴志（初習外国語・独） 宮崎充保（英語）

杉原道子（留学生センター） ワークショップ活動内容

・18日

1 / 自己紹介 2 / シラバス「授業の一般目標」「授業の到達目標」の作成

（余裕があれば「授業の概要」も） 3 / 作成目標の発表・質疑応答

発表は、時間の関係で、英語の宮崎・古川の二氏が担当。質疑応答では、語学力の養成と異文化理解との関係をどのように捉え目標の中に位置づけるかについて、活発な意見が交わされた。語学力育成と同時に異文化理解にも配慮すべきで

あるとの見解が主流を占めた。

・ 19日

1 / シラバス「成績評価方法」および「授業計画」の作成 2 / 発表・質疑応答

各自が作成した「成績評価方法」について、全員が一通り発表。質疑応答は各自の設定した目標と評価方法との関連性を検討することから行われた。その他に取り上げられた話題の主なものは、以下の通り。

TOEICのスコアを成績評価に反映することの適否について。TOEICで優秀な成績を収めた生徒は出席しなくてもよいか、等。

リスニングの授業とその評価をどのようにすべきか。

出席を欠格条件とした場合の、出席点の扱いについて。出席点は不要ではないか。

担当科目、授業形態が異なる場合には、無理な面があるが、担当科目が同一である場合は、統一した評価基準が望ましい。

評価は客観的であるべき。客観性を保つための方策について。

総じて活発な意見交換が行われ、有意義なワークショップであった。

(藤原記)



1 1 . 講義 5(まとめ)

これで、一応すべてのグループの発表終わりました、ちょうどというか、ぎりぎりの時間になってしまいました。次に、最後の講義であります。講義 5 番、林先生の方からお願いしたいと思います。配付資料がございますので配ります。

林(教育) 先生方お疲れさまでした。教育でFD委員をやっております林でございます。今回、私の専門が教育方法ということで何か授業技術というようなことも含めて、評価の研修をさせていただいております。そこで、お役に立てるお話があればということで最後させていただきます。

資料を配布しましたので、講義 5 というところを読んでいただいたらいいと思います。今日、山本先生がお話しされていたような幾つかのやり方とか、農学部の大島先生が小テストをやっているいろいろな評価していることに関連しています。先生方お疲れだと思いますが、こういう機会ですから、今、小学校、中学校、高校の先生がこんな研修をやっているんだとか、海外ではどういうふうに教員研修やっているかとか勉強なさっていただければと思います。結論から申し上げますと、日本の先生の授業技術というのは世界的に非常に高く評価されています。日本の先生の技術を学びたいというような姿勢で研修が行われています。

ちょっとこれをごらんください。まず、中学校の子どもたちが授業をやっているんですが、この教科は総合的な学習の時間です。各教科のいろいろ得た知識を最終的にまとめ上げるという科目です。これは福井の中学校の授業風景です。福井に飛行場をつくったらいいか、つくらない方がいいかということ子どもたちにディベートさせているんです。最終的に自分の意見をみんなの前で発表して、最後にみんなの意見を聞くという、こういう授業をやっているんですね。

これをちょっとごらんください。つくった方がいい、つくらない方がいいというのは当然 2 つの班に意見が分かれるわけです。つくらない方がいい生徒たちは反対派からの資料を集めてみんなで議論をしている。で、最終的にプレゼンテーションを行うんですね。このような中学生が、これからやがて大学にやってくることになります。

次にごらんいただきたいのは、小中高等学校の先生の授業の風景です。やはり、基礎基本がきちりできてない先生が非常に多いんです。授業って一体何かを振り返ってみようって。先生方御存じのように、昨年度 289 名の先生が、教師不適格、そのうちの 5 名が免職になりました。これも、ここだけの話ですが、大阪府で高等学校の約半数の先生が授業ができないということで、今、再教育を行っています。その半数の先生はどのような学校にいるかということ、混乱校、もしくは進学校です。進学校は全く授業技術が要りません。先生が本と教科書を置いておけば自分でやっていきます。そういう現状で、今もう大変なことになっているんです。

これは、山口県の、四国からも来られていますが、授業技術の研修をやっているところです。やはり、ここで大事になるのは、今非常に問題になっています、何かしらないけど、個性個性っていいながら、先生たちも基礎的な学力がものすごく低下しているという現実です。

これを見ていただいたらわかりますように、この中に、先生方も非常にびっくりするような研修があります。これは、黒板の書き方を練習しているんですね。ここに書いたもの、例えば、言葉じゃなくて絵をかいて、あなたは子どもたちに伝えるときにはどういふようなことをしたらいいですかと。要するに、絵が上手、下手という問題の前に、先生が考えようとしないうけですね。

これを見てください。これは非言語の練習をしているんです。私は今日先生方のご発表を後ろで学生の気持ちになって聞きました。そしたら、あの先生はごっついシビアそうやなど、怖いとか、あの先

生はごっついアクティビティーやなどが、山本先生は熱血先生やなどが、そういう何かイメージがあるわけですね。これは、もうシラバス以前の問題なんです。ですから、どうしても、特に小中高等学校の先生が腕を組んで授業をすると、後ろで見ていると非常に不愉快です。

これは図形並びっというのをやっています。各先生に自分でここに図形をつくっていただいて、受講者の方に同じ図形を口頭で話してくださいという訓練です。これをやると、先生によってはめっちゃくち下手なんですね。自分が言っても、後に全然伝わってないという。

これが2つ目の授業です。山口大学の工学部の学生が今授業をやっている風景です。教科名はコミュニケーションです。この科目は徳島大学の工学部のFD科目と同じにしています。これは、自分の研究テーマを徳島大学の工学部の学生に教えてやってくださいというテーマです。

こういう訓練はなぜ必要かということ、学習者はどれだけの知識を持っているのか、どれだけのスキーマを持っているのかということを考えさせるためです。これそうですね、四国の人口を調べてきているわけです。山口大学にいながら、四国の学生に話しするときに、四国の学生たちはどういことに關心を持っているんだろう、どういう知識を持っているんだろう、こういうようなことですね。これも、コンピューター支援診断の画像システムで、実は四国にはこれだけのたくさんの高齢者がいるよということを前提に話をしているわけですね。こういうのは工学部の一例です。これが実はFD科目の一つの内容でございます。

それでは、少し本題に行きますが、ちょっとこれもごらんください。じゃあ、一番最後の班でありましたように、エクセルを教えたい、ワードを教えたい。じゃあ、なかなかスキルの差が出ちゃう、そういうのをどうしたらいいだろうか。じゃあ、人海戦術で補習をやるか、もしくは教材ですね。実は、これは、今年の5月に私がパキスタンの方に行ってつくってきた教材です。こういう教材を使って、エクセルとかワードについて勉強している、こういう教材を学生にも配布してます。これちょっとごらんください。これは実はデプターでつくっております。今ちょっと音声を消してますが、一番最初、一番上にありますように、何遍もリピートできます。ですから、これは説明用の教材です。そうすると、学生がこれを何遍も何遍も聞きます。ステップごとに一番最初のセルについての説明が入っています。こういうものが用意されていますから、先生が補習を一切しない。それには理由があるんです。パキスタンは、非常に先生たちの質がよくない。先生も足りないんです。ですから、こういう教材をつくって、学生たちに配って学習をするということが行われています。

これは説明用の教材ですが、例えば、最終的にこれを先生とやり取りをしたい、じゃあ、どうしたらいい、今日のメールの中に、シラバスの中にありましたね、こういうものがつくられてます。これ、今Yahooですが、Yahooでこういうように入れてやりなさい、こういうような教材を幾つか用意している。これで、とにかく遅れている子どもたち、学生たちに一生懸命やっていただくという、こういうようなシステムをつくってます。

それでは、ちょっと資料の方に戻っていただいて、もう時間はあんまりございませんのでもう一度確認していきたいと思います。

昨日、今日お話を聞いてて、授業をとってみたいというような気持ちになった先生の授業もあります。昨日もお話がありましたように、私たち人文社会と理工系というのは、はっきり違いがあるということですね。これが、レンガ積み上げ方式です。ですから、シラバスをやるときに、ここで切ったらいいいわけです。ここまでできたかできないか。これがレンガ積み上げ方式です。系統学習ですね。それと、人文の今日の先生がお話されましたように、ネットワークというのは、自分が興味を持ったものをためながら、また、クリティカルに、要するに、今言っていることは本当に正しいのかどうか、僕はそんなこといっちゃあおれませんか。医学部の先生から、我々教育学部は、こういうものをよくやっているよと

いうたら、とんでもないと言われました。というのは、やっぱりもうそんなことやったら国家試験通らないからといって、もうこれ現実ですよ。これ今歯抜けになっているわけです。こういう順番にやっていってるわけです。

ところが、今日御発表ありましたように、これをとってもいいじゃないかと。アジアと日本って何かおかしんじゃないか。そういうようなあたり、これはやっぱりクリティカルシンキングといって、一つの大きな今考え方になっている。これはいい点がいっぱいあるんですよ。ただ、やっぱりここをやるためには、先生からの教授技術がものすごく大きいんですね。要するに先生次第で子どもがかわるといふ感じがあります。それに対して、こちらはというのは、どちらかという、問題解決能力、要するに、問題をどんどん自分で解いていく。それとか、コミュニケーション能力ですね。ほかから知識をもらわないといけない。それとか、想像力が出てくる、意欲、これまさに情意面ですよ。ですから、こちらの方で情意面をつくるというのは非常に大変だということがわかります。こちらは、こういうように主体的なものです。今、学校教育はどちらに向いているかという、昨年度まではこちらでした。文科省は、生きる力とか何やらわけのわからんことを言っています。これがこちらです、はっきりいうて。生きる力って一体なんだって、で、今日も下で中学校の先生が、生きる力の研修会やってます。そうしたら、ある先生が、あれは何をやっているんだと聞くので、僕もわかりませんって答えました。そのとおりです。

こちら側は何かというたら、エクセルについての操作研修、オームの法則についての研修、こういうことです。はっきりしています。これがはっきりしてない。昨年度まで一生懸命、マスコミはこちらに行っていました。そろそろかわってきましたね、こちらです。最近言っているのが学力保証ということですよ。現場からそういう声があがっています。総合的な学習の時間は、実はこちら側ですから、情意、関心が非常に大きくなります。学校の方では評価しません。やったやらないだけです。ですから、これをやっているときに、今徐々にこちらに来ている。現場の先生は、教科の授業がやっぱり本当に子どもたちの学力につながっていると、要するに育成につながるということで、非常にこれを重視されています。これが私のイメージです、もうこれを見ていただいたらわかりますね。これは先生です。自分で勝手にシラバスをつくって、自分で目標をつくって、一生懸命やっている。子どもがついていけないから落とすという、これがはっきりいって、行動主義の我々の一般的な授業です。に対して、これが、今日、人文の先生もお話されたように、これいいじゃないか、好きなようにとれよと、どんどん伸びろよって、別に筋引っ張る必要ないよというのがこれです。これを評価せえっていうのは無理ですね、はっきりいって。ですから、小中高等学校は評価しないんです。

それで、そこに書いていますように、授業の創造というのは、やはり先生方が今日お話しているように、「わかる」「楽しい」「ためになる」。ここ辺、非常に何かややこしいことが出てきました。昨日からのお話で、認知って、別に認知を使わなくてもいいんじゃない、知識、理解でもいいんじゃないかと。それと、やはり昨日からお話が出ているように、有効な教材をつくってみる、そして、成果を一度1回開いてみよう。先生方御存じのように、今日つくった評価というのは来年どうなるかわかんないんです、はっきりいって。先生方が子どもたちの学生のどこの着眼点をもって評価することをしたらいいかということとはわからない上で、知識、理解とは何だとか、興味、関心は何だと、意欲とは何だと、これ勝手に自分の持っているイメージでしかやってない。ですから、やったことは、その評価というものを1回そこでさらけ出してみてもう一度今の授業技術に戻っていただく、こういうシステムを考えたらどうかと思います。これが、評価の内容です。受け入れのところでも、例えば、一つは、講義を受講する、関心があるっていうのと、何々ができる、集中する、新しい何々に関心を持つと、これは資料の方にも載っていますが、こういうような段階づけで、ある程度その評価はできるんじゃないか。これは、

ある意味でそれを評価するためにカテゴリー化しているわけですが、これをぜひやっていただきたいんですが、先ほど、山本先生だったかな、毎回授業のために小テストをやっている。そうすると、やっぱり大事なのは、授業を行うに際して最低必要限の知識や技能について、先生が知る必要があるんじゃないかと。実はこれ、私の一例ですが見てください。先ほどの徳島の例ですが、徳島大学の3回生を対象に、自分の研究テーマを伝えようというものです。そうすると、学生というのはいっぱい自分の意見を出してくるわけです。こういうふうにつないでいったらどうやろうかと。それを私たちがあんまり把握していないと、勝手に子どもたちはこれだけの知識持っているだろうということで、授業をやっちゃうんですよ。ここが、認知面での診断評価でも、情意面でも大事です。受講目的、それと、資料にお配りしておきましたが、先ほどの山本先生と同じようですが、私も小テストを行っています。小テストというのは、38ページぐらいですが、毎回これを行っています。これは何かというと、今日、先ほどから申し上げていますように、絶対に例えが出るといえば、オームの法則です。私は工学部出てますので、非常に工学部の先生に感謝したい点があるんですね。あるとき、子どもが、「先生テープレコーダーってどんどん小さくなるのに、なぜあのアダプターというのは、いつまでたっても重いのか」といって、このときに、やはり電圧ということが頭に浮かんできます。そして、「先生、整流ってあれどうやってやっているの」ちゅうたときに、ぼっとダイオードというような知識が出てくる。こういうように、何か子どもたちから聞いてきたことに対して、自分自身ができるというのが、最終的には私は基礎学力じゃないかと思っています。

それで、診断シートのところを見ていただいたらわかりますように、やっぱり事実というのは絶対に伝えなければいけない。それと、やっぱりそれに対してクリティカルに考える。今日もお話ありましたよね、例えば、滝野先生、これおかしいと違うか、アジアと日本というのは、そういうものをやっぱりきっかけとして与えて、子どもたちに書かせる。もう一点重要な点は、自分でこの授業をどれだけやったか、つかんだとかというのをフィードバックして、先生がつかんでいるということです。どうしても先生方はあんまり見ていない部分があるんですね。やっぱり子どもたちが一生懸命やったのに、なぜ同じことやったのに俺だけだめなんだという不満が出てきちゃう。

それで、その次のページを見ていただいたらわかりますように、学生が体調が悪いといって態度が悪いんですよ。私もどうして何回も態度悪いかなと思ったら、女性のあの日だったり、昨日どうしても何かやってて疲れていると。そうしたら、やっぱりもう正直に書かせて、実はこういうことと、もう一点は、ワンポイントを言っています。実はこれは60名ぐらいが限界です。先ほど5時間とおっしゃってましたね、山本先生、5時間の小テストを見る。これは、もう50名が限界。それ以外のときにはどうするかというと、例えば、出席カードの裏にワンポイントを書かせるとか、先生方が工夫するという事ではないでしょうか。そうすると、先生、板書ももう少し字を大きくしてくれとか、エアコンがきつ過ぎる、しゃべるのをもっとゆっくり言ってくれとか。こういうような本当にそのワンポイントを我々がフィードバックしてつかむということです。

それで、あと5分です。これ見てください。これ、先ほどありましたように、電子メールを私も使っていますが、これが回答箱になっているケースが多いんです。先生、いじめについてなくしたいんですがどうしたらいいでしょうかと。一言でいじめなんていうものを、簡単に書いてくるんです。それとか、自分の所属も書かずに、これは工学部の学生さんも多かったです。所属を書かずに自分自身の要件だけ書いて、名前がわからないわけですよ。そしたら、そしたら、m a k iとかs k y b l u eとかあるんです。自分はわかってるんですね。そういう教育を、今小中高等学校でやっているんですが、残念ながら、今大学に入っている学生はそういうことがわかんない。携帯メールの感触でやってくるんですね。ある人は、もう256文字ですから、それで切って、その2、その3ってレポートを持って置いとくま

す。非常に不愉快ですね、あれははっきりいって。せいぜい学校に来て、自分で張ればいいのに、それ先生張ってくれというて、続くって書いて。こういう親密感はいいいんですけど、やはり一線を置くというあたりで非常に問題になってくる。

プレゼンテーションってさっき言いましたように、やはり、今の考えでは、情意面です。情意面を含む重要な学習の場です。ですから、先ほど山本先生が言ったように、そのプレゼンテーションの評価ってあります、はっきりいって、話し言葉がちゃんとしているか、教材がどうか。だけど、今私が考えるのは、ある意味でいえば情意面で、最後に総括してそれを出すという場面でとらえたらどうかと思います。やはりここにありますように、自己と聞き取りによる総合評価ですから、私は学生に評価させています。

最後ですが、これも非常に今日の役に立つ内容だと思うんですが、持続力、昨日学長先生のお話、15分が限界ですね。これはいろいろ研究をされていて15分、テレビが大体15分でコマーシャル入れてますね。これやはりいろいろ研究されています。これが、実は記憶容量、今回、研修が始まったころ、先生方非常に記憶されているはずですね。ところが、だんたん過ぎてきて、今日の最後のもうここぐらいで早く終われというあたりで、ある悪い先生というか、非常に意地の悪い先生は、ここで次の時間試験するとか、今回やるぞとか言うんです。で、学生が聞いてないとなると、どっちがいいか悪いかといったら、両方とも悪いですね。

私の言おうとしている点は、一番最初に気宇というのを書いてますが、情緒的気宇というのは、怒る先生ですね。小学校でよくある机をたたく先生、ぼーんと。これが情緒的な気宇です。それと、もう一点。高等教育では、やはり、メディアを組み合わせると言うことですね。ですから、これから急に黒板書いて写せよと。こればかり書かせていると、もう15分が限界です。ですから、私はよく教員研修をしますが、15分過ぎると後ろの方で居眠りが始まるんですよ。だって、字はきれいだし、静かだし、暗いし、もう最高ですよ。ですから、ここで話題をかえるとか、やっぱりいい授業というのは、印象に残る授業ですから、今日私が8人グループの中でいろいろと印象に残ったものを簡単に挙げてみましょう。例えば、滝野先生、ここはもうクリティカルシンキング、アジアと日本、これはもう絶対忘れない。それとか、森岡先生、ロボコンが非常に好きなんだな。それと中内先生、この方は非常に論理的なお考えの持ち主だな、と。大島先生、この先生は非常にうまく行動目標と法制主義をくっつけていたのと、最後に、×じゃないと言っておられたり、ものすごく印象的でした。それとか、例えば、Eグループの山本先生、この先生はもう一言で熱血先生ですね。手を挙げるポイント制、こういうのが気宇です。それに、山本先生は、その整合性についてのいろいろな形成的評価にかかわって小テストで非常に苦勞されているなど、こういうあたりですね。これが実は気宇なんですね。これをこの授業の中に入れていっているんです。そうすると、今回もそうですね、要するに、Gまでのグループ発表をしましたが、やっぱり先生方に残っているものもあるじゃないですか。学生も同じなんですよ。ここに残っているんですよ、何らか。ここの気宇の部分で。ですから、僕は小単元を持ってきています。この授業でやるためのキーワードを持ってきています。そうすると、学生が比較的、これについて覚えてくれていると、そういうことでございます。

本当に先生方、非常に短い時間でしたがありがとうございました。滝野先生、本当にありがとうございました。日本とアジア、もうこれ絶対に今度授業でも使いたいと思います。

それと、Eグループの森岡先生も大変だと思いました。各国教官によるその評価を全部そろえていくというあたり、そのあたりも、私は非常に勉強になりました。それと、数学では、やっぱりなぜ、どうしてという、ある意味で探究心というか、価値、態度、そういうあたりの学習につながっている。大島先生、非常にすばらしい教材、ああいう教材があれば、ますます教育効果が上がるんじゃないかと思

ます。

それと、環境の山本先生、やっぱり正道評価の重要性というのは非常に大事だと思いますし、小テスト、絶対に頑張ってくじけずにやっていただきたいと思います。本当に大変だと思いますが。

笠谷先生、概要の中にオリジナリティを入れるというのは、僕はある意味で非常にいいんじゃないかと思いますね。単なるワープロ、エクセルを勉強するじゃなくて、自分が何に使いたいかというのをキーワードに入れるということは、学生にとって非常にいいんじゃないかと、そういうような感じがします。

ちょうど1分前でございます。大変お疲れさまでございました。授業技術は、やっぱりほかの先生に見ていただいて改善されるということですので、ぜひもし何かこういう授業技術について御質問とか、いろいろありましたら、私の方に御連絡ください。どうもありがとうございました。



12 . 閉会の言葉

司会（岩部） 2時になりまして、もうバスが来ているかと思いますが、最後に15分以内で全部終わらせたいと思いますけれども、丸本先生の方から閉会の言葉をいただきまして、その後アンケート用紙を配りますので、アンケート記入をお願いします。そのとき同時に事務の方から事務連絡をしていただきますので、よろしくお願いたします。

丸本（副学長） それでは、最後になりましたけど、私の方から最後のごあいさつを申し上げます。どうも1日半にわたりまして、研修御苦労さまでございました。私、出たり入ったりで申しわけございませんでしたが、先ほどの林先生のお話を聞いておりまして、これが絶対だという教え方はないっていう感じがいたしました。それから、大変難しい。結局、皆さん一人ひとりの個性がその授業に生きていけば、いい授業ができるというふうに思いました。

ただ、その中で幾つかポイントありますね。学生にあきさせない方法だとか、あるいは声の大きさ、あるいはその図表を考える。こういう点は、どなたが参考にされてもいいんじゃないかという気がいたします。その辺を一つの授業技術として皆さんが学ばれて、そして、自分の個性のある授業をしていただければ、学生は必ず理解するでしょうし、その他、たくさん成果が上がるだろうと思っております。

あと、この1日半の研修を通じて、私も過去何回か出ていて感じておりますことは、文系と理系の先生方が、こういう場で一緒になって、自分と全く違う授業をやっておられる先生方の話を聞くという、そこに逆にまた学ぶものがあるんじゃないかと思うわけでございます。やはり、学問のあり方とか、その専門が違くと全く同じでないところはたくさんあります。しかし、こういう場で聞くと、ああ、そうか、ああいう考え方もあるのか、ああいう組み立て方もあるのか、また、ああいう論理の持っていく方もあるのか、それがまたひとつ勉強になる。

それから、今日は林先生もいろいろコメントいただいておりますけど、ああ、あれは俺にないやり方だけでもいいなと思うことは、ぜひそれをどんどん真似していただいてもいいんじゃないかと思えます。何も全部真似しなくてもいいですけど、ああ、あそこは僕はぜひ今度取り入れようというところを、1つでも、2つでも取り入れていただけて、学生にわかりやすい授業をやっていただきたいと思っております。

それから、現在、法人化に向けて我々も会議を毎日やっておりますが、近いうちに、各学部、また共通教育を含めて、ピュアレビューと申しまして、同じ専門のグループの先生方に見ていただきながら、授業改善をします。これけなすためのことじゃなくて、その先生の問題点をできるだけみんなでディスカッションして、もうちょっと声を大きくしていただいけませんかと、もうちょっとこの辺を指示していただくといいんじゃないでしょうかといった、授業をよくするためのピュアレビューというものも、16年度から取り入れる予定でございます。大多数の学部がそれを実施すると明言しておりますので、むしろ、これは緊張するんじゃないで、今日みたいな感じで、リラックスしていただけて取り入れていただくということが、山口大学の授業改善につながると、私信じております。大変な時代に来たなと思えますね。今までは、本当に自分の勝手なやり方で、だれもコメントできなかったけども、しかし、今から先はそういう時代ではなくて、授業の内容から、あり方から、すべて公表されて、いろんな人の評価を受けるというか、そういう時代になってしまったと。それで、こんなことしていたら大学の先生になりてがなくなるんじゃないかと思えますけども、そうはいいはおれませんので、ぜひひとつこれをまた機会に、明日からの授業改善に生かしていただきたい。

そしてまた、今日もたった60名の方でございますね、900名近くいる教員の約10分の1以下で

ございます。明日、あさっての方あります。しかし、これ一巡するのに5年ぐらいかかるわけですね。ですから、担当者ももう毎年毎年工夫をしながらやっているんですが、多分今から先は、もうこういうFD研修会というのは、各学部で独自にやっていただくようになるし、それからまた、授業科目別部会といって専門家集団がありますね。そこで、専門家のための授業改善もやっていただきたいと思っています。

そして、できるだけ、山口大学に入ってきた学生が、いや、山口大学の授業はやっぱり違うよと、ぴしっと先生方もやっていただくし、また、落ちこぼれてもフォローもあるよという、そういったやはり授業を心がけていきたいと、私どもも思っております。

今日は本当に1日半御苦労さまでございました。また、よろしく申し上げます。来年また、それから来られる先生方に、不安があると言われたら、必ず行ってこいと、ぜひ御宣伝をいただきたいと思っています。よろしく申し上げます。ありがとうございました。



13 . 研修会資料

講義1 「今、なぜ、厳格な成績評価か？」

『中期計画及び認証評価体制への対応(体制整備)について』

2003/06/24 大学教育センター

(教員能力開発(FD)専門委員会 資料)

1. 機関審査(事前審査)から、認証評価(事後評価)へ
学校教育法69条関係(2002/12)、中教審答申(2002/08)、中期計画の達成度評価は認証評価の変形
2. 機関審査(たとえば設置審査)と認証評価との違い
 - 1) 機関審査:設置前(事前)に機関の教育目的と教育能力が教育目標を達成可能か審査する。
[教育目的]、カリキュラムと教員の能力(資格)の審査
 - 2) 認証評価:設置後に成果(Outcome)に基づいて機関の実績を点検・評価する。
教育目的、カリキュラム、授業の連携を含む成果の挙証を求められる。
3. 認証評価
 - 1) 教育目的・教育目標:教育目的・目標は妥当か?
 - 2) カリキュラム:カリキュラムは教育目的・目標達成に十分貢献しているか?
 - 3) 授業の教育目的・教育目標:全体の教育目的・目標に(どのように)貢献しているか? 他の授業と整合的か?
 - 4) 成績評価基準は授業の目的・目標に対応しているか?
 - 5) 実際に成績評価基準に従った成績評価がなされているか?
3)~5)がFDの課題
4. 認証評価体制への移行に伴う課題
 - 1) シラバス記載事項の整備
 - 1-1) 教育目的・教育目標の明示
教育目的は抽象的・包括的な授業の目的を示し、教育目標と関連づけられている必要がある。
教育目標は具体的で成績評価基準(観点)と明確に対応している必要がある。
 - 1-2) 評価基準と評価の観点・評価手段:厳格な成績評価
評価基準は何を合格の基準とするかを明示する。評価基準は授業の目的・目標に則した観点に基づき、観点に対して適切な評価手段を用いて測定されていなければならない。
注:評価手段とは定期テストとか実技とかであるが、その内容に踏み込んで知識・理解を客観テストで評価するとか、態度や考え方を評価するために論述式の応用問題を課すとかの観点との対応を示す必要がある。
 - 2) 評価基準に従って実際の成績判定を行ったことの挙証
成績評価の方法と実績の挙証のほか、学生授業評価も論拠となる。

(学校教育法)

(下線部、強調は引用者)

第六十九条の三 大学は、その教育研究水準の向上に資するため、文部科学大臣の定めるところにより、当該大学の教育及び研究、組織及び運営並びに施設及び設備(次項において「教育研究等」という。)の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする。

2 大学は、前項の措置に加え、当該大学の教育研究等の総合的な状況について、政令で定める期間ごとに、文部科学大臣の認証を受けた者(以下「**認証評価機関**」という。)による評価(以下「**認証評価**」という。)を受けるものとする。ただし、認証評価機関が存在しない場合その他特別の事由がある場合であつて、文部科学大臣の定める措置を講じているときは、この限りでない。

3 専門職大学院を置く大学にあつては、前項に規定するもののほか、当該専門職大学院の設置の目的に照らし、当該専門職大学院の教育課程、教員組織その他教育研究活動の状況について、政令で定める期間ごとに、認証評価を受けるものとする。ただし、当該専門職大学院の課程に係る分野について認証評価を行う認証評価機関が存在しない場合その他特別の事由がある場合であつて、文部科学大臣の定める措置を講じているときは、この限りでない。

4 前二項の認証評価は、大学からの求めにより、大学評価基準(前二項の認証評価を行うために**認証評価機関**が定める基準をいう。次条において同じ。)に従つて行うものとする。

第六十九条の四 認証評価機関になろうとする者は、文部科学大臣の定めるところにより、申請により、文部科学大臣の認証を受けることができる。

2 文部科学大臣は、前項の規定による認証の申請が次の各号のいずれにも適合すると認めるときは、その認証をするものとする。

- 一 大学評価基準及び評価方法が認証評価を適確に行うに足りるものであること。
- 二 認証評価の公正かつ適確な実施を確保するために必要な体制が整備されていること。
- 三 第四項に規定する措置(同項に規定する通知を除く。)の前に認証評価の結果に係る大学からの意見の申立ての機会を付与していること。
- 四 認証評価を適確かつ円滑に行うに必要な経理的基礎を有する法人(人格のない社団又は財団で代表者又は管理人の定めのあるものを含む。次号において同じ。)であること。
- 五 次条第二項の規定により認証を取り消され、その取消の日から二年を経過しない法人でないこと。
- 六 その他認証評価の公正かつ適確な実施に支障を及ぼすおそれがないこと。

3 前項に規定する基準を適用するに際して必要な細目は、文部科学大臣が、これを定める。

4 認証評価機関は、認証評価を行つたときは、遅滞なく、その結果を大学に通知するとともに、文部科学大臣の定めるところにより、これを公表し、かつ、**文部科学大臣に報告**しなければならない。

5 認証評価機関は、大学評価基準、評価方法その他文部科学大臣の定める事項を変更しようとするとき、又は認証評価の業務の全部若しくは一部を休止若しくは廃止しようとするときは、あらかじめ、文部科学大臣に届け出なければならない。

6 文部科学大臣は、認証評価機関の認証をしたとき、又は前項の規定による届出があつたときは、その旨を官報で公示しなければならない。

第六十九条の五 文部科学大臣は、認証評価の公正かつ適確な実施が確保されないおそれがあると認めるときは、認証評価機関に対し、必要な報告又は資料の提出を求めることができる。

2 文部科学大臣は、認証評価機関が前項の求めに応じず、若しくは虚偽の報告若しくは資料の提出をしたとき、又は前条第二項及び第三項の規定に適合しなくなつたと認めるときその他認証評価の公正かつ適確な実施に著しく支障を及ぼす事由があると認めるときは、当該認証評価機関に対してこれを改善すべきことを求め、及びその求めによつてもなお改善されないときは、その認証を取り消すことができる。

3 文部科学大臣は、前項の規定により認証評価機関の認証を取り消したときは、その旨を官報で公示しなければならない。

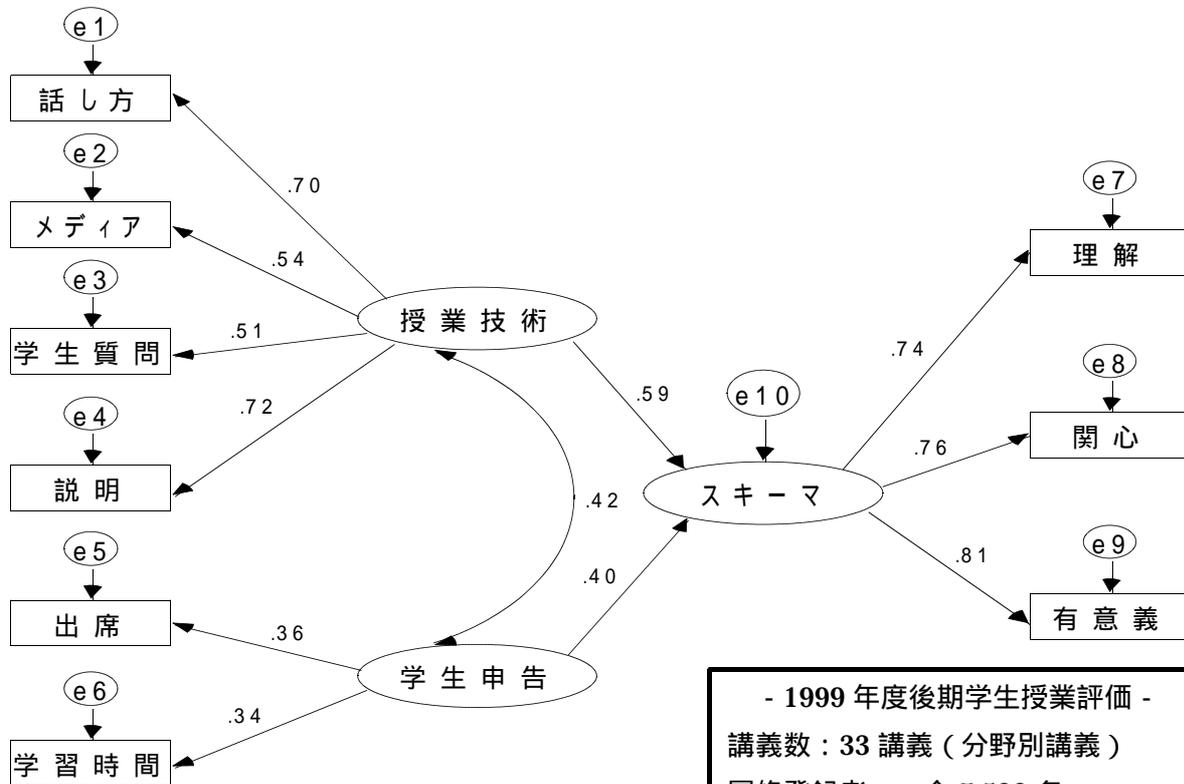
第六十九条の六 文部科学大臣は、次に掲げる場合には、第六十条の政令で定める審議会等に諮問しなければならない。

- 一 認証評価機関の認証をするとき。
- 二 第六十九条の四第三項の細目を定めるとき。
- 三 認証評価機関の認証を取り消すとき。

<メモ>

講義2 「授業技術に関して」

1. 授業技術の「理解度」「満足度」への影響



- 1999年度後期学生授業評価 -
 講義数：33講義（分野別講義）
 履修登録者：全7,599名
 回収数・率：3,811名（50.4%）
 有効回答数：2,918名
 CFI=.961, RMSEA=.062
 AIC=332.554, GFI=.978

2. 良い講義（プレゼンテーション）の条件

- (1) 学習者のレディネスの把握（学生授業評価：「説明」項目）
- (2) 分かりやすい論理構成（学生授業評価：「説明」項目）
- (3) 方法の工夫
 - 3-1) 言語関連（学生授業評価：「話し方」項目）
 - 3-2) 非言語関連（学生授業評価：「態度」項目）
 - 3-3) メディア関連（学生授業評価：「メディア利用」項目）
- (4) その他授業運営の工夫
 - 4-1) 指導者と学習者とのコミュニケーション関連
 （質問、机間巡視、KR、学習者の応答、学習者への指示の仕方、学習者の参加等）
 - 4-2) 授業の雰囲気作り（不測の事態への対応、怒り方、誉め方等）
 - 4-3) 導入・展開・まとめと授業の内容
 （導入の方法、展開の方法、まとめの方法、授業の内容等）

講義3 - 1 「授業の目標の設定」

1. JABEEを初め、各種認証評価は、学習・教育目標に対してその到達度を挙証することが求められている。授業の成果としての目標の分類方法は、分類の視点の違いによって様々なものがあるが、教科や学問領域の枠を超えて、共通の体系に当てはめて考えようとしたものに、Bloom, B. S. (1956)らによる教育目標分類学がある(表1)。

- 表1 -

. 認知的領域 (Cognitive Domain)

1. 「知識」 事物・事象・方法・プロセスやパターンなどを想起できること
 - 1-1 個別的なものの知識(述語の意味、人名や事件、年、場所など)
 - 1-2 特定のものを扱う手段・方法の知識(探求や批判の仕方、扱い方、分類法など)
 - 1-3 一般的・抽象的なものの知識(説明したりまとめるときに使う概念)
2. 「理解」 伝えられたことの意味が分かる
 - 2-1 変換(意味を変えずに表現を変える。いわば逐次的翻訳)
 - 2-2 解釈(情報を再度構成し見直して説明・要約できる)
 - 2-3 外挿(情報に沿いつつその範囲を超えて傾向・趨勢を見る)
3. 「応用」 一般的な概念・手順の規則や方法などの抽象概念を、特定の具体的状況に適用すること
4. 「分析」 情報を関係・組織原理などの要素に分けて関連を明らかにできること
5. 「総合」 まとまった考えを作ったり、計画立案したり、関係を演繹すること
6. 「評価」 目的に照らして素材や方法の価値を判断すること
 - 6-1 内的基準による判断(情報内容の一貫性や論理的正しさで内容を評価)
 - 6-2 外的基準による判断(記憶されたり選定された外的基準で素材を評価)

. 情意的領域 (Affective Domain)

1. 「注意すること」
 - 1-1 意識する(ほとんど認知行動と見うる)
 - 1-2 意欲的な受け入れ(対象に注意したり、注意すべきものを避けない)
 - 1-3 統制された選択的行動(状況の側面は弁別できるが評価や緊張は伴わない)
2. 「反応」
 - 2-1 反応としての黙従
 - 2-2 意欲的な反応
 - 2-3 満足感のある反応(喜びなどの情緒的反応を伴う意欲的反応)
3. 「価値づけ」
 - 3-1 一つの価値を受け入れる(信念や態度を含む諸現象に一貫し安定した反応を示す)
 - 3-2 一つの価値を好ましいとする
 - 3-3 一つの価値にもとづいて行動する(進行と言えるほどに価値を内在化している)
4. 「組織化」
 - 4-1 価値の概念化
 - 4-2 価値体系の組織化(種々の価値の秩序ある統合)
5. 「価値による個性化」
 - 5-1 一般化された構え(個人をその広範な行動に一貫する傾向で記述できるほど体系的な組織化)
 - 5-2 個性化の実現(人生観や世界観)

. 精神運動的領域 (Psychomotor Domain)Harrow, A. J.によるもの

1. 「反射運動」
 - 1-1 単脊髄反射(危険に対し手肢を体に引きつける)

- 1-2 間脊髄反射（２つ以上の単脊髄反射）
- 1-3 超脊髄反射（脳を介した反射）
- 2. 「基本的 - 基礎的運動」
 - 2-1 移動運動（這う、走る、登るなど）
 - 2-2 非移動運動（ゆする、かがむ、まわるなど）
 - 2-3 操作運動（箱を積むなど協応的運動）
- 3. 「知覚的能力」
 - 3-1 筋感覚的弁別（身体の空間的位置的感覚）
 - 3-2 視覚的弁別（図 - 地弁別や知覚恒常性）
 - 3-3 聴覚的弁別（音の方向・記憶など）
 - 3-4 触覚的弁別（触れて硬軟・粗密など）
 - 3-5 協応能力（目 - 手、目 - 足の協応など）
- 4. 「身体的能力」
 - 4-1 持続力（酸素の供給利用能）
 - 4-2 筋力（漸増する抵抗に耐える力）
 - 4-3 柔軟性（関節の動く範囲）
 - 4-4 敏捷さ（動きの巧妙さと素早さ）
- 5. 「熟練した運動」
 - 5-1 単純な順応的技能（鋸をひく、ワルツを踊るなど）
 - 5-2 複合的順応的技能（剣技、カヌーなど）
 - 5-3 複雑な順応的技能（空中体操技など）
- 6. 「非論弁的コミュニケーション」
 - 6-1 表出運動（表情、ジェスチャーなど）
 - 6-2 解釈的運動（創作ダンスなど）

2. 行動目標

目標は「教師の学習者に対する働きかけが終わったときに、教師が学習者に証明できるようになってもらいたい行動」の形で表すことが目標の明確化であるとして、目標を、学習者が学習後に達成する学習成果としての行動として表現する。これらの行動は、観察できるものだけでなく、観察することはできないが、観察できる行動から、あるいは一連の行動の系列から十分に推測できる行動までを含む。これらの行動を表す動詞を、「行為動詞（表２）」と呼ぶ。

行動目標は、その背後に目標についての思想と技術を伴っている。理念に偏らず、具体的な教育評価や教育技術との関連で目標を記述することが重要である。

- 表 2 -

「行動目標の記述に用いられる行為動詞（例）」

・ 認知的行為動詞

説明する	構成する	命名する	再構成する	比較する
計画する	予測する	発見する	見つける	推論する
区別する	区分する	分類する	同定する	測定する
分析する	配列する	系統化する	一般化する	公式化する
正当化する	関係づける	合成する	分離する	配列する
計算する	質問する	帰納する	演繹する	定義する
評価する	批判する	識別する	検証する	結合する
結論する	決定する	対応する	対照する	選択する
選別する	適合する	指摘する	列挙する	概括する
要約する	解釈する	描写する	叙述する	指示する
収集する	応用する	保存する		

・運動的行為動詞

走る	跳ぶ	投げる	反復する	打つ
止める	入れる	防ぐ	かわす	持ち上げる
引く	押す	倒す	反応する	

・創作的行為動詞

構成する	制作する	彩色する	スケッチする	作曲する
作詞する	表現する	歌う	合奏する	合唱する

・技能的行為動詞

削る	切る	貼る	つなぐ	組み立てる
操作する	測定する	調整する	混ぜる	配合する
解剖する	書く	描く	運転する	修理する

・社会的行為動詞

発表する	意見を聞く	受容する	賛同する	報告する
後始末する	かたづける	協力する		

以上、西之園晴夫(1986)「コンピュータによる授業設計と評価」より抜粋

・一般行為に用いる行為動詞(例)

書く	記述する	表現する	述べる	意見を述べる
経験を話す	感想を話す	考えを発表する	挙手する	
学習内容を発表する	説明する	図示する	表示する	複写する
例示する				
グループの意見を発表する		提示する	グラフ化する	報告する
記録する	ノートに記録する		データを記録する	
教科書を読む	参考書を読む	問題を読む	作品を聴く	説明を聴く
話を聴く	グループで相談する		質問する	
後始末する	片付ける	繰り返す	書き直す	調べる
選ぶ	準備する	計算する	組み立てる	取り付ける
練習する	再生する	討論する	議論する	協議する
名前を付ける	列挙する	整える	試してみる	記憶する
思い出す	提案する			
区別する	利用する	採用する	対比する	分析する
テストする	操作する	比較する	選り分ける	割り当てる
選択する	学習課題を作る	反省する	解決する	予定する
見積もる	調査する	収集する	分類する	順序づける
試作する	試みる	設計する	開発する	計画する
構成する				
応用する	吟味する	展望する	組織する	予測する
予想する	反論する	批判する	判断する	調整する
経営する	創造する	認識する	評価する	支援する
弁護する	査定する	理解する	解釈する	翻訳する

定義する

賞賛する

以上、西之園晴夫(2002)、「多人数教育における実践知創造科目開発の方法論」から抜粋

理数系科目における行為動詞の使い方(例)

- 1. 受容・体験 : ~を見る ~を読む ~を聞く ~を書き写す
 ~を測定する
- 2. 記憶 : ~の定義・記号・定理・例を暗唱・再生できる
 ~に関する観察事実を再生できる ~と現象の関係を説明できる
 ~の内容と式表現を対応させて暗唱できる
- 3. 同定・識別 : ~に基づいて例を分類・識別できる
 ~が適用可能か判定できる
 ~がどう利用されているか判定できる
 ~と類似概念との違いを説明できる
 ~が成り立つことを確認する
- 4. 適用 : ~の例や現象を列挙できる ~に数値をあてはめて計算できる
 ~を用いて解を求められる ~を用いて数式の変形操作ができる
 ~を用いて現象を定式化できる ~を適用して結果を予測できる
- 5. 結合 : ~を用いて証明できる ~を適用して現象を説明できる
 ~を用いて推論可能なことを列挙できる
 ~の適用を計画できる ~と~との関係を説明できる
 ~を使って図に表せる ~を用いて仮説を立てられる
 ~を調べるための実験を計画できる
- 6. 評価 : ~の意味を解釈できる ~が役立つ例を挙げられる
 ~の制約を説明できる

以上、松田稔樹(1993)、「教授活動モデルに基づく授業改善」より抜粋

一般目標と行動目標記述のための動詞例

1. 一般目標記述のための動詞の例

知る	認識する	理解する	判断する	適用する
価値を認める		感じる	考察する	使用する
実施する	評価する	位置づける	示す	創造する
修得する	身につける			

2. 行動目標記述のための動詞の例

2-1 認知的領域

列挙する	述べる	具体的に述べる	記述する	説明する
分類する	比較する	一般化する	類別する	指摘する
関係づける	判断する	予測する	選択する	同定する
推論する	対比する	公式化する	使用する	識別する
応用する	適用する	演繹する	結論する	批判する
評価する				

2-2 情意的領域

尋ねる	助ける	討議する	寄与する	コミュニケーションする
協調する	見せる	表現する	感じる	始める

参加する 配慮する	反応する 相談する	応える 示す	系統立てる	相互に作用する
--------------	--------------	-----------	-------	---------

2-3 精神運動的領域

感じる	始める	模倣する	熟練する	工夫する
実施する	創造する	解剖する	注射する	挿入する
操作する	動かす	手術する	触れる	触診する
打診する	聴診する	調べる	準備する	測定する

以上、医学・歯学教育ワークショップ配付資料（富士研修所）参照

3. 行動目標の限界

知識の修得や操作技能・運動技能等に関わる目標等の行動で表現できる目標は、それを達成する手順と筋道が比較的明確で、直線的に形成することができる。それに対して、興味・関心、態度、学習意欲、価値観等の情意的な目標は、それを達成する手順と筋道が複雑かつ多様であり、これらは、行動目標として表現することが困難な目標である。（南部、1993）

また、学習者は失敗から学ぶことが多く、目標として設定した行動やそれに近い行動ができたか否かだけで短絡的に成果を評価することは間違いだという批判も多い。

さらに、初等・中等教育の実践の中には、一つの教科の1時間の授業の設計に、行動目標を上位目標から下位目標まで分類し、分刻みで目標を設定することが見られるが、多くの場合、「目標つぶしの授業」と呼ばれ、生き生きした学習者の活動を疎外する原因ともなっている。

しかしながら、JABEEの認定基準にも、「情意的領域」に関わる学習目標や、認知的領域でも短期的な行動目標では達成できない高度な目標（表3）が示されているほか、昨今の認証評価には、目標の設定とその達成度の挙証が大前提となっていることから、行動目標の限界を認識しながらも、当面はその枠組みの中で教育活動を進めなければならないと考える。

- 表3 -

日本技術者教育認定基準、基準1「学習・教育目標の設定と公開」

- (1) 自立した技術者の育成を目的として、下記の(a) - (h)に示した知識・能力等を網羅したプログラム独自の具体的な学習・教育目標が設定され、公開されていること
 - (a) **地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養**
 - (b) **技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、および技術者が社会に対して負っている責任に関する理解(技術者倫理)**
 - (c) 数学、自然科学および情報技術に関する知識とそれらを活用できる能力
 - (d) 該当する分野の専門技術に関する知識とそれらを用いて問題解決に活用できる能力
 - (e) 種々の科学、技術および情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力
 - (f) 日本語による論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力
 - (g) **自主的、継続的に学習できる能力**
 - (h) 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力
- (2) 伝統、資源および卒業生の活躍分野等を考慮して、特色ある学習・教育目標が設定され、公開されていること
- (3) 学習・教育目標が社会の要求や学生の要望を考慮して設定されていること

4. 梶田叡一の目標類型

梶田（1978）は、行動目標の考え方に潜む狭さを批判し、達成目標、向上目標、体験目標の3種類に類別し、目標類型とBloomらの目標領域を整理した（表4、表5）。

- 表4 -

目標類型と目標領域の観点からの代表的目標例の分類（梶田）

領域 \ 目標類型	達成目標	向上目標	体験目標
認知的領域	知識、理解等	論理的思考力、創造性（思考、判断）等	発見等
情意的領域	興味、関心等	態度、価値観等	触れあい、感動等
精神運動的領域	技能、技術等	練達等	技術的達成等

- 表5 -

目標類型と目標到達性（梶田）

領域 \ 目標類型	達成目標	向上目標	体験目標
到達性の確認の基本視点	目標として規定されている通りにできるようになったか	目標として規定されている向上が見られるかどうか	目標として規定されている体験が生じたかどうか
目標到達性の性格	特定の教育活動の直接的な成果	多様な教育活動の複合的総合的な成果	教育活動の内在する特定の経験
到達性確認に適した時期	授業中 単元末、学期末、学年末	学期末、学年末	授業中 単元末

<メモ>

講義 3 - 2 「シラバスの目標の書き方」

1. シラバスとは何か？

- ・ 学生が科目選択を行ったり、履修計画を立てたりするための情報。
- ・ 学生が授業中や授業外で学習を行うための指針となるもの。
- ・ 教員が学生に示す授業全体の設計書、契約書。

2. 山口大学のシラバスはどのように作成されているか？(2003年度)

Webシラバス「かぼす」のフォーマットを利用・・・共通教育、人文学部・人文科学研究科、教育学部・教育学研究科、経済学部・経済学研究科、農学部・農学研究科、医学部(保健学科)、東アジア研究科

独自のフォーマットを利用・・・理学部・理工学研究科(理学系)、工学部・理工学研究科(工学系)、医学部(医学科)

3. シラバスにはどのような内容が含まれているか？

授業(開設)科目、単位数、担当教官、開設期、開設時限、授業区分、対象学生、授業の概要、授業の目標、授業計画(15週)、成績評価方法、教科書、参考文献、連絡先・オフィスアワー、メッセージ・担当教官からの希望事項
どの学部のシラバスにもほぼすべて含まれている。

4. シラバスの書き方

学生が科目選択・履修計画を行う上で役に立ち、授業中・授業外での学習を充実させることのできるシラバスを作成する。

シラバスの作成は、教員にとっては授業の概要・目標の設定、授業計画とそこで用いる教授法・学習メディアの選定、目標に沿った成績評価方法の選択など、具体的に授業をデザインする過程であり、授業を成功に導くための大切な作業である。

(1) 授業の概要

- ・ どのような授業を行うのか、授業の趣旨(目的・ねらい)を記入する。
- ・ 学生が理解できるよう、分かりやすい言葉で具体的に書く。専門用語を多用しない。

(例)

- ・ を講義する、 を説明する、 を紹介する、 を明らかにする、 を提示する、 を考察する、・・・

(2) 検索キーワード

- ・ 学生が検索しやすいキーワードを記入する

(3) 授業の目標

- ・ 学生がどのような知識や態度を身につけることができるかを示す。
- ・ 2003年度版は1つの欄に自由に記入したが、2004年度からは「授業の目標(一般目標)」「授業の目標(到達目標)」の2つに分けて記入する。
- ・ 授業の目標(一般目標)には、学生に達成させたい目標を簡潔に記入する。
- ・ 授業の目標(到達目標)には、一般目標を達成させるための個別の到達目標を記入する。その際、知識・理解(認知的領域・達成目標)、思考・判断(認知的領域・向上目標)、関心・意欲(情意的領域・達成目標)、態度・価値観(情意的領域・向上目標)、技能・表現(精神運動領域・達成目標)、その他、の6つの到達目標の中から該当する項目を選択し、行為動詞(を説明できる、 を討議する等)を用いて具体的に記入する。

< 到達目標の具体例 > (2003年シラバスより該当箇所を抜粋)

知識・理解(認知的領域・達成目標)

- ・ドイツ文学に親しみ、作品が問いかける問題を読み取って理解を深める(共・外国文学)
- ・現代の論理学で用いられる代表的な記号の意味、命題論理の基本を理解する(共・哲学)
- ・東洋史上の遊牧民族の興亡を通観することによって遊牧民族社会の特質を理解する(共・東洋史)
- ・社会学の基本的な考え方を身につける(共・社会学)
- ・世界の政治と経済、日本の政治と経済を見る目を養うとともに、経済学の基本的な知識の習得を目指す(共・経済学)
- ・政治学の基本的な問題について、幅の広い理解を得ることを目標とする(共・政治学)
- ・日本の教育改革の性格について基礎的理解を得る(共・教育学)
- ・心理学全般に関する基礎的知識の習得を通して自己理解および他者理解を深める(共・心理学)
- ・壮大かつ緻密な構想をもつ西洋音楽の生成過程、的確に理解、把握してほしい(共・芸術概論(西洋音楽の発展と生成))
- ・至適な健康・体力を維持・増進するための運動処方についての科学的な知見を理解する(共・運動健康科学)
- ・「病」「健康」「医療」「医学」について、自分なりに定義し、人に示すことができる(共・医療環境論)
- ・分数関数、無理関数、三角関数、指数関数、対数関数の極限や導関数の意味を正しく理解し、基本的な定理や公式が正しく運用できるようになる(共・数学入門1)
- ・授業科目の「物理学I」と「物理学II」を履修するために必要な思考方法と計算方法を身につける(共・物理学入門1)
- ・高校レベルの化学の内容を確認しながら、物質の理解に必要な基本的な原理や考え方を確実に理解・習得し、共通・専門教育で開講されている化学関連の授業を受講するための基礎を身につける(共・化学入門1)
- ・共通教育の生物学を受講する為の基本的な能力を身につけることを目標とする(共・生物学入門1)
- ・人類が生活している地球の表面および地球の中心から宇宙への広がりを理解することにより、人類にとって何が大切であるかを考える(共・地球科学)
- ・現代社会の支柱である科学技術のあり方を歴史的経緯をふまえて正確に理解できるようになる(共・科学史)
- ・基本的な文法項目と日常表現に習熟する(共・ドイツ語入門1)
- ・TOEICテストで「単語力」「文法力」「聴解力」「速読力」「即断力」を養いながら、本格的な英語での「コミュニケーション実践に立ち向かう」態勢を整える(共・TOEIC準備)
- ・高度情報化社会に必要な情報処理の基礎知識を修得することを目標とする(共・情報処理概論)
- ・情報とデータ表現について説明できる(共・情報社会と人間(主題別))
- ・失業問題について、法学、経済学、社会学、心理学からアプローチし、多面的な検討を行うことを通して、複眼的な考察の重要性について受講者に理解してもらう(共・失業問題の多面的検討(総合))

思考・判断(認知的領域・向上目標)

- ・「正義」について批判的で柔軟な見方・考え方ができるようになる(共・倫理学)
- ・哲学の根本問題に触れながら、自己の生のトータルな哲学的反省を開始する(共・哲学)
- ・人文科学としての歴史学に触れ、学問上の常識や通説を疑い再検討することの必要性を学ぶ(共・日本史)
- ・日常生活を「あたりまえ」のこととして片づけるのではなく、様々な人間の営みや制度、システムなどの観点から複眼的に再構成していく思考様式を身につける(共・社会学)
- ・我々の生活と経済活動がどのような形で結びついているのかを考える力を養う(共・経済学)
- ・憲法という政治的・公的な世界のルールを、具体的・個人的な生活世界との関連で考察する(共・日本国憲法)
- ・現在進行している日本の教育改革の性格を、第二次大戦後の教育の歴史的展開から考える(共・教

育学)

- ・最終的に自分なりのよりよい見方を身につけてほしい(共・心理学)
- ・日本近代における美術にまつわる諸問題への認識を深め、美術のあり方について自らの見解を持つ(共・芸術史(日本近代美術史))
- ・自らの生活スタイルや求める健康・体力に応じて具体的、実践的に有効な運動処方を組み立てることができることを目標とする(共・運動健康科学)
- ・病・健康・医学・医療を歴史的な脈絡の中に位置づけた上で、そのながれから導き出される医学・医療の現状と将来について、自分なりの意見を表明できる(共・医療環境論)
- ・関数の概念とそれを解析する方法である微分積分学を学ぶことにより、論理的な考え方を身につける(共・数学入門1)
- ・微分方程式を用いて物理現象を記述、解決できるようになる(共・物理学1)
- ・本講義をとおして新しい地球観を身につけ、生命に満ち溢れた地球を維持しつづけるにはどうしたら良いのかを考える(共・現代地球科学総説)
- ・近未来の科学技術社会への洞察力を養う(共・科学史)
- ・日本語とは異なる発想や表現を通して、視野を広げ物事を複眼的に観るようになること(共・フランス語初級1)
- ・学生自身の生活世界のなかから、批判的視座を獲得する(共・歴史を語るのは『誰』- アメリカ黒人の目(主題別))

関心・意欲(情意的領域・達成目標)

- ・身近な地域に関する歴史的関心を深めながら問題意識を高める(共・日本史)
- ・現代社会のしくみや変化の趨勢について関心の幅を広げ、それらを眺める視点を掘り下げていく(共・社会学)
- ・さらなる心理学への興味が湧く(共・心理学)
- ・同時代に活躍する作家とその表現、自らを取り巻く環境における芸術活動に対する関心を高める(共・芸術史(現代美術史))
- ・「医療環境」に関わる様々なテーマを自分自身で見つけ出し、自分なりの意見を持ち、人にわかりやすく説明できる(共・医療環境論)
- ・宇宙論や相対性理論などの最新トピックスに興味をもつ(共・物理学1)
- ・官能基の化学や化学反応の機構を理解して、有機化学のおもしろさや楽しさを知って欲しい(共・化学)
- ・地球を大切にしたい気持ちを抱いてもらうことと、テレビや新聞・雑誌の地球に関するニュースに関心を持ってもらうことが目標である(共・現代地球科学総説)
- ・ドイツ社会一般に関する理解を深め、旅行、留学など実際にドイツに触れる意欲を高める(共・ドイツ語入門1)
- ・「英語でのコミュニケーション志向」(使える英語)の意識と意欲を喚起する(共・TOEIC準備)
- ・過去をみる「まなざし」について意識を高める(共・歴史を語るのは『誰』- アメリカ黒人の目(主題別))

態度・価値観(情意的領域・向上目標)

- ・倫理的な問題について主体的に考える(共・倫理学)
- ・教育に付きまとう「べきである」論を一旦留保し、丹念に事実を探求し、その結果に基づいて分析し、議論する態度を身につける(共・社会学)
- ・新聞をきちんと読めるようになる(共・経済学)
- ・法的な問題意識を自ら探求していくことができるようになる(共・法学)
- ・個々人や人間社会について、共感的な理解や対応ができ、人間理解のための一助となる(共・心理学)
- ・生涯にわたってスポーツを実践し、スポーツを楽しむ積極的な態度を養う(共・スポーツ運動実習(バドミントン))
- ・「医療環境」に関わる様々なテーマについて、ディスカッションや共同作業を通して異なる意見を持つ

- つ人たちと意見を闘わせ、あるいは折り合いをつけることができる（共・医療環境論）
- ・大学は、自ら課題を見い出し、それ明らかにしていくことを基本的な学問態度として要求します。この授業でそういう態度を身に付けて欲しいと思います（共・生物学1）
 - ・自習課題を通して、少なくとも週6日1日1時間の英語の「自学自習」の習慣を身につける（共・TOEIC準備）
 - ・コミュニケーション活動について学び、自己改善ができる（共・情報社会と人間(主題別)）

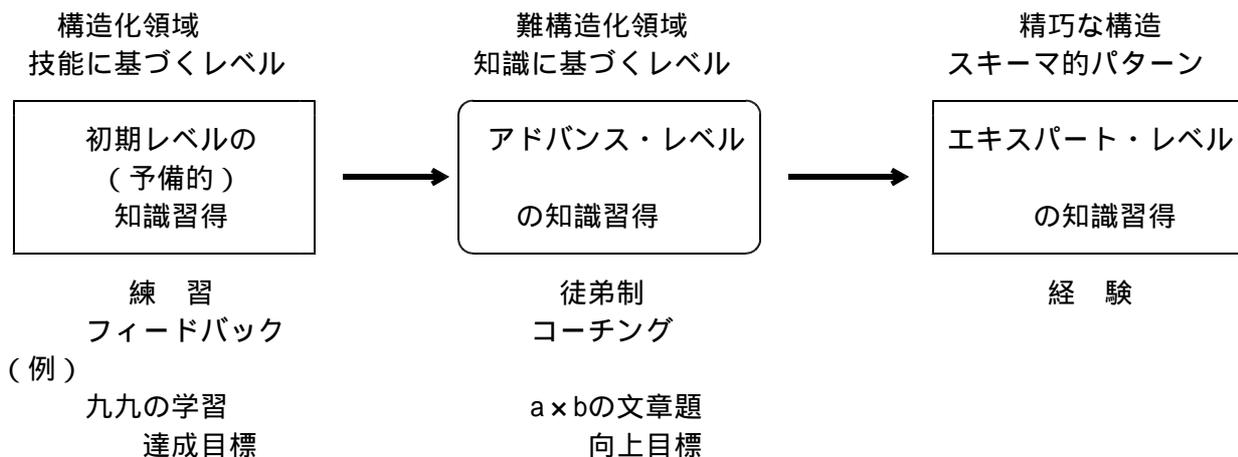
技能・表現(精神運動領域・達成目標)

- ・絵画・陶芸の制作を通して、美術の一端を理解する（共・芸術実践(美術)）
- ・この授業では、ラリーを続けるという楽しみを味わいながら、ゲームに必要な技術を習得し、バドミントンという実践能力を養う（共・スポーツ運動実習(バドミントン)）
- ・大学での修学に必要な技能：大学を利用して情報収集できる技能と「読む」「書く」「話す(議論する)」+プレゼンテーションの技能の涵養(共・基礎セミナー(経済))

<メモ>

講義 4 - 1 「授業計画と成績評価方法」

1. 知識習得の3段階モデル (Jonassen, D. H, 1991)



2. 向上目標に対応する授業の設計

行動目標は、具体的な教育評価や教育技術を伴っている。

「達成目標」は、練習やフィードバックに基づいて、特定の具体的な知識や技術を身につけさせる目標であり、比較的容易に、達成したかどうかを確かめることができる。

一方、「向上目標」は、ある方向へ向かっての向上や深まりが要求される目標で、思考力、思想、社会性等の包括的・総合的目標などに相当する。それらを、あらかじめ目標として盛り込むためには、かなり高度な授業設計が必要であり、またその評価も長期的かつ計画的、総合的な仕組みが必要である。

授業の形態	評価の方法	評価の主体
<ul style="list-style-type: none"> ・ 協働学習 ・ 個別学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・ レポート ・ プレゼンテーション ・ 作品や実演 ・ ポートフォリオ ・ パフォーマンス・テスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己評価 ・ 相互評価

構成主義の学習環境をデザインするためのガイドライン (久保田、2002)

- (1) 学習活動を実際に解決しなければならない問題として、より大きな枠組みの中に埋め込む。
- (2) 学習者が問題や課題に主体的に取り組めるように支援する。
- (3) 本物 (authentic) の問題状況をデザインする。
- (4) 現実の複雑な社会状況を反映した学習環境と課題をデザインする。
- (5) 問題解決に向けて取り組んでいるプロセスを学習者自身が自分のこととして捉える環境をデザインする。
- (6) 学習者の学びの過程を支援し、多様なコミュニケーション・モードを活用する環境をデザインする。
- (7) 多様な視点で評価できる学習環境をデザインする。
- (8) 学習内容と学習プロセスの両方について内省する機会を用意する。

講義4 - 2 「シラバスの各週の授業計画と成績評価方法の書き方」

1. 授業計画

- ・ 授業計画を「週単位」(15回)ごとに分けて記入する(全学的なシラバスの統一のため、できるだけ授業計画を週単位ごとに分けて入力する)
- ・ 週単位ごとの授業計画がたてられない場合には「全体」の方に入力する。
- ・ 「週単位」と「全体」の両方に記入することも可能。
- ・ 「授業外学習の指示等」の欄には次の授業までに提出する宿題、提出物、参考文献の指示などを記入する。
- ・ 「授業の記録」の欄には各授業で使用した資料を必要に応じて随時アップロードする。

2. 成績評価方法

- ・ 「成績評価方法(総合)」に成績評価方法の概要を入力する。
- ・ 「成績評価方法(観点別)」には「授業の到達目標」に応じた成績評価方法を選択する。
- ・ まず、「授業の到達目標」と「成績評価方法」との関係を示す。評価において非常に重視する領域には、重視する領域には を記入する。
- ・ さらに、成績評価割合(%)を記入する。2003年度は20-40%というように幅があったが、2004年度からは具体的な数字を記入する。
 <例> 定期試験7割、授業中のレポート2割、宿題1割の総合評価で成績評価を行う場合、「定期試験」を70%、「小テスト・授業内レポート」を20%、「宿題・授業外レポート」を10%にし、後の項目を「評価に加えず」にする。
 また、出席日数が足りない場合に単位を出さないようにしている場合には、「出席」を「欠格条件」にする。他の項目についても同様。
- ・ 成績評価で重要視している項目がない場合には、「その他」の右の空欄にその項目名を入力し、その割合を記入。
- ・ JABEE指定科目となっている授業は該当する「JABEE収集資料」欄に をつける。

(例) Webシラバス改訂版(2004年度より)の成績評価欄

成績評価方法(観点別)								
到達目標等	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE収集資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)								
小テスト・授業内レポート								
宿題・授業外レポート								
授業態度・授業への参加度								
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品								
演習								
出席								
その他()								
合計								

(参考)教育活動の評価方法

各評価側面に適した評価方法

評価方法 \ 評価側面	知識・理解	思考力・論理力	興味・関心	態度	技能
標準テスト					
教師作成テスト					
質問紙法					
問答法					
観察記録法					
レポート法					
製作物法					

印はその評価側面にふさわしい評価方法を、 印は評価可能な評価方法を表す
 出典：梶田叡一『教育評価』第2版補訂版、有斐閣双書、2002年、164頁。

- ・標準テスト・・・テストの専門家によって作成された標準発達検査、標準言語能力テスト、標準学力検査など、いわゆる標準化テストを用いる方法。テストの形態としては教師作成テストの場合とほとんど同じである場合もあるが、広範囲の子どもにあらかじめ予備的に施行した結果に基づいて得点解釈の基準が作られているので、国や都道府県といった広い視野のもとにおいて個々の水準、クラス、学校などの水準を知ることができる。
- ・教師の作成によるテスト・・・最も一般的な評価方法であり、個々の教師が自由に問題を作り、得点の解釈をするというものである。教師が自分の受け持っている子どもについて、自分の関心や目標との関連において把握したい点に関し、問題を作成することができる。筆問筆答(ペーパーテスト)の形をとるのが普通である。
- ・質問紙(自己評価票を含む)・・・専門家あるいは教師によって作成された種々の質問紙を用いる方法。設問に対して回答を記述あるいは選択するという点においては、標準テストや教師作成テストの場合と同様であるが、子どもが自らの実状を反省あるいは診断によって答える - したがって、回答に正答・誤答の別がない - という点で異なる。最近、自己評価の手段としても用いられることが多い。
- ・面接による評価(問答法)・・・教師と子どもが対面し、口問口頭によってさまざまな側面についての実態把握を行ったりテストをしたりする方法。面接法とか試問と呼ばれることもある。
- ・観察記録による評価・・・幼児・児童・生徒がさまざまな活動に取り組んでいる際に示す態度や発言などを観察し、教師があらかじめ準備したチェック項目や基準に照らし合わせて評価するという方法。実験・観察や探索・探検などの活動の評価方法として、また幼児教育における「遊び」の評価方法として、特に重要な意味を持つ。
- ・レポート・作文等による評価・・・何らかの課題を与えてレポートや作文を書かせ、教師があらかじめ準備した基準に照らし合わせて評価を行うという方法。ごく短いものである場合、1行コメントなどコメント記述法となる。
- ・製作物や実演による評価・・・図画や工作などの活動を通じて製作された作品を提出させ、あるいは音楽や体育などで実際に演じさせ、教師があらかじめ準備したチェック項目や基準に照らし合わせて評価するという方法。

2004年度WEBシラバス(改訂案)

系列	分野	科目類型			
開設科目名		単位数		担当教官	
開設期		開設時限		授業区分	
対象学生		備考	JABEE工学部指定		
授業の概要		授業の趣旨を記入する			
本授業は		を体系的に説明することを目的とする。			
検索キーワード	、 、 . . .				
授業の一般目標		学習者を中心とした授業目標を記入する			
を知る。		を理解する。 を考察する。			
授業の到達目標		一般目標を達成するための到達目標を記入する(該当項目選択)			
レ	知識・理解の観点	1. を説明できる。 2. を関係づける。			
レ	思考・判断の観点	1. を類別できる。 2. を指摘できる。 3.			
レ	関心・意欲の観点	1. を討議できる。 2. に寄与できる。			
レ	態度・価値観の観点	1. に参加できる。 2. と協調できる。			
	技能・表現の観点	1. が使用できる。 2. を表現できる。			
	その他の観点				
授業計画(全体)					
授業計画(授業単位)					
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録	
第1回	4月9日	【項目】オリエンテーション 【内容】担当教員の紹介、授業の目標と進め方、シラバス説明、成績評価の方法	シラバスを読んでおくこと	配布資料1	
第2回目	4月16日	【項目】 【内容】 について説明する	1. 教科書p21-29を読んでおくこと 2. 資料2を読んでおくこと	レジュメ 1. 水について・・・ 2. 油について・・・	
第3回目	4月23日	【項目】 について解説する 【内容】グループディスカッションをする			
第15回		【項目】試験			
成績評価方法(総合)					

授業の中で小テストを 回行う。 についてレポートを 字程度で作成し提出する。 試験を実施する。以上を下記の観点・割合で評価する。なお、出席が所定の回数に満たない者には単位を与えない。

成績評価方法(観点別)								
到達目標等	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)							70%	
小テスト・授業内レポート							20%	
宿題・授業外レポート							10%	
授業態度・授業への参加度							評価に加えず	
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							欠格条件	
その他()							評価に加えず	
合計							100%	80%
関連科目								
教科書	_____							
参考書								
メッセージ								
連絡先・オフィスアワー								

2004年度WEBシラバス(改訂案)【記述具体例1】

系列	社会科学	分野	教育学	科目類型	総説
開設科目名	教育学	単位数	2単位	担当教官	
開設期	1年生前期	開設時限	火曜日1・2時限	授業区分	講義
対象学生	全(獣医除く)	備考	JABEE工学部指定		
授業の概要					
<p>本授業では、生涯学習の観点から教育の各領域について概説する。 まず、生涯学習そのものについて理解を深めるために基本的な事項について説明する。 次に、学校制度、教育を受ける権利、教育課程、児童生徒の在学管理と懲戒、教育行政について説明する。</p>					
検索キーワード	教育、学校、生涯学習、教育制度				
授業の一般目標					
(1)生涯学習の基本的な事項について理解するとともに、教育の各領域の概要と課題を理解する (2)教育問題について関心を持ち、主体的に考えることができる					
授業の到達目標					
レ	知識・理解の観点	1．生涯学習とは何かについて説明できる。2．教育の各領域の概要と課題を説明できる。			
レ	思考・判断の観点	1．授業で取り上げた各領域について自分の意見を論理的に述べるができる。			
レ	関心・意欲の観点	1．教育に関する関心を広げ、問題意識を高めることができる、			
レ	態度・価値観の観点	1．日常生活の中で教育問題について主体的に考えることができる。			
	技能・表現の観点				
	その他の観点				
授業計画(全体)					
授業計画(授業単位)					
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録	
第1回目	4月13日	【項目】オリエンテーション 【内容】担当教員の紹介、授業の目標と進め方、シラバス説明、成績評価の方法	シラバスを読んでおくこと	配布資料1	
第2回目	4月20日	【項目】生涯学習の推進1 【内容】生涯学習のキー概念について	教科書p.1-7を読んでおくこと	レジュメ	
第3回目	4月27日	【項目】生涯学習の推進2 【内容】自己実現能力の育成と体験学習	教科書p.7-11を読んでおくこと		
第4回目	5月11日	【項目】生涯学習の推進3 【内容】学校教育の今日的課題について	教科書p.11-18を読んでおくこと		
第5回目	5月18日	【項目】生涯学習の推進4 【内容】小テスト	これまでの授業を復習しておくこと		
第6回目	5月25日	【項目】学校教育の制度1 【内容】制度発展の特色について	教科書p.21-32を読んでおくこと		

第7回目	6月1日	【項目】学校教育の制度2 【内容】制度の概要と課題について	教科書p.33-41を 読んでおくこと	
第8回目	6月8日	【項目】学校教育の制度3 【内容】グループディスカッション		グループディスカッション(まとめ)
第9回目	6月15日	【項目】教育を受ける権利の保障と法体系 【内容】教育を受ける権利・機会均等とは	教科書p.42-49を 読んでおくこと	
第10回目	6月22日	【項目】教育課程の編成 【内容】法的基準と学習指導要領、教科書、 課題について	教科書p.57-72を 読んでおくこと	
第11回目	6月29日	【項目】児童・生徒の在学管理と懲戒1 【内容】就学、在学管理、懲戒について	教科書p.73-89を 読んでおくこと	
第12回目	7月6日	【項目】児童・生徒の在学管理と懲戒2 【内容】懲戒、不登校と新たな就学形態に ついて。グループディスカッション。	教科書p.89-93、 配布資料2を 読んでおくこと	グループディスカッション(まとめ) 配布資料2
第13回目	7月13日	【項目】教育行政の推進と法規1 【内容】教育行政の歴史的変遷、地方教育 行政について	教科書p.116-124 を 読んでおくこと	
第14回目	7月20日	【項目】教育行政の推進と法規2 【内容】国の教育行政、改革動向、課題に ついて。	教科書p.124-130 を 読んでおくこと レポート提出	
第15回	7月27日	【項目】試験		

成績評価方法(総合)

授業の中で小テスト1回、授業内レポート数回を行う。 グループディスカッションのまとめをメールで提出する、 授業の最終回に関心ある教育問題についてレポートを2000字程度で作成し提出する。 最後に試験を実施する。以上を下記の観点・割合で評価する。なお、出席が所定の回数に満たない者には単位を与えない。

成績評価方法(観点別)

到達目標等	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集 資料
成績評価方法								
定期試験(中間・期末試験)							50%	
小テスト・授業内レポート							30%	
宿題・授業外レポート							10%	
授業態度・授業への参加度							10%	
受講者の発表(プレゼン)・ 授業内での制作作品							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							欠格条件	
その他							評価に加えず	
合計							100%	80%

関連科目

教科書参考書

編 『生涯学習時代の教育と法規』 ミネルヴァ書房、2003年。

参考書

『 』 書房、2002年。
『 』 書店、2001年。

メッセージ

教科書は必ず購入すること。
履修希望者が100名を超えた場合には抽選を行うので初回に必ず出席すること。

連絡先・オフィスアワー

@yamaguchi-u.ac.jp 研究室： 学部 階 オフィスアワー
曜日10:00～12:00

2004年度WEBシラバス(改訂案)【記述具体例2】

系列	主題	分野	芸術と表現	科目類型	包括
開設科目名	プレゼンテーション技術 - 相互理解のための自己表現技術 -		単位数	2 単位	担当教官
開設期	後期	開設時限	水曜日3・4 時限	授業区分	選択・講義
対象学生	全	備考	JABEE工学部指定		
授業の概要					
<p>情報社会においては、溢れる情報の中から必要な情報を取り出す力が求められると同時に、自らも発信する力がますます強く求められている。それは、サイバースペースにおける情報発信のみならず、人間のコミュニケーションの基本形であるface to faceのコミュニケーションにおいてもその重要性は以前にも増して強まっていると言える。</p> <p>ところが、人前で意見を述べたり、議論したりする力は、これまでの学校教育の中で十分に涵養されてきたとは言い難い。この授業では、様々なプレゼンテーション訓練を通じて、プレゼンテーションやコミュニケーションの重要性を認識し、それを改善するための技術、方法を理解して、人前で発表したり、議論したりする力を養うことを目指している。</p> <p>就職活動や卒業論文の発表など、実際に応用できることはもちろん、積極的に自らの意見を述べ、他人の意見を聴く態度を養うことにより、これからの生活や学習の質の向上を目指したい。</p> <p>授業では、前半部分を講義およびグループ内での様々な訓練に当て、後半部分をパワーポイントを使ったプレゼンテーション作成と発表に当てる。パワーポイントについては初心者を対象にしているが、コンピュータの基本操作(ワードが使える程度)は前提としている。</p>					
検索キーワード	プレゼンテーション、コミュニケーション				
授業の一般目標					
<p>プレゼンテーション、コミュニケーションが社会生活の中で果たしている役割を認識し、その影響を理解するとともに、自分および他人のプレゼンテーションを客観的に評価あるいは批評する態度を身につける。また、状況に応じて常に適切なプレゼンテーション、コミュニケーションを心がけると同時に、それらの質を改善するためには何が必要かを判断し、適切な技術とメディアを選択し、適用する技術と心構えを修得する。</p>					
授業の到達目標					
レ	知識・理解の観点	1. プレゼンテーションを評価するための観点を説明できる。 2. 自分および他人のプレゼンテーションを観点に基づき、評価できる。			
レ	思考・判断の観点	1. 実施されたプレゼンテーション、コミュニケーションが、固有の状況の中で果たしている役割や意味、その影響を文脈に基づいて説明できる。			
レ	関心・意欲の観点	1. 状況に応じて常に適切なプレゼンテーションを心がける。			
レ	態度・価値観の観点	1. 他人のプレゼンテーションに対して、技術的観点のみならず、その内容に関して適切な評価、批評ができる。 2. 他人の意見を尊重し、協調的、建設的な議論が行える。			
レ	技能・表現の観点	1. プレゼンテーションの質を改善するために必要な技術・方法を具体的に選択し、適用できる。			
	その他の観点				
授業計画(授業単位)					
回数	日付	授業項目・内容等	授業外学習の指示等	授業の記録	
1回	4/10	【項目】オリエンテーション 【内容】担当教員の紹介、授業の目標と進め方、シラバス説明、成績評価の	シラバスを読んでおくこと	配布資料1	

		方法		
2回	4/17	【項目】プレゼンテーションの意義と方法 【内容】良いプレゼンテーションの条件	1. 予習としてテキストpp.21-29を讀んでおくこと	配付資料2 パワーポイント資料1
3回	4/24	【項目】言語関連 【内容】1. プレゼンテーションにおける「言語」の意義と役割 2. 言語訓練(1) - 論理性の訓練、コミュニケーションにおける質問の意義、相手を思いやる態度の重要性に関して -	1. 予習としてテキストpp.30-32を讀んでおくこと 2. 本日の内容に関するレポート	配付資料3(話し言葉) パワーポイント資料2
4回	5/1	【項目】言語関連 【内容】1. 言語訓練(2) - 写真を用いた強制連結法、グループ内に於ける即興的マイクロプレゼンテーション	1. 予習としてテキストpp.33-34を讀んでおくこと 2. 本日の内容に関するレポート	配付資料4(言葉と写真) パワーポイント資料3
5回	5/8	【項目】非言語関連 【内容】1. 非言語の意義と役割 2. 非言語訓練(1) - グループ内「無言面接」を通して表情と態度に関して学ぶ。	1. 予習としてテキストpp.35-40を讀んでおくこと。 2. 本日の内容に関するレポート	配付資料5(無言面接) パワーポイント資料4

以下、6回目～15回目 省略

成績評価方法(総合)

毎回、その日に行われたプラクティスについてグループ内で議論し、個人ごとに問題点、改善された点、反省等のレポートをまとめて次週までに提出する。また、最後は各自10分程度のマイクロプレゼンテーションを行い、全員で評価し合う。一人の発表者に対し、観点別に全員が評価用紙に記入し、発表者にフィードバックする。発表者は評価をとりまとめ、すべての観点別平均点と総合点を計算して、自分の発表を観点別に再度振り返ると同時に、オーディエンスからの指摘(コメントも書き写す)に対する反省も踏まえて、A4、5枚程度のレポートを提出する。従って、「やった」だけの発表では評価を行わない。

到達目標等 成績評価方法	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度・価値観	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
定期試験(中間・期末試験)							実施せず	
小テスト・授業内レポート							30	
宿題・授業外レポート							50	
授業態度・授業への参加度							20	
受講者の発表(プレゼン)							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							欠格条件	
その他							評価に加えず	
合計							100	80
関連科目								
教科書	情報社会を生き抜くプレゼンテーション技術(ぎょうせい)							
参考書								
メッセージ								
連絡先・オフィスアワー								

講義5 「学生の情意関心をいかに育み評価するか」

教育学部 林徳治

大学生の入学前や卒業時の学力の低下、将来への夢（職業、人生設計）や目的意識を持たないなど、今日の大学教育には課題が山積している。多くの諸課題のうち、とりわけ私たち大学教育関係者が早急に取り組みなければならない課題として、学生のための授業改善があげられる。ここでいう授業は、一般的に「わかる」（知識理解）、「楽しい」（情意）、「ためになる」（応用）授業の創造を意味する。ここでは、学生の学力保証としての知識理解や技能習得のためのシラバスの構築（認知領域）、有効な教材教具の開発・活用（教育方法）、学習意欲の向上（情意領域）、そして成果としての適切な教育評価が重要なポイントとなってくる。医学部や工学部では、すでに早くから行動目標に基づいたシラバスや教材が構築されている。また、教育学部では、個に応じた情意面の構成的な学習方法に実践を積んできている。

授業と一口に言っても各学部、教科により実験、演習、講義、受講人数など様々な形態がある。現状では各担当教官が対処してベストを尽くしているので一般化することははなはだ困難であるが、私の実施している教育学部の教職科目を事例として紹介し参考になるところがあれば幸いである。

1. 履修前の学生における情意面を知る（診断的評価）

受講する学生は実に様々である。卒業単位に必要、修得免許に必要、授業が空いているといった受動的な「受け入れ」から、シラバスを見て、先輩から聞いてなど能動的な「反応」によるものまである。これらの動機は、複合的なものが多く、その割合によってその教科に対する情意面が異なってくる。担当教官は、講義開始前に学生のレディネス（認知領域、情意領域）をテストや質問アンケートにより事前に知っておくことはきわめて大切である。教官は、講義を通して受動的な「受け入れ」レベルの学生が能動的な「反応」、「価値づけ」とおし「組織化」、「個性化」へと態度を変容させるのも楽しみである。

(1) 認知領域での診断評価

授業を行うに際して最低限必要な知識や技能について調べるテスト

(2) 情意領域での診断評価

「なぜ受講したいのか?」、「何を期待しているのか（内容、方法、評価）?」、「この教科を学習して自分の将来の何に役立てたいのか?」

これらは全講義終了後に事後アンケートとして、前述した「わかる」、「楽しい」、「ためになる」の観点からなるアンケートを実施することにより学生の変容を知ることができる。

2. 授業診断シート（portfolio）の活用（形成的評価）・・・添付資料参照

授業毎に授業診断シートを配布して新しい知識の獲得、自己の考え、授業の参加度、教官への要望などを記述させる。これはあくまでも学生の学習記録の保存用として考案したものであるが、授業毎が定期的に教官が収集して点検し返却することが大切である。このシートは、学生の保存、管理が原則である。授業終了後に学生の学習過程を振り返る上で、学習の参加度をグラフ化するなどして提出させる。ただし、教官による授業毎の回収は多くても60名前後の受講者が限界であり、私の経験した例で受講者260名ではその回収・返却時間や膨大な負担から考えて困難であった。受講者が大勢の場合は、簡易化した出席カードとワンポイント（感想や要望）を記述させ提出させる。

3. 電子メール・掲示板やWeb学習の活用（別添資料を参照）

電子メールの普及によって、メールコミュニケーションは学生にとって日常化しているため、教官とのコミュニケーションに大変効果がある。学生は、質問や欠席などを携帯電話によるメールで気軽に送信してくる。ここでも学生のマナーのひどさに気づくが、情報モラルの育成の一環として注意を促している。メールコミュニケーションを介して教官と学生間での親密度が向上するケースが多い。ただし日頃出張、会議など多忙な教官にとっては、メール受信やそのreplyが大変であり根気を要する。ここで大切な点はメールコミュニケーションによる情意面での効果は大切にしなければならない

が、教官が学生にとっての Q & A のような何でも回答箱にならないようにすることである。学生の多くは、その点に気づいていないことが多い。また HP 上の BBS へ学生からの書き込みはきわめて少なく、たとえ書き込みがあったとしても特定の学生に限られるケースが多い。そこで、教官からの連絡事項として用いることが一般的である。

講義の前後に Web 学習を実施している。これは 2001 年 6 月から取り組み、学部、大学院、教員研修などでの受講者が 900 名を越えた。今日では通信教育においても Web による学習形態が普及しており、単位としても認定されるようになった。学生に遠隔学習を体験させることはきわめて重要であり、その教育効果も期待できる。

4. 学生による学習成果の発表（プレゼンテーション）の機会の充実を

学生にとって学習成果（テーマ）の発表は、知識の「価値づけ」、「組織化」、「個性化の実現」として情意面を含めた重要な学習の場面である。ここでは、獲得された新しいスキーマを構成して他者に伝えるといった表現・伝達技術能力が求められる。このような課題のもとで学生は、各科目で得られた専門的な知識や技能と表現・伝達技術に必要なパワーポイント教材やレジュメ作成といったメディア活用能力を求められる。このような学習場面を通して学生の認知・情意各領域の成果が統合されることになる。学生各自が実施するプレゼンテーションは、自己・聞き手による相互評価をとおして各自にフィードバックされるものであり、情意領域の評価としてとりあつかうことができる。

評価に関する設問についての参考資料

1. 評価の種類

- (1) 診断的評価・・・学習前のレディネス（認知・情意）のチェック
- (2) 形成的評価・・・学習過程でのチェック（出席、小レポート、発言など）
- (3) 総括的評価・・・学習後でのチェック（試験、レポート）

2. 評価の内容

A. 認知領域

(1) 知識

術語の知識・・・特定のシンボル（言語的、非言語的）
特定の事実の知識・・・時期、出来事、人、場所
特定なものを扱う手段・手法の知識・・・抽象概念
約束事の知識・・・観念や現象の扱いや表現法
一般化の知識・・・理論

(2) 技能

理解・・・伝えられたことがわかるといった最も低いレベル 変換・解釈
応用
分析
統合

B. 情意領域

情意目標の形成的評価は、「成績をつけることを目的にするのではなく学生にフィードバック（気づき、喚起、意欲）をすることを目的とする。

(1) 受け入れ（注意）・・・講義を受講する。（受動）

意識
意欲的受け入れ
統制された注意

(2) 反応・・・講義をすすんで受講する（能動）

黙従
意欲的
満足

(3)価値づけ・・・教官に質問、意見する
受け入れ
欲求・追及
行動

(4)組織化・・・講義で得た知識を元に自己の考えや新たな知識を獲得する
概念化
組織化

(5)個性化・・・人生哲学を作り上げる

3.情意目標の例 (Levy)

- (1)受け入れ・・・～に関心がある
- (2)反応・・・～ができる
- (3)価値づけ・・・～に熱中する
- (4)組織化・・・新しい～に関心を持つようになる

引用文献

Handbook on Formative and Summative Evaluation of Student Learning, Benjamin S. Bloom, 梶田 叡一訳、教育評価ハンドブック、第一法規

今日の授業を振り返って

	思う	やや 思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	思わ ない
体調はよい					
授業に集中できた					
授業は楽しかった					
授業は短く感じた					
授業のスピードは 適切であった					
授業の情報量は 適切であった					
授業は難しかった					
授業で用いた教材は よくわかった					
授業はためになった					

今日の授業で一番印象に残った点（ポイント）は？

今日の授業で改善してほしい点は？

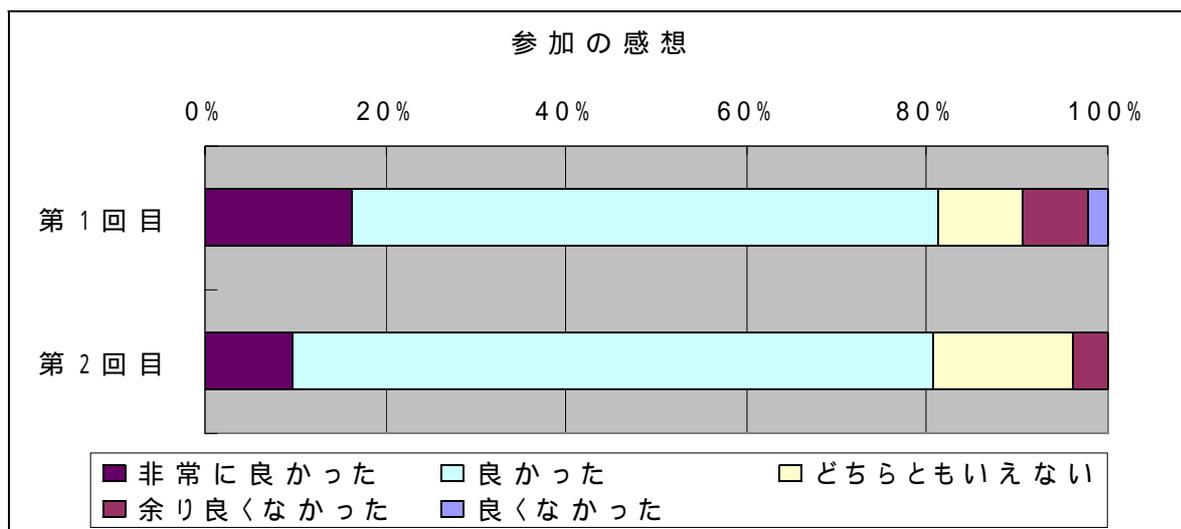
このプリントは授業のまとめで使います。
すべての講義が終了するまで各自で保管しましょう。

14. 平成15年度 山口大学FD研修会アンケート結果

平成15年度 山口大学FD研修会 アンケート結果

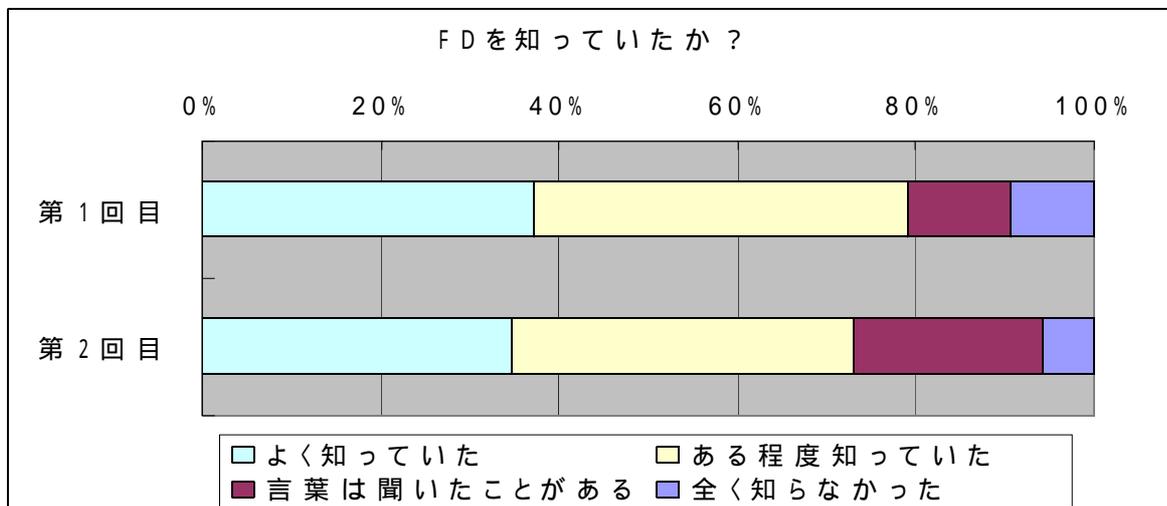
1. 研修会に参加した感想は？

	第1回目		第2回目	
良くなかった	1	2%	0	0%
余り良くなかった	3	7%	2	4%
どちらともいえない	4	9%	8	15%
良かった	28	65%	37	71%
非常に良かった	7	16%	5	10%
合計	43		52	



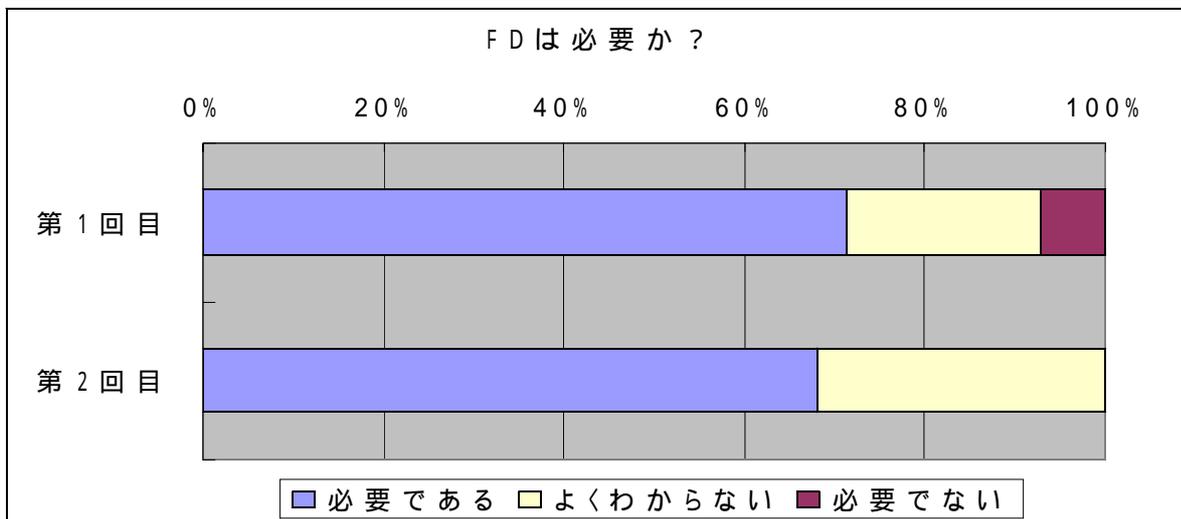
2. FDを知っていましたか？

	第1回目		第2回目	
全く知らなかった	4	9%	3	6%
言葉は聞いたことがある	5	12%	11	21%
ある程度知っていた	18	42%	20	38%
よく知っていた	16	37%	18	35%
合計	43		52	



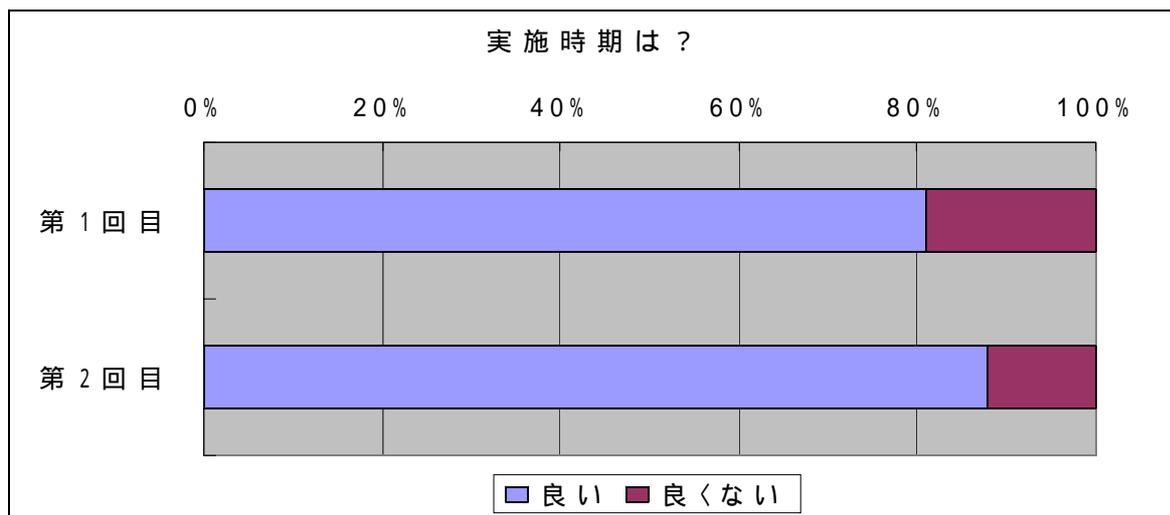
3. FDに関する研修会は、今後も必要か？

	第1回目			第2回目	
必要である	30	71%		34	68%
必要でない	3	7%		0	0%
よくわからない	9	21%		16	32%
合計	42			50	



4. 実施時期は？

	第1回目			第2回目	
良い	34	81%		44	88%
良くない	8	19%		6	12%
合計	42			50	



実施場所は？

	第1回目			第2回目	
良い	37	88%		44	86%
良くない	5	12%		7	14%
合計	42			51	

